國際聯盟調査委員會報告書

外務省

國際聯盟調查委員會報告書

注　意

一　本翻譯文ハ國際聯盟事務總長ヨリ聯盟理事會及各聯盟國ニ通報セル聯盟調査委員會報告書（英吉利語）及其ノ後聯盟事務局ヨリ發表セル右報告書正誤表ニ依レルモノニシテ報告書中尚誤記又ハ誤植ト認メラルル點尠カラザルモ本翻譯文ハ特殊ノ場合ヲ除キ原文ニ何等變更ヲ加ヘズ其ノ儘譯述シテ更ニ後日見ルコトアルベキ訂正ヲ俟ツコトトセリ

二　右誤記又ハ誤植ト認メラルル點ノ主ナルモノヲ例示スレバ左ノ如シ

（イ）第六十三頁（報告書第三十七頁）ニ「千八百三十一年九月十八日前」トアルハ「千九百三十一年九月十八日前」トスルヲ正シトスベシ（報告書佛蘭西語翻譯文第四十頁參照）

（ロ）第百二十五頁（報告書第六十九頁）ニ「本庄中將ハ午前十一時頃新聞記者ヨリノ、、、、、、」又同頁（報告書第六十九頁）ニ「參謀長ハ奉天特務機關ヨリ午前十一時四十六分電話ニテ、、、、、、」トアルハ夫々「午後十一時頃」及「午後十一時四十六分」トスルヲ正シトスベシ（報告書佛蘭西語翻譯文第七十五頁參照）

（ハ）第百五十九頁（報告書第八十八頁）ニ「日清汽船會社ナル名稱ノ一汽船内ニ、、、、、」トアルハ報告書佛蘭西語翻譯文第九十五頁ノ通リ「日清汽船會社ノ一汽船内ニ、、、、、」ヲ正シトスベシ

（ニ）第百七十五頁（報告書第九十六頁）ニ「海龍吉林線及吉林敦化、吉林長春鐵道ノ間ニ、、、、、、、」トアルハ「海龍吉林線及吉林敦化、吉林長春鐵道ノ間ニ、、、、、、、」ヲ正シトスベシ（報告書佛蘭西語翻譯文第百四頁參照、報告書ト同語ヲ用ユ）

（ホ）第二百三十二頁（報告書第百二十五頁）ニ「支那人移住者ノ上海及河北ニ在ル其ノ家族、、、、、」トアルハ「支那人移住者ノ山東及河北ニ在ル其ノ家族、、、、、」トスルヲ正シトスベキガ加シ（報告書佛蘭西語翻譯文第百三十六頁參照、報告書ト同語ヲ用ユ）

三　報告書第六章第二節（報告書第百一頁）滿洲國ノ財政ニ關スル敍述中ニ使用セラルル Yuan ナル語ハ滿洲國ノ貨幣單位タル「圓」ノ意ナルモ之ヲ其ノ儘「圓」ト譯出スルトキハ日本圓ト混同ノ惧アルヲ以テ滿洲國ニ於ケル慣行ヲモ參酌シ右 Yuan ニ對シ「銀圓」（本翻譯文第百八十三頁）ナル譯語ヲ使用シタリ尤モ滿洲國内ノ一般日常取引ニ於テ

ハ今日尚「元」ヲ使用シ居ルコト支那ニ於ケルト同樣ナリ

四　報告書第百三十五頁ニ引用セル内田伯爵ノ講會演說ニハ「千八百七十五年頃」トアルモ本翻譯文（第二百五十二頁）ニ於テハ同伯爵ノ右演說ノ速記錄ニ依リ「明治八年頃」ト改メタリ

五　報告書附屬ノ地圖（十四葉）ハ釘裝ノ便宜上之ヲ別冊トシ尚閲覽上ノ便ヲ計リ各地圖ニ揭記ノ地名索引、凡例等ニ適當ナル變更ヲ加ヘ且翻譯文トシテ不必要ト認メラルルモノハ之ヲ削除シタリ

國際聯盟調査委員會報告書

内容目次

緒言……一頁
第一章　支那ニ於ケル近時ノ發展ノ概要……一六
第二章　滿洲……三八
第三章　支那及日本間ノ滿洲ニ關スル諸問題……六三
第四章　千九百三十一年九月十八日及其ノ後滿洲ニ於テ發生セル事件ノ敍述……一二一
第五章　上海……一五二
第六章　「滿洲國」……一六〇
第七章　日本ノ經濟的利益及支那ノ「ボイコット」……二〇四
第八章　滿洲ニ於ケル經濟的利益……二二四
第九章　解決ノ原則及條件……二三三
第十章　考察及理事會ヘノ提議……二四五
附錄　極東ニ於ケル國際聯盟調査委員會ノ旅程……二六一

地圖目次

一　中國及日本國
二　滿洲政治地圖
三　滿洲鐵道地圖
四　滿洲地貌圖
五　千九百三十一年九月十八日前ノ滿洲ニ於ケル軍事上ノ態勢
六　奉天事變圖（千九百三十一年九月十八日乃至十九日）
七　千九百三十一年九月三十日頃ノ滿洲ニ於ケル軍事上ノ態勢
八　千九百三十一年十二月十日頃ノ滿洲ニ於ケル軍事上ノ態勢
九　千九百三十二年五月一日頃ノ滿洲ニ於ケル軍事上ノ態勢
十　千九百三十二年八月二十日頃ノ滿洲ニ於ケル軍事上ノ態勢
十一　上海市
十二　上海附近
十三　極東ニ於ケル委員會ノ旅程ヲ示ス主要經路地圖
十四　極東ニ於ケル委員會ノ旅程ヲ示ス補足經路地圖

緒言

（支那ノ正式提訴、千九百三十一年九月二十一日）

千九百三十一年九月二十一日在「ジュネーヴ」支那政府代表ハ國際聯盟事務總長ニ書翰ヲ送リテ九月十八日ヨリ十九日ニ亘ル夜間奉天ニ於テ發生セル事件ニ依リ惹起セラレタル支那及日本間ノ紛爭ニ關シ聯盟理事會ノ注意ヲ喚起センコトヲ求メ且聯盟規約第十一條ニ基キ「國際ノ平和ヲ危殆ナラシムル事態ノ此ノ上ノ進展ヲ阻止スル爲卽時處置ヲ執ランコト」ヲ理事會ニ訴ヘタリ

（聯盟理事會ノ決議、九月三十日）

九月三十日理事會ハ次ノ決議ヲ可決セリ

「理事會ハ

(一)　理事會議長ガ支那及日本ノ政府ニ致セル緊急要請ニ對スル右兩政府ノ回答及該要請ニ應ジテ既ニ執ラレタル處置ヲ了承ス

(二)　日本政府ガ滿洲ニ於テ何等領土的企圖ヲ有セザル旨ノ同政府ノ聲明ノ重要ナルコトヲ認ム

(三)　日本政府ガ其ノ國民ノ生命及財產ノ安全ノ有效ニ確保セラルルニ從ヒ既ニ開始セラレタル其ノ軍隊ノ鐵道附屬地內ヘノ撤收ヲ能フ限リ速ニ續行スベキ旨及成ルベク迅速ニ右ノ意嚮ヲ完全ニ實現センコトヲ希望スル旨ノ日本代表ノ聲明ヲ了承ス

(四)　支那政府ガ日本軍隊ノ撤收ノ續行竝ニ支那地方官憲及警察力ノ回復ニ從ヒ鐵道附屬地外ニ於ケル日本國民ノ生命及財產ノ安全ニ對スル責任ヲ負フベキ旨ノ支那代表ノ聲明ヲ了承ス

(五) 兩政府ガ兩國間ノ平和及良好ナル了解ヲ攪亂スル虞アル一切ノ行爲ニ出ヅルコトヲ避ケンコトヲ欲スルヲ信ジ兩政府ハ各自ニ事件ノ範圍ノ擴大又ハ事態ノ惡化ヲ防止スル爲一切ノ必要ナル處置ヲ執ルベシトノ保障ヲ支那及日本ノ代表ヨリ與ヘラレタルコトヲ了承ス

(六) 兩當事國ニ對シ兩國間ノ正常關係ノ回復ヲ促進シ及之ガ爲前記約定ノ履行ヲ續行シ且速ニ完了スル爲能フ限ノ一切ヲ爲スベキコトヲ請求ス

(七) 兩當事國ニ對シ事態ノ進展ニ關スル完全ナル情報ヲ屢理事會ニ送ランコトヲ請求ス

(八) 緊急會合ヲ必要ト爲スガ如キ何等豫期セザル事件ノ發生セザル限リ千九百三十一年十月十四日（水曜日）同日ニ於ケル事態ヲ考究スル爲更ニ「ジュネーヴ」ニ會合スルコトヲ決定ス

(九) 理事會議長ガ事態ノ進展ニ關シ當事國又ハ他ノ理事國ヨリ得ルコトアルベキ情報ニ顧ミ會合ノ必要ナキニ至レリト其ノ同僚特ニ兩當事國代表ノ意見ヲ求メタル後決定スル場合ハ十月十四日ト定メラレタル理事會ノ會合ヲ取消スコトヲ議長ニ許可ス」

右決議採擇前ニ於ケル討議中支那代表ハ「日本ノ軍隊及警官ノ迅速且完全ナル撤收竝ニ完全ナル原狀回復ヲ確保スル爲理事會ノ計畫スベキ最良ノ方法ハ一中立委員會ヲ滿洲ニ派遣スルコトナリ」トノ支那政府ノ見解ヲ表明セリ

理事會ハ紛爭考究ノ爲更ニ十月十三日ヨリ二十四日迄會議ヲ開催シタルガ日本代表ノ反對アリタル結果該會議ニ於テ提案セラレタル決議ニ對シ全會一致ヲ得ルコト能ハザリキ

理事會ノ會議、十月十三日—二十四日

「パリ」ニ於ケル理事會ノ會議、十月十一—十六日、十二月十日

理事會ハ再ビ十一月十六日「パリ」ニ會合シ約四週間ヲ專ラ事態ノ研究ニ費シタリ十一月二十一日日本代表ハ日本政府ニ於テハ九月三十日ノ決議ガ其ノ精神及條章ノ通リ遵守セラルベキコトヲ顧念シ居ル次第ヲ述ベタル後一調査委員會ヲ現地ニ送ランコトヲ提案セリ右提案ハ次デ他ノ一切ノ理事國ノ歡迎スル所ト爲リ千九百三十一年十二月十日全會一致ヲ以テ次ノ決議採擇セラレタリ

十二月十日ノ決議

「理事會ハ

(一) 兩當事國ガ嚴肅ニ拘束ヲ受クベキ旨宣言シ居レル千九百三十一年九月三十日理事會ノ全會一致可決セル決議ヲ再ビ確認ス依テ理事會ハ右決議ノ定ムル條件ニ依リ日本軍ノ鐵道附屬地內ヘノ撤收ガ能フ限リ速ニ實行セラレンガ爲支那及日本ノ政府ニ對シ右決議ノ實施ヲ確保スルニ必要ナル一切ノ處置ヲ講ゼンコトヲ要求ス

(二) 十月二十四日ノ理事會以來事態更ニ重大化シタルニ顧ミ兩當事國ガ此ノ上事態ノ惡化スルヲ避クルニ必要ナル一切ノ措置ヲ執ルベキコト及此ノ上戰鬪若ハ人命ノ喪失ヲ惹起スルコトアルベキ一切ノ主動的行爲ヲ差控フベキコトヲ約スルコトヲ了承ス

(三) 兩當事國ニ對シ事態ノ進展ニ付引續キ理事會ニ通報センコトヲ求ム

(四) 其ノ他ノ理事國ニ對シ其ノ現地ニ在ル代表者ヨリ得タル情報ヲ理事會ニ提供センコトヲ求ム

(五) 上記諸措置ノ實行トハ關係ナク

本件ノ特殊ナル事情ニ顧ミ兩政府ニ依ル兩國間ノ繫爭諸問題ノ終局的且根本的解決ニ寄與センコトヲ希望シ

國際關係ニ影響ヲ及ボシ支那及日本間ノ平和又ハ平和ノ基礎タル兩國間ノ良好ナル了解ヲ攪亂セントスルノ虞アル一切ノ事情ニ關シ現地ニ於テ研究ヲ遂ゲ理事會ニ報告センガ爲五名ヨリ成ル一委員會ヲ任命スルコトヲ決定ス

支那及日本ノ政府ハ右委員會ヲ助クル爲各一名ノ參與員ヲ指名スルノ權利ヲ有ス

兩政府ハ右委員會ガ其ノ必要ト爲スベキ一切ノ情報ヲ現地ニ於テ入手センガ爲ノ各般ノ便宜ヲ右委員會ニ供與ス

兩當事國ガ何等カノ交渉ヲ開始スル場合ニハ右交渉ハ右委員會ノ受任事項ノ範圍内ニ屬セザルベク又何レカノ當事國ノ軍事的施措ニ干渉スルコトハ右委員會ノ權限ニ屬セザルモノト了解ス

右委員會ノ任命及審議ハ日本軍隊ノ鐵道附屬地内ヘノ撤收ニ關シ九月三十日ノ決議ニ於テ日本政府ノ與ヘタル約束ニ何等影響ヲ及ボスモノニ非ズ

(六) 現在ヨリ千九百三十二年一月二十五日ニ開カルベキ理事會ノ次回通常會議迄ノ間依然本件ヲ付託セラレ居ル理事會ハ理事會議長ニ於テ本件ノ經過ヲ注意シ若シ必要アラバ新ニ理事會ヲ招集センコトヲ求ム」

議長ノ宣言

右決議ヲ提案スルニ當リ議長「ブリアン」氏ハ次ノ宣言ヲ爲セリ

「茲ニ提出セラレタル決議ハ貴覽ノ通リ別個ノ二方針ニ基ク行動ヲ規定ス卽チ (一) 平和ニ對スル直接ノ脅威ヲ終熄セシムルコト (二) 兩國間ノ紛爭ノ現存原因ノ終局的解決ヲ容易ナラシムルコト之ナリ

支那及日本間ノ關係ヲ攪亂スルガ如キ事情ノ調査ハ其レ自體望マシキコトナルガ今回ノ會議中右調査ガ兩當事國ニ對シ受諾シ得ベキモノナルコトヲ發見シタルハ理事會ノ欣快トセル所ナリ依テ理事會ハ十一月二十一日理事會ニ提出セラレタル委員會設置案ヲ歡迎セリ決議ノ末項ヨリノ第二項ハ右委員會ノ任命及職能ヲ規定ス

予ハ茲ニ決議ニ付項ヲ逐ヒテ若干說明ヲ加ヘントス

第一項　本項ハ九月三十日理事會ガ全會一致ヲ以テ採擇セル決議ヲ再ビ確認シ同決議中ニ記サレタル條件ノ下ニ能フ限リ速ニ日本軍ノ鐵道附屬地内ヘ撤收スルコトヲ特ニ强調スルモノナリ

理事會ハ此ノ決議ヲ最重要視シ且兩政府ガ其ノ九月三十日ニ爲シタル約定ノ完全ナル履行ニ努ムベキコトヲ確信ス

第二項　理事會ノ前回會合以來事態ヲ大ニ惡化セシメ且當然ナル憂慮ヲ招徠シタル諸種ノ事件ノ發生シタルハ不幸ナル事實ナリ此ノ上ノ戰鬪ヲ惹起スルコトアルベキ一切ノ主動的行爲竝ニ事態ヲ惡化セシムル虞アル他ノ一切ノ行動ヲ差控フルコト最必須且緊急ナリ

第四項　第四項ニ於テ當事國以外ノ理事國ハ現地ニ在ル自國代表者ヨリ接受セル情報ヲ引續キ

理事會ニ提供センコトヲ求メラル

此ノ種情報ハ頗ル價値アルモノナルコトヲ過去ニ於テ證シタルヲ以テ諸地點ニ斯ノ如キ代表者ヲ派遣シ得ル諸國ハ現在ノ方法ヲ繼續シ且之ヲ改善スル爲能フ限ノ一切ヲ爲スベキコトニ同意セリ

右目的ノ爲兩當事國ニシテ希望スルニ於テハ此等代表者ヲ派遣スベキ地點ヲ兩當事國ガ右諸國ニ指示シ得ル樣右諸國ハ兩當事國ト接觸ヲ保ツベキモノトス

第五項ハ一調査委員會ノ設置ヲ規定ス右委員會ノ受任事項ハ同委員會ノ純然タル諮問的性質ニ悖ラザル限リ廣汎ナリ右委員會ガ研究ノ要アリト認ムル問題ハ苟モ國際關係ニ影響ヲ及ボシ支那及日本間ノ平和又ハ平和ノ基礎タル兩國間ノ良好ナル了解ヲ攪亂セントスル虞アル事態ニ關スルモノナル限リ原則トシテ除外セラレザルベシ兩國政府ハ何レモ其ノ特ニ審査ヲ希望スル問題ニ付之ガ考究ヲ右委員會ニ請求スルノ權利ヲ有ス右委員會ハ理事會ニ報告スベキ問題ヲ定ムルコトニ付充分ナル自由裁量ヲ有シ且望マシキ場合ニ於テハ中間報告ヲ爲スノ權能ヲ有ス

九月三十日ノ決議通リ兩當事國ノ爲シタル約定ガ右委員會ノ到著ノ時迄ニ實行セラレザル場合ニ於テハ右委員會ハ能フ限リ速ニ理事會ニ對シ其ノ事態ニ付報告スベシ

「兩當事國ガ何等カノ交渉ヲ開始スル場合ニハ右交渉ハ右委員會ノ受任事項ノ範圍内ニ屬セザルベク又何レカノ當事國ノ軍事的施措ニ干渉スルコトハ右委員會ノ權限ニ屬セザル」旨特

兩當事國ノ留保及批判

ニ規定セラル右後段ノ規定ハ何等右委員會ノ調査權能ヲ制限セズ又右委員會ガ其ノ報告ニ必要ナル情報ヲ得ル爲充分ナル行動ノ自由ヲ有スベキコトモ明白ナリ」

日本代表ハ右決議ヲ受諾スルニ當リ決議第二項ニ關スル留保ヲ爲シ「本項ハ滿洲各地ニ於テ猖獗ヲ極ムル匪賊及不逞分子ノ活動ニ對シ日本臣民ノ生命及財産ノ保護ニ直接備フルニ必要ナルベキ行動ヲ日本軍ガ執ルコトヲ妨グルノ趣旨ニ非ズトノ了解ノ下ニ」日本政府ノ爲ニ本項ヲ受諾スルモノナル旨ヲ述ベタリ

支那代表モ亦決議ヲ受諾セルモ原則ノ諸點ニ關スル其ノ意見及留保ノ一部ガ次ノ通リ記錄ニ止メラレンコトヲ求メタリ

「一　支那ハ規約ノ一切ノ規定、其ノ加入セル一切ノ現存條約竝ニ國際法及國際慣例ノ容認セラレタル原則ニ基キテ支那ノ有シ又ハ有シ得ベキ一切ノ權利、救濟方法及法律的地位ヲ完全ニ留保スルコトヲ要シ且之ヲ留保ス

二　支那ハ理事會ノ決議及理事會議長ノ聲明ニ依リ明白ナラシメラレタル今回ノ施措ヲ以テ次ノ四箇ノ基本的ニシテ且相關關係ヲ有スル要素ヲ包含スル實際的措置ナリト認ム

(イ)　敵對行爲ノ即時停止

(ロ)　日本ノ滿洲占領ノ能フ限リ短期間内ニ於ケル清算

(ハ)　今後ニ於ケル事件一切ノ進展ニ關スル中立國人ノ觀察及報告

(ニ)　理事會ノ任命シタル一委員會ニ依ル全滿洲ノ事態ニ關スル現地ニ於ケル包括的調査

右施措ハ實際上及精神ニ於テ右ノ基本的要素ニ基クモノナルガ故ニ右要素ノ一タリトモ具體化セラレズ又ハ豫定ノ如ク有效ニ實現セラレザル場合ニハ其ノ完全性ハ明白ニ破壞セラルベシ

三　支那ハ決議中ニ規定セラルル委員會ハ其ノ現地ニ到著前日本軍隊ノ撤收ガ完成セラレザルトキハ右ノ撤收ニ關シ調査シ且勸告ヲ載セタル報告ヲ爲スコトヲ其ノ第一任務ト爲スベキモノト了解シ且期待ス

四　支那ハ右施措ハ滿洲ニ於ケル最近ノ事件ヨリ發生セル支那及其ノ國民ニ對スル賠償及損害ノ問題ヲ直接ニモ暗默的ニモ害スルコトナキモノト想定シ此ノ點ニ關シ明白ナル留保ヲ爲ス

五　支那ハ提出セラレタル決議ヲ受諾スルニ當リ理事會ガ此ノ上ノ戰鬪ヲ招徠スルコトアルベキ一切ノ主動的行爲若ハ事態ヲ惡化セシムル虞アル他ノ一切ノ行動ヲ避クル樣支那及日本雙方ニ指令シ以テ此ノ上ノ戰鬪及流血ヲ阻止セントスル理事會ノ努力ヲ謝ス本決議ガ終熄セシムルコトヲ眞ニ目的ト爲シタル事態ヨリ生ジタル無法律狀態存在ノ口實ノ下ニ右ノ指令ヲ破ルベカラザルコトハ之ヲ明白ニ指摘セザルベカラズ現ニ滿洲ニ在ル無法律狀態ノ多クハ日本軍ノ侵入ニ依リテ生ジタル平常生活ノ中絕ニ因ルモノナルコトヲ述ベザルベカラズ通常ノ平和的生活ヲ回復スル唯一ノ確實ナル方法ハ日本軍隊ノ撤收ヲ迅速ナラシメ且支那官憲ヲシテ治安ノ維持ノ責任ヲ負ハシムルコトニ在リ支那ハ如何ナル外國ノ軍隊ニ依ル其ノ領域ノ侵入

及占領ヲモ許容スルコトヲ得ズ況ヤ右軍隊ガ支那官憲ノ警察職權ヲ冒スコトヲ寬容スルコトニ於テヲヤ

六　支那ハ他ノ列國ノ代表者ヲ通ジテ爲ス中立的觀察及報告ノ現在ノ方法ヲ繼續シ且改善スルノ意圖ヲ滿足ヲ以テ了承ス而シテ支那ハ斯カル代表者ヲ派遣スルコト望マシト思考セラルル地方ヲ時時必要ニ應ジ指示スベシ

七　支那ハ日本軍ノ鐵道附屬地內ヘノ撤收ヲ規定スル本決議ヲ受諾スルニ當リ右鐵道附屬地內ニ於ケル軍隊ノ維持ニ關シ其ノ常ニ執リ來レル態度ヲ何等讓步スルモノニ非ザルコトハ了解セラレザルベカラズ

八　支那ハ其ノ領土的又ハ行政的保全ヲ害スルガ如キ政治的ノ紛亂ヲ招徠セントスル日本側ノ一切ノ企圖（例ヘバ所謂獨立運動ヲ助クルガ如キ又ハ右等目的ノ爲ニ不逞分子ヲ利用スルガ如キ）ヲ以テ事態ノ此ノ上ノ惡化ヲ避クベシトノ約定ノ明白ナル違反ト認ムベシ」

調査委員會ノ任命

右ノ結果本委員會委員ハ理事會議長ニ依リ選定セラレ兩當事國ノ同意ヲ得タル上千九百三十二年一月十四日ノ理事會ニ於テ次ノ如ク最終的ニ承認セラレタリ

「アルドロヴァンディ」伯爵閣下（伊太利人）

「アンリ、クローデル」中將（佛蘭西人）

「リットン」伯爵閣下（英吉利人）

「フランク、ロッス、マッコイ」少將（亞米利加合衆國人）

委員會ノ構成

「ドクトル、ハインリッヒ、シュネー」閣下（獨逸人）

歐羅巴側委員ハ亞米利加合衆國委員ノ一代表者ト共ニ一月二十一日「ジュネーヴ」ニ於テ二回ノ會合ヲ催シタルガ右會合ニ於テ「リットン」卿ハ全員一致ヲ以テ委員長ニ選擧セラルルト共ニ本委員會事業ノ假計畫ハ承認セラレタリ次デ日本及支那ノ政府ハ十二月十日ノ決議ニ基キ何レモ「委員會ヲ助クル爲夫々一名ノ參與員ヲ指名スルノ權利」ヲ有シタルニ付右參與員トシテ「トルコ」駐劄日本大使吉田伊三郎閣下及支那前國務總理、前外交部長博士顧維鈞閣下ヲ任命セリ

國際聯盟事務總長ハ聯盟事務局部長「ロベール、アース」氏ニ本委員會ノ事務總長ノ職務ヲ行フコトヲ指定セリ（註）

註　事務總長ハ本委員會事務局ニ次ノ諸氏ヲ提供セリ

情報部員「ベルト」氏、國際事務局ヲ擔任セル事務次長ノ補佐員「フォン、コッツェ」氏、政治部員「パスチュホーフ」氏、事務局臨時職員ニシテ本委員會委員長ノ祕書役タル「ダブリュー、ダブリュー、アスター」氏及情報部員「シャレール」氏

佛蘭西陸軍軍醫隊員ニシテ「クローデル」將軍ノ隨員タリシ「ペー、ジューヴレー」少佐及「マッコイ」將軍ノ隨員ニシテ且事務局ノ一般事務ニモ協力セル「ビッドル」中尉

横濱駐在佛蘭西副領事ニシテ日本語通譯員タリシ「ドペイール」氏

情報部員ニシテ本委員會事務局ト協力セル背木氏及吳秀峰氏

本委員會ハ其ノ事業ノ進行中「ジー、エィチ、ブレークスリー」教授（亞米利加合衆國「クラーク」大學教授、「ドクター、オヴ、フィロソフィー」、「エル、エィチ、ディー」）、「デヌリー」氏（佛蘭西大學教授有資格者）、「ベン、ドルフマン」氏（「ビー、エー」及「エム、エー」、亞米利加合衆

國「カリフォルニア」大學「ウイリアム、ハリスン、ミルス、フェロー」）、「ドクトル、アー、デー、アー、ド、カット、アンジェリーノ」、「ティー、エー、ハイアム」大佐（「カネーディアン、ナショナル」鐵道會社會長ノ補佐員）、威海衞駐在英吉利領事「ジー、エス、モッス」氏、「ドクター、シー、ウォルター、ヤング」（「エム、エー」、「ドクター、オヴ、フィロソフィー」、「ニュー、ヨーク」市世界時事問題研究所ノ極東代表者）ノ專門的進言ニ依リ補佐セラルル所アリタリ

本委員會ノ歐羅巴側委員ハ二月三日「ル、アーヴル」及「プリマス」ヲ出帆シ二月九日「ニュー、ヨーク」ニ於テ亞米利加合衆國委員ノ參加ヲ得タリ

此ノ間極東ニ於ケル形勢ノ發展ハ支那政府ヲシテ一月二十九日規約第十條、第十一條及第十五條ニ基キ聯盟ニ對シ新ナル提訴ヲ爲サシメタリ千九百三十二年二月十二日支那代表ハ理事會ニ對シ規約第十五條第九項ニ基キ紛爭ヲ聯盟總會ニ付託スルコトヲ請求セリ然レドモ本委員會ハ理事會ヨリ何等ノ新ナル指令ヲモ接受セザリシニ付十二月十日ノ理事會決議ニ從ヒ理事會ヨリノ委任事項ヲ解釋シ行ケリ右ノ内ニハ次ノモノヲ含ム

規約第十條、第十一條及第十五條ニ基ク支那ノ聯盟提訴

(一)　理事會ニ付議セラレタル支那及日本間ノ紛爭ノ調査但シ紛爭ノ原因、其ノ發展ノ狀態及調査當時ノ狀況ヲ含ム

(二)　兩國間ノ根本的利益ヲ調整スベキ日支紛爭ノ解決策ニ對スル考慮

本委員會ノ使命ニ關スル右ノ概念ハ其ノ事業ノ計畫ヲ決定セリ（註）

註　事務局註　本委員會ノ旅程ニ付テハ第二百六十一頁ノ附錄竝ニ地圖第十三及第十四ヲ見ヨ

本委員會ノ東京到著、百三十二年二月十九日

紛爭ノ本舞臺タル滿洲ニ到著スル以前ニ兩國ノ利益ノ本質ヲ確ムル爲日本及支那ノ政府竝ニ各方面ノ意見ヲ代表スル人士ト接觸ヲ保チタリ卽チ本委員會ハ二月二十九日東京ニ到著シ同地ニ於テ日本參與員ノ參加ヲ得タリ尙本委員會ハ皇帝陛下ニ謁見スルノ光榮ヲ得タリ東京ニハ八日間ノ滯在ヲ爲シ日日政府要員及其ノ他トノ會談ヲ爲シタルガ右ノ內ニハ總理大臣犬養氏、外務大臣芳澤氏、陸軍大臣荒木中將、海軍大臣大角大將ヲ含ミタリ右ノ外有力ナル銀行家、實業家及諸種ノ團體ノ代表者其ノ他トモ會見ヲ遂ゲタリ吾人ハ右等人士ヨリ滿洲ニ於ケル日本ノ權利及利益竝ニ日本ト同地方トノ史的關係ニ關スル情報ヲ受領セリ上海ノ事態ニ關シテモ議スル所アリタリ東京出發後吾人ハ京都滯在中「滿洲國」ナル名ノ下ニ滿洲ニ於テ一新「國家」ノ建設アリタル次第ヲ知リタリ大阪ニ於テハ實業界代表者トノ會談行ハレタリ

上海、三月十四日—二十六日

本委員會ハ三月十四日上海ニ到著シ支那參與員ノ參加ヲ得タリ同地滯在二週間ヲ一般調査ノ外最近ノ戰鬪ニ關スル事實及吾人ガ曩ニ東京ニ於テ芳澤氏ト議シタル休戰ノ可能性ニ關シテモ成ルベク多ク知ルコトニ用ヒタリ吾人ハ荒廢地域ヲ訪ヒ最近ノ戰鬪動作ニ關スル日本陸海軍當局ノ陳述ヲ聽取セリ吾人ハ又若干ノ支那政府要員及廣東ヲ含ム實業界、敎育界其ノ他ノ首腦者トモ會見セリ

南京、三月二十六日—四月一日

三月二十六日本委員會ハ南京ニ赴キタルガ其ノ一部ハ途中杭州ニ立寄リタリ翌週中本委員會ハ國民政府主席ニ面謁スルノ光榮ヲ得タリ行政院長汪精衞氏、軍事委員會委員長蔣介石將軍、外交部長羅文幹氏、財政部長宋子文氏、交通部長陳銘樞將軍、敎育部長朱家驊氏其ノ他ノ政府要員トモ

會見セリ

楊子江沿岸、四月一日—七日

吾人ハ更ニ充分代表的意見及支那各地ノ現狀ヲ知ランガ爲途中九江ニ立寄リタル上四月一日漢口ニ赴キタリ本委員會ノ代表者數名ハ湖北省及四川省ノ宜昌、萬縣及重慶ヲ視察セリ

北平、四月九日—十九日

四月九日本委員會ハ北平（北京ノ現稱）ニ到著シタルガ同地ニ於テハ張學良元帥及九月十八日迄滿洲ノ政府ノ官吏タリシ人士ト會談セリ九月十八日夜奉天營舍ノ指揮官タリシ支那諸將官ヨリ證據ノ提出アリタリ

吾人ノ北平滯在ハ支那參與員顧維鈞博士ノ滿洲ニ入ルコトニ關シ發生シタル困難ノ爲延引セリ滿洲ニ入ルニ當リテ本委員會ハ二團ニ分レ一部ハ山海關經由鐵道ニ依リ奉天ニ赴キタルガ殘餘ハ顧博士ト共ニ海路大連ヲ經由シ以テ日本ノ鐵道地域內ヲ旅行スルコトト爲セリ顧博士ニ對スル「滿洲國」領域入國ノ反對ハ本委員會ガ日本鐵道地帶ノ北部終點タル長春到著ノ後遂ニ撤回セラレタリ

滿洲、四月二十日—六月四日

吾人ハ滿洲內ニ約六週間留マリ奉天、長春、吉林、哈爾賓、大連、旅順、鞍山、撫順及錦州ヲ視察シタリ吾人ハ又齊齊哈爾ニモ赴カント欲シタルモ哈爾賓滯在中附近ニ間斷ナキ戰鬪アリ且日本軍事當局ヨリ當時東支鐵道ノ西部線ノ旅行ニ關シ本委員會ノ安全ヲ保障シ得ザル旨ヲ告ゲラレタルニ顧ミ隨員ノ一部ノミ空路ニ依リ齊齊哈爾ニ赴キタリ彼等ハ同地ヨリ洮南昂昂溪鐵道及四平街洮南鐵道ニ依リ旅行シ奉天ニ於テ本委員會ノ主班ニ合セリ

滿洲滯在中吾人ハ假報告書ヲ起草シ四月二十九日之ヲ「ジュネーヴ」ニ送付セリ（註）

吾人ハ關東軍司令官本庄中將其ノ他ノ陸軍將校及日本ノ領事官憲ト頻繁ナル會談ヲ爲シタリ長春ニ於テハ「滿洲國」執政卽チ今ハ「ヘンリー」溥儀ナル私名ニ依リ知ラルル前宣統帝ヲ訪問セリ吾人ハ又日本ノ國籍ヲ有スル官吏及顧問ヲ含ム「滿洲國」政府要員竝ニ各省省長トモ會見ヲ重ネタリ又各地方住民代表ヲモ接見シタルガ右ハ概ネ日本人又ハ「滿洲國」當局ニ依リ紹介セラレタリ右公ノ會見ノ外ニ吾人ハ多數ノ支那人及外國人ト會見ヲ遂グルコトヲ得タリ

北平、六月五日―二十八日

本委員會ハ六月五日北平ニ歸著シ蒐集シタル尨大ナル資料ノ吟味ヲ同地ニ於テ開始セリ行政院長汪精衞氏、外交部長羅文幹博士及財政部長宋子文氏トハ更ニ二回ノ會談ヲ遂ゲタリ

東京、七月四日―十五日

六月二十八日本委員會ハ朝鮮經由東京ニ向ヘリ右日本ヘノ出發ハ海軍大將齋藤子爵ノ內閣ニ於ケル外務大臣ガ當時尙任命セラレ居ラザリシ爲遲延セルモノナリ七月四日東京到著後總理大臣海軍大將齋藤子爵、外務大臣內田伯爵及陸軍大臣荒木中將ヲ含ム新內閣ノ首腦ト會談シタルガ之ニ依リ吾人ハ滿洲ニ於ケル狀況ノ進展竝ニ日支關係ニ關スル政府ノ現在ノ見解及政策ヲ知リ得タリ

北平、七月二十日

斯ノ如クニシテ支那及日本ノ政府ト重ネテ接觸ヲ遂ゲタルニ付本委員會ハ北平ニ歸著シ本報告書ノ起草ニ著手セリ

參與員

本委員會ノ事業ニ對シテ終始多大ノ盡力ヲ惜マザリシ兩參與員ハ多數ノ貴重ナル證據書類ヲ提出セリ一參與員ヨリ受領セル資料ハ之ヲ他ノ參與員ニ提示シ以テ之ニ對スル批判ヲ爲スノ機會ヲ與ヘタリ此等ノ書類ハ發表セラルベシ

十二月十日ノ決議ニ基ク使命ノ概念ハ本委員會ノ報告書ノ構想ヲ定メタリ

附屬書ニ表示セル如ク會見セル人物及團體ノ多數ナルコトハ以テ吾人ノ審査シタル證據ノ如何ニ多數ニ上リタルカヲ明ニスベシ更ニ吾人ノ旅行中吾人ハ多量ノ印刷物、請願、要請及書翰ヲ受領セリ單ニ滿洲ニ於テノミニテモ英吉利文、佛蘭西文及日本文ノモノヲ除キ約千五百五十通ノ漢文書翰及四百通ノ露西亞文書翰ヲ受領セリ

此等ノ書類ノ整理、翻譯及研究ハ多大ノ勞力ヲ必要ト爲シタルガ各地ヘノ間斷ナキ移動ニモ拘ラズ之ヲ遂行シ七月北平ニ歸著後日本ヘノ最終訪問前完成スルコトヲ得タリ

本委員會ノ事業ノ計畫及旅程ヲ決定シタル本委員會ノ使命ニ關スル概念ハ又同樣ニ其ノ報告書ノ構想ヲ指導セリ

吾人ハ最先ニ紛爭ノ根本的原因ヲ成ス滿洲ニ於ケル兩國ノ權利及利益ヲ記述シテ史的背景ヲ明ナラシメント試ミタリ次デ現在ノ事變勃發ノ直前ニ於ケル比較的最近ノ個個ノ案件ヲ審議シ更ニ千九百三十一年九月十八日以後ニ於ケル事件ノ經過ヲ記述セリ各種問題ノ査察ヲ通ジ吾人ハ過去ノ行爲ニ對スル責任ヨリモ寧ロ將來ニ於テ之ヲ繰返スコトヲ避クル方法ヲ發見スルコトノ必要ニ重キヲ措キタリ

最後ニ本報告書ハ理事會ノ直面シツツアル諸種ノ問題ニ關シ吾人ガ理事會ニ提出センコトヲ欲スル若干ノ省察及考察竝ニ吾人ニ於テ紛爭ノ永續的解決及支那日本間ノ良好ナル了解ノ再建ヲ成就セシメ得ベシト察スル諸方針ニ基ク若干ノ提議ヲ以テ結バレ居レリ

第一章

支那ニ於ケル近時ノ發展ノ概要

現在ノ紛爭ニナルノ完全ニハ理解前ノ事ノ狀態ニ關スル知識ニ必要ナリ

現在ノ紛爭ニ付初テ國際聯盟ヲシテ留意セシムルニ至ラシメタル千九百三十一年九月十八日ノ事件ハ支那及日本間ノ關係ノ緊張漸增ヲ示セル餘リ重大ナラザル軋轢ノ長期ニ亘ル連鎖ノ結果ニ外ナラズ現在ノ紛爭ヲ完全ニ理解センガ爲ニハ右兩國間ニ於ケル最近ノ關係ノ主要ナル要因ニ關スル知識ヲ必要トス從テ問題ニ關スル吾人ノ研究ヲ滿洲自體以外ニ及ボシ且現在ノ日支關係ヲ決定スル一切ノ要因ヲ最廣汎ナル局面ニ付考究スル必要アリタリ例ヘバ中華民國ノ國民的熱望、日本帝國及舊露西亞帝國ノ膨脹政策、「ソヴィエト」聯邦ヨリノ現時ノ共產主義宣布竝ニ右三國ノ經濟的及軍略的必要ノ如キハ滿洲問題ノ如何ナル研究ニ當リテモ根本的ニ重要視セラルベキ要因ナリ

滿洲ハ地理的ニ日本及露西亞ノ領域ノ間ニ介在スルヲ以テ支那ノ右部分ハ政治的ニ紛爭ノ中心ト爲リ右三國間ノ戰爭ハ總テ右土地ニ於テ行ハレタリ實ニ滿洲ハ相衝突スル要求及政策ノ遭遇點ニシテ現在ノ紛爭ノ具體的事實ヲ充分ニ正解スルニ先ダチ先ヅ此等ヲ考査スルコトヲ要ス故ニ吾人ハ先ヅ右根本的要因ヲ順次檢討セントス

支那、進化シツツアル國家

支那ニ於ケル支配的要因ハ徐徐ニ行ハレツツアル國家自體ノ現代化ナリ現時ノ支那ハ其ノ國家生

活ノ有ラユル方面ニ於テ過渡的證跡ヲ示シツツ進化シツツアル國家ナリ政治的擾亂、內亂、社會的及經濟的不安定竝ニ其ノ結果タル中央政府ノ萎微ハ千九百十一年ノ革命以來支那ノ特徵ト爲リタリ此等ノ狀態ハ支那ノ接觸シ來レル一切ノ國家ニ不利ナル影響ヲ及ボシ來レルモノニシテ其ノ匡救セラルルニ至ル迄ハ常ニ世界平和ニ對スル脅威タルベク又世界ノ經濟不況ヲ助成スル一原因タルベシ

千八百四十二年支那初テ國人ニ外ニ開放セラル

現在ノ狀態ニ至ル迄ノ諸段階ニ付テハ本報告書ニ於テハ單ニ簡單ナル概要ヲ記述スベキガ右ハ固ヨリ詳細ナル歷史タルコトヲ目的トスルモノニハ非ズ支那ハ個個ノ西洋人ト接觸シタル最初ノ數世紀中ハ西洋ヨリノ影響ノ關スル限ニ於テハ實際上孤立セル國家ナリキ此ノ孤立狀態ハ第十九世紀ノ當初近代的交通通信ノ改良ガ距離ヲ狹メ極東ヲ他ノ諸國ヨリ容易ニ到達シ得ルニ至ラシムルニ及ビテ當然終了スベキ運命ニ在リタリ然レドモ當時尙支那ニハ此ノ新ナル接觸ニ應ゼントスルノ用意ナカリキ千八百四十二年ノ戰爭ノ終末ヲ告ゲタル南京條約ノ結果トシテ數港ハ外國人ノ貿易及居住ノ爲ニ開カレ外國ノ影響ハ之ヲ同化スベキ何等ノ準備ヲモ爲シ居ラザル政府ヲ有スル國ニ導入セラレタリ外國商人等ハ支那ガ外國人ノ行政的、法律的、司法的、知識的及衞生的必要ニ對スル設備ヲ爲シ得ル以前ニ其ノ諸港ニ居住シ始メタリ外國商人等ハ從テ自己ノ慣レタル狀態及社會標準ヲ齎シタリ諸條約港ニハ外國都市勃興シ組織、行政及商業ノ外國式方法闖入シ來レリ外國ト支那トノ右對照ヲ緩和セントシタル雙方ノ努力ハアリタルベキモ效果ナク軋轢ト誤解トノ長年月之ヨリ繼續スルニ至レリ

日本トノ比較

支那ノ問題ハ更ニ頗ル困難ナリ

屢次ノ武力衝突ニ於テ外國武器ノ大ナル效力ヲ見タル支那ハ西洋式方法ニ依リテ兵器廠ヲ建テ軍隊ヲ敎練シ力ヲ以テ力ニ對抗セント欲シタリ範圍ニ於テ限ラレタル支那ノ右方向ヘノ努力ハ結局失敗スベキ運命ニ在リタリ支那ガ外國人ニ對抗シテ自己ノ地歩ヲ維持シ得ンガ爲ニハ更ニ根本的ナル改革ヲ必要トシタルモ支那ハ斯カル改革ヲ望マズ却テ右改革ニ反對シテ其ノ文化ト領土トヲ護ラント欲シタリ

日本モ西洋ノ影響ニ對シ初テ國ヲ開キタル當時ハ同樣ナル諸問題卽チ惑亂的ナル諸思想トノ新ナル接觸、相異ル社會標準ノ衝突、其ノ結果タル外國居留地ノ設定、片務的關稅協定及治外法權要求ノ諸問題ニ直面セザルヲ得ザリキ然レドモ日本ハ內政上ノ改革ニ依リ、自己ノ現代的要求ノ標準ヲ西洋ノ標準迄高ムルコトニ依リ及外交交涉ニ依リ此等ノ諸問題ヲ解決セリ日本ノ西洋諸思想ノ同化ハ未ダ完全ナラザルヤモ知レズ又相異ル時代ノ新舊思想間ノ軋轢ハ時ニ之ヲ見ルコトアルヤモ知レズト雖モ而モ日本ガ自己ノ古キ傳統ノ價値ヲ減ズルコトナクシテ西洋ノ科學ト技術トヲ同化シ且西洋ノ社會標準ヲ採用シタル速度ト徹底振リトハ一般ノ賞嘆シ來レル所ナリ

日本ノ同化及改革ノ諸問題ガ如何ニ困難ナリシニモセヨ支那ガ直面セル諸問題ハ其ノ領土ノ廣大ナルコト、支那ノ人民ニ國家的統一ノ缺如セルコト及徵收セラレタル收入ノ全部ガ中央國庫ニ到達セザル傳統的財政組織ヲ有スルコトニ依リ更ニ頗ル困難ナリ支那ガ解決スルコトヲ要スル問題ハ日本ガ直面シタル問題ニ比シ更ニ頗ル複雜ニシテ兩者ヲ比較スルハ失當ナリトスルモ而モ支那ノ必要トスル解決ハ結局日本ノ採用セルガ如キ方針ニ依ラザルヲ得ズ外國人ヲ容受スルコトニ對

諸外國トノ衝突ニ因ル支那ノ損失

スル支那ノ嫌惡及支那在住外國人ニ對スル支那ノ態度ハ當然重大ナル結果ヲ生ムベキモノナリキ右ハ其ノ爲政者ノ注意ヲ外國ノ勢力ニ對スル反抗及其ノ制限ニ集中セシメ支那ガ外國居留地ニ於ケル一層現代的ナル諸狀態ノ經驗ニ依リ利益スルコトヲ妨ゲタリ其ノ結果トシテ支那ヲシテ新シキ諸狀態ニ善處シ得シムル爲ニ必要ナル建設的改革ハ殆ド全ク顧ミラレザリキ

各自ノ權利及國際關係ニ關スル相容レザル二箇ノ見解ノ避クベカラザル衝突ハ戰爭及紛爭ヲ招徠シ其ノ結果ハ主權ノ漸次ノ割讓及一時的又ハ永久的ノ領土喪失ト爲レリ支那ハ黑龍江ノ北岸ニ於ケル大地域及沿海州、琉球諸島、香港、「ビルマ」竝ニ安南、東京、「ラーオーズ」、交趾支那等ノ印度支那ノ諸地方、臺灣、朝鮮及他ノ數箇ノ朝貢國ヲ失ヒ又其ノ他ノ領土ヲ長期ニ亘リ租貸シタリ外國ノ法廷、行政、警察及軍事施設ハ支那ノ領土ニ於テ許容セラレタリ自國ノ輸出入關稅率ヲ自由ニ規定スル權利ハ一時喪失セラレタリ支那ハ外國人ノ生命及財產ノ被害ニ對スル賠償竝ニ巨額ノ戰爭償金ヲ支拂ヒタルガ此等ハ其ノ後常ニ支那財政ノ重荷タルニ至レリ支那領土ヲ諸外國ノ勢力範圍ニ分割スルコトニ依リ國家トシテノ存在スラ脅サルル迄ニ至レリ

千九百年團匪蜂起後改革運動起ル

千八百九十四年乃至九十五年ノ日淸戰爭ニ於ケル支那ノ敗戰及千九百年ノ團匪蜂起ノ慘憺タル結果ハ有識指導者ノ眼ヲ開キ根本的改革ノ必要ヲ感ゼシメタリ改革運動ハ當初ハ滿洲朝廷ノ指揮ヲ甘受スル意アリシモ其ノ目的及指導者ガ太后ニ密告セラルル所ト爲リシ後ハ同王朝ヨリ離反シ光緒帝ハ其ノ百日ノ改革ノ代償トシテ千九百八年崩御ニ至ル迄事實上ノ監禁生活ヲ送リタリ

滿洲朝ノ沒落

滿洲朝ハ二百五十年間支那ヲ統治シタルモ其ノ後年ニ至リテハ太平ノ亂（千八百五十年乃至千八

百六十五年）雲南ニ於ケル回教徒ノ叛亂（千八百五十六年乃至千八百七十五年）及支那「タークキスタン」ニ於ケル叛亂（千八百六十四年乃至千八百七十七年）等相次グ叛亂ニ依リ實力ヲ失ヒタリ殊ニ太平ノ亂ハ同帝國ノ基礎ヲ搖撼シ王朝ノ威嚴ハ遂ニ回復スルコトヲ得ザル大ナル打擊ヲ蒙リタリ而シテ千九百八年太后ノ崩御後其ノ固有ノ弱點ヨリシテ遂ニ倒潰セリ

革命主義者ハ幾度カ叛亂ノ小計畫ヲ試ミタル後南支那ニ於テ成功セリ斯クテ革命ノ指導者孫逸仙博士ヲ臨時大總統トスル共和政府短期間南京ニ樹立セラレタリ千九百十二年二月十二日當時ノ太后ハ幼兒皇帝ノ名ニ於テ退位ノ勅書ニ署名シ次デ袁世凱ヲ大總統トスル臨時立憲政治創始セラレタリ皇帝ノ退位ト共ニ各省、道及縣ニ於ケル其ノ代表者ハ皇帝ノ權威ニ基キテ其ノ有シ來レル勢力及道義的威嚴ヲ失ヘリ彼等ハ普通人ト爲リ其ノ決定ヲ强制シ得ル限ニ於テノミ人民ハ彼等ニ服從スルコトト爲レリ斯クテ各省ニ於テ次第ニ文官都督ガ武官タル都督ニ依リテ代ラルルニ至リタルハ當然ノ結果ナリ中央行政官ノ地位モ亦同樣ニ最强大ナル軍隊ヲ有シタルカ又ハ省若ハ地方ノ群雄ノ最强大ナル集團ニ依リ支持セラレタル軍閥將領ニ依リテノミ保持セラレ得ルニ至レリ

北方ニ於テ一層顯著ナリシ武人獨裁ノ傾向ハ軍隊ガ革命ニ對シテ屢與ヘタル援助ノ爲或程度ノ人氣ヲ博シ居リタル事實ニ依リテ助成セラレタリ軍閥將領ハ革命ヲ成功セシメタル功勞ニ對シ報酬ヲ要求スルニ躊躇セザリキ彼等ノ大部分ハ北方ノ首領ニシテ或程度迄所謂北洋軍閥（日清戰爭後袁世凱ニ依リテ訓練セラレタル模範軍隊ニ於テ低キ身分ヨリ高キ指揮的地位ニ上リタル人士）トシテ一群ヲ成シタリ此等ノ軍人ハ袁世凱ニトリテハ多少信賴シ得ルモノナリキ蓋シ彼等ハ支那ニ

北方ニ於ケル武人獨裁ノ傾向

於テハ當時尙西洋ノ各組織ノ特徵タル團體的忠誠ニ代ル迄ニ爲リ居ラザリシ個人的忠實ノ絆ニ依リ結バレ居リタレバナリ彼等ハ袁世凱ニ依リ其ノ支配下ニ在ル諸省ノ督軍ニ任命セラレタリ右諸省ニ於テ權力ハ彼等ノ手中ニ留リ從テ省ノ收入ハ彼等ガ自由ニ取リテ以テ之ヲ自己ノ個人的軍隊及部下ノ爲ニ使用シ得ルニ至レリ

南方諸省ニ於テハ一ニハ諸外國トノ接觸ノ結果トシテ又一ニハ人民ノ異レル社會的慣習ノ爲ニ事態ヲ異ニシタリ南支那ノ人民ハ常ニ武人ノ專制政治及外部ヨリノ公ナル干涉ヲ好マザリキ孫逸仙博士其ノ他南方ノ指導者ハ立憲主義ノ思想ニ忠實ナリキ然レドモ楊子江以南ノ諸省ニ於テハ軍隊ノ改造ハ未ダ充分進捗シ居ラズ且設備整頓セル兵工廠ヲ有セザリシ爲彼等ハ其ノ背後ニ有力ナル軍隊ヲ有セザリキ

南方ニ於ケル狀態

遷延ニ遷延ヲ重ネタル後千九百十三年最初ノ國會ガ北京ニ於テ召集セラレタル際ニハ袁世凱ハ既ニ其ノ軍事的地位ヲ確立シ唯缺クル所ハ各省軍隊ノ忠誠ヲ確保スルニ足ル財源ノミナリキ世ニ善後借款ト稱セラルル大外債ハ彼ニ必要ナル財力ヲ供給セリ然レドモ彼ガ右借款ヲ國會ノ同意ヲ得ズシテ締結シタル行爲ニ依リ國民黨ニ屬スル彼ノ政治的反對者ハ孫博士ノ指導ノ下ニ公然彼ニ背反スルニ至レリ軍事的ニハ南方ハ北方ヨリモ弱カリシガ北方ノ戰勝諸指揮官ガ南方ノ數省ヲ征略シ之ヲ北方ノ諸將軍ノ下ニ置クニ至リテ更ニ其ノ弱キヲ加ヘタリ

其ノ後袁世凱ニ依リ開設セラレタル千九百十三年ノ國會ヲ回復セシメ又ハ僞國會ヲ召集セントスル數次ノ企畫、王政ヲ樹立セントスル兩度ノ計畫、大總統及內閣ノ幾度トナキ變替、軍閥將領間

袁世凱ニ對スル叛亂、千九百十三年

內亂及政治的不安定、千九百十四年—千九百十八年

ニ於ケル服屬關係ノ不斷ノ移動及一省又ハ數省ノ一時的獨立ニ關スル幾多ノ宣言ヲ見タリキ廣東ニ於テハ孫博士ヲ首領トスル國民黨政府ハ千九百十七年以來權力行使ヲ中絶シタルコト屢アリタルモ兎ニ角存續スルニ成功セリ右期間ニ於テ支那ハ各軍閥間ノ戰爭ニ依リ荒廢セラレ常時存在スル匪賊ハ零落セル農夫、飢饉ニ襲ハレタル諸地方ノ絶望セル住民及給料不渡リノ兵士等ヲ編入シテ眞正ノ軍隊ト擇ブ所ナキニ至レリ南方ニ於テ戰ヒツツアリシ立憲主義ノ人士サヘモ幾度トナク彼等自身ノ內ニ發生スル軍閥爭鬪ノ危險ニ曝サレタリ

國民黨ノ改組

千九百二十三年孫逸仙博士ハ自己ノ主義ノ勝利ヲ得ル爲ニハ明確ナル政綱、嚴格ナル黨規及組織的宣傳ノ必要ナルコトヲ露西亞革命家ニ依リテ確信セシメラレ彼ノ「建國大綱」及「三民主義」(註)中ニ略述セル一ノ政綱ヲ以テ國民黨ヲ改造セリ系統的組織ハ中央執行委員會ノ仲介ニ依ル黨ノ規律及行動ノ統一ヲ確保セリ政治訓練處ハ宣傳者及黨地方支部ノ組織者ヲ敎育シ他方黃埔ニ於ケル軍官學校ハ露西亞將校ノ援助ノ下ニ黨ノ思想ニ透徹セル指導者ヲ有スル有能ナル軍隊ヲ黨ノ爲ニ作リ上ゲタリ右施設成リテ國民黨ハ幾何モナク廣ク民衆ト接觸スル用意成ルニ至レリ同情者ハ黨地方支部カ又ハ黨ニ加盟セル農民及工人組合カニ組織セラレタリ右人心ノ準備的征服ハ千九百二十五年孫博士ノ歿後國民黨軍ノ北伐ノ成功ヲ來シ千九百二十八年ノ末ニハ多年存セザリシ名義上ノ統一ヲ成就シ且暫時繼續シタル實際上ノ統一ヲモ或程度迄實現セリ

註　國民的獨立、民主政治及社會改組

孫博士ノ政綱ノ第一段卽チ軍政期ハ斯クシテ成功スルニ至レリ

中央政府ノ樹立

第二期卽チ黨獨裁ノ下ニ於ケル訓政期茲ニ開始セラレ得ルコトト爲レルガ右時期ハ自治政治ノ技術ニ對スル民衆ノ敎育及國家ノ改造ニ捧ゲラルベキ時期ナリキ

千九百二十七年南京ニ中央政府樹立セラレタリ同政府ハ黨ニ依リテ統制セラレタリ實際ニ於テ政府ハ黨ノ一重要機關ニ過ギズ政府ハ五院（行政、立法、司法、監察及考試ノ諸院）ヨリ成レリ同政府ハ孫博士ノ「五權憲法」(「モンテスキュー」ノ三權分立ニ支那ノ古來ノ二制度タル監察院ト考試院トヲ加ヘタルモノ）ノ方針ニ能フ限リ近似スル樣構成セラレタルガ右ハ人民ガ一部ハ直接ニ又一部ハ其ノ選擧セル代表者ヲ通ジテ自ラ政府指揮ノ責ニ任ズベキ最後ノ段階タル憲政ノ段階ヘノ推移ヲ容易ナラシムル爲ナリ

各省ニ於テモ同樣ニ省政府ノ組織ニ付委員制度採用セラレタルガ他方村落、都市及縣ニ於テハ人民ハ地方自治政治實行上ノ敎育ヲ受クルコトト爲レリ黨ハ今ヤ其ノ政治的及經濟的再建ノ計畫ヲ實行スルノ用意成リタルモ內部ノ不和、私的軍隊ヲ有スル諸將軍ノ定期的叛亂及共產主義ノ脅威ノ爲ニ實行シ得ザリキ實際ニ於テ中央政府ハ幾度トナク其レ自體ノ生存ノ爲ニ戰フコト必要ナリキ

中央政府ノ權威ハ外部ヨリ拒否セラレ內部ノ不和ニ因リ弱メラレタリ

表面上統一ハ暫時保持セラレタリ然レドモ有力ナル軍閥巨頭ガ相互ニ連合シ南京ニ向ヒテ進軍セル場合ニハ統一ノ外觀スラモ保持スルコト不可能ナリキ此等ノ軍閥巨頭ハ一度モ目的ヲ達セザリシモ彼等ハ戰敗ノ後ニ於テモ輕視セラレ得ザル潛勢力タリキ加フルニ彼等ハ決シテ中央政府ニ對スル戰爭ハ叛逆行爲ナリトノ解釋ヲ採ラザリキ彼等ノ眼中ニ於テハ此等ノ戰爭ハ單ニ彼等ノ黨派

ト偶然國都ニ在住シ諸外國ニ依リ中央政府トシテ承認セラレタル他ノ黨派トノ間ノ爭覇戰ニ過ギザリキ此ノ上下關係ノ缺如セルコトニハ更ニ甚シキ危險アリ蓋シ黨自體内ノ重大ナル不和ニ因リ中央政府ガ孫博士ノ疑ナキ後繼者タルノ資格スラ弱メラレタルガ爲ナリ此ノ新ナル分裂ノ結果南方ノ有力ナル諸首領ハ離反シ廣東ニ退キタルガ同地方ノ地方官憲及國民黨ノ地方支部ハ屢中央政府トハ獨立ニ行動セリ

右概括的敍述ニ徵シ支那ノ崩壞的諸勢力ハ今尙優勢ナルコト明白ナリ此ノ結合力ノ缺如ノ原因ハ國民ノ大衆ガ其ノ自國ト諸外國トノ間ノ關係緊張セル時期ヲ除キテハ國家ヲ基礎トセズ家族及地方ヲ基礎トシテ考フル傾向ニ在リ今日ニ於テハ各州獨立主義的感情ヲ超越セル指導者モ相應アリト雖モ眞ノ國家的統一ガ齎サルルニ先ダチ遙ニ多數ノ國民ガ國家的見地ヲ有スルニ至ランコト必要ナリ

假令支那ノ過渡期ノ狀況ガ避クルコトヲ得ザル政治的、社會的、知識的及道德的亂雜ヲ示シツツアリテ支那ノ性急ナル友人ヲ失望セシメ且平和ニ對スル危險ト爲リタル怨恨ヲ作リタリト雖モ而モ諸種ノ困難、遷延及失敗ニモ拘ラズ事實ニ於テ相當ノ進步ガ遂ゲラレタルコトハ事實ナリ現在ノ紛爭ノ論議ニ方リ常ニ聞ク議論ハ支那ハ「組織アル國家ニ非ズ」トカ又ハ「全然混沌タル狀態及意想外ノ無政府狀態ニ在リ」トカ支那ノ今日ノ狀態ハ當然支那ヨリ國際聯盟ノ一員タル資格ヲ失ハシメ且規約中ノ保護條項ノ適用ヲ支那ヨリ奪フベキモノナリトカノ言說ナリ右ニ關シテハ「ワシントン」會議ニ際シ一切ノ參加諸國ガ全然右ト異リタル態度ヲ執リタルコトヲ記憶スルコト有

現時ノ支那ノ狀態ト會議當時ノ支那ノ狀態トノ比較

用ナルベシ而モ當時ニ於テモ支那ハ北京及廣東ニ於テ二箇ノ全然異レル政府ヲ有シ又奥地ノ交通通信ヲ屢妨害スル多數ノ匪賊ニ依ル攪亂ヲ受ケタル一方ニ於テ支那全土ヲ其ノ渦中ニ投ズベキ内亂ノ準備行ハレツツアリタリ千九百二十二年一月十三日卽チ「ワシントン」會議尙開會中ニ於テ中央政府ニ發送セラレタル最後通牒ニ引續キ開始セラレタル右内亂ノ結果トシテ中央政府ハ同年五月顚覆シ右政府ニ代リ北京ニ樹立セラレタル政府ニ對スル滿洲ノ獨立ハ同年七月張作霖元帥ニ依リ宣言セラレタリ斯ノ如ク獨立ヲ主張スル政府ハ少クトモ三箇アリタリ而モ右ノ外ニ實際上自治ヲ行ヘル省又ハ省ノ部分若干存在セリ現在ニ於テハ中央政府ノ權威ハ尙若干ノ省ニ於テ薄弱ナリト雖モ中央ノ權力ハ少クトモ公然トハ否認セラルルコトナク若シ中央政府ニシテ名實相應ズルモノトシテ維持セラルルニ於テハ地方行政、軍隊及財政ハ漸次國家的性質ヲ帶ブルニ至ルベキモノト期待スルコトヲ得ベシ敍上ノ諸理由ハ他ノ諸理由ト共ニ國際聯盟總會ヲシテ客年九月支那ヲ理事國トシテ選擧セシムルニ至リタルモノナルコト疑ヲ容レズ

現政府ハ其ノ時時ノ收支ノ均衡竝ニ健全ナル財政的原則ノ遵守ニ努メ來レリ諸種ノ課稅ハ統一セラレ且簡單化セラレタリ正當ナル豫算制度ヲ缺クガ故ニ財政部ハ年次說明書ヲ發表シ來レリ中央銀行ハ設立ヲ見タリ國家財政委員會任命セラレ其ノ委員中ニハ銀行界及商業界ノ有力者包含セラル財政部ハ又徵稅ノ方法ガ屢未ダ甚ダ滿足ナラザル地方ノ財政ヲ監督スルニ努メツツアリ總テ此等ノ措置ハ政府ノ功ニ歸セラルベキモノナルモ而モ政府ハ間斷ナキ内亂ノ爲ニ其ノ内債ヲ千九百二十七年以降約十億「ドル」(銀)增加スルノ已ムヲ得ザルニ至レリ政府ハ資金ノ缺乏ニ妨ゲラレ

支那ノ改造ニ對スル努力

國民主義

其ノ熱望セル改造計畫ヲ實行スルコトヲ得ズ又支那ノ殆ド總テノ問題ノ解決ニ必須缺クベカラザル交通通信ノ改良ヲ完成スルコトヲ得ザリキ政府ハ多數ノ事項ニ付失敗シタルコト疑ナキモ而モ既遂ノ業績多多アリ

現代支那ノ國民主義ハ支那ガ今ヤ經過シツツアル政治的過渡期ニ於ケル一ノ通常ナル事象ニシテ此ノ種ノ國民的感情及熱望ハ同樣ノ狀態ニ置カレタル如何ナル國ニ於テモ之ヲ見ルコトヲ得ベシ然レドモ國民的統一ヲ意識スルニ至レル人民ガ外的掣肘ヲ離脱セント欲スル自然的欲望ニ加フルニ國民黨ノ勢力ハ一切ノ外部的勢力ニ益反感ヲ懷カントスル附加的ニシテ異常ナル色彩ヲ支那ノ國民主義ニ注入シ來リ且其ノ目的ヲ擴大シテ今尙「帝國主義的壓迫」ノ下ニ在ル一切ノ亞細亞民族ノ解放ヲ包含セシムルニ至レリ右ハ或程度迄初期ニ於テ共產主義ト聯繫アリシ國民黨ノ標語ニ基因ス今日ノ支那ノ國民主義ニハ又過去ノ偉大ニ對スル記憶モ浸潤シ居リ之ガ更生ハ其ノ希望スル所ナリ右主義ハ租借地、鐵道地域內ニ於テ外國ノ手ニ依リ行使セラルル行政的ノ及其ノ他純粹ニ商業的ナラザル諸權利、租界及居留地ニ於ケル行政權竝ニ外國人ガ支那ノ法律、法廷及課稅ニ服從セザルコトヲ意味スル治外法權ノ返還ヲ要求ス輿論ハ國民的屈辱ト看做サルル此等ノ權利ノ存續ニハ强硬ニ反對ナリ

治外法權問題ニ對スル諸外國ノ態度

諸外國ハ概シテ此等ノ要望ニ對シ同情アル態度ヲ執リ來レリ千九百二十一年乃至千九百二十二年ノ「ワシントン」會議ニ於テハ右要望ハ主義上受諾セラルベキコトハ容認セラレタルモ唯之ヲ滿足セシムベキ最好ノ時期及方法ニ付テハ意見ノ相違存シタリ敍上ノ諸權利ヲ直ニ拋棄スルニ於テ

ハ財政上其ノ他ノ內面的困難ニ基キ支那ガ今直ニ達成スルコトヲ得ザルガ如キ程度ノ行政、警察及司法ヲ樹立スルノ責任ヲ支那ニ負擔セシムルニ至ルベシトスルコト當時ノ感想ナリキ現今問題ト爲リ居レル治外法權ナル一問題ニ付之ヲ見ルモ若シ之ヲ尙早ニ撤廢スルニ於テハ諸外國トノ間ニ多數ノ別個ナル諸問題ヲ誘發スルナルベシ若シ外國人ニシテ支那ノ多數地方ニ於テ支那國民ノ豪リツツアリタルト同樣ノ不公正ナル待遇及過酷ナル課稅ヲ受クルヲ要スルコトト爲ルニ於テハ國際關係ハ改善セラレズ却テ惡化スベシトスルコトモ亦當時ノ感想ナリキ此等ノ留保ニモ拘ラズ「ワシントン」會議ニ於テ又ハ同會議ノ結果トシテ達成セラレタルモノ多多アリタリ卽チ支那ハ五箇ノ租借地中ノ二、多數ノ租界、東支鐵道附屬地ノ行政權、關稅自主權及郵政權ヲ回收シ平等ノ基礎ニ立ツ多數ノ條約モ亦商議セラレタリ

支那ハ「ワシントン」會議ニ於テ爲サレタル通リ其ノ困難ヲ解決スル爲ノ國際的協調ノ道程ニ上リタルヲ以テ若シ引續キ右道程ヲ辿リタランニハ爾後ノ十年間ニ於テ更ニ顯著ナル進步ヲ遂ゲ得タルナルベシ然ルニ支那ハ其ノ遂行シタル排外宣傳ノ慘毒ニ因リ阻害セラレタリ右宣傳ハ現在ノ紛爭ノ依テ起レル雰圍氣ノ醸成ニ寄與スル迄ニ二箇ノ方面ニ於テ實行セラレタリ卽チ第七章ニ記述セル經濟的「ボイコット」ノ利用及諸學校ニ對スル排外宣傳ノ注入之ナリ

諸學校ニ於ケル國民主義

千九百三十一年六月一日發布セラレタル支那ノ臨時約法ニハ「三民主義ハ中華民國ニ於ケル敎育ノ基本的原則タルベシ」トノ規定アリ(註)孫逸仙博士ノ思想ハ恰モ過去ノ世紀ニ於テ古典ノ有シタル權威ヲ持スルガ如キモノトシテ今ヤ諸學校ニ於テ敎授セラレ孫總理ノ遺訓ハ革命前ニ於テ孔

子ノ教訓ガ受ケタルト同樣ノ尊敬ヲ受ケツツアリ然レドモ不幸ニシテ青少年ノ教育ニ當リ注意ハ國民主義ノ建設的方面ニ對スルヨリモ寧ロ否定的方面ニ注ガレタリ諸學校ニ使用セラルル教科書ヲ熟讀スル者ハ其ノ著者ガ愛國心ヲ燃スニ憎惡ノ焰ヲ以テシ又男性的精神ノ養成ヲ被害ノ意識ノ上ニ置クコトニ努メタリトノ印象ヲ得諸學校ニ於テ始メラレ且社會生活ノ有ラユル方面ヲ通ジテ實行セラレタル毒惡ナル排外宣傳ノ結果學生ヲ驅リテ政治運動ニ參加セシムルコトト爲リ時ニハ國務大臣其ノ他ノ官憲ノ身體、居宅又ハ官署ノ襲擊及政府ノ顚覆ヲ計ルガ如キ事態ニ立チ至ラシメタリ斯ノ如キ態度ハ有効ナル內部的改革又ハ國民的諸標準ノ改善ヲ伴ハザリシ爲諸外國ヲシテ警戒セシメ且現在諸外國ノ唯一ノ保護手段タル諸權利ノ拋棄ヲ猛躊躇セシムルニ至レリ

註「國民教育」ノ章第四十七條

法律及秩序ノ諸問題、充分ナル交通通信ノ必要

法律及秩序ノ維持ノ問題ニ關聯シ現在支那ニ於テ交通通信ノ方法ノ不充分ナルコトハ重大ナル障碍ヲ爲スモノナリ交通通信ノ便ガ國軍ノ迅速ナル輸送ヲ確保スルニ充分ナルニ非ザレバ法律及秩序ノ維持ハ假令全部ニ非ズトスルモ其ノ大部分ハ地方官憲ノ手ニ委セラレザルベカラズ而シテ地方官憲ハ中央政府ノ遠隔ナル爲地方的問題ノ處理ニ當リ自己ノ裁量ニ依ルコトヲ許サレザルベカラズ斯ノ如キ狀態ニ在リテハ獨立セル考慮及行動ハ容易ニ法律ノ範疇ヲ超エ其ノ結果地方ハ漸次私有ノ領地ナルガ如キ觀ヲ呈スルニ至ル地方ノ軍隊モ亦其ノ指揮官ニ與スルモ國民ニ與セズ中央政府ノ命ヲ以テ一軍ノ指揮官ヲ他ノ軍ニ轉任セシムルコトハ多數ノ場合ニ於テ不可能ナリ中央政府ガ全國ニ亘リ其ノ威令ヲ敏速且永久ニ行フ爲ノ物的手段ヲ有セザル限リ內亂ノ危險ハ存續セザ

地方軍隊

ルヲ得ズ

匪賊

支那ノ全歷史ヲ通ジテ存在シ且今日ト雖モ支那ノ有ラユル地方ニ存在スル匪賊ノ問題ニ對シテモ右ト同樣ノ考察ヲ加フルコトヲ得匪賊ハ支那ニ於テ嘗テ絕エタルコトナク政府ハ未ダ曾テ之ヲ掃滅スルコトヲ得ザリキ適當ナル交通通信ノ便ヲ缺キタルコトハ政府ガ四圍ノ狀況ノ變化ニ伴ヒテ增減スル右ノ害惡ヲ芟除スルコトヲ得ザリシ理由ノ一ナリ此ノ外與リテ力アリシ原因ハ特ニ惡政ノ結果トシテ支那ニ頻發セル地方的騷擾及叛亂ニ之ヲ求ムルコトヲ得ベシ假令斯ノ如キ叛亂ガ無事鎭壓セラレタル後ニ於テモ叛民ヲ糾合シタル匪賊團ハ支那ノ諸地方ニ於テ活動ヲ繼續セリ右ハ太平ノ亂（千八百五十年乃至千八百六十五年）ノ鎭壓後ニ於テ特ニ然ルヲ見タリ更ニ近時ニ於テハ給料不渡リニシテ他ニ生活ノ途ヲ樹ツルコトヲ得ズ且內亂ニ從事シテ掠奪ニ慣レタル兵卒モ亦匪賊ノ源ト爲リタリ

支那ノ各地ニ於テ匪賊ヲ增加セシムルニ至レル他ノ原因ハ洪水及旱魃ナリ此等ハ寧ロ常規的ニ發生シ常ニ飢饉及匪賊ヲ伴ヘリ問題ハ急速ニ增加スル人口ノ壓迫ニ依リ更ニ惡化セラレタリ人口稠密ナル地域ニ於テハ通常ノ經濟的困難ハ一層增加シ僅ニ生命ヲ支フルノミニシテ不時ノ災厄ニ備フルノ餘裕ナキ人民ノ間ニ在リテハ其ノ生活狀態ノ極メテ些少ナル惡化モ多數ノ者ノ生活ヲ不可能ナラシムルニ至リ易シ從テ匪賊ハ當時ノ一般經濟狀態ノ影響ヲ蒙ムルコト大ナリ匪賊ハ繁榮ナル時代又ハ地方ニ於テハ減少セルモ上記何レカノ理由ニ依リ生存競爭深刻ト爲リ又ハ政治的狀態ガ攪亂セラレタル場合ニ於テハ必ズ增加シタリ

共産主義ハ中央政府ノ權力ニ對スル挑戰ナリ

支那ニ於ケル共産主義ノ起原、百二十一年千九

匪賊ガ一旦或地域ニ於テ其ノ勢力ヲ確立スルニ於テハ内地ニ於ケル交通通信ノ便ノ缺如セル爲之ヲ實力ヲ以テ鎮壓スルコト困難ト爲レリ接近困難ニシテ數哩ノ行程ニ幾日カヲ要スルガ如キ地方ニ於テハ武裝セル多數ノ賊團ハ其ノ居所及行動ヲ知ラシメズシテ出沒ヲ恣ニシ自由ニ行動スルコトヲ得匪賊ノ討伐永ク放置セラレ且隨所ニ實例アルガ如ク兵士モ之ト内應スルトキハ水陸兩路ニ依ル交通ハ妨害セラルルニ至ル斯ノ如キ事態ノ發生ハ唯適當ナル警察力ニ依リテノミ之ヲ阻止スルコトヲ得奥地ニ於テハ必然的ニ不期戰ヲ惹起スルガ故ニ匪賊ノ討伐益困難ナリ

地方將領ノ私的軍隊及全國ニ亘ル匪賊ノ集團ノ瀰漫ハ支那ノ内部的平和ヲ攪亂スルモノナリト雖モ此等ハ今ヤ中央政府トシテノ其ノ權力ニ對スル脅威タラザルニ至レリ然レドモ茲ニ他ノ原因ヨリスル此ノ種ノ脅威アリ卽チ共産主義ナリ

支那ニ於ケル共産主義運動ハ其ノ發生ノ初期ニ於テハ知識階級及勞働階級内ニ限ラレ右兩階級ニ於テ同主義ハ千九百十九年乃至千九百二十四年ノ期間ニ相當ノ勢力ヲ得ルニ至レリ當時支那ノ農村地方ハ殆ド此ノ運動ノ影響ヲ蒙ラザリキ「ソヴィエト」政府ノ千九百十九年七月二十五日ノ宣言ハ舊帝政政府ガ支那ヨリ「奪取」セル一切ノ特權ヲ欣然拋棄スベキコトヲ宣明セルモノニシテ支那全國殊ニ知識階級ノ間ニ好印象ヲ發生セシメタリ千九百二十一年五月「中國共産黨」正式ニ組織セラレ宣傳ハ特ニ上海ノ勞働階級ノ間ニ行ハレ同地ニ赤色「シンディケート」組織セラレタリ千九百二十二年六月ノ其ノ第二回大會ニ於テ當時黨員三百ヲ超エザリシ共産黨ハ國民黨トノ同盟ヲ決議セリ孫逸仙博士ハ共産主義ニハ反對ナリシモ個個ノ支那共産主義者ノ入黨ヲ許ス意嚮ナ

リキ千九百二十二年ノ秋「ソヴィエト」政府ハ「ヨッフェ」氏ヲ長トスル一團ヲ支那ニ派遣シタルガ同氏ト孫博士トノ間ニ行ハレタル重要會見ノ結果千九百二十三年一月二十六日ノ共同宣言ト爲リ右宣言ニ依リ支那ノ國家的統一及獨立ノ爲ノ「ソヴィエト」側ノ同情ト支持トニ關スル保障與ヘラレタリ他方共産黨ノ組織及「ソヴィエト」式統治組織ハ當時ノ支那ニ於ケル狀態ノ下ニ於テハ之ヲ導入スベカラザル旨明瞭ニ聲明セラレタリ右協定ニ基キ千九百二十三年末迄ニ若干ノ軍事及民政顧問「モスコー」ヨリ派遣セラレ「孫博士ノ監督ノ下ニ國民黨ト廣東軍トノ内部構成ノ改革ニ從事シタリ」

千九百二十四年三月召集セラレタル國民黨ノ第一回國民會議ニ於テ中國共産黨員ハ國民黨ニ加入スルコトヲ正式ニ承認セラレタルガ唯之ニ對シテハ斯ノ如キ黨員ハ以後「プロレタリア」革命ノ準備ニ參加スベカラザル旨ノ條件附セラレタリ斯クシテ共産主義寛容時代開始セラルルニ至レリ

容共時代、百二十四年—百二十九年千九

右時期ハ千九百二十四年ヨリ千九百二十七年ニ及ベリ千九百二十四年初期ニ於テ共産黨員ハ約二千名ヲ算ヘ又赤色「シンディケート」ハ約六萬ノ會員ヲ擁シタリ然レドモ共産黨員ハ間モナク國民黨内部ニ於テ勢力ヲ扶植シ正派國民黨員ノ間ニ憂慮ヲ惹起セシムルニ至レリ右共産黨員ハ千九百二十六年末中央委員會ニ於テ一提案ヲ爲シタルガ右提案中ニハ勞働者、農民及兵士ニ屬スルモノヲ除ク一切ノ不動産ノ國有、國民黨ノ改組、共産主義ニ反對スル一切ノ軍閥將領ノ芟除、共産黨員二萬竝ニ勞働者及農民五萬ノ武裝ノ如キモノ迄モ包含セラレタリ然レドモ右提案ハ否決セラレ

國民黨ト共産主義トノ分裂、千九百二十七年

爲ニ共産黨員ハ從前國民黨軍ノ編制ニ最努力シタルニ拘ラズ國民黨ノ企圖セル北方軍閥ノ討伐ヲ支持スルコトヲ中止スルニ至レリ然ルニ彼等ハ後日右討伐ニ加ハリ北伐軍ガ中央支那ニ達シ千九百二十七年武漢ニ國民黨政府ヲ樹立スルヤ國民黨要人ガ其ノ軍隊ノ南京及上海占領ニ至ル迄彼等ト事ヲ構フルコトヲ敢テセザリシヲ以テ同政府内ノ實權ヲ掌握スルニ成功セリ武漢政府ハ湖南及湖北ノ兩省ニ於テ純然タル共産主義的施政ヲ相次デ實行シ國民革命ハ將ニ共産革命ニ轉化セシメラレントスルニ至リタリ

國民黨要人ハ遂ニ共産主義ノ脅威重大ニシテ最早之ヲ寛容シ得ザルコトヲ決斷シ自己ノ勢力ガ南京ニ確立セラレ千九百二十七年四月十日別個ノ國民政府同地ニ組織セラルルヤ南京政府ハ直ニ軍隊及行政部ヨリ共産主義ヲ驅逐スベキコトヲ命ズル旨布告セリ七月十五日從來在南京國民黨要人トノ合作ヲ肯ゼザリシ在武漢國民黨中央執行委員ノ大多數モ國民黨ヨリ共産黨員ヲ除去シ「ソヴィエト」顧問ノ支那退去ヲ命ズル決議ヲ採擇セリ右決定ノ結果國民黨ハ其ノ統一ヲ回復シ南京政府ハ廣ク同黨ノ承認ヲ受クルニ至レリ

南昌及廣東事件

容共時代ニ於テ數箇ノ軍隊共産主義ニ加擔スルニ至レリ此等ノ軍隊ハ國民黨軍ノ北伐ニ際シテハ後方ニ大部分ハ江西地方ニ遺留セラレタルガ右部隊ヲ連絡シ且國民政府ニ對シ事ヲ擧ゲンコトヲ之ニ說得スル爲共産黨員派遣セラレタリ千九百二十七年七月三十日江西省首府南昌ノ駐屯軍ハ他ノ部隊ト共ニ叛亂シ人民ニ對シ幾多ノ暴虐ヲ行ヒタルモ八月五日政府軍ノ擊破スル所ト爲リ南方ニ退却セリ十二月十一日廣東ニ共産主義者ノ暴動アリ同市ハ二日間其ノ手中ニ歸シタリ南京政府

共産黨軍トノ武力鬪爭ノ繼續

ハ此等ノ叛亂ニハ「ソヴィエト」政府ノ手先ノ積極的ナル干與アリタルモノト思惟シ千九百二十七年十二月十四日ノ命令ヲ以テ一切ノ支那駐在「ソヴィエト」聯邦領事ノ認可狀ヲ撤回セリ

内亂ノ再發ハ千九百二十八年乃至千九百三十一年ノ間ニ於テ共産黨勢力ノ伸張ニ幸セリ赤軍ハ編制セラレ江西福建兩省ニ於ケル廣大ナル地域ハ「ソヴィエト」化セラレタリ漸ク千九百三十年十一月卽チ北方軍閥ノ强力ナル聯合ノ敗戰後幾何モナクシテ中央政府ハ共産主義ノ鎭壓ニ專心努力シ得ルニ至リタリ共産軍ハ江西湖南兩省ノ各地ニ策動シ當時二三箇月ノ間ニ二十萬ノ人命ノ喪失ト約十億「ドル」(銀)ノ物的損害トヲ惹起シタル旨報ゼラレタリ此等ノ軍隊ハ今ヤ其ノ勢力强大ト爲リ政府ノ派遣シタル第一回討伐軍ヲ擊退シ第二回討伐軍ヲ粉碎スルニ至レリ第三回討伐軍ハ總司令蔣介石將軍ノ指揮ノ下ニ數度ノ會戰ニ於テ共産軍ヲ擊破シ千九百三十一年七月半ニ至ル迄ニ共産軍ノ最重要ナル根據地ヲ陷レタルヲ以テ共産軍ハ福建方面ニ總退却ヲ行ヘリ

蔣介石將軍ハ荒廢シタル地方ノ再興ヲ目的トスル政治委員會ヲ組織スル一方赤軍ヲ追擊シテ之ヲ江西省東南ノ山岳地帶ニ擊退セリ

斯ノ如ク南京政府ハ將ニ赤軍主力ヲシテ活動ノ餘地ナカラシメントシ居リタル處偶支那ノ各地ニ各種ノ事件發生シ政府ヲシテ其ノ攻擊ヲ中止シテ軍隊ノ大部分ヲ撤退スルノ己ムナキニ至ラシメタリ卽チ北方ニ於テハ石友三將軍ノ叛亂起リ之ニ對シ湖南省ニ於ケル廣東軍ノ抗敵干涉ニ依ル策應アリ之ト時ヲ同ジクシテ奉天ニ於テハ九月十八日事件發生セリ此等ノ情勢ニ乘ジ赤軍ハ再ビ攻擊ヲ開始シ討伐ノ戰勝ニ依リ收メラレタル成果ハ幾何モナクシテ殆ド完全ニ失ハレタリ

現在ニ於ケル共産黨組織ノ範圍

福建江西兩省ノ大部分及廣東ノ若干部分ハ信賴スベキ報道ニ依レバ完全ニ「ソヴィエト」化セラレ居ル趣ナリ共産黨ノ勢力範圍ハ更ニ廣大ニシテ楊子江以南ノ支那ノ大部分並ニ楊子江以北ノ湖北、安徽及江蘇各省ノ一部ニ跨レリ上海ハ共産主義宣傳ノ中心地ト爲レリ共産主義ノ個人的同情者ハ恐ラク支那ノ各都市ニ發見セラレ得ベシ現在ハ二箇ノ共産主義省政府ガ江西及福建ニ於テ組織セラレタルニ止マルト雖モ比較的小ナル「ソヴィエト」組織ハ數百ニ達ス共産主義政府自體ハ地方ノ勞働者及農民ノ會議ニ依リ選擧セラレタル委員會ニ依リ組織セラル右共産主義政府ハ事實中國共産黨ノ代表者ニ依リ支配セラレ居リ中國共産黨ハ其ノ目的ノ爲ニ訓練セラレタル人員ヲ派遣ス此等派遣人員ノ大多數ハ曩ニ「ソヴィエト」聯邦ニ於テ訓練セラレタルモノナリ中國共産黨中央委員會ノ支配下ニ在ル地方委員會ハ次デ省委員會ヲ支配シ省委員會ハ更ニ縣委員會ヲ支配ス以下之ニ準ジ以テ工場、學校、兵營等内ニ組織セラレタル共産主義細胞ニ及ブ

共産黨ノ用フル方法

一地方ガ赤軍ニ依リ占領セラレ其ノ占領ガ多少ナリトモ永久的性質ヲ有スト認メラルルニ於テハ當該地方ヲ「ソヴィエト」化スル爲努力ス如何ナル民衆ノ反對モ恐怖主義ニ依リ彈壓セラレ茲ニ上述ノ如ク共産主義政府樹立セラル斯カル共産主義政府ノ完全ナル組織ハ内政人民委員、反革命主義者ニ對スル爭鬪ノ爲ノ人民委員（「ゲー、ペー、ウー」）、財政人民委員、農村經濟人民委員、教育人民委員、衞生人民委員、郵便及電信人民委員、交通人民委員及軍事委員會並ニ勞働者及農民取締委員會ヲ包含ス斯ノ如キ精細ナル政府組織ハ完全ニ「ソヴィエト」化セラレタル地方ニ於テノミ存在ス

他處ノ組織ハ遙ニ小規模ナリ

行動綱領ハ債務ノ破棄並ニ大地主又ハ寺院、僧院及教會ノ如キ宗教團體ヨリ强力ヲ以テ押收セル土地ノ土地ヲ有セザル「プロレタリア」及小農ニ對スル分配ニ在リ課稅ハ簡單化セラレ農民ハ其ノ土地ノ生産高ノ一定部分ヲ納付セシメラル農業改良ノ爲灌漑、農村信用制度及産業組合ヲ發達セシムル手段講ゼラル公學校、病院及調劑所モ建設セラルルコトアリ

斯ノ如ク最貧困ナル農民ハ共産主義ニ依リ相應ノ利益ヲ得ルニ反シ富裕及中産階級ノ地主、商人並ニ地方紳士ハ卽時沒收又ハ徵發及罰金ノ何レカニ依リ完全ニ沒落セシメラル而シテ右土地綱領ヲ適用スルコトニ於テ共産黨ハ群衆ノ支持ヲ得ルコトヲ期待ス右ノ點ニ關シ其ノ宣傳ト行動トハ共産主義理論ガ支那ノ社會組織ト矛盾スルノ事實ニモ拘ラズ非常ナル成功ヲ贏チ得タリ壓制的課稅、不法徵發、高利貸附及兵卒又ハ匪賊ニ依ル掠奪ノ結果ヨリ生ズル怨嗟ハ極度ニ利用セラル特殊ナル標語ガ農民、勞働者、兵卒及知識階級ノ爲ニ又特ニ婦人ニ適スル樣變改ノ上使用セラル

支那ニ於ケル共産主義ノ特質

支那ニ於ケル共産主義ハ「ソヴィエト」聯邦以外ノ多數ノ國ニ於ケルガ如ク既存政黨ノ或黨員ノ懷抱スル政治上ノ主義カ又ハ他ノ政黨ト權力ヲ爭フ特別ノ黨組織カヲ意味スルノミニ非ズ支那ニ於ケル共産主義ハ國民政府ノ事實上ノ競爭相手ト爲レリ支那ニ於ケル共産主義ハ其レ自體ノ法律、軍隊及政府並ニ自己ノ行動地域ヲ有ス此等ノ事態ニ關シテハ他ノ如何ナル國ニモ其ノ類例ヲ見ズ加之支那ニ於テハ共産主義ノ討伐ニ因リ生ゼル混亂ハ國家ガ國内改造ノ重大時期ヲ經過シツツア

ル事實ニ依リ一層重大化セラレ更ニ最近十一箇月間ノ例外的重大性ヲ有スル對外危機ニ依リ彌複雜化セラレタリ國民政府ハ先ヅ共產主義ノ勢力下ニ在ル地方ニ對スル支配權ヲ回復シ其ノ一度回復シタル曉ニハ右等地方ニ於テ經濟的更生ノ政策ヲ遂行セント決意シタルモノノ如キモ既述ノ如キ內外ノ困難ハ之ヲ別トスルモ其ノ軍事行動ニ於テ資金ノ缺乏ト不完全ナル交通通信トニ依リ惱マサレタリ支那ニ於ケル共產主義ノ問題ハ斯ノ如ク國家改造ナル更ニ大ナル問題ト關聯スル所アリ

此等事態ノ日支關係ニ及ボセル影響

千九百三十二年夏南京政府ハ赤色抵抗ノ徹底的鎭壓ヲ目的トスル重要ナル軍事行動ヲ發表セリ右行動ハ既ニ開始セラレタル處之ニ伴ヒテ上記ノ如ク再獲得地方ノ全般的ノ社會的及行政的改組行ハルベキ筈ナリシガ現在ニ至ル迄何等ノ重要ナル結果モ公表セラルルニ至ラズ

日本ハ支那ノ最近接セル隣國ニシテ且最大ナル顧客ナルヲ以テ日本ハ本章ニ於テ記述セラレタル無法律狀態ニ依リ他ノ何レノ國ヨリモ一層多ク苦ミタリ支那ニ於ケル居留外國人ノ三分ノ二以上ハ日本人ニシテ滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ數ハ約八十萬ヲ算ス故ニ現在ノ狀態ニ於テ支那ノ法律、裁判及課稅ニ服從セシメラルトセバ之ニ依リ苦シム國民ヲ他ノ何レノ國ヨリモ多ク有スルモノハ日本ナリ

日本ハ其ノ條約上ノ權利ニ代ルベキ滿足ナル保護ガ期待シ得ラルルニ非ザレバ到底支那側ノ要望ヲ滿足セシムルコト不可能ナルヲ感ジタリ日本ノ支那ニ於ケル特ニ滿洲ニ於ケル利益ハ他ノ强大國ノ利益ガ後退スルニ比例シテ一層顯著ニ主張セラルルニ至レリ支那ニ於ケル日本臣民ノ生命及

財產ノ保護ニ對スル不安ハ日本ヲシテ內亂又ハ地方的混亂ニ際シ屢干涉ヲ行ハシメタリ斯ノ如キ行動ハ痛ク支那ノ憤激ヲ買ヒタルガ千九百二十八年濟南ニ於ケルガ如キ武力衝突ヲ招徠シタルトキニ於テ特ニ然リ近年支那ニ於テハ日本ノ主張ハ他ノ列國ノ總テノ權利ノ總計以上ニ國民的翹望ニ對スル重大ナル挑戰ヲ形成スルモノナリト認メラルルニ至レリ

支那改造問題ニ對スル外國ノ關係

本問題ハ其ノ日本ニ及ボセル影響列國ニ及ボセル以上ニ大ナリト雖モ而モ日支間ノミノ問題ニハ非ズ支那ハ例外的權力及特權ハ其ノ國家ノ威嚴及主權ヲ侵害スルモノナリト感ズルガ故ニ其ノ卽時還付ヲ要求ス諸外國ハ支那ニ於ケル狀態ガ自國民ノ充分ナル保護ヲ確保セザル限リ右支那側ノ希望ニ應ズルコトヲ躊躇セリ蓋シ此等外國人ノ利益ハ特別ノ條約上ノ權利ノ享有ニ依リ與ヘラルル保障ニ依存スレバナリ本章ガ記述セント試ミタル過渡期ニ於テ避クベカラザル擾亂ノ過程ハ輿論ノ力ヲ强メシムルニ至リタルガ右輿論ノ力ハ中央政府ガ國家ノ統一ト改造トノ完成ニ失敗シテ弱メラレ居ル限リ其ノ外交政策ノ遂行ニ當リ恐ラク引續キ同政府ヲ困却セシムルモノナルベシ對外關係ノ分野ニ於ケル支那ノ國民的要望ノ實現ハ內政ノ分野ニ於テ近代的政府ノ機能ヲ發揮スル能力ノ如何ニ繫ルモノナリ而シテ此等兩者ノ齟齬ガ除去セラレザル限リ國際的軋轢及事件發生ノ危險、「ボイコット」竝ニ武力干涉ハ繼續セラルベシ

現在ノ國際的軋轢ノ極端ナル事例ハ再ビ支那ヲシテ國際聯盟ノ干涉ヲ求ムルノ己ムナキニ至ラシメタルガ若シ滿足ナル解決ニシテ達成セラルルニ於テハ支那ヲシテ千九百二十二年「ワシントン」ニ於テ創始セラレ有益ナル效果ヲ齎シタル國際協力政策ノ利益ヲ覺知セシムルコトヲ得ベシ現在

國際協力ハ解決ノ最善ノ希望ヲ與フ

支那ハ他ノ援助ヲ藉ラズシテ其ノ國家改造ヲ完成スルニ必要ナル資金ヲモ又訓練セラレタル專門家ヲモ有セズ孫逸仙博士自身モ右事實ヲ認メ現ニ同國ノ經濟的發展ニ對スル國際的參加ノ一大計畫ヲ作成セリ國民政府モ亦近年其ノ諸問題ノ解決ニ關シ例ヘバ千九百三十年以來財政問題ニ付、千九百三十一年國民經濟會議ノ組織以來國際聯盟ノ技術機關ト連絡シテノ經濟的計畫及發展ニ關スル問題ニ付竝ニ同年ノ大洪水ニ因リ蒙レル災害救濟ニ付國際援助ヲ求メ且之ヲ受諾セリ斯ノ如キ國際協力ノ行路ヲ辿リテコソ支那ハ其ノ國民的理想ノ達成ニ向テ最確實ニシテ最迅速ナル進歩ヲ爲スベク而シテ斯ノ如キ政策ハ諸外國ヲシテ中央政府ノ求ムル支持ヲ與ヘ且世界ノ他ノ諸國トノ平和關係ヲ危殆ナラシムル虞アル軋轢ノ一切ノ原因ヲ能フ限リ速ニ且有效ニ除去スル爲ノ援助ヲ與ヘシムルコトヲ一層容易ナラシムベシ

第二章

滿洲

一　記述

記述、支那ノ他ノ部分及露西亞トノ關係

序言

滿洲ハ支那ニ於テハ東三省トシテ知ラルル豐饒ナル大地域ニシテ僅僅四十年前ニハ殆ド開發セラ

レ居ラズ現在ニ於テスラ尙人口稀薄ナルヲ以テ支那及日本ノ過剩人口問題ノ解決ニ益重大ナル役ヲ勤ムルニ至レリ幾百萬ノ窮乏セル農民ガ山東省及河北省ヨリ滿洲ニ流入セル一方製品及資本ハ日本ヨリ同地方ニ輸出セラレ食料品及原料品ト交換セラレタリ斯ノ如ク滿洲ハ支那及日本ノ各自ノ必要ニ應ズルコトニ依リテ支那及日本雙方ノ有力ナル伴侶タル實ヲ擧ゲタリ卽チ日本ノ活動ナクンバ滿洲ハ斯ノ如キ大ナル人口ヲ誘致且收容シ得ザリシナルベク又支那人農民及勞働者ノ來住ナクンバ滿洲ハ斯クモ急速ニ發展シ以テ日本ニ對シ市場竝ニ食料品、肥料及原料品ヲ供給スルコト能ハザリシナルベシ

然レドモ他國ノ協力ニ依存スルコト斯クモ多大ナル滿洲ハ上述ノ理由ニ依リ先ヅ露西亞ト日本トノ間ニ於テ次デ支那ト其ノ兩强隣邦トノ間ニ於ケル衝突ノ地域ト爲ルノ運命ヲ有シタリ當初滿洲ガ各種政策ノ大衝突地域タルニ至リタルハ其ノ占據ガ極東政策ノ支配ヲ意味スルモノト考ヘラレタルガ故ニシテ其ノ後滿洲ノ農業、鑛業及林業上ノ資源發見セラルルニ及ビ滿洲其レ自體ニ垂涎セラルルニ至レリ先ヅ露西亞ハ支那ノ犧牲ニ於テ特殊ノ條約上ノ權利ヲ獲得シタルガ其ノ南滿洲ニ關スルモノハ後ニ日本ニ讓渡セラレタリ斯ノ如クニシテ獲得セラレタル特權ノ行使ハ南滿洲ノ經濟的開發ヲ促進スル上ニ彌益有用ト爲レリ軍略上ノ理由ハ依然トシテ重要ナルモノアルモ露西亞及日本ガ滿洲開發ノ爲採リタル積極的地位ノ齎セル廣汎ナル經濟的利害關係ハ右兩國ノ外交政策ニ於テ彌强調セラルルニ至レリ

滿洲ハ先ヅ軍略上ノ利益ノ爲ノ續テ農業ノ及資源ノ垂涎セラレタル地域ナリ

支那人農民ノ土地占據

支那ハ當初開發ノ方面ニ活動スルコトナク殆ド滿洲ガ自己ノ支配ヨリ露西亞ノ手ニ移ルニ委セタ

リ而シテ滿洲ニ於ケル支那ノ主權ヲ再ビ確認セル「ポーツマス」條約後ニ於テモ同地方ノ開發ニ當レル露西亞及日本ノ經濟的活動ハ支那ノ活動ニ比シ一層顯著ニ世界ノ眼ニ映ジタリ此ノ間幾百萬ノ支那人農民移住シタルガ右ハ將來ニ於ケル土地所有ノ根據ヲ爲セリ右移住ハ事實平和的ニシテ目立タザルモ頗ル實質的ノ占領ナリキ露西亞及日本ガ北滿洲及南滿洲ニ於ケル各自ノ勢力範圍ノ設定ニ從事セル間ニ支那人農民ハ土地ヲ其ノ手ニ收メ滿洲ノ支那性ハ今ヤ變改シ得ザルコトト爲レリ斯カル狀態ニ於テ支那ハ再ビ其ノ主權ヲ主張スルノ好機會ヲ待望スルコトヲ得タルガ千九百十七年ノ露西亞革命ハ北滿洲ニ於テ支那ニ右ノ機會ヲ與ヘタリ支那ハ過去久シキニ亘リ等閑ニ附シ居リタル當該地方ノ統治及開發ニ一層積極的活動ヲ開始シ近年ニ於テハ南滿洲ニ於ケル日本ノ勢力ヲ減殺セント試ミタルガ右政策ノ結果軋轢高マリ遂ニ千九百三十一年九月十八日其ノ頂點ニ達シタリ

人口

全人口ハ約三千萬ト算セラレ其ノ內二千八百萬ハ支那人又ハ同化セル滿洲人ナリト稱セラル朝鮮人ノ數ハ八十萬ト目セラレ其ノ大部分ハ朝鮮國境ノ所謂間島地方ニ集合シ爾餘ノモノハ滿洲ニ廣ク分散ス蒙古種族ハ內蒙古ニ接スル牧地ニ居住シ其ノ數少シ滿洲ニ於ケル露西亞人ハ約十五萬アル模樣ナルガ其ノ大部分ハ東支鐵道沿線地方特ニ哈爾賓ニ居住ス約二十三萬ノ日本人ハ南滿洲鐵道沿線ノ居留地及關東州租借地（遼東半島）ニ主トシテ集中シ居レリ滿洲ニ於ケル日本人、露西亞人及其ノ他ノ外國人（朝鮮人ヲ除ク）ハ總數四十萬ヲ超過セズ

面積

滿洲ハ佛蘭西及獨逸ヲ合シタル大サノ面積ヲ有スル廣大ナル地域ニシテ約三十八萬平方哩ト算セ

ラル支那ニ於テハ之ヲ常ニ「東三省」ト稱ス蓋シ其ノ行政區劃ハ南部ニ遼寧（奉天）東部ニ吉林北部ニ黑龍江ノ三省ニ分タルルヲ以テナリ遼寧ハ面積七萬平方哩吉林ハ十萬平方哩黑龍江ハ二十萬平方哩以上ト算セラル

地理

滿洲ハ其ノ特性大陸的ナリ東南部ニ長白山脈、西北部ニ大興安山脈ノ二山脈アリ右兩山脈間ニ滿洲大平原橫ハリ其ノ北部ハ松花江流域ニ南部ハ遼河流域ニ屬ス右兩流域ノ分水界ハ歷史的ニ相當重要ナルモノナルガ滿州平原ヲ南北兩部ニ分ツ一ノ丘陵脈ナリ

滿洲ハ西ハ河北省及內外蒙古ニ境ヲ接ス內蒙古ハ從前三箇ノ特別行政地域卽チ熱河、察哈爾及綏遠ニ分タレタルガ何レモ千九百二十八年國民政府ニ依リ省トシテノ完全ナル地位ヲ付與セラレタリ內蒙古特ニ熱河ハ常ニ滿洲ト關係ヲ保チ滿洲問題ニ多少ノ影響ヲ與ヘ居レリ滿洲ハ其ノ西北、東北及東ニ於テハ「ソヴィエト」聯邦ノ「シベリア」諸州ニ東南ニ於テハ朝鮮ニ境シ南ハ黃海ニ臨ム遼東半島ノ南端ハ千九百五年以來日本ニ保有セラレ其ノ面積千三百平方哩ヲ超エ日本ノ租借地トシテ統治セラル加之日本ハ租借地外ニ亘リ南滿洲鐵道ヲ敷設セル狹キ地帶ニ對シ或種ノ權利ヲ行使ス右地帶ノ全面積ハ僅僅百八平方哩ナルモ線路ノ長サハ六百九十哩ニ達ス

經濟的資源

滿洲ノ地味ハ一般ニ豐饒ナルモ其ノ開發ハ運輸ノ利便ニ左右セラレ多數ノ重要都市ハ河川及鐵道ニ沿ヒテ繁榮ス過去ニ於ケル開發ハ大體河川系統ニ賴リシモノナルガ右河川系統ハ鐵道ガ運輸機關トシテ第一位ヲ占ムルニ至レル今日ニ於テモ依然トシテ甚ダ重要ナリ大豆、高粱、小麥、粟、大麥、米、燕麥ノ如キ重要穀產額ハ十五年間ニ倍加シ千九百二十九年此ノ種穀產物ハ八億七千六

百萬「ブッシェル」以上ト算セラレタリ千九百三十一年ノ「マンチュリア、イーヤ、ブック」所揭ノ算定ニ依レバ全面積ノ二八・四「パーセント」ハ耕作シ得ルニ拘ラズ千九百二十九年ニハ僅僅一二・六「パーセント」開墾セラレ居ルニ過キズ從テ經濟狀態改善セラルルニ於テハ將來生產額ノ著シキ增大ヲ期待シ得ベキガ如シ千九百二十八年度ニ於ケル滿洲ノ農產物ノ全價額ハ一億三千萬「ポンド」以上ト算セラレ其ノ大部分ハ輸出セラル絹綢モ亦滿洲ノ他ノ重要輸出品ナリ

木材及鑛物

山嶽地方ハ木材及鑛物殊ニ石炭豐富ナリ鐵及金ノ重要ナル鑛床モ亦存在ストセラレ他方良質ノ油頁岩、白雲石、菱苦土石、石灰石、耐火粘土、滑石及珪土モ多量ニ發見セラレタリ從テ鑛業ハ極メテ重要ト爲ルベシト期待セラル(註)

註 尙第七章竝ニ本報告書附屬ノ特別研究第二及第三ヲ見ヨ

二 支那ノ他ノ部分トノ關係

滿洲朝沒落ニ至ル迄ノ歷史

滿洲ニハ有史以來各種「ツングース」族居住シ蒙古韃靼人ト自由ニ雜居シタルガ優越セル文明ヲ有スル支那人移住民ノ影響ヲ受ケ彼等自身團結スルコトヲ覺リ數箇ノ王國ヲ建設シタリ此等王國ハ時ニ滿洲ノ大部分竝ニ支那及朝鮮ノ北部地方ヲ支配セリ殊ニ遼、金及滿洲朝ハ支那ノ大部分又ハ全部ヲ征服シ數世紀間之ヲ支配シタリ一方支那ハ有力ナル皇帝ノ下ニ北方ノ侵入ヲ防止シ之ニ代リテ自ラ滿洲ノ大部分ニ其ノ主權ヲ樹立スルヲ得タルコトアリ移住支那人ノ植民ハ古代ヨリ行ハレ周圍ノ地方ニ支那文化ノ影響ヲ及ボシタル支那人ノ都邑ハ同ジク古代ヨリ存在セリ卽チ二千年

間永久的ノ立脚地維持セラレ支那文化ハ滿洲ノ極南部ニ於テ常ニ行ハレタルガ右文化ノ影響ハ事實上滿洲全部ニ其ノ權力ヲ振ヘル明朝(千三百六十八年乃至千六百四十四年)ノ統治中極メテ强大ト爲リタリ滿洲人ガ千六百十六年滿洲ニ於ケル明朝ノ施政ヲ覆ヘシ千六百二十八年支那ヲ征服スル爲長城ヲ越エタル以前既ニ滿洲人ノ間ニハ支那文化普及シ著シク支那人ニ同化セラレタリ滿洲軍中ニハ多數ノ支那人アリテ漢旗トシテ知ラルル別個ノ部隊ニ編制セラレタリ

右征服後滿洲朝ハ支那ノ比較的重要ナル都市ニ守備兵ヲ置キ滿洲人ノ一定職業ニ從事スルコトヲ禁ジ滿洲人及支那人間ノ雜婚ヲ禁止シ支那人ノ滿洲及蒙古移住ヲ制限セリ右ノ措置ハ人種的ヨリハ寧ロ政治的ノ差別觀念ニ基キ滿洲朝ノ永久的支配ヲ擁護スルノ目的ニ出デタルモノナリ而シテ右措置ハ事實上滿洲人同樣ノ特權的地位ヲ享有セル多數ノ漢旗人ニハ及バザリキ

滿洲人及其ノ味方タル支那人ノ出境ハ滿洲ノ人口ヲ著シク減少セシメタルモ南部ニ於テハ支那人ノ團體ハ依然トシテ存在シ右立脚地ヨリ少數ノ移住者ハ奉天省ノ中央部ヲ橫斷シテ分散セリ而シテ其ノ數ハ排斥法ヲ潛ルニ成功シ又ハ時時同法ノ緩和ヲ利用シテ支那ヨリ絕エズ移住民入込メル爲增加シタリ滿洲人及支那人ハ益融化シ支那語ハ實質上滿洲語ニ代ルニ至レリ尤モ蒙古、ハ同化セラレズ此等移住民ノ爲奥地ニ後退セシメラレタリ最後ニ北方ヨリスル露西亞人ノ進出ヲ阻止スル爲滿洲政府ハ支那人ノ移住ヲ奬勵スルニ決シタリ從テ千八百七十八年滿洲各地ハ開放セラレ且移住民ニ各種ノ奬勵ヲ與ヘタル結果千九百十一年ノ支那革命當時滿洲ノ人口ハ千八百萬ト算セラレタリ

滿洲朝ハ千九百七年卽チ退位ノ數年前滿洲ニ於ケル施政ヲ改革スルコトニ決定セリ滿洲各省ハ從前獨自ノ政體ヲ有スル別個ノ關外領域トシテ統治セラレ省行政ヲ競爭考試ニ及第セル學者ノ手ニ委スル支那ノ慣例ハ滿洲ニ於テハ行ハレズシテ純粹ナル軍政施カレ右軍政ノ下ニ滿洲官吏及慣習維持セラレタリ支那ニ於テハ官吏ハ其ノ出生セル省ニ於テハ官職ニ就クヲ許サレザリキ滿洲各省ニハ將軍アリテ軍事ト共ニ文政ニ付完全ナル權力ヲ行使シタルガ後ニ至リ文武兩政ノ分離試ミラレタルモ其ノ結果ハ滿足ナラザリキ卽チ各權限ノ分界妥當ナラズ屢誤解及陰謀アリ其ノ結果能率ヲ擧グルニ至ラザリキ依テ千九百七年右ノ企圖ハ放棄セラレ特ニ外交政策ノ方面ニ於ケル權力集中ノ目的ヲ以テ三名ノ將軍ニ代フルニ全滿洲ニ對スル總督ヲ置クコトトシ總督ノ監督ノ下ニ巡撫省行政ヲ掌リタリ右改組ハ支那ノ省政府組織ヲ受入セル後日ノ行政改革ノ素地ヲ作レリ滿洲朝ノ右最後ノ措置ハ千九百七年以後滿洲ノ政治ヲ掌レル有能ナル爲政家ニ依リ大ナル效果ヲ收メタリ

滿洲朝ノ沒落後

千九百十一年革命起ルヤ共和政體ニ贊セザル滿洲官憲ハ後日滿洲及北支那ノ獨裁官ト爲ルニ至リタル張作霖ニ對シ革命軍ノ前進阻止ヲ命ジ以テ內亂ノ騷擾ヨリ此等ノ省ヲ救フニ成功シタリ民國建設セラルルヤ滿洲官憲ハ既成事實ヲ受諾シ進ンデ民國初代大總統ニ選任セラレタル袁世凱ノ統率ニ從ヒタリ各省ニハ將軍及巡按使任命セラレタルガ滿洲ニ於テモ支那ノ他ノ部分ト同樣暫時ニシテ將軍ハ同僚タル巡按使ヲ無力タラシムルニ成功シタリ

千九百十六年張

千九百十六年卽チ退位ノ數年前滿洲ニ於ケル施政ヲ改革スルコトニ決定セリ滿洲各省ハ從前獨自ノ政體ヲ有スル別個ノ關外領域トシテ統治セラレ省行政ヲ競爭考試ニ及第セル學者ノ手ニ委スル支那ノ慣例ハ滿洲ニ於テハ行ハレズシテ純粹ナル軍政施カレ右軍政ノ下ニ滿洲官吏及慣習維持セラレタリ支那ニ於テハ官吏ハ其ノ出生セル省ニ於テハ官職ニ就クヲ許サレザリキ滿洲各省ニハ將軍アリテ軍事ト共ニ文政ニ付完全ナル權力ヲ行使シタルガ後ニ至リ文武兩政ノ分離試ミラレタルモ其ノ結果ハ滿足ナラザリキ卽チ各權限ノ分界妥當ナラズ屢誤解及陰謀アリ其ノ結果能率ヲ擧グルニ至ラザリキ依テ千九百七年右ノ企圖ハ放棄セラレ特ニ外交政策ノ方面ニ於ケル權力集中ノ目的ヲ以テ三名ノ將軍ニ代フルニ全滿洲ニ對スル總督ヲ置クコトトシ總督ノ監督ノ下ニ巡撫省行政ヲ掌リタリ右改組ハ支那ノ省政府組織ヲ受入セル後日ノ行政改革ノ素地ヲ作レリ滿洲朝ノ右最後ノ措置ハ千九百七年以後滿洲ノ政治ヲ掌レル有能ナル爲政家ニ依リ大ナル效果ヲ收メタリ

千九百十一年革命起ルヤ共和政體ニ贊セザル滿洲官憲ハ後日滿洲及北支那ノ獨裁官ト爲ルニ至リタル張作霖ニ對シ革命軍ノ前進阻止ヲ命ジ以テ內亂ノ騷擾ヨリ此等ノ省ヲ救フニ成功シタリ民國建設セラルルヤ滿洲官憲ハ既成事實ヲ受諾シ進ンデ民國初代大總統ニ選任セラレタル袁世凱ノ統率ニ從ヒタリ各省ニハ將軍及巡按使任命セラレタルガ滿洲ニ於テモ支那ノ他ノ部分ト同樣暫時ニシテ將軍ハ同僚タル巡按使ヲ無力タラシムルニ成功シタリ

千九百十六年張

作霖ノ奉天督軍任命

千九百十二年、張ノ北京中央政府ニ對スル忠誓斷絶

「ソヴィエト」聯邦ト奉天ノ協定、千九百二十四年

張作霖元帥吳佩孚將軍ヲ破ル

ニ大ナリキ對獨宣戰ノ問題起ルヤ彼ハ支那ニ於ケル軍閥將領ガ宣戰ニ反對セル國會ノ解散ヲ要求セルニ參加シタリ而シテ右要求ガ大總統ニ依リ拒絶セラルルヤ彼ハ奉天省ハ北京中央政府ヨリ獨立セルコトヲ宣言シタルガ後ニ至リ右宣言ヲ取消シ千九百十八年其ノ中央政府ニ對スル功績ニ依リ東三省巡閱使ニ任ゼラレタリ斯クテ滿洲ハ再ビ特別ノ制度ヲ有スル一ノ行政單位ト爲リタリ

張作霖ハ中央政府ノ與ヘタル顯職ヲ受領シタルモ其ノ時時ノ態度ハ變轉常ナカリシ中央政府ノ支配者タル軍閥將領トノ個人的關係ノ如何ニ依存セリ彼ハ自己ト政府トノ關係ヲ視ルニ個人的同盟ノ意味ヲ以テシタルモノノ如シ千九百二十二年七月其ノ權力ヲ長城以內ニ樹立スルニ失敗シ其ノ政敵ガ北京政府ヲ支配スルヲ見ルヤ彼ハ中央政府ニ對スル忠誠ヲ廢棄シ滿洲ニ於テ完全ナル行動ノ獨立ヲ維持シ遂ニ其ノ權力ヲ長城以南ニ及ボシ竝ニ北京ノ支配者ト爲リタリ彼ハ外國ノ權利ヲ尊重スルノ意アルコトヲ表明シ支那ノ義務ヲ承認シタルモ外國ニ對シ滿洲ニ關スル一切ノ事項ニ付テハ今後自己ノ政府ト直接交涉センコトヲ要求セリ

依テ彼ハ千九百二十四年五月三十一日ノ支那「ソヴィエト」協定ガ支那ニ甚ダ有利ナリシニ拘ラズ之ヲ廢棄シ「ソヴィエト」聯邦ヲ說得シテ千九百二十四年九月之ト別個ノ協定ヲ締結セルガ右ハ千九百二十四年五月三十一日ノ中央政府トノ協定ト實質的ニ同一ナリ右ノ事實ハ張作霖ガ內外兩政策ニ關シ完全ナル行動ノ獨立ノ承認ヲ固持セルコトヲ明證シタリ

千九百二十四年彼ハ再ビ支那ニ侵入シタルガ馮玉祥將軍（現在元帥）ガ其ノ上官吳佩孚將軍（現在元帥）ヲ戰鬪ノ重要ナル時機ニ遺棄シタル爲成功セリ右ノ直接ノ結果トシテ中央政府ハ忽チ顚

郭松齡ノ反逆 九百二十五年

覆シ南方上海ニ至ル迄張元帥ノ勢力擴大セリ

千九百二十五年張元帥ハ再ビ武力ニ訴ヘ這回ハ其ノ最近迄ノ同盟者タル馮將軍ニ對抗セリ此ノ戰鬪ニ於テ彼ノ部將ノ一人郭松齡ハ最重要ナル時機ニ際シ彼ヲ棄テ馮將軍ニ味方セリ千九百二十五年十一月ノ郭松齡ノ反逆ハ單ニ一時的ノ關係タルニ止マラズ「ソヴィエト」聯邦及日本ニモ關係セリ蓋シ前者ノ行動ハ間接ニ馮將軍ニ有利ニシテ後者ノ行動ハ張元帥ニ有利ナリシヲ以テナリ郭松齡ハ元帥ノ部下タリシニ拘ラズ社會改革ニ關シ馮將軍ト見解ヲ同クシ其ノ上官ノ沒落ガ内亂終熄ニ必要ナリトノ信念ヨリ彼ニ對シ鋒ヲ逆ニセルモノナリ右反逆ハ元帥ヲ甚シク危機ニ陷レタリ郭松齡ハ鐵道西方ノ地域ヲ占領シ居リ元帥ハ奉天ニ在リテ著シク減少セル兵力ヲ擁シ居リタリ此ノ時ニ方リ日本ハ南滿洲ニ於ケル自己ノ利益ニ顧ミ南滿洲鐵道ノ兩側ニ各二十支里（七哩）ノ中立地帶ヲ宣言シ如何ナル軍隊モ之ヲ通過スルコトヲ禁止シタリ右ハ郭松齡ノ元帥ニ對スル進軍ヲ妨ゲ黑龍江ヨリノ援軍到著ノ餘裕ヲ與ヘタリ援軍ハ現金ヲ以テ運賃ヲ支拂ハザル限リ鐵道輸送ノ許可ヲ拒否セル「ソヴィエト」鐵道當事者ノ行動ニ依リ遲延シタルモ他ノ行路ニ依リ進ムコトヲ得タリ

右援軍ノ到著及日本ノ與ヘタル多少トモ公然ノ援助ハ戰鬪ヲ元帥ニ有利ニ解決セリ郭松齡ハ敗戰シ馮將軍ハ後退ノ己ムヲ得ザルニ至リ北京ヲ張元帥ノ爲遺棄シタリ張元帥ハ右ノ際ニ於ケル東支鐵道當事者ノ行動ヲ憤リ該鐵道ノ權利ヲ絕エズ簒奪シ以テ報復餘ス所ナカリキ右事件ノ與ヘタル經驗ハ彼ヲシテ滿洲三省ノ首都ヲ聯絡スル獨立ノ鐵道網ヲ建設セシメタル重要ナル要因タルノ觀

滿洲獨立ノ意義

アリ

張作霖元帥ガ時ヲ異ニシテ宣言セル獨立ナルモノハ彼又ハ滿洲ノ人民ガ支那トノ分離ヲ希望セルコトヲ意味セルモノニハ非ズ彼ノ軍隊ハ支那ガ恰モ外國ナルカノ如ク之ヲ侵略シタルニ非ズシテ單ニ内亂ニ參加シタルニ過ギズ他省ノ軍閥巨頭ト同樣張ハ中央政府ヲ或ハ支持シ或ハ攻擊シ又ハ其ノ領域ヲ中央政府ヨリ獨立セルモノト宣言シタルモ右ハ支那ヲ個個ノ國家ニ分割スルニ至ルガ如キ方法ニテ爲サレタルニ非ズ之ニ反シ支那ノ内亂ノ多クハ眞ニ强力ナル政府ノ下ニ同國ヲ統一セントスル何等カノ大計畫ニ直接又ハ間接關係アルモノナリ從テ一切ノ戰爭及「獨立」ノ期間ヲ通ジ滿洲ハ終始支那ノ一構成部分タリシナリ

張作霖對國民黨

吳佩孚ニ對スル戰爭ニ於テ張作霖元帥及國民黨ハ同盟セルニ拘ラズ張自身ハ國民黨ノ主義ヲ承認セザリキ彼ハ孫博士ノ希望セル如キ憲法ハ支那人民ノ精神ト調和スルモノトハ見受ケラレザリシヲ以テ之ヲ是認セザリキ然レドモ張ハ支那ノ統一ヲ希望シ滿洲ニ於ケル「ソヴィエト」聯邦及日本ノ利益範圍ニ對スル張ノ政策ハ能フベクンバ兩者ヲ一掃セント欲シタルコトヲ示セリ事實ニ徵スルモ「ソヴィエト」聯邦ノ範圍ニ關シテハ張ハ右政策ノ實行ニ殆ド成功シ又南滿洲鐵道ヲ同鐵道ノ培養地域ノ或部分ヨリ切斷スベキ上述ノ鐵道建設政策ニ著手シタリ張ガ滿洲ニ於ケル「ソヴィエト」聯邦及日本ノ利益ニ對シ斯カル態度ニ出デタルハ一ハ張ガ其ノ右兩國トノ交涉ニ關スル自己ノ權力ノ制限ニ堪ヘ難ク爲リタルコトト他ハ張ガ支那ニ於ケル外國人ノ特權的地位ニ關シ各種ノ支那輿論ト共ニ感ジタル憤怨トニ因ルベシ事實千九百二十四年十一月張ハ孫博士ヲ改組會議ニ

招請シタル處同博士ハ會議議題中ニ生活標準ノ改善、國民會議ノ召集及不平等條約ノ廢棄ヲ包含セシメンコトヲ求メタリ右會議ハ孫博士ノ重患ニ陷リタル結果開催ヲ見ズシテ止ミタルガ右孫博士ノ提議ハ孫ト張元帥トノ間ニ一脈ノ了解ノ相通ズルモノアリ且兩者ノ間ニ支那ノ對外政策ニ關シ合意ノ基礎ヲ求メ得ベカリシヲ想ハシム

張作霖ノ晩年

張作霖元帥ハ其ノ晩年ニ於テハ日本ニ對シ日本ガ各種ノ條約及取極ニ依リ取得セル特權ノ利益ヲ漸次容認セザル意向ヲ示スニ至レリ兩者ノ關係ハ時ニ稍緊張シタリ支那ニ於ケル黨派的鬪爭ニ關係セズ專ラ力ヲ滿洲ノ開發ニ用フベシトノ日本ノ忠告ニ對シ彼ハ憤怨ヲ感ジ之ヲ無視シタルガ其ノ子亦彼ニ倣ヘリ馮將軍ノ敗戰後張作霖ハ大元帥ノ稱號ノ下ニ北方軍閥同盟ノ盟主ト爲レリ

千九百二十八年彼ハ第一章ニ說述セル國民黨軍ノ北伐ニ際シ其ノ破ル所ト爲リ日本ヨリ早キニ及ンデ其ノ軍隊ヲ滿洲ニ引揚グベキ旨勸告セラレタリ日本ノ宣明セラレタル目的ハ戰捷軍ニ追擊セラレタル敗殘兵ノ遁入ニ依リ滿洲ガ內亂ノ災禍ニ投ゼラルルコトヲ防止セントスルニ在リタリ

右勸告ニ對シ元帥ハ憤慨シタルモ結局之ニ從フノ外ナカリキ彼ハ千九百二十八年六月三日北平(元ノ北京)ヨリ奉天ニ向ケ出發シタル處翌日奉天市外北平奉天線ガ南滿洲鐵道線ノ鐵橋下ヲ通過スル地點ニ於テ爆裂ノ爲其ノ搭乘セル列車破壞セラレ死亡セリ

張作霖元帥ノ死千九百二十八年六月四日

右殺害ノ責任ハ今日迄確定セラレズ慘事ハ神祕ノ幕ニ蔽ハレ居レルモ當時右事件ニ日本ガ共謀シタルヤノ嫌疑起リ既ニ緊張シ居リタル日支關係ニ一段ノ緊張ヲ加フル原因ト爲レリ

張作霖元帥ノ死後其ノ子張學良滿洲ノ支配者ト爲レリ彼ハ新時代ノ國民的要望ニ共鳴シ居リタル

其ノ子張學良元帥

ヲ以テ內亂ヲ中止シ國民黨ノ統一政策ヲ援助セント欲シタルガ既ニ國民黨ノ政策及傾向ニ付多少ノ經驗ヲ有シタル日本ハ斯カル勢力ガ滿洲ニ侵透セントスル形勢ハ之ヲ歡迎セザリキ日本ハ若キ元帥ニ對シ右ノ趣旨ヲ勸告スル所アリタルガ彼ハ父ト同ジク斯カル勸告ヲ不快トシ自己ノ判斷ニ從フベク決心セリ斯クテ彼ト國民黨及南京トノ關係ハ緊密ヲ加ヘ千九百二十八年十二月彼ハ易幟ヲ行ヒ中央政府ニ對スル忠順ヲ宣言シ東北邊防軍總司令ニ任ゼラルルト共ニ內蒙古ノ一部約六萬平方哩ノ面積ヲ有スル熱河ヲ加ヘタル滿洲ノ政權ノ長官タルコトヲ確認セラレタリ

若キ元帥ノ中央政府ヘノ忠順ヲ宣スル

滿洲ガ國民黨支那ト合體セル結果滿洲ノ行政組織ハ中央政府ノ同組織ニ近似スル樣多少ノ變更ヲ必要トスルニ至リ委員制度採用セラレ國民黨ノ諸黨部設立セラレタルガ事實ハ從來ノ通リ舊制度及舊人物活動ヲ繼續セリ支那ニ於テ不斷ニ行ハレタルガ如キ國民黨支部ノ地方行政ニ對スル干涉ハ滿洲ニ於テハ寬容セラレズ總テノ主要文武官憲ハ國民黨員タルベシトノ規定ハ單ナル形式トシテ取扱ハレ軍事、政務、財政、外交等總テノ問題ニ付中央政府トノ關係ハ自發的協力ニ依存セリ無條件服從ヲ要求スルガ如キ命令又ハ訓令ハ容認セラレザリシナルベク滿洲官憲ノ意ニ反シタル任免ノ如キハ想像シ得ラレザリキ政府及黨ノ問題ニ關スル右ノ如キ行動ノ獨立ハ支那ノ他ノ各地方ニ於テモ存シタルガ斯カル場合總テノ重要ナル任命ハ地方官憲ニ依リテ行ハレ中央政府ハ單ニ之ヲ確認スルニ止レリ

國民黨トノ聯繫ハ實質上ヨリモ名義上ノモノナリ

外交政策ノ範圍ニ於テハ滿洲ト國民政府トノ合體ハ相當重要ナル結果ヲ招徠セリ尤モ此ノ點ニ付地方政府ハ依然多クノ行動ノ自由ヲ保持シタリ東支鐵道ノ滿洲ニ於ケル地位ニ對スル張作霖元帥

國民政府トノ合體ガ滿洲ニ於ケル對承ニ依ル繼

外政策ニ及ボシタル影響

ノ執拗ナル攻撃及日本ノ要求スル或種ノ權利ニ對スル無視ハ滿洲ニ於テハ既ニ國民黨トノ合體以前ヨリ「進取政策」ノ採用セラレ居タルコトヲ示スモノナルガ國民黨トノ合體後ハ滿洲ハ巧ニ組織セラレ且系統的ナル同黨ノ宣傳ニ開放セラレタリ同黨ハ其ノ正規印刷物ニ於テ又同黨ト關係深キ多數ノ機關紙ニ於テ常ニ喪失主權ノ回復及不平等條約ノ廢棄ノ極メテ重要ナルコト竝ニ帝國主義ノ邪惡ヲ强調スルコトヲ止メザリキ支那領土ニ於ケル外國ノ利益、裁判所、警察、警備兵又ハ軍隊ノ實體ノ明白ナル滿洲ニ於テ斯カル宣傳ガ深キ印象ヲ與ヘタルハ必然ナリ國民黨ノ宣傳ハ同黨ノ教科書ニ依リ學校ニ浸入シ又遼寧人民外交協會ノ如キ結社出現シテ國民主義的感情ヲ鼓吹强調スルト共ニ排日煽動ヲ實行シ又支那人家主及地主ニ對シ强力ヲ加ヘ以テ日本人及朝鮮人タル賃借人ヘノ賃貸料ノ引上又ハ賃貸契約ノ更新拒絶ヲ行ハシメタリ（註）日本側ハ本委員會ニ對シ多數ノ此ノ種事件ヲ報告シ來レリ朝鮮人移民ハ組織的迫害ヲ蒙レリ諸種ノ排日的命令及訓令發セラレ軋轢ノ案件ハ堆積シ危險ナル緊張加ハレリ千九百三十一年三月各省首都ニ國民黨黨部建設セラレ次デ其ノ他ノ都市及縣ニ支部ノ設立ヲ見タリ黨ノ宣傳員ニシテ支那ヨリ北上シ來ルモノハ次第ニ其ノ數ヲ加ヘ日本側ハ排日運動ノ日ニ激化スルヲ訴ヘタリ千九百三十一年四月奉天ニ於テ人民外交協會主催ノ下ニ五日間ノ會議開催セラレ滿洲各地ヨリノ代表者三百餘名之ニ參加シ滿洲ニ於ケル日本ノ地位一掃ノ可能性ニ付討議セラレタルガ其ノ決議ノ內ニハ南滿洲鐵道回收ノ一項ヲ含メリ當時「ソヴィエト」聯邦及其ノ人民モ亦右同樣ノ傾向ニ惱マサレタルガ一方白系露西亞人ハ何等返還スベキ主權又ハ例外的特權ヲ有セザルニ拘ラズ屈辱及虐待ヲ蒙レリ

內政ニ及ボセル影響

內政問題ニ關シテハ滿洲官憲ハ其ノ欲スル權力ヲ悉ク保持シ而シテ其ノ權力ノ根本ニ觸レザル限リ中央政府ノ採用セル行政規則及方法ニ從フニ異議ナカリキ

東北各省政務委員會

國民政府トノ合體後幾何モナク奉天ニ東北政務委員會設立セラレタルガ右ハ中央政府ノ名義上ノ監督ノ下ニ在ル東北諸省ノ最高行政官憲ナリキ同委員會ハ十三名ヨリ成リ其ノ內一名ヲ委員長ニ選ベリ同委員會ハ遼寧、吉林、黑龍江及熱河ノ四省竝ニ千九百二十二年以來東支鐵道ノ行政地域ニ代レル所謂特別區ノ政府ノ活動ヲ指揮監督スル責ニ任ジタリ同委員會ハ特ニ中央政府ニ留保セラレタル以外ノ有ラユル事項ヲ處理シ且中央政府ノ法律規則ニ抵觸セザル如何ナル措置ヲモ執リ得ルノ權限ヲ有シ省及特別區ノ政府ハ右委員會ノ決定ヲ實施スルノ義務ヲ負ヘリ

各省ノ行政組織ハ支那ノ他ノ地方ニ於テ採用セラレタル組織ト根本的ニハ相違スル所ナキモ滿洲ヲ一行政單位トシテ維持センガ爲ニ特權ヲ保持セルコト最重要ナル差異ナリ尤モ右特權ナカリセバ滿洲側ノ自發的合體ハ恐ラク行ハレザリシナルベシ事實外部的變更ニ拘ラズ舊事態引續キ存在セリ滿洲當局ハ從來ノ如ク其ノ權力ガ南京ヨリ來ルヨリモ遙ニ多ク彼等ノ軍隊ヨリ來ルモノナルコトヲ認識セリ

軍隊、全經費ノ八〇パーセントヲ占ムル軍費

右事實ハ約二十五萬ニ上ル大常備軍維持セラレ又二億「ドル」（銀）以上ヲ費シタリト傳ヘラルル大兵工廠ノ保持セラレ居ルコトヲ說明スルモノナリ軍事費ハ全經費ノ八〇「パーセント」ニ達シタリト推計セラレ其ノ殘額ヲ以テシテハ行政、警察、司法及教育ノ費用ヲ支辨スルニ足ラズ國庫ハ

官吏ニ對シ適當ナル俸給ヲ支給スル能ハザリキ而シテ有ラユル權力ハ少數軍人ノ手ニ歸シタルヲ以テ官職ハ彼等ノ手ヲ通ジテノミ得ラレ斯カル事態ノ避ケ難キ結果トシテ親族閥、腐敗、惡政ハ跡ヲ斷タザリキ本委員會ハ右惡政ニ對スル甚大ナル不平ガ廣ク各地ニ存スルヲ認メタリ尤モ右事態ハ滿洲ニ特有ノモノニハ非ズシテ支那ノ他ノ地方ニモ同樣乃至更ニ惡化セル事態存在セリ

軍隊維持ノ爲ニハ重稅ヲ課スルノ要アリタルガ通常收入ニテハ尙不足セルヲ以テ當局ハ省政府不換紙幣ノ價値ヲ順次下落セシムルコトニ依リ更ニ人民ニ課稅セリ(註) 右政策ハ既ニ千九百三十年頃ニ殆ド獨占的ノ割合ヲ占メ居リタル「豆類公買」操作ニ關聯シテ屢行ハレ殊ニ最近其ノ度ヲ加ヘタリ滿洲重要物產ノ管理權ヲ取得スルコトニ依リ當局ハ外國ノ豆類買入業者就中日本人ニ對シ高價買入ヲ餘儀ナカラシメ以テ其ノ收入ヲ增大セント欲シタルガ斯カル取引ハ當局ガ如何ナル程度ニ銀行及商業ヲ管理シタルカヲ示スモノナリ官吏モ亦自由ニ有ラユル私的企業ニ從事シ其ノ權力ヲ利用シテ自己及其ノ一味ノ爲ニ富ヲ蒐メタリ

滿洲ニ於ケル支那政權ノ建設的努力

註 本報告書附屬ノ特別研究第四及第五ヲ見ヨ

千九百三十一年九月事件前ノ滿洲ニ於ケル行政ノ缺陷ガ如何ナルモノナリシニセヨ同地方ノ或部分ニ於テハ行政改善ノ努力行ハレ殊ニ敎育ノ進步、都市行政及公共事業ノ分野ニ於テ若干ノ效果擧リタルコトハ之ヲ認メザルベカラズ右時代ニ於テ張作霖元帥及張學良元帥ノ治下ニ在リテ滿洲經濟資源ノ開發及組織ニ關シ支那人民及支那側事業ガ從來ヨリモ遙ニ大ナル役ヲ勤ムルニ至リタル事實ハ特ニ玆ニ强調スルノ要アリ(註)

註 尙第八章及本報告書附屬ノ特別研究第三ヲ見ヨ

既述ノ如ク支那人移民ノ廣汎ナル定住ハ滿洲ト支那ノ他ノ地方トノ間ノ經濟的及社會的關係ノ發展ニ貢獻シタリ然レドモ 右殖民以外ニ右ノ時代ニ於テ日本ノ資本ニ關係ナキ支那鐵道殊ニ奉天海龍鐵道、打虎山通遼鐵道(北平奉天線ノ枝線)齊齊哈爾克山鐵道、呼蘭海倫鐵道建設セラレ又葫蘆島築港計畫、遼河改修工事及諸河川ニ於ケル航行事業ノ開始ヲ見タリ支那官民ハ此等企業ニ參加スルニ至リ鑛山業ニ於テハ本溪湖、穆稜、札賚諾爾及老頭溝炭坑ニ關係ヲ有シ其ノ他諸鑛山ノ開發ニ付單獨責任ヲ有シタルガ此等鑛山ノ多クハ政府ノ東北礦務總局ノ指揮ヲ受ケタリ支那人ハ尙黑龍江省ノ採金事業ニモ利害關係ヲ有シタリ森林業ニ關シテハ支那人ハ鴨綠江採木公司ニ於テ日本人ト共同ノ利益ヲ有シ尙黑龍江省及吉林省ニ於テ伐木事業ニ從事セリ滿洲各地ニ農事試驗場開設セラレ農業組合及灌漑計畫奬勵セラレタリ最後ニ支那人事業家ハ製粉及織物工業、哈爾賓ニ於ケル豆、油及製粉工場、絹綢、木綿及羊毛ノ紡績及製織工場ニ從事セリ

支那ノ他ノ部分トノ通商關係

滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ間ノ貿易モ亦增大セリ(註) 右貿易ハ一部分支那ノ銀行就中滿洲ノ主要都市ニ支店ヲ設ケタル中國銀行ヨリ金融ヲ受ケタリ支那汽船及戎克ハ支那本部ト大連、營口(牛莊)及安東トノ間ヲ往復シタルガ其ノ運送貨物量漸增シ滿洲海運業界ニ於テハ日本ノ「トン」數ニ次ギ第二位ヲ占メタリ支那保險業モ漸次增加ノ趨勢ニ在リ又支那海關ガ對滿洲貿易ニ依リ取得スル收入ハ增加シツツアリタリ

斯ノ如ク日支衝突ニ先ダツ期間ニ於テハ滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ政治的及經濟的聯繫ハ漸次强

固ヲ加ヘツツアリタリ右漸增シツツアリタル相互ノ依存關係ハ滿洲及南京ニ於ケル支那人指導者ヲシテ露西亞又ハ日本ノ獲得セル利益及權利ノ排除ヲ目的ト爲セル國民主義的政策ヲ益實行セシムルニ與リテ力アリタリ

註　尙第八章及本報告書附錄ノ特別研究第六ヲ見ヨ

三　露西亞トノ關係

露支關係

千八百九十四年乃至九十五年ノ日清戰爭ハ其ノ後ノ事件ノ立證セル如ク露西亞ヲシテ表面上ハ支那ノ爲ニ而シテ事實上ハ自己ノ利益ノ爲ニ干涉ヲ爲スノ機會ヲ與ヘタリ日本ハ千八百九十五年下關條約ニ依リテ日本ニ讓渡セラレタル南滿洲ニ於ケル遼東半島ヲ外交上ノ壓迫ニ依リ支那ニ還付スルノ己ムヲ得ザルニ至リタルガ露西亞ハ日本ガ課シタル戰爭償金ノ支拂ニ付支那ヲ援助シタリ

東清鐵道

千八百九十六年兩國間ニ防守同盟密約締結セラレ同年露西亞ハ上述ノ援助ノ報償トシテ「チタ」ヨリ浦潮斯德迄一直線ニ滿洲ヲ橫斷シテ「シベリア」橫斷鐵道ノ一枝線ヲ建設スル權利ヲ獲得シタリ同線ハ日本ガ再ビ支那ヲ攻擊シタル場合ニ露西亞軍隊ヲ東洋ニ輸送スルノ必要ニ出デタリト稱セラレタルガ露清銀行（後ノ露亞銀行）ハ本計畫ノ官的色彩ヲ多少隱蔽センガ爲ニ設立セラレタリ次デ同銀行ハ本件鐵道ノ建設及運輸ノ爲ニ東清鐵道會社ヲ設立シタリ千八百九十六年九月八日露清銀行ト支那政府トノ間ニ締結セラレタル約款ノ條項ニ依レバ同會社ハ本件鐵道ヲ建設シ八十年間之ヲ運轉スベキモノニシテ其ノ期間滿了後ハ無償ニテ支那ノ所有ニ歸スベキモノナルガ支

千八百九十六年九月八日ノ約款

那ハ三十六年後ニ於テ協定セラルベキ價格ヲ以テ之ヲ買收スルノ權利ヲ有シタリ約款期間中ハ同會社ハ其ノ土地ニ對シ絕對的且排他的ノ行政權ヲ有スベキモノナリシガ本條項ハ露西亞ニ依リテ約款ノ他ノ諸條項ニ依リ窺ヒ得ベキ範圍ヨリモ遙ニ廣義ニ解釋セラレタリ支那ハ露西亞ガ約款ノ範圍ヲ常ニ擴大セント試ミツツアルニ對シ抗議シタルモ之ヲ阻止スルコト能ハズ露西亞ハ東清鐵道ノ地域內ニ於テ其ノ鐵道都市ノ急激ナル發達ニ伴ヒ主權ニモ等シキ權利ヲ行使スルニ漸次成功シタリ尙支那ハ鐵道ノ必要トスル總テノ政府所有地ヲ無償ニテ引渡スコトニ同意シタルガ私有地ハ時價ヲ以テ買上ゲ得ルコトト爲シタリ同會社ハ更ニ同社ニ必要ナル電信線ヲ建設運用スルコトヲモ許與セラレタリ

露西亞ノ遼東半島租借

千八百九十年

露西亞ハ千八百九十八年嘗テ日本ガ千八百九十五年拋棄ヲ餘儀ナカラシメラレタル遼東半島ノ南部ニ對シ二十五箇年ノ租借權ヲ得ルト共ニ東清鐵道ヲ哈爾賓ヨリ右租借地內ノ旅順口及「ダルニー」（現時ノ大連）ニ聯結スル權利竝ニ旅順口ニ軍港ヲ建設スル權利ヲ取得シタリ右枝線ノ通過地方ニ於テ鐵道會社ハ鐵道用トシテ伐木及採炭ノ權利ヲ認メラレ又千八百九十六年九月八日ノ約款ノ各條項ハ諸補助的枝線ニモ適用セラレタリ露西亞ハ租借地內ニ於テハ自由ニ關稅ヲ取極ムルコトヲ許サレタリ千八百九十九年「ダルニー」（現時ノ大連）ハ自由港タルベキ旨聲明セラレ外國ノ船舶及貿易ニ開放セラレタリ右枝線ノ通過地域內ニ於テハ如何ナル鐵道特權モ他國臣民ニハ許與セラルルコトヲ得ズ且租借地北方ノ中立地帶ニ於テハ如何ナル港モ外國貿易ニ開カルルコトナク又露西亞ノ同意ナクシテハ如何ナル利權又ハ特權モ許與セラルベカラザリキ

露西亞ノ滿洲占領、千九百年

日本ハ露西亞ニ對シ開戰セリ、千九百四年二月十日

千九百年露西亞ハ團匪ノ蜂起ガ露西亞臣民ヲ危殆ナラシメタルコトヲ理由トシテ滿洲ヲ占領セリ他ノ諸國ハ之ニ抗議シ且露西亞軍隊ノ撤退ヲ要求シタルモ露西亞ハ右ノ措置ヲ執ルコトヲ遷延セリ千九百一年二月露支祕密條約案「セント、ピータースバーグ」ニ於テ討議セラレタルガ其ノ條項ニ依レバ支那ハ滿洲ニ於ケル其ノ行政權ヲ回收シ之ガ代償トシテ露西亞ガ千八百九十六年ノ基本約款第六條ニ基キ設置セル鐵道守備隊ノ維持ヲ承認スルコト及他ノ諸國又ハ其ノ臣民ニ對シ露西亞ノ同意ナクシテ滿洲、蒙古及新彊ニ於ケル鑛山又ハ他ノ利益ヲ讓渡セザルコトヲ約スルコトセリ該條約案ノ右條項及他ノ數條項周知セラルルニ及ビ支那及他ノ諸國ニ於テ輿論ノ反對ヲ惹起シ千九百一年四月三日露西亞政府ハ右計畫ハ撤回セラレタル旨ノ通牒ヲ發シタリ

日本ハ右策動ヲ特ニ注視シ來リタリ千九百二年一月三十日日本ハ日英同盟條約ヲ締約シタルヲ以テ一層自國ノ安固ナルヲ覺エタリ然レドモ日本ハ依然露西亞ガ朝鮮及滿洲ニ侵入シ來ルコトアルベキヲ懸念シタルヲ以テ他ノ諸國ト共ニ滿洲ニ於ケル露西亞軍隊ノ撤退ヲ强要セリ露西亞ハ自國以外ノ企業ニ對シ事實上滿洲及蒙古ヲ閉鎖スルニ至ルベキ條件ノ下ニ撤退ニ異存ナキコトヲ宣言セリ露西亞ノ壓迫ハ朝鮮ニ於テモ亦增大シ千九百二年七月露西亞軍隊ハ鴨綠江ノ河口ニ現ハレタリ其ノ他數多ノ行爲ハ日本ヲシテ露西亞ガ日本ノ生存ニ對スル脅威ニハ非ズトスルモ日本ノ利益ニ對スル脅威タルベキ政策ヲ執ルニ決シタリト信ゼシメタリ千九百三年七月日本ハ門戸開放政策ノ維持及支那ノ領土保全ニ關シ露西亞ト商議ヲ開始シタルガ何等功ヲ奏セザリシヲ以テ千九百四年二月十日開戰セリ支那ハ中立ヲ保チタリ

「ポーツマス」條約

露西亞ハ敗戰シ千九百五年九月五日「ポーツマス」條約ヲ締結シテ之ニ依リ日本ノ爲ニ南滿洲ニ於ケル其ノ特殊權利ヲ拋棄セリ租借地及租借ニ關聯セル一切ノ權利ハ日本ニ讓渡セラレ同時ニ旅順口長春間ノ鐵道及其ノ枝線竝ニ右鐵道ニ附屬シ又ハ右鐵道ノ利益ノ爲ニ經營セラルル右地域內ノ一切ノ炭坑モ亦日本ニ讓渡セラレタリ兩當事國ハ租借地ヲ除キ各自ノ軍隊ニ依リテ占領セラレ又ハ其ノ監理ノ下ニ在ル滿洲全部ヲ擧ゲテ全然支那專屬ノ行政ニ還付スルコトニ同意セリ兩國ハ滿洲ニ於ケル各自ノ鐵道線路ヲ保護センガ爲（特定條件ニ基キ）守備兵ヲ維持スルノ權利ヲ留保シ右守備兵ノ數ハ一キロメートル毎ニ十五名ヲ超過スルコトヲ得ズト爲セリ

露西亞ノ勢力北滿洲ニ制限セラル

露西亞ハ其ノ勢力範圍ノ半ヲ失ヒ爾來其ノ範圍ハ北滿洲ニ限定セラルルコトト爲レリ露西亞ハ同地方ニ其ノ地位ヲ保持シ爾後數年間其ノ勢力ヲ增大シタルガ千九百十七年露西亞革命勃發スルニ及ビ支那ハ右地域ニ於ケル其ノ主權ヲ再ビ主張スル決意ヲ爲セリ

「シベリア」出兵

當初支那ノ行動ハ聯合國ノ干涉（千九百十八年乃至千九百二十年）ニ參加スルコトニ限定セラレ居リタリ右干涉ハ露西亞革命後「シベリア」及北滿洲ニ於テ迅速ニ擴大シツツアリタル混亂狀態ニ關聯シ浦潮斯德ニ集積貯藏セラレタル莫大ナル兵器軍需品ノ保護及東部戰線ヨリ「シベリア」ヲ經テ引揚中ナリシ「チェッコスロヴァキア」軍約五萬ノ撤退援助ノ兩目的ノ爲決定セラレタルモノナリキ右提議ハ受諾セラレ且各國ハ「シベリア」橫斷鐵道ノ各自ノ特定區域ニ配置セラルベキ七千名ノ遠征軍ヲ派遣スベク東支鐵道ハ支那側ノ單獨ノ責任ニ委スルコトニ協定セラレタリ聯合國軍隊ノ協力ノ下ニ鐵道ノ運行ヲ確保スル爲一ノ特別ノ聯合國鐵道委員會ハ千九百十九年組織セラ

千九百十七年露西亞革命勃發後支那ハ九十八年露西亞ニ許容セル特權ヲ廢止ス

レ右委員會ノ下ニ技術部及輸送部ヲ配セリ千九百二十年右干渉終了シ聯合國軍隊ハ日本軍隊ヲ除キ「シベリア」ヲ撤退シタルガ日本軍隊ハ既ニ過激派ト公然敵對狀態ニ入リ居リタリ右戰鬪ハ殆ド二箇年ニ亘リ繼續セリ千九百二十二年「ワシントン」會議後日本軍モ亦撤退シ同時ニ右聯合國委員會ハ其ノ技術部ト共ニ消滅セリ

其ノ間支那ハ東支鐵道ノ首腦者「ホルヴァト」將軍ガ鐵道附屬地ニ一獨立政權ヲ樹立セントスル企圖ニ失敗シタル後右地域ニ於ケル秩序維持ノ責任ヲ引受ケタリ（千九百二十年）同年支那ハ改造後ノ露亞銀行ト一協定ヲ締結シ且新露西亞政府トノ協定ヲ見ル迄一時鐵道ノ最高支配權ヲ執ルノ意嚮ヲ表明シタリ支那ハ又千八百九十六年ノ約款及會社ノ原定款ニ依リ支那ニ許與セラレタル諸便益ヲ回收スルノ意嚮ヲ表明セリ爾來會社督辦及董事四名竝ニ稽察局委員二名ハ支那政府之ヲ指名スルコトト爲レリ露西亞ノ優勢ハ又其ノ後行ハレタル他ノ多數ノ措置ニ依リ衰ヘタリ鐵道附屬地ニ於ケル露西亞ノ武裝部隊ハ武裝ヲ解除セラレ支那兵之ニ代レリ露西亞人ノ治外法權ハ廢止セラレ法廷ハ侵入セラレ且閉鎖セラレ露西亞人ハ支那ノ法律、裁判及課稅ニ服セシメラレタリ露西亞人ハ支那警察ガ大ナル權力ヲ有シ且統制不充分ナリシ爲右警察ニ依リ逮捕セラレ且無期限ニ拘禁セラレ得ルコトト爲レリ

特別行政區域ノ形成

千九百二十二年從來會社ノ行政ニ服シ來リタル鐵道附屬地ハ東三省ノ特別區ニ編改セラレ奉天ニ對シ直接責任ヲ負フ一行政長官ノ支配スル所ト爲レリ鐵道ニ附屬スル土地ノ行政ニモ亦干渉ヲ受ケタリ張作霖元帥ハ露西亞新政府ガ承認セラルルニ先ダチ事實上露西亞ノ勢力範圍ヲ清算シ了リ

タルガ私人ノ利益ハ右過程中ニ於テ甚シキ侵害ヲ受ケタリ「ソヴィエト」聯邦政府ガ其ノ前政府ノ滿洲ニ於ケル遺產ヲ繼承セル時ニハ同鐵道ハ既ニ其ノ特權ノ大半ヲ失ヒ居リタリ

支那「ソヴィエト」協定

千九百二十四年ノ協定

千九百十九年及千九百二十年「ソヴィエト」聯邦政府ガ爲シタル支那ニ關スル政策ノ宣言ハ帝政政府ガ支那ニ於テ獲得シタル特權殊ニ北滿洲ニ於テ獲得シタル特權ノ完全ナル拋棄ヲ包含セリ右政策ニ從ヒ「ソヴィエト」聯邦政府ハ新協定ニ依リテ既成事實ノ調整ヲ行フコトニ同意セリ千九百二十四年五月三十一日支那「ソヴィエト」聯邦協定ニ依リ東支鐵道ハ共同管理下ノ純商業的企業ト爲リ支那モ亦右企業ニ財政上ノ利益ヲ獲得セリ然レドモ「ソヴィエト」聯邦政府ハ總支配人（廣大ニシテ範圍明瞭ナラザル權力ヲ行使ス）ノ任命權ヲ保有シ且右協定ニ依リ同政府ハ鐵道事務ニ付優越セル勢力ヲ振ヒ又北滿洲ニ於ケル其ノ經濟的利益ノ重要部分ヲ保持シ得タリ上述ノ如ク北京ニ於テ支那政府ト締結セラレタル千九百二十四年五月ノ協定ハ張作霖元帥之ヲ承認セズ自ラ別個ノ協定ヲ締結スルコトヲ主張シタリ千九百二十四年九月署名セラレタル右協定ハ其ノ條項殆ド同一ナリシモ之ニ依リ鐵道ノ租借ハ八十箇年ヨリ六十箇年ニ短縮セラレタリ

「ソヴィエト」聯邦ノ利益ニ對スル張作霖ノ侵略政策

右協定ハ「ソヴィエト」聯邦ト滿洲ニ於ケル張作霖元帥ノ政府トノ友好關係時代ヲ招徠セザリキ千九百二十四年ノ二協定ニ於テ未解決ノ儘殘サレタル多數ノ問題ヲ處理スベキ會議ノ召集ハ各種ノ口實ニ依リ延期セラレタリ千九百二十五年及千九百二十六年ニ於テ兩度ニ亘リ東支鐵道總支配人ハ張作霖ノ軍隊ノ鐵道輸送ヲ拒絕セリ右第二次ノ拒絕事件ニ依リ總支配人逮捕セラレ「ソヴィエト」聯邦ハ最後通牒ヲ發スルニ至レリ（千九百二十六年一月二十三日）而シテ此等ハ孤立セル

事件ニハ非ザリキ然ルニ支那官憲ハ露西亞ノ利益ニ反シ且「ソヴィエト」聯邦政府及白系露西亞人ニ依リ齊シク遺憾トセラレタル政策ヲ固執セリ

滿洲ニ於ケル「ソヴィエト」聯邦ノ努力ハ清算セラレタル最後ノ支那ノ努力ハ百二十千九九年

滿洲ガ南京政府ニ服屬シタル後國民主義精神ハ力ヲ增シ且鐵道ニ對シ優越ナル支配ヲ維持セントスル「ソヴィエト」聯邦ノ努力ハ從前ニ比シ一層反感ヲ以テ迎ヘラレタリ千九百二十九年五月露西亞ノ利益範圍ノ殘存セルモノヲ清算シ終ラントスル企圖行ハレタリ右攻擊ハ各地ニ於ケル支那警察ノ「ソヴィエト」聯邦領事館ニ對スル襲擊ニ依リ開始セラレタルガ支那警察ハ多數ヲ逮捕シ且「ソヴィエト」聯邦政府ト東支鐵道トノ被傭者ガ共產主義革命ノ陰謀ヲ爲シ居リタルコトヲ證スル證據ヲ發見シタリト主張セリ七月右鐵道ノ電信電話機關ハ押收セラレ且多數ノ重要ナル「ソヴィエト」機關及企業ハ强制的ニ閉鎖セラレタリ最後ニ右鐵道ノ「ソヴィエト」側支配人ハ支那側任命ノ者ニ事務ヲ引繼グベキ旨要請セラレタルモ同人ハ之ヲ拒絕シタル爲其ノ任務遂行ヲ禁止セラレタリ支那官憲ハ自由ニ「ソヴィエト」側職員ニ代フルニ自己ノ指名者ヲ以テシ且多數ノ「ソヴィエト」聯邦民ヲ逮捕シ其ノ一部ヲ追放セリ支那側ハ「ソヴィエト」聯邦政府ガ支那ノ政治及社會制度ニ反對スル宣傳ヲ行ハザル旨ノ誓約ニ背キタリトノ理由ニ基キ右强力行爲ヲ正當ナリトセリ「ソヴィエト」聯邦政府ハ其ノ五月三十日附公文ニ於テ右非難ヲ否認セリ

「ソヴィエト」聯邦ノ行動

殘存セル露西亞ノ權利及利益ノ强制的清算ノ結果「ソヴィエト」聯邦政府ハ行動ニ出ヅベク決意シタリ數度ノ書翰往復ノ後「ソヴィエト」聯邦政府ハ支那ヨリ其ノ外交官及商務代表者竝ニ東支鐵道ニ於ケル其ノ職員全部ヲ召還シ且其ノ領土ト支那トノ間ノ一切ノ鐵道交通ヲ斷絕セリ支那モ

亦同樣ニ同聯邦トノ關係ヲ斷絕シ一切ノ支那外交官ヲ同聯邦領土ヨリ召還セリ同聯邦ノ軍隊ハ滿洲國境ヲ越エテ襲擊ヲ開始シ千九百二十九年十一月ニハ武力侵入ト爲ルニ至レリ南京政府ガ紛爭ノ解決ヲ托セル滿洲官憲ハ敗戰シ且甚シク威信ヲ失墜シタル後「ソヴィエト」聯邦ノ要求ヲ承認スルノ止ムナキニ至リタリ千九百二十九年十二月二十二日「ハバロフスク」ニ於テ議定書署名セラレ之ニ依リ原狀回復行ハレタリ右紛爭中「ソヴィエト」聯邦政府ハ「パリ」條約ノ締約國タル第三國ヨリノ數多ノ覺書ニ對スル回答ニ於テ常ニ同聯邦ノ措置ハ合法ナル自衞ノ爲執ラレタルモノニシテ毫モ右條約ノ違反トシテ解釋シ得ズトノ態度ヲ執リタリ

「ハバロフスク」議定書、千九百二十九年十二月二十日

滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ次章ニ於テ詳說セラルベキモ之ニ先ダチ今滿洲ニ於ケル露西亞ノ地位ヲ敍述スルニ當リ千九百五年以後ニ於ケル同國ト日本トノ關係ニ付略說スルノ必要アリ

千九百五年以後ノ滿洲ニ關スル日露關係

露西亞日本間ノ戰爭ノ殆ド直後ニ於テ兩國間ニ密接ナル協調政策行ハレタルコトハ興味アル事實ニシテ講和成ルニ及ビ兩國ハ北滿洲及南滿洲ニ於ケル各自ノ利益範圍ニ關シ滿足ナル妥協ニ到達スルコトヲ得タリ殘存シタルベカリシ抗爭ノ痕跡ハ滿洲ノ發展ニ活潑ニ從事セント欲シタル他ノ諸國トノ論爭ニ依リ忽ニシテ拭ヒ去ラレタリ他ノ競爭者ニ對スル憂懼ハ兩國融和ノ過程ヲ促進シ千九百七年、千九百十年、千九百十二年及千九百十六年ノ諸條約ハ兩國ヲ益親密ナラシメタリ

協調政策、千九百七年—千九百十年

千九百十七年ノ露西亞革命次デ爲サレタル支那國民ニ對スル政策ニ關スル千九百十九年七月二十五日附及千九百二十年十月二十七日附「ソヴィエト」聯邦政府ノ宣言竝ニ後ニ於ケル千九百二十四年五月三十一日附及千九百二十四年九月二十日附支那「ソヴィエト」聯邦協定ハ滿洲ニ於ケル日露

露西亞革命ノ日本ニ及ボセル影響

ノ了解及協調ノ基礎ヲ粉碎セリ右政策ノ根本的變更ハ極東ニ於ケル三國ノ關係ヲ全ク變改セリ更ニ聯合國干涉(千九百十八年乃至千九百二十年)ハ之ニ伴ヘル「シベリア」ニ於ケル日本及「ソヴィエト」聯邦ノ軍隊間ノ確執(千九百二十年乃至千九百二十二年)ト共ニ日本露西亞間ノ關係ノ轉回ヲ大ナラシメタリ「ソヴィエト」聯邦政府ノ態度ハ支那ノ國民主義的熱望ニ强キ刺戟ヲ與ヘタリ同聯邦政府及第三「インターナシォナル」ハ現行條約ヲ基礎トシテ支那トノ關係ヲ維持セル一切ノ帝國主義諸國ニ反對スル政策ヲ採用シタルヲ以テ右兩者ガ主權回收ノ鬪爭ニ於テ支那ヲ支持スルコトハアリ得ベキコトナリトセラレタリ右ノ形勢ノ發展ハ日本ガ隣邦露西亞ニ對シ嘗テ懷キタル一切ノ懸念及疑惑ヲ復活セリ嘗テ日本ト戰爭シタル露西亞ハ其ノ戰爭後數年間友邦及同盟國ト爲リタリ然ルニ今ヤ右關係ハ變化シ北滿洲國境ヲ越エ來ル危險ノ可能性ハ再ビ日本ノ關心事ト爲レリ北部ニ於ケル共產主義者ノ敎義ト南部ニ於ケル國民黨ノ排日宣傳トノ提携ノアリ得ベキコトハ日本ヲシテ兩國ノ間ニ共產主義及排日宣傳ニ染マザル滿洲ヲ介在セシメントスル希望ヲ益感ゼシムルニ至レリ日本ノ疑懼ハ「ソヴィエト」聯邦ガ外蒙古ニ於テ獲得セル優越ナル勢力及支那ニ於ケル共產主義ノ發達ニ依リ最近數年間ニ於テ更ニ增大シタリ

千九百二十五年一月日本及「ソヴィエト」聯邦間ニ締結セラレタル協定ハ正規ノ關係ヲ樹立セルモ革命前ニ於ケル密接ナル協調ヲ復活スルニ至ラザリキ

第三章

日本及支那間ノ滿洲ニ關スル諸問題

(千八百三十一年九月十八日前)

一　支那ニ於ケル日本ノ利益

千九百五年ノ條約ニ依ル日本ノ權利

千九百三十一年九月ニ至ル四半世紀間ニ於テ滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ結合ハ漸次鞏固ト爲リ之ト同時ニ滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ增加シツツアリタリ滿洲ハ明ニ支那ノ一部タリシモ右一部タルヤ同地方ニ於テ日本ガ支那ノ主權行使ヲ制限スルガ如キ特殊ノ權利ヲ獲得シ若ハ主張シタルモノニシテ兩國間ノ衝突ハ其ノ當然ノ歸結ナリキ

千九百五年十二月ノ北京條約ニ依リ支那ハ從來露西亞ノ租借シ居リタル關東州租借地及露西亞ノ管理シ居リタル東清鐵道南部線中長春以南ノ鐵道ノ日本ヘノ讓渡ヲ承認シ尙追加協定ニ依リ支那ハ安東奉天間ノ軍用鐵道ヲ改良シ且之ヲ十五箇年間經營スル特權ヲ日本ニ付與シタリ

千九百六年八月南滿鐵道會社組織セラレタル

千九百六年八月從前ノ露西亞鐵道ヲ安東奉天鐵道ト共ニ引受ケ且管理スル爲勅令ニ依リ南滿洲鐵道會社組織セラレタリ日本政府ハ鐵道、其ノ附屬財產竝ニ撫順及煙臺ノ價値アル炭坑ヲ提供スル代償トシテ同會社株式ノ半數ヲ其ノ有トシ同會社ヲ統制スル地位ヲ得タリ同會社ハ鐵道附屬地ニ於ケル行政權能ヲ委任セラレ徵稅ヲ許サレ又鑛業、電氣事業、倉庫業其ノ他多數ノ諸事業經營ノ

權限ヲ與ヘラレタリ

朝鮮ノ併合

千九百十年日本ハ朝鮮ヲ併合シタルガ之ニ依リ朝鮮人移住民ハ日本臣民ト爲リ日本官吏ハ此等ニ對シ法權ヲ行使スルコトト爲リタル爲滿洲ニ於ケル日本ノ權利ハ間接ニ增大シタリ

千九百十五年一般ニ「二十一箇條要求」トシテ知ラルル日本ノ異常ナル諸要求ノ結果五月二十五日日本及支那ハ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約ニ署名シ且公文ヲ交換セリ右諸協定ニ依リ旅順口及「ダルニー」(現時ノ大連)ヲ含ム關東州ノ元來二十五箇年ノ期限ナリシ租借竝ニ南滿洲及安東奉天兩鐵道ニ關スル特權ハ總テ九十九箇年ニ延長セラレタリ加之日本臣民ハ南滿洲ニ於テ旅行及居住シ各種ノ營業ニ從事シ且商業、工業及農業ノ爲必要ナル土地ヲ商租スル權利ヲ得タリ日本ハ又南滿洲及東部內蒙古ニ於ケル鐵道及其ノ他或種ノ借款ニ對スル優先權竝ニ南滿洲ニ於ケル顧問ノ任命ニ關スル優先權ヲ獲得シタリ然レドモ千九百二十一年乃至二十二年ノ「ワシントン」會議ニ於テ日本ハ借款及顧問ニ關スル其ノ權利ヲ拋棄シタリ

千九百十五年ノ條約及交換公文

此等ノ諸條約及其ノ他ノ諸協定ハ滿洲ニ於ケル重要ニシテ且特殊ナル地位ヲ日本ニ與ヘタリ卽チ日本ハ租借地ヲ事實上完全ナル主權ヲ以テ統治シ南滿洲鐵道會社ヲ通ジテ鐵道附屬地ノ施政ニ當レルガ右鐵道附屬地ハ數箇ノ都市竝ニ奉天及長春ノ如キ人口大ナル都會ノ廣大ナル部分ヲ含ミ此等ノ地域ニ於テ日本ハ警察、徵稅、敎育及公共事業ヲ管理シタリ又日本ハ滿洲ノ多數地方ニ武裝隊ヲ存置シタリ卽チ租借地ニ於ケル關東軍、鐵道附屬地ニ於ケル鐵道守備隊及各地方ニ亘ル領事館警察之ナリ

滿洲ニ於ケル日本及支那間ノ政治的、經濟的及法律的關係ノ特殊性

日本ノ有スル多數ノ權利ノ上記概說ニ依リ滿洲ニ於テ同國及支那間ニ作ラレタル政治的、經濟的及法律的關係ノ特殊性ハ明瞭ニシテ恐ラク世界ノ何處ニモ右事態ノ正確ナル類例ナカルベク隣邦ノ領土內ニ斯ノ如キ廣汎ナル經濟的及行政的特權ヲ有スル國ハ他ニ其ノ例ヲ見ザルベシ若シ此ノ種ノ事態ニシテ雙方ニ依リ自由ニ希望セラレ若ハ受諾セラレタルモノナリトセバ又經濟的及政治的範圍ニ於ケル緊密ナル協力ニ關スル熟考セラレタル政策ノ表現及具體化ナリトセバ不斷ノ紛糾及論爭ヲ釀スコトナク之ヲ持續シ得ベキモ此等ノ條件ヲ缺クニ於テハ右ハ軋轢及衝突ヲ惹起スルノミナリ

二　滿洲ニ於ケル日本及支那ノ根本的利益ノ衝突

滿洲ニ對スル支那ノ態度

支那人ハ滿洲ヲ以テ支那ノ一構成部分ト認メ同地方ヲ支那ノ他ノ部分ヨリ分離セシメントスル一切ノ企畫ニ對シテ憤激ス從來此等東三省ハ支那及諸外國ガ共ニ支那ノ一部ト常ニ思惟スル所ニシテ同地方ニ於ケル支那政府ノ法律上ノ權限ニ付疑問視セラレタルコトナシ右ハ多數ノ日支間ノ諸條約及諸協定竝ニ他ノ諸國際條約ニ依リ明ナル所ニシテ且日本ノ外務省ヲ含ム諸外交官廳ヨリ正式ニ公表セラレタル多數ノ聲明書中ニ繰返ヘサレ居ル所ナリ

支那國防ノ第一線トシテノ滿洲

支那人ハ滿洲ヲ以テ其ノ「國防ノ第一線」ト認メ居レリ支那ノ領土トシテ滿洲ハ之ト接壤スル日本及露西亞ノ領域ニ對スル一種ノ緩衝地帶ト思惟セラレ日本及露西亞ノ勢力ノ此等ノ地域ヨリ支那ノ他ノ地方ヘノ侵入ニ對スル前哨トセラレ居レリ北平市ヲ含ム長城以南ノ支那ヘ滿洲ヨリ侵入

スルコトノ容易ナルハ歴史上ノ經驗ニ依リ支那人ニ示サレタル所ナルガ右東北ヨリノ外國ノ侵略ヲ惧ルル念ハ鐵道交通ノ發達ニ依リ近年增大シ且前年ノ事件中一層强メラレタリ

滿洲ニ於ケル支那ノ經濟的利益

支那人ハ又經濟的理由ニ依ルモ滿洲ノ彼等ノ爲ニ重要ナルコトヲ認ムルモノニシテ數十年來彼等ハ滿洲ヲ「支那ノ穀倉」ト呼ビ更ニ近年ニ至リテハ之ヲ近隣諸省ノ支那農民及勞働者ニ季節的就業ヲ與フル地域ト認ムルニ至レリ

支那ハ全體トシテ人口過剩ナリト云ヒ得ベキヤハ疑問ナルモ或地方又ハ或省例ヘバ山東ノ如キガ住民ヲ他地方ニ移出スル要アル程度ノ人口ヲ有スルコトハ本問題ニ關スル最有力ナル權威者ノ一般ニ認ムル所ナリ(註)從テ支那人ハ滿洲ヲ以テ現在及將來ニ於ケル支那ノ他地方ノ人口問題ヲ緩和シ得ル邊彊地方ト認メ居レリ支那人ハ滿洲ノ經濟的開發ガ主トシテ日本人ノ力ニ依ルトノ主張ヲ否定シ其ノ論駁ノ根據トシテ支那人ノ植民事業特ニ千九百二十五年以降ニ於ケルモノ、彼等ノ鐵道建設及其ノ他ノ事業ヲ擧ゲ居レリ

(註) 尙本報告書附屬ノ特別研究第三ヲ見ヨ

滿洲ニ於ケル日本ノ利益、日露戰爭ヨリ生ゼル感情

滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ其ノ性質及程度ニ於テ其ニ他ノ諸外國ノ利益ト異ルモノアリ千九百四年乃至五年奉天及遼陽、南滿洲鐵道沿線、鴨綠江及遼東半島等滿洲ノ野ニ於テ戰ハレタル露西亞ニ對スル日本ノ大戰爭ノ記憶ハ總テノ日本人ノ腦裡ニ深クモ印セラルル所ナリ日本人ニトリテハ露西亞ニ對スル戰爭ハ露西亞ノ侵略ノ脅威ニ對シ自衛ノ爲生死ヲ賭シテ戰ヒタル戰爭トシテ永久ニ記憶セラルベク右ノ一戰ニ十萬ノ將士ヲ喪ヒ且二十億金圓ヲ消費シタル事實ハ日本人ヲシテ此

等ノ犧牲ヲ決シテ無益ニ歸セシメザランコトヲ決意セシメタリ

然レドモ滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ其ノ源ヲ右戰爭ヨリ十年以前ニ發ス千八百九十四年乃至九十五年ノ主トシテ朝鮮問題ニ關スル支那トノ戰爭ハ大部分旅順口及滿洲ノ野ニ於テ戰ハレタルガ下關ニ於テ署名セラレタル講和條約ニ依リ遼東半島ノ主權ハ完全ニ日本ニ割讓セラレタリ日本人ニトリテハ露西亞、佛蘭西及獨逸ガ右割讓地ノ拋棄ヲ强制シタル事實ハ日本ガ戰勝ノ結果トシテ滿洲ノ右ノ部分ヲ獲得シ之ニ依リテ日本ハ同地方ニ對スル一箇ノ道義的權利ヲ得該權利ハ今尙存續スルモノナリトノ其ノ確信ニ何等ノ影響ヲ及ボスモノニ非ズ

滿洲ニ於ケル日本ノ軍略上ノ利益

滿洲ハ屢日本ノ「生命線」ナリト稱セラル滿洲ハ現時日本ノ領土タル朝鮮ニ境ヲ接ス支那四億ノ民衆ガ一度統一セラレ强力ト爲リ且日本ニ敵意ヲ有シ滿洲及東部亞細亞ニ覇ヲ唱フルノ日ヲ想像スルコトハ多數日本人ヲ不安ナラシムルモノナリ然レドモ一層多數ノ日本人ニトリテハ彼等ガ國家的生存ノ脅威及自衛ノ必要ヲ語ルトキ彼等ノ肚裡ニ存スルハ寧ロ露西亞ニシテ支那ニ非ズ從テ滿洲ニ於ケル日本ノ利益中根本的ナルモノハ同地方ノ軍略的重要性ナリ

日本人中ニハ日本ハ「ソヴィエト」聯邦ヨリノ攻擊ノ可能性ニ備フル爲滿洲ニ堅固ナル防禦線ヲ築ク要アリト考ヘ居ル者アリ彼等ハ朝鮮人ノ不平分子ガ隣接セル沿海州ノ露西亞人共產主義者ト聯携シテ將來北方ヨリノ軍事的侵入ヲ誘致シ又ハ之ト協力スルコトアルベシトノ常住ノ危惧ヲ懷キ居レリ彼等ハ滿洲ヲ以テ「ソヴィエト」聯邦及支那ノ他ノ部分ニ對スル緩衝地帶ト認メ居レリ殊ニ日本ノ陸軍軍人ハ露西亞及支那トノ協定ニ依リ南滿洲鐵道沿線ニ數千ノ守備兵ヲ駐屯セシムル權

滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊地位」

利ヲ得タルハ日露戰爭ニ於ケル日本ノ莫大ナル犧牲ニ對スル輕少ナル代償ニシテ同方面ヨリノ攻擊ノ可能性ニ對スル安全保障トシテハ貧弱ニ過グト考ヘ居レリ

愛國心、國防ノ絕對的必要及特殊ナル條約上ノ權利等ノ總テガ合體シテ滿洲ニ於ケル「特殊地位」ノ要求ヲ形成シ居レリ然レドモ日本人ノ懷ク此ノ「特殊地位」ノ觀念ハ支那又ハ他ノ諸國トノ條約及協定中ニ法律的ニ明示セラレ居ル所ニ局限セラレ居ルモノニ非ズ日露戰役ノ遺產タル感情及史的聯想竝ニ最近四半世紀間ニ於ケル在滿洲日本側企業ノ成果ニ對スル矜持ハ「特殊地位」ニ對スル日本人ノ要求ノ捕捉シ難キモ現實ナル一部分ヲ成スモノナリ從テ此ノ語ヲ日本人ガ外交用語中ニ使用スルトキ其ノ意味ハ不明瞭ニシテ他ノ諸國ガ國際文書ニ依リ之ヲ認ムルコトハ不可能ニ非ズトスルモ困難ナリトシタルベキコト寧ロ當然ナリ

日本政府ハ日露戰爭以來隨時露西亞、佛蘭西、英吉利及亞米利加合衆國ヨリ滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊地位」、「特殊勢力及利益」又ハ「卓絕ナル利益」ノ承認ヲ得ンコトヲ試ミタルガ此等ノ努力ハ單ニ部分的ニ成功シタルニ止マリ斯カル要求ノ承認ガ多少ナリトモ明確ナル言辭ヲ用ヰテ與ヘラレタル場合ニモ右辭句ヲ含ム國際協定又ハ了解ノ多クハ時ノ經過ト共ニ正式ナル廢棄又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ消滅スルニ至レリ舊露西亞帝政政府ト結バレタル千九百七年、千九百十年、千九百十二年及千九百十六年ノ日露祕密諸協約、同盟、保障及政策宣明ニ關スル日英諸協約、千九百十七年ノ「ランシング」石井公文交換ハ其ノ例ナリ「ワシントン」會議ニ於ケル千九百二十二年二月六日ノ九國條約ノ署名國（註）ハ支那ノ「主權、獨立竝ニ其ノ領土的及行政的保全ヲ尊重ス

滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊地位」

日本ノ滿洲ニ對スル政策一般

ルコト」「一切ノ國民ノ商業及工業ニ對シ支那ニ於ケル機會均等」ヲ維持スルコトヲ約定スルコトニ依リ、支那ニ於テ「特別ノ權利又ハ特權ヲ求ムル爲」支那ニ於ケル情勢ヲ利用スルコトヲ差控フルコトニ依リ又「支那ガ自ラ有力且安固ナル政府ヲ確立維持スル爲最完全ニシテ且最障礙ナキ機會」ヲ之ニ供與スルコトニ依リ滿洲ヲ含ム支那ノ各地方ニ於ケル署名國ノ「特殊地位」又ハ「特別ノ權利及利益」ノ要求ニ對シ廣キ範圍ニ於テ挑戰セリ

註　九箇國ハ亞米利加合衆國、白耳義、英帝國、支那、佛蘭西、伊太利、日本、和蘭、「ポルトガル」ナリキ

然レドモ九國條約ノ規定モ廢棄其ノ他ノ方法ニ依ル前記諸協定ノ拋棄モ日本人ノ態度ニ何等ノ變更ヲ生ゼシメザリキ石井子爵ガ其ノ近著ノ回想錄（外交餘錄）中ニ下ノ如ク述ベタルハ善ク同國人一般ノ意見ヲ表明シ居ルモノト謂フベシ

「「ランシング」石井協定ガ廢止セラレテモ日本ノ特殊利益ハ儼トシテ其所ニ存在スル。日本ガ支那ニ有スル特殊利益ハ國際協定ニ依ツテ創設セラレタモノデモナケレバ又廢止ノ目的トナリ得ベキモノデモナイ」

上記滿洲ニ關スル日本ノ要求ハ支那ノ主權ニ抵觸シ又國民政府ノ翹望ト兩立シ得ザルモノナリ蓋シ同政府ハ支那ノ領土ヲ通ジテ今尙諸外國ノ有スル特別ノ權利及特權ヲ減殺シ且其ノ將來ニ於ケル擴大ヲ阻止センコトヲ企圖スルモノナルヲ以テナリ日本及支那ノ滿洲ニ於テ執リタル各自ノ政策ヲ考察セバ此ノ衝突ノ發展ハ更ニ明瞭ナルベシ

千九百三十一年九月ノ事件ニ至ル迄千九百五年以降日本ノ諸內閣ハ滿洲ニ於テ同一ノ一般的目的

ヲ有シタルモノノ如クナルモ其ノ目的ヲ達成スル爲最適當ナリトスル政策ニ關シテ見解ヲ異ニシ又治安維持ニ對シテ日本ノ執ルベキ責任ノ範圍ニ付稍意見ノ相違アリタリ

彼等ノ努力ノ對象タリシ一般的目的ハ日本ノ既得利益ヲ維持發展シ日本ノ企業ノ擴張ヲ助成シ且日本人ノ生命及財産ノ充分ナル保護ヲ得ルニ在リタリ此等ノ目的ヲ實現スル爲ニ採ラレタル諸政策ノ總テニ共通ナリキト稱シ得ベキ一ノ主要ナル特徴存シタルガ右特徴ハ滿洲及東部内蒙古ヲ支那ノ他ノ部分トハ別個ノモノト認ムル傾向ニシテ右ハ滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊地位」ニ關スル日本人ノ觀念ヨリ生ズル自然ノ結果ナリ日本ノ諸内閣ノ主張シタル各特別ナル政策例ヘバ幣原男爵ノ所謂「友好政策」ト故陸軍大將田中男爵ノ所謂「積極政策」トノ間ニ如何ナル相違ヲ認メ得タリトスルモ前記ノ特徴ハ常ニ共通ノモノナリキ

「友好政策」ハ「ワシントン」會議ノ頃ヨリ始マリ千九百二十七年四月迄繼續セラレテ「積極政策」之ニ代リ千九百二十九年七月ニ至リ更ニ「友好政策」ニ立戻リ千九百三十一年九月迄外務省ノ公然ノ政策トシテ繼續セラレタリ右兩政策ノ原動力タル精神ニハ著シキ相違存シ「友好政策」ハ幣原男爵ノ言ヲ以テセバ「好意ト善隣ノ誼トヲ基礎トシ」「積極政策」ハ武力ヲ基礎トスルモノナリ然レドモ採用セラルベキ具體的措置ニ關スル兩政策ノ相違ハ主トシテ滿洲ニ於ケル治安ノ維持及日本ノ利益ノ保護ノ爲執ルベキ行動ノ程度ノ如何ニ在リタリ

田中内閣ノ「積極政策」ハ滿洲ヲ支那ノ他ノ部分ヨリ區別スルコトノ必要ヲ强調シ其ノ積極的性質ハ「若シ動亂滿洲及蒙古ニ波及シ其ノ結果治安紊レ同地方ニ於ケル日本ノ特殊地位竝ニ權利及

利益ノ脅威ヲ受クル場合」日本ハ「其ノ脅威ノ如何ナル方面ヨリ來ルヲ問ハズ此等ヲ擁護」スベキ旨ノ腹藏ナキ宣言ニ依リテ明ニセラレタリ田中政策ハ其ノ以前ノ諸政策ガ其ノ目的ヲ滿洲ニ於ケル日本ノ利益ノ擁護ニ限定セルニ反シ滿洲ニ於ケル「治安」維持ノ任務ヲ日本ガ自ラ執ルベキ旨ヲ斷乎トシテ主張セリ

日本政府ハ滿洲ニ特殊ナル既得利益ヲ維持發展セシムル爲滿洲ニ於テハ概シテ支那ノ他ノ地方ニ於ケルヨリモ一層確乎タル政策ヲ行ヘリ或内閣ハ武力ニ依ル威嚇ヲ伴フ干涉政策ノ使用ニ大ナル希望ヲ懸クル傾向アリタリ右ハ千九百十五年支那ニ對スル「二十一箇條要求」提示ノ際ニ於テ殊ニ然ルモノアリシガ「二十一箇條要求」竝ニ他ノ干涉及武力政策ノ得失ニ關シテハ日本國内ニ常ニ著シキ意見ノ相違アリタリ

「ワシントン」會議ハ支那ノ他ノ地方ノ事態ニ著シキ影響ヲ及ボシタルモ滿洲ニ於テハ實際上殆ド變化ノ見ルベキモノナカリキ千九百二十二年二月六日ノ九國條約ハ支那ノ領土保全及門戸開放ノ政策ニ關スル其ノ規定ニモ拘ラズ又滿洲ニ付テハ同條約ハ條文上滿洲ニモ適用セラレ得ルモノナリト雖モ同地方ニ於ケル日本ノ既得利益ノ性質及範圍ニ顧ミ單ニ其ノ制限的適用アリタルノミ前述ノ如ク日本ハ千九百十五年ノ條約ニ依リ許與セラレタル借款及顧問ニ關スル其ノ特別ノ權利ヲ正式ニ拋棄シタリト雖モ九國條約ハ右既得利益ニ基ク要求ヲ實質上毫モ縮少スルコトナカリキ

「ワシントン」會議ヲ千九百二十八年張作霖元帥ノ死歿ニ至ル期間中滿洲ニ於ケル日本ノ政策

「ワシントン」會議ノ滿洲ニ於ケル日本ノ地位及政策ニ對スル影響

日本ノ對張作霖關係

ハ東三省ノ事實上ノ支配者ト同國トノ關係ニ依リ決セラレタリ日本ハ彼ニ或程度ノ支持ヲ與ヘタルガ特ニ前章記載ノ郭松齡謀反ノ際ニ於テ然リトス張作霖元帥ハ日本ノ要求中ノ多數ニ反對シタリト雖モ右支持ノ報償トシテ日本ノ希望ニ對シ適度ノ承認ヲ與フルコトヲ必要ナリト感ジタリ右希望ハ優越セル兵力ニ依リ何時ニテモ强要セラレ得ルモノナルヲ以テナリ彼ハ又時ニ北方ニ於ケル露西亞ノ敵對ニ對シ日本ヨリ支持ノ得ラレンコトヲ希望セリ概言スレバ日本ノ張作霖元帥トノ關係ハ相當ニ滿足ナルモノナリキ尤モ彼ノ晩年ニハ彼ガ日本側ノ所謂約束及協定ノ一部ヲ履行セザリシ結果右關係ハ次第ニ平靜ヲ失フニ至レリ千九百二十八年六月ニ於ケル彼ノ敗戰及奉天ヘノ最後ノ退却前ノ數箇月ニ於テハ日本側ノ感情ガ彼ニ反對ニ激變セントスルノ兆サヘ顯然タルニ至レリ

滿洲ノ治安維持ニ關スル日本ノ主張

千九百二十八年春支那國民軍ガ張作霖軍驅逐ノ爲北京ニ進軍中ナリシ時田中男爵ヲ首相トセル日本政府ハ滿洲ニ於ケル「特殊地位」ニ顧ミ日本ハ右地方ニ於ケル治安ヲ維持スベキ旨ノ宣言ヲ發セリ國民軍ガ內亂ヲ長城以北ニ及ボサントスル惧アルニ至ルヤ日本政府ハ五月二十八日支那ノ主タル諸將軍ニ次ノ通告ヲ送レリ

「滿洲ノ治安維持ハ帝國ノ最モ重視スル所ニシテ苟モ同地方ノ治安ヲ紊シ若ハ之ヲ紊スノ原因ヲ爲スガ如キ事態ノ發生ハ帝國政府ノ極力阻止セントスル所ナルガ故ニ戰亂京津地方ニ進展シ其ノ禍亂滿洲ニ及バントスル場合ニハ帝國政府トシテハ滿洲治安維持ノ爲適當ニシテ且有效ナル措置ヲ執ラザルヲ得ザルコトアルベシ」

右ト同時ニ田中男爵ハ日本政府ハ「敗退軍又ハ其ノ追擊軍」ガ滿洲ニ入ルヲ防止スベシトノ一層明確ナル聲明ヲ發セリ

右重大政策ノ宣明ハ北京及南京兩政府ノ雙方ヨリノ抗議ヲ招致シタルガ南京政府ノ公文ハ日本ノ提議スルガ如キ措置ハ啻ニ「支那國內事項ノ干涉タルニ止マラズ又領土主權相互尊重ノ原則ノ甚シキ侵犯」ナリト陳述セリ

日本ニ於テモ田中內閣ノ右「積極政策」ハ一黨ヨリ强キ支持ヲ受ケタル一方他黨特ニ幣原派ニ依リ全滿洲ニ於ケル治安ノ維持ハ日本ノ責任ニ非ズトノ理由ヲ以テ强ク非議セラレタリ

日本及張學良間ノ緊張セル關係

日本ト千九百二十八年父ノ後ヲ承ケタル張學良元帥トノ關係ハ當初ヨリ次第ニ緊張ヲ加ヘタリ日本ハ滿洲ガ新ニ南京ニ樹立セラレタル國民政府ヨリ分立シ居ランコトヲ希望シタルガ張學良元帥ハ南京政府ノ政權ヲ承認センコトニ傾キ居リタリ中央政府ニ忠順ヲ誓フベカラズトノ緊急ノ忠言ガ日本官憲ニ依リ爲サレタルコトニ付テハ既ニ言及シタリ然レドモ奉天政府ガ千九百二十八年十二月政府諸官所ニ國民黨旗ヲ揭揚シタルトキ日本政府ハ何等干涉ヲ試ミザリキ

日本ト張學良元帥トノ關係ハ緊張ヲ繼續シ千九百三十一年九月直前ノ數箇月ニ於テハ險惡ナル軋轢ノ進展ヲ見タリ

三　滿洲ニ於ケル日支鐵道問題

滿洲ニ於ケル國際

四半世紀間滿洲ニ於ケル國際政戰ハ主トシテ鐵道政策ナリキ純粹ナル經濟上及鐵道運輸上ノ性質

間ノ政策ハ主トシテ鐵道政策ナリ

ヲ有スル考量ハ國策ノ命ズルガ儘ニ隱蔽セラレ滿洲諸鐵道ハ同地方ノ經濟的發展ノ爲極度ノ貢獻ヲ爲シタリト云フコト能ハザルノ結果ヲ來セリ吾人ノ滿洲鐵道問題研究ガ示ス所ニ依レバ滿洲ニ於テハ包括的ニシテ相互ニ有益ナル鐵道計畫ヲ達成セントスル協力ハ支那及日本雙方ノ鐵道建設者及當局間ニハ殆ド皆無ナリキ鐵道ノ擴張ガ主トシテ經濟的考量ニ依リ決定セラレタル西部「カナダ」及「アルゼンティン」ノ如キ地方ニ於ケル鐵道ノ發達ニ反シ滿洲ニ於ケル鐵道ノ發達ノ歴史ハ主トシテ支那及日本間ノ拮抗問題ニ終始セリ何等重要性アル滿洲ニ於ケル鐵道ニシテ支那及日本又ハ他ノ利害關係ヲ有スル外國間ノ文書往復ヲ惹起セズシテ從來建設セラレタルモノナシ

南滿洲鐵道ハ滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊使命」ニ貢獻セリ

滿洲ニ於ケル鐵道ノ建設ハ露西亞ノ投資ニ依リ且其ノ支配下ニ在リタル東清鐵道ヲ以テ始マルモノニシテ日露戰爭後南部ニ於テハ日本ノ管理スル組織卽チ南滿洲鐵道之ニ代リ斯クシテ支那及日本間ノ將來ノ對抗ヲ必然ナラシムルニ至レリ南滿洲鐵道會社ハ名義上私營會社ナリト雖モ事實上日本政府ノ企業ナリ其ノ職能ハ單ナル鐵道ノ經營ノミニ非ズシテ政治的行政ノ特殊權能ヲモ包含ス會社創立ノ當時ヨリ日本人ハ同鐵道ヲ純經濟的企業ト認メタルコトナシ同社ノ初代社長タリシ故後藤子爵ハ南滿洲鐵道ハ滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊使命」ニ貢獻セザルベカラズトノ基礎的原則ヲ定メタリ

南滿洲鐵道組織ハ發達シテ能率高ク管理整ヒタル鐵道企業ト爲リ滿洲ノ經濟的發達ニ大ニ寄與スルト共ニ支那人ニ對シ學校、研究所、圖書館及農事試驗所ノ如キ鐵道以外ノ諸施設ニ付模範ヲ示ス所アリタリ然レドモ右ハ會社ノ政治的性質、日本ニ於ケル黨派政略トノ連繫及何等相應セル金

支那ノ自國鐵道ヲ建設セントスル努力ハ滿洲ノ南京ニ對スル忠順宣誓ニ先ダツ

錢的利得ヲ期待シ得ザル或種ノ大ナル支出ノ爲ニ生ズル制限及積極的障碍ヲ伴ヒタリ右鐵道會社ノ組織以來其ノ政策ハ同鐵道線ニ連絡セラルルガ如キ支那諸鐵道ノ建設ニ對シテノミ資本ヲ供給シ斯クシテ連絡運輸協定ノ手段ニ依リ貨物ノ大部分ヲシテ日本租借地内ノ大連ニ於ケル海運輸出ノ爲南滿洲鐵道ニ轉向セシメントスルニ在リタリ此等諸鐵道ヘノ融資ニ巨額ノ支出アリタルガ其ノ建設ハ時ニ或ハ純經濟的根據ヨリ見テ妥當ナリト爲シ得ベキヤハ疑問ナリ殊ニ巨額ノ資本ノ前貸及關係貸付條件ニ顧ミ然リトス

支那ノ國土ニ南滿洲鐵道ノ如キ外國管理ノ施設存在スルコトハ自然支那官憲ニ依リ嫌惡セラレ條約及協定ニ依ル其ノ權利及特權ニ關スル問題ハ日露戰爭以來常ニ發生セリ特ニ千九百二十四年滿洲ニ於ケル支那官憲ガ鐵道發達ノ重要ナルヲ認ムルニ至リ日本ノ資本ヨリ獨立セル自己ノ鐵道ヲ發達セシメンコトヲ企圖シタル後ニ於テハ右問題ハ一層危機ヲ孕ムニ至レリ本問題ニハ經濟的及軍事的考慮ノ兩者包含セラレタリ例ヘバ打虎山通遼線ハ新地域ヲ開發シ且北平奉天鐵道ノ收入ヲ增加センガ爲計畫セラレタル次第ナルガ一方千九百二十五年十二月ニ於ケル郭松齡ノ背反ハ獨立ニ所有セラレ且運用セラルル支那鐵道ノ有スルコトアルベキ軍略的及政治的價値ヲ示ス所アリタリ日本ノ獨占ヲ覆シ其ノ將來ノ發達ヲ妨害セントスル支那ノ企圖ハ國民政府ノ政治的勢力ガ滿洲ニ及ブ以前ヨリ存セシ所ニシテ例ヘバ打虎山通遼、奉天海龍城及呼蘭海倫ノ諸鐵道ハ張作霖元帥ノ時代ニ建設セラレタルモノナリ千九百二十八年政權繼承後張學良元帥ノ政策ハ中央政府及國民黨ノ提唱ニ係ル「利權回收」運動ノ蔓延ニ依リ强硬ヲ加ヘ南滿洲鐵道會社ヲ中心トシテ集中セラ

「併行線」ニ關スル紛爭

レタル日本ノ獨占的且膨脹的ノ政策ト衝突ヲ來シタリ

千九百三十一年九月十八日及其ノ以後滿洲ニ於テ兵力ニ訴ヘタルコトヲ正當ナリトスル日本側ノ主張ニ於テ日本ハ其ノ「條約上ノ權利」ノ侵害セラレタルコトヲ擧ゲ且千九百五年十一月乃至十二月北京ニ於テ開會セラレタル日支會議中支那政府ノ爲セル次ノ趣旨ノ約束ヲ支那ガ履行セザリシコトヲ高調セリ

「清國政府ハ南滿洲鐵道ノ利益ヲ保護スルノ目的ヲ以テ該鐵道ヲ未ダ回收セザル以前ニ於テハ該鐵道附近ニ之ト併行スル幹線又ハ該鐵道ノ利益ヲ害スベキ枝線ヲ敷設セザルコトヲ承諾ス」

滿洲ニ於ケル所謂「併行鐵道」問題ニ關スル此ノ紛爭ハ久シキニ亘リテ重要性ヲ有シタルモノナリ同問題ガ初テ發生シタルハ千九百七年乃至八年ニシテ當時日本政府ハ右權利ヲ主張シ支那側ガ一英國商會トノ契約ノ下ニ新民屯法庫門鐵道ヲ建設セントスルコトヲ防止シタリ千九百二十四年滿洲ニ於ケル支那人ガ更新セラレタル强度ヲ以テ日本ノ金融的關係ヨリ獨立セル自己ノ鐵道ヲ發達セシメンコトヲ企圖シテ以來日本政府ハ支那側ノ打虎山通遼及吉林海龍城線建設ニ抗議シ來レリ尤モ右兩線共日本側ノ抗議ニモ拘ラズ完成開通セリ

「條約上ノ權利」ハ「秘密議定書」ノ存在ニ關スル問題

本委員會ノ極東到著前ニ在リテハ日本ノ主張スルガ如キ約束ガ現ニ存在スルヤニ付大ニ疑問アリキ右紛爭ノ久シキニ亘リ重要性ヲ有スルモノナルニ顧ミ本委員會ハ緊要ナル事實ニ關スル情報ヲ得ル爲特別ノ苦心ヲ拂ヘリ東京、南京及北平ニ於テ一切ノ關係文書ヲ審査シタル結果今ヤ吾人ハ所謂「併行鐵道」ニ關スル千九百五年十一月乃至十二月ノ北京會議ニ於ケル支那全權ノ約束ナ

論點タル眞ノ問題

ルモノハ何レノ正式條約中ニモ包含セラレ居ラザルコト、問題ノ約束ナルモノハ千九百五年十二月四日北京會議ノ第十一日目ノ會議錄中ニ發見セラルルコトヲ陳述シ得ルモノナリ吾人ハ右北京會議會議錄中ニ記入アル外斯カル約束ナルモノヲ包含スル文書ハ他ニ存セザルコトニ付日本及支那參與員ヨリノ同意ヲ得タリ

從テ論點タル眞ノ問題ハ滿洲ニ於テ或鐵道ガ右ノ如キ約束ニ違反シテ支那側ニ依リ建設セラレタルコトヲ日本ガ主張シ得ベキ「條約上ノ權利」存在スルヤ否ヤニハ非ズシテ千九百五年ノ北京會議會議錄中ノ右記入ガ「議定書」ト稱セラルルト否トヲ問ハズ正式約定ノ效力ヲ有シ其ノ適用ノ期間又ハ事情ノ制限ナク支那側ヲ拘束スルノ言質ナリヤ否ヤノ點ニ在リ

北京會議會議錄中ノ右記入ガ國際法上ノ見地ヨリシテ拘束力アル約定ヲ構成スルモノナリヤ若シ然リトスレバ合理的ニ右ニ與ヘラルベキ解釋ハ單一ナリヤノ問題ノ決定ハ當ニ公正ナル司法的裁判所ニ依リ判定セラルベキ事項ナリ

會議錄中ノ右記入ノ支那側及日本側ノ正式翻譯文ニ依レバ「併行鐵道」ニ關スル論爭ノ辭句ガ支那全權側ノ意圖ノ宣言又ハ聲明ナルコトニ付テハ疑ノ餘地ナシ

意圖ノ聲明アリタルコトニ付テハ支那側ニ於テモ之ヲ否認セズ然レドモ右表明セラレタル意圖ノ性質ニ付論爭ノ間終始雙方ノ間ニ意見ノ相違アリキ日本側ノ主張點ハ右用語ハ南滿洲鐵道會社ガ同鐵道ト競爭線ナリト認ムル如何ナル鐵道ヲモ支那ガ之ヲ建設シ又ハ建設スルコトヲ許可スルコトヲ禁止スルモノナリト言フニ在リ他方支那側ニ於テハ論爭ノ辭句ニ包含セラルル唯一ノ言質ハ

南滿洲鐵道ノ商業上ノ效用及價値ヲ不當ニ侵害スルノ故意ノ目的ヲ以テ鐵道ヲ建設スルコトナシトノ意圖ノ聲明ナリト主張ス新民屯法庫門鐵道計畫ニ關スル千九百七年ノ公文ノ交換ニ際シ慶親王ハ支那政府ヲ代表シテ日本公使林男爵宛千九百七年四月七日附ノ通告中北京會議ニ於テ日本全權ハ南滿洲鐵道ヨリノ特定哩數ニ依リ「併行線」ナル語ノ定義ヲ定ムルコトニハ同意ヲ拒否シタルモ「日本ハ滿洲ノ開發ノ爲支那國ノ將來執ルコトアルベキ措置ヲ妨グルモノニ非ズ」ト宣言シタルコトヲ述ベタリ右ニ依レバ支那政府ハ日本ガ南滿洲ニ於ケル鐵道建設ノ獨占權ニ付正當ナル主張ヲ有シタリトスルコトニ付テハ常ニ之ヲ否認シ來レリト雖モ南滿洲鐵道ノ利益ヲ明白且不當ニ害スル鐵道ヲ建設スベカラザルノ義務支那側ニ存シタルコトハ右剔問實際上之ヲ承認シタルモノノ如シ

支那側ニ於テ何ガ併行線ヲ構成スルカニ關スル定義ヲ希望シタルモ右定義ハ未ダ定メラレタルコトナシ日本政府ガ千九百六年乃至千九百八年新民屯法庫門鐵道ノ建設ニ反對シタルトキ日本ハ「併行」鐵道トハ南滿洲鐵道ヨリ約三十五哩以内ニ在ル鐵道ナリト思惟シタリトノ印象ヲ生ゼシメタルガ千九百二十六年日本政府ハ打虎山通遼鐵道ノ建設ニ對シ該計畫鐵道ト南滿洲鐵道トノ間ノ距離ハ「平均七十哩以内」ナルベキコトヲ指摘シ「競爭併行線」ナリトシテ之ニ抗議シタリ之ヲ要スルニ充分滿足ナル定義ヲ作成スルコトハ困難ナルベシ

鐵道運用ノ見地ヨリスレバ「併行」線トハ若シ右ガ他ノ鐵道ヨリ其ノ當然吸收シ得ベカリシ貨物ノ一部ヲ奪フ線ナルニ於テハ「競爭線」ト思惟スルコトヲ得ベシ競爭的運輸ハ地方的運輸及連絡

斯ノ如ク廣義且非技術的ニ表示セラレタル章句ノ解釋ニ關スル困難

運輸ノ兩者ヲ包含ス而シテ特ニ後者ヲ考慮スルトキハ「併行」線ノ建設ニ反對スル規定ハ如何ニ甚ダ廣キ解釋ト爲リ得ベキカヲ知ルコト困難ナラズ將又何ガ「幹線」又ハ「枝線」ナルカニ付テモ支那及日本間ニ何等ノ意見ノ一致ナシ此等ノ語ハ鐵道運用ノ見地ヨリスレバ變化スルモノナリ打虎山ヨリ北方ニ延長スル北平奉天鐵道ノ一線ハ當初其ノ鐵道當局ニ依リ「枝線」ト考ヘラレタルモ同線ガ打虎山ヨリ通遼迄完成セラレタル後ニ於テハ之ヲ幹線ト見ルコトヲ得ルニ至レリ

併行鐵道ニ關スル右約束ノ解釋ガ支那及日本間ノ激シキ論爭ヲ招徠シタルハ固ヨリ自然ノ數ナリキ支那側ハ南滿洲ニ於テ自己ノ鐵道ヲ建設センコトヲ企テタルガ殆ド總テノ場合ニ於テ日本ヨリノ抗議ヲ惹起セリ

客年九月ノ事件發生前支那及日本間ノ緊張ヲ加ヘシメタル鐵道問題ノ第二類ハ滿洲ニ於ケル支那政府ノ諸鐵道建設ノ爲日本側ガ資金ヲ貸付ケタル契約ヨリ生ゼルモノナリ延滯金及利子ヲモ含ミ總計一億五千萬圓ノ現在額ニ達スル日本資本ハ次ノ支那鐵道卽チ吉林長春、吉林敦化、四平街洮南及洮南昂昂溪鐵道竝ニ或狹軌鐵道ノ建設ニ支出セラレタリ

日本側ハ支那側ガ右債務ノ支拂ヲ爲サントセズ又債務ニ對シ適當ナル準備ヲ爲サントセズ尙又日本人鐵道顧問ノ任命ニ關スルガ如キ契約中ノ諸條項ヲ實行セントセザルコトヲ訴ヘタリ日本側ニ於テハ日本側財團ガ吉林會寧鐵道ノ建設ニ參加スルコトヲ許サルベシトノ所謂支那政府ノ約束ニ關シ支那側ガ之ヲ履行センコトヲ繰返シ要求シタリ右計畫線ハ吉林敦化鐵道ヲ朝鮮國境迄延長シ

滿洲ニ於ケル支那鐵道建設ニ對スル日本借款ヨリ起ル諸問題

テ日本ノ爲其ノ海港ヨリ滿洲ノ中心ニ至ル新ナル短距離ノ海陸路ヲ有セシメ他ノ鐵道ト連結シテ內地トノ交通ヲ短縮スベシ

支那側ノ辯疏

支那側ハ其ノ債務支拂ノ不履行ヲ辯疏シ右ハ正常ナル貸借行爲ニ非ザルコトヲ指摘セリ支那側ハ右等貸付ハ主トシテ南滿洲ニ於ケル鐵道建設ヲ獨占センガ爲南滿洲鐵道ニ依リ爲サレタルコト、其ノ目的ハ元來軍略的及政治的ナルコト竝ニ何レニスルモ新線ハ甚シク過剩ニ資本ヲ投下セラレタルモノナルヲ以テ少クトモ當分ハ建設費及債務ノ償還ニ必要ナル金錢ヲ收得スルコトノ財政上不可能ナルコトヲ主張シタリ支那側ハ所謂債務不履行ノ何レニ付テモ公正ナル審査ヲ爲スニ於テハ其ノ行爲ノ充分正當ナルコト立證セラルベシト抗辯セリ吉林會寧鐵道ニ付テハ協定ナルモノノ道義的效力ハ勿論法律的效力ヲモ否認セリ

南滿洲鐵道株式會社ハ枝線網ヲ要望セリ

借款論爭ヲ惹起シタルコト寧ロ當然ナル此等ノ鐵道協定ニ關聯シテ存在セル一定ノ事態存シタリ南滿洲鐵道ハ殆ド枝線ヲ有セズ貨物及旅客運輸ヲ增加スル爲培養線網ヲ發達セシムルコトヲ欲シタリ仍テ會社ハ假令借款ガ近キ將來ニ於テ償還セラルベキ可能性乏シキ場合ト雖モ新線ノ建設ノ爲前貸ヲ爲スコトヲ辭セズ且從前ノ借款ガ存續セル場合ニモ其ノ上ノ出資ヲ繼續スルコトヲ辭セザリシナリ

斯カル狀態ニ於テ而シテ新ニ建設セラレタル支那線ガ南滿洲鐵道網ノ培養線タルノ役ヲ勤メ且或程度迄右南滿洲鐵道ノ勢力下ニ運用セラレタル限リ南滿洲鐵道會社ハ借款ノ償還ヲ强制スル爲何等特別ノ努力ヲ爲サザリシモノノ如ク支那線ハ彌增大スル借款義務ヲ負ヒテ運用セラレタリ然レ

西原借款

ドモ此等鐵道線ノ或モノガ新ナル支那鐵道網ニ連絡セラレ且千九百三十年乃至千九百三十一年ニ南滿洲鐵道ト激烈ナル競爭ヲ起スニ及ビテ借款ノ不償還ハ直ニ苦情ノ題材ト爲リタリ

此等借款協定ノ或モノニ付他ノ紛議ヲ生ジ易キ要因ハ其ノ政治的性質ナリ吉林長春鐵道ガ南滿洲鐵道會社ノ支配下ニ置カレ同線ノ未濟ノ負債ガ千九百四十七年ニ滿期ト爲ル長期借款ニ借換ヘラレタルハ所謂「二十一箇條要求」ノ結果ナリ所謂「滿蒙四鐵道協定」ノ結果トシテ千九百十八年ニ出資セラレタル前渡金二千萬圓ハ其ノ使用目的ニ付何等ノ制限ナク「安福派」軍閥政府ニ對シ爲サレタル所謂「西原借款」ノ一ナリ吉林會寧鐵道ノ建設ヲ目的トスル千九百十八年ノ借款豫備契約ニ關聯シテ安福派ニ千萬圓ヲ前渡セルモ亦西原借款ノ結果ナリ支那國民ノ感情ハ「西原借款」問題ニ關シ其ノ交涉以來激發セルニモ拘ラズ支那政府ハ今日ニ至ル迄右借款ヲ否認シタルコトナシ斯カル狀態ニ於テ支那側ハ借款契約ノ條件ヲ履行スベキ道義的義務ヲ殆ド感ゼザリキ

吉林會寧鐵道計畫

日支關係ニ於テ特ニ重要ナルハ吉林會寧鐵道計畫ニ關スル問題ナリ最初ノ一團ノ問題ハ千九百二十八年竣工セル吉林ヨリ敦化ニ至ル部分ニ關聯ス爾來日本側ハ支那側ガ建設ヲ目的トセル日本ノ前渡金ヲ鐵道收益ニ依リ保障セラルル正規ノ借款ニ借換ヘザルコトヲ理由トシテ不平ヲ唱ヘ又支那側ガ同線ノ爲ノ日本人會計吏ノ任命方ヲ拒絕シ契約ニ違反シタル旨ヲ主張セリ

一方支那側ハ提出セラレタル建設費ガ日本人技師ノ見積高ヨリ遙ニ大ナルノミナラズ證憑ノ提出セラレタル全額ヲモ超ユルコト大ナル旨ヲ主張シ建設費ノ決定セラルル迄正式ニ同線ヲ接收スルコトヲ拒絕シ且右接收ニ至ル迄日本人會計吏ヲ任命スベキ何等ノ義務ヲモ負ハザル旨ヲ抗議セ

リ

何等ノ主義又ハ政策ノ問題ヲ包含セザル斯カル特定且技術的問題ハ明ニ仲裁又ハ司法的判定ニ付スルヲ適當トスルモ本問題ハ未解決ノ儘殘サレ支那側及日本側相互ノ憤怨ヲ助長セシメタリ

敦化會寧線計畫

一層重大且遙ニ複雜ナルハ敦化ヨリ會寧ニ至ル鐵道ノ建設ニ關スル問題ナリキ同線ハ長春ヨリ朝鮮國境ニ至ル鐵道ヲ完成スベク右國境ニ於テ附近ノ朝鮮港ニ通ズル日本鐵道ト連絡スベシ中部滿洲ヘノ直接ノ進路ヲ與ヘ且木材及鑛物資源ノ豐富ナル地方ヲ開拓スベキ本線ハ經濟的價値アルト共ニ日本ニトリ大ナル軍略的重要性ヲ有スベシ

日本側ハ本線ハ建設セラレザルベカラズ且右資金供給ニ參加セザルベカラザル旨ヲ固執シ且支那側ガ既ニ右趣旨ノ條約上ノ保障ヲ與ヘタル旨ヲ主張セリ日本側ハ支那政府ガ千九百九年九月四日ノ間島協約ニ於テ「日本國政府ト商議ノ上」同線ヲ建設スベキコトヲ約セル旨竝ニ右約束ハ滿洲ノ間島地方ニ對スル朝鮮從來ノ要求ヲ日本ガ抛棄スルコトニ對シ或程度迄其ノ代償トシテ與ヘラレタルモノナルコトヲ指摘セリ後千九百十八年ニ於テ支那政府及日本諸銀行ハ本線建設ノ爲ノ借款ニ對スル假協定ニ署名シ右協定ニ依リ銀行側ハ支那政府ニ千萬圓ノ金額ヲ前渡セルガ右ハ西原借款ノ一ニシテ此ノ點ガ支那側ヨリ觀レバ協定ノ效力ヲ阻害スル事實タルモノナリ

然レドモ此等ノ契約ハ何レモ日本資本家ヲ右鐵道建設ニ參加セシムベキ義務ヲ無條件ニ且特定期日前ニ支那ニ負ハシムル確定的借款契約協定ニハ非ザリキ

千九百二

本線建設ノ爲ノ正式且確定的契約ハ千九百二十八年五月北京ニ於テ署名セラレタル旨主張セラレ

十八年五月ノ契約

タルモ其ノ效力ニ關シテハ幾多ノ疑義アリキ斯カル契約ハ五月十三日乃至十五日ニ頗ル異常ナル狀態裡ニ當時張作霖元帥ノ下ニ在リタル北京政府ノ交通部代表者ニ依リ確ニ署名セラレタリ然レドモ支那側ハ當時國民軍ノ進擊ニ依リ强ク壓迫セラレ爲ニ將ニ北京ヲ撤退セントセル張元帥ハ若シ彼ニシテ本契約ヲ承認セザレバ奉天ヘノ退却ハ危殆ニ瀕スベシトノ日本側ノ威嚇ニ依ル「脅迫」ノ下ニ右官吏ヲシテ署名セシムルコトヲ承認セルモノナル旨ヲ主張ス又張作霖元帥自身モ果シテ契約ニ署名セリヤ否ヤハ今尙論爭ノ點ナリ張元帥ノ歿後奉天ノ東北政治委員會及張學良元帥ハ共ニ本契約ハ形式ニ缺陷アリ且脅迫ノ下ニ締結セラレ北京內閣又ハ東北政治委員會ニ依リ未ダ曾テ批准セラレタルコトナシトノ理由ニ依リ契約ヲ承認スルコトヲ拒絕シタリ

敦化會寧線建設ニ對スル支那側反對ノ裏面ノ理由ハ日本ノ軍事的及軍略的目的ヲ恐レ且國家ノ權利及利益ハ日本海ヨリ滿洲ヘノ日本ノ此ノ新ナル接近ニ依リ威嚇セラルベシト信ジタルコトニ在リタリ

右特殊ノ鐵道問題ハ元來經濟的又ハ商業的問題ニ非ズシテ日本及支那ノ國策間ノ衝突ヲ包含セリ

連絡運輸ニ關スル紛爭

又支那線及日本線間ノ連絡運輸取極、運賃率問題及大連港ト營口（牛莊）ノ如キ支那港トノ間ノ競爭ニ關スル附隨的問題モ存シタリ

千九百三十一年九月迄ニ支那側ハ全長約千キロメートルノ鐵道ヲ獨力ニテ敷設シ所有シ且運用セリ其ノ最主ナルモノハ奉天海龍、海龍吉林、齊齊哈爾克山、呼蘭海倫及打虎山通遼（北平奉天線

ノ一枝線）ノ諸線ニシテ加之北平奉天鐵道及日本資本ノ投ゼラレタル吉林長春線、吉林敦化線、四平街洮南線及洮南昂昂溪線ヲ所有セリ現在ノ紛爭勃發前二年間支那側ハ此等ノ諸線ヲ一大支那鐵道網トシテ運用セントシ且支那港タル營口（牛莊）ニ於テ尙將來ハ胡蘆島ニ於テ一海口ヲ有スル支那側運用線路ノミヲ使用シテ能フベクンバ一切ノ貨物ヲ運輸セント努力セリ支那側ハ其ノ鐵道網ノ一切ノ部分ニ亘リ連絡運輸ノ施措ヲ爲スト共ニ重要線區ニ於テ支那線ト南滿洲鐵道トノ間ニ同樣ナル運輸協定ヲ爲スコトヲ拒絕セリ日本側ハ右差別ハ普通少クトモ南滿洲鐵道線ノ一部ヲ通過シ大連ニ出口ヲ求ムベキ北滿洲ヨリノ多大ノ貨物ヲ南滿洲鐵道ヨリ奪取シタル旨主張セリ

鐵道運賃率ノ競爭

此等ノ連絡運輸紛爭ト併行シテ激烈ナル運賃率ノ競爭日本線及支那線間ニ勃發セリ右ハ千九百二十九年乃至千九百三十年支那側ガ打虎山通遼線及吉林海龍線ノ開通後運賃率ヲ低減シタルニ始マレリ支那線ハ當時支那銀貨幣ノ價値暴落シ從テ此等諸線ニ於ケル銀建運賃率ガ南滿洲鐵道ニ於ケル金圓ニ依ル運賃率ヨリ低廉ト爲リタル結果自然的利益ヲ有シタルモノノ如シ日本側ハ支那ノ運賃率ノ餘リニ低廉ナル爲右ハ不正競爭ヲ構成スルモノナル旨ヲ主張セシモ之ニ對シ支那側ハ其ノ目的ハ南滿洲鐵道ノ場合ノ如ク元來收益ヲ獲得スルニ非ズシテ國土ヲ發展セシメ農民ヲシテ能フ限リ低廉ニ作物ヲ市場ニ送達セシムルニ在ル旨答ヘ居レリ

國產製造品ノ利益ノ爲ノ國家的差別ノ主張

運賃率引下ゲノ右競爭ニ偶隨伴シテ雙方ヨリ夫々他方ハ其ノ國民ノ利益ノ爲賃率ノ差別又ハ內密割戻ヲ行フ旨主張セリ日本側ハ支那側ガ支那產品ヲ外國品ヨリモ低廉ニ支那線上ヲ運搬セシメ得ルガ如キ鐵道等級ノ區分ヲ爲シ居ルコトヲ非難シ且支那側管理ノ諸港ニ向ケ支那線ヲ通ジ仕向ケ

ルル自國產品及貨物ニ對シ普通ヨリモ低廉ナル賃率ヲ與ヘタルコトヲ難詰セリ又支那側ニ於テハ之ニ對シ南滿洲鐵道ガ祕密ノ拂戻ヲ爲スコトヲ非難シ日本ノ一運送業者ガ其ノ取扱ニ係ル貨物ニ對シ南滿洲鐵道線ノ規定賃率ヨリモ低廉ナル運賃率ヲ呈示シ居リタルコトヲ特ニ指摘セリ

此等ノ問題ハ極メテ技術的且複雜ニシテ雙方ガ夫々相手方ニ對シテ爲セル非難ハ何レガ妥當ナルカヲ決定スルコトハ困難ナリキ本問題ノ如キハ鐵道委員會又ハ正規ノ司法的決定（註）ニ依リ通常解決セラルベキモノナルコトハ明ナリ

註　本報告書附屬ノ特別研究第一ヲ見ヨ

港灣ニ關スル紛爭

滿洲ニ於ケル支那官憲ノ鐵道政策ハ胡蘆島ニ於ケル新ナル港灣發展ニ集中セラレタリ營口ハ第二次港タルベク唯胡蘆島ノ完成ニ至ル迄主港タルモノナリ滿洲ノ殆ド有ラユル部分ニ通ズベキ多數ノ新ナル鐵道計畫セラレタリ日本側ハ支那側ニ依リ實施セラレタル連絡運輸ノ施措及低廉ナル運賃率ハ通常大連ニ向テ運輸セラルベキ多クノ貨物ヲ同港ヨリ奪取シ右狀態ハ千九百三十年特ニ顯著ナリシ旨主張セリ日本側ハ南滿洲鐵道ニ依リ大連ニ向ケ輸送セラルル輸出貨物ハ千九百三十年ニ於テ百萬メートル式「トン」以上ノ減少ヲ見タルニ營口港ハ現實ニ前年ヨリ增加ヲ示シタル旨陳述セリ然レドモ支那側ハ大連ニ於ケル貨物ノ減少ハ主トシテ一般的不況及普通南滿洲鐵道ニ依リ輸送セラルル貨物ノ大部分ヲ占ムル大豆ノ特ニ著シキ暴落ニ基因セルモノナル旨ヲ指摘セリ支那側ハ又營口ニ於ケル貨物ノ增加ハ新ナル支那鐵道線ニ依リ最近開拓セラレタル地方ヨリノ貨物運送ノ結果ナリト主張セリ

日本側ハ特ニ支那諸鐵道及胡蘆島港ノ將來ノ競爭ニ關心シ居ルガ如ク多數ノ鐵道ノ新建設計畫及胡蘆島港ノ開發ニ關スル支那側ノ目的ハ「大連港竝ニ南滿洲鐵道自體ヲ無價値同樣」ナラシメントスルモノナリト論難セリ

此等多數ノ鐵道問題ヲ全般的ニ考察スルニ問題ノ多數ハ其ノ性質技術的ニシテ通常ノ仲裁又ハ司法手續ニ依リ解決シ得ラルルモノナルモ其ノ他ハ國家政策ノ根本點不一致ヨリ來レル支那及日本間ノ激甚ナル競爭ニ因ルモノナルコト明白ナリ

千九百三十一年ノ日支鐵道交渉

事實上此等一切ノ鐵道問題ハ千九百三十一年ノ初ニ於テ尙未解決ナリキ此等懸案タル鐵道諸問題ニ付雙方ノ政策ノ調和ヲ目的トスル會議ノ開會方ニ付日本及支那雙方ニ依リ爲サレタル最後的ナリシモ無效ニ終レル努力ハ一月ヨリ夏迄斷續的ニ繼續セラレタリ此等所謂木村、高間ノ商議ハ何等ノ效果ヲ齎サザリキ交渉ガ一月ニ開始セラレタル際ニハ雙方ニ誠意ノ證跡アリタルモ支那及日本雙方ニ責任アル諸種ノ遷延アリ結局周到ナル準備ヲ爲セル正式會議ハ現紛爭ノ起レル時ニハ尙行ハレ居ラザリキ

四　千九百十五年ノ日支條約及交換公文竝ニ關係諸問題

二十一箇條要求竝ニ千九百十五年ノ日支條約及交換公文

兩國ノ鐵道紛爭ヲ除キ千九百三十一年九月尙懸案中ナリシ極メテ重大ナル日支問題ハ所謂「二十一箇條要求」ノ結果タル千九百十五年ノ日支條約及交換公文ニ基因セルモノナリ漢冶萍鑛山（漢口附近）問題ヲ除キ千九百十五年ニ商議セラレタル他ノ協定ハ或ハ新ナルモノニ代ヘラレ又ハ日

本ニ依リ自發的ニ拋棄セラレタルヲ以テ此等ノ論爭ハ主トシテ南滿洲及東部內蒙古ニ關セルモノナリ滿洲ニ於ケル論爭ハ次ノ諸規定ニ關スルモノナリキ

(一) 關東州租借地ノ日本所屬期限ヲ九十九箇年（千九百九十七年）ニ延長スルコト

(二) 南滿洲鐵道及安東奉天鐵道ノ日本所屬期限ヲ九十九箇年（夫々二千二年及二千七年）ニ延長スルコト

(三) 「南滿洲」ノ內地卽チ條約其ノ他ニ依リ外國人ノ居住及營業ノ爲ニ開放セラレタル地域外ニ於テ土地ヲ商租スルノ權利ヲ日本臣民ニ許與スルコト

(四) 南滿洲ノ內地ニ於テ旅行シ居住シ及營業ヲ爲スノ權利竝ニ東部內蒙古ニ於テ日支合辦ニ依ル農業企業ニ參加スルノ權利ヲ日本臣民ニ許與スルコト

日本人ノ此等許與及特權享有ノ適法ナル權利ハ全然千九百十五年ノ條約及交換公文ノ效力如何ニ懸ルモノニシテ支那側ハ常ニ此等ノ條約及交換公文ガ彼等ヲ拘束スルコトヲ否認シ來レリ如何ニ技術的ノ說明又ハ議論ヲ爲ストモ「二十一箇條要求」ナル語ハ「千九百十五年ノ條約及交換公文」ト殆ド同意義ナルコト竝ニ支那ノ目的ハ此等ヨリ自由ト爲ルコトニ在リトスル信念ヲ支那國民上下ノ心裡ヨリ奪フコトヲ得ズ千九百十九年「パリ」會議ニ於テ支那ハ此等ノ條約ハ「戰爭ヲ以テ脅シタル日本ノ最後通牒ノ强制ニ基キ」締結セラレタルモノナリトノ理由ニ依リ其ノ廢棄ヲ要求セリ千九百二十一年乃至二十二年ノ「ワシントン」會議ニ於テハ支那代表ハ「此等諸協定ノ衡平及公正ニ付及從テ其ノ根本的效力ニ付」問題ヲ提起セリ而シテ支那ガ千八百九十八年露西亞ニ許

遼東地方租借期限並ニ南滿洲及安東奉天鐵道ノ特權延長

與セル遼東領域（關東）ノ二十五箇年原租借期限滿了ノ直前卽チ千九百二十三年三月支那政府ハ日本ニ對シ千九百十五年ノ諸條項ノ廢棄要求ノ再通告ヲ發シ且「千九百十五年ノ條約及交換公文ハ支那ニ於ケル輿論ニ依リ頑强ニ非難セラレ來レル旨」ヲ述ベタリ支那側ハ千九百十五年ノ條約ハ「根本的效力」ヲ缺如スト解釋セルヲ以テ情勢ニ依リ實行スルヲ便宜ナリトセル場合ヲ除キ滿洲ニ關スル諸條項ノ實施ヲ怠リタリ

日本ハ右ノ結果タル支那ニ依ル屢次ノ條約上ノ權利侵害ヲ痛烈ニ非難セリ日本ハ千九百十五年ノ條約及交換公文ハ正當ニ署名セラレ且批准セラレ完全ナル效力ヲ有スルモノナル旨ヲ主張セリ確ニ日本ノ相當大ナル一團ノ輿論ハ當初ヨリ「二十一箇條要求」ニ同意セザリキ殊ニ近時日本ノ言論界ハ本政策ヲ非難スルコト普通ト爲レリ然レドモ日本政府及國民ハ滿洲ニ關スル此等條項ノ有效ナルコトヲ固執スルニ一致シ居ルモノノ如クナリキ

千九百十五年ノ條約及交換公文ノ二大重要規定ハ關東州ノ租借ヲ二十五箇年ヨリ九十九箇年ニ竝ニ南滿洲鐵道及安東奉天鐵道ノ特權ヲ同ジク九十九箇年ノ期限ニ延長セル規定ナリ此等ノ延長ハ一ハ千九百十五年ノ條約ノ結果ナルコト一ハ元來前諸政府ノ租貸セルモノナル諸地域ノ回復ハ支那ニ於ケル外國ノ利益ニ反對セル國民黨ノ「利權回收」運動中ニ含マレ居ルコトノ二箇ノ理由ニ依リ關東州租借地及南滿洲鐵道ハ屢煽動ノ目的ト爲リ又時ニハ支那ノ外交的申入ノ目的ト爲レリ中央政府ニ對スル滿洲ノ忠順ヲ宣言シ滿洲ニ國民黨勢力ノ傳播ヲ許容シタル張學良元帥ノ政策ニ依リ此等ノ問題ハ千九百二十八年以後尖鋭性ヲ加ヘ來レリ尤モ此等ノ問題ハ實際政治ノ背後ニ隱

レ居リタリ

之ト共ニ千九百十五年ノ條約及交換公文ニ關聯シテ南滿洲鐵道ノ回收或ハ之ヲ純經濟的企業ト爲ス爲ニ其ノ組織ヨリ政治的性質ヲ剝奪セントスル運動アリタリ之ガ資本及利子全額ヲ拂戻シタル上右鐵道ヲ回收シ得ベク定メラレタル最近ノ時期ハ千九百三十九年ナリシヲ以テ千九百十五年ノ諸條約ノ單ナル廢棄自體ハ支那ノ爲ニ南滿洲鐵道ヲ回收セザリシナルベシ何レニセヨ支那ガ右目的ノ爲ニ必要ナル資金ヲ調達シ得ベカリシヤ否ヤハ極メテ疑問トスベキ所ナリ支那國民黨代辯者等ガ折ニ觸レ南滿洲鐵道ノ回收ヲ唱ヘタルコトハ日本側ニトリテハ焦慮ノ種ト爲リ彼等ノ合法ナル權利及利益ハ之ニ依リテ脅威ヲ感ゼシメラレタリ

南滿洲鐵道ノ本來ノ機能ニ關スル日本側ト支那側トノ不一致ハ千九百六年同鐵道會社組織當時ヨリ存續シ居レリ勿論技術的ニハ同鐵道會社ハ日本法律ノ下ニ株式組織ノ民間企業トシテ成立シ居ルモノニシテ實際上全然支那ノ法權ノ圏外ニ在リ特ニ千九百二十七年以來在滿洲支那人諸團體ノ間ニハ南滿洲鐵道ヨリ其ノ政治的及行政的機能ヲ剝奪シテ之ヲ「純商業的企業」タラシメントスル運動アリタルガ右ノ目的貫徹ノ爲ノ具體案ハ何等支那側ニ依リテ提議セラレザリシモノノ如シ事實上該鐵道會社ハ一ノ政治的企業タリキ日本政府ハ其ノ株ノ過半數ヲ掌握シ居リ該會社ハ同政府ノ代理者タリ卽チ其ノ業務上ノ方針ハ密接ニ同政府ニ依リテ左右セラレ日本ニ於テ新內閣成立ノ際ハ該會社ノ高級社員ハ殆ド常ニ更迭セラレタリ更ニ又該會社ハ常ニ日本ノ法律ノ下ニ警察、徵稅及教育ヲ含ム廣汎ナル政治的行政權能ヲ賦與セラレ居レリ從テ該會社ヨリ此等ノ權能ヲ剝奪

スルコトハ當初考案セラレ其ノ後擴大セシメラレタル南滿洲鐵道ノ「特殊使命」ノ全部ヲ拋棄セシムルコトト爲リタリシナラン

鐵道附屬地

南滿洲鐵道附屬地內ニ於ケル日本側行政權ニ關シ特ニ土地ノ取得、徵稅及鐵道守備隊ノ駐屯ニ關シテハ多數ノ問題ヲ生ジタリ

鐵道附屬地ハ鐵道線路ノ兩側數「ヤード」ノ外ニ大連ヨリ長春及安東ヨリ奉天ニ至ル南滿洲鐵道全系統ノ沿線ニ於ケル日本ノ「鐵道都市」ト稱セラルル十五市邑ヲ含メリ此等ノ鐵道都市ノ內奉天、長春及安東ニ於ケル都市ノ如キハ人口稠密ナル支那人町ノ大地域ヲ包含シ居レリ

鐵道附屬地內ニ於テ南滿洲鐵道ガ殆ド完全ナル市政ヲ施行スル權利ヲ有スル法律的根據ハ千八百九十六年ノ露清鐵道原約中當該鐵道會社ニ對シ「其ノ土地ニ對スル絕對的且排他的行政權」ヲ賦與シタル一條項ニ存ス露西亞政府ハ千九百二十四年ノ支那「ソヴィエト」協定ニ至ル迄又南滿洲鐵道ノ關スル限リ東清鐵道ノ本來ノ權利ヲ繼承セル日本政府ハ其ノ後ニ於テモ共ニ右ノ規定ヲ以テ鐵道附屬地ノ政治的支配權ヲ許與スルモノト解釋セリ支那側ニ於テハ千八百九十六年ノ條約中ノ他ノ規定ハ該條項ガ警察、徵稅、敎育及公共事業ノ管理ノ如キ廣汎ナル行政權ヲ許與スルコトヲ意味シタルモノニ非ザルコトヲ明瞭ニシ居ル旨ヲ固執シテ前記ノ解釋ヲ絕エズ否定シ來レリ

土地ニ關スル紛爭

鐵道會社ノ土地取得ニ關スル紛爭ハ屢繰返サレタル所ナリ千八百九十六年ノ原約中ノ一條項ニ基キ鐵道會社ハ「鐵道線路ノ建設、運用及之ガ保護ノ爲實際上必要ナル」私有地ヲ買入レ又ハ賃借

鐵道附屬地內ニ於ケル課稅權ニ關スル紛爭

スルノ權利ヲ有セリ然レドモ支那側ニ於テハ日本側ハ餘分ノ土地ヲ獲得センガ爲ニ右ノ權利ヲ濫用セント企テタル旨主張セリ其ノ結果南滿洲鐵道會社ト支那地方官憲トノ間ニハ殆ド紛爭ノ絕ユルコトナカリキ

鐵道附屬地內ニ於ケル課稅權ニ關スル主張ノ相違ハ屢紛議ヲ釀シタリ日本側ハ元來鐵道會社ガ「其ノ土地ニ對スル絕對的且排他的行政權」ヲ許與セラレ居ルコトニ其ノ主張ノ根據ヲ置ケルニ反シ支那側ハ主權國ノ權利ヲ以テ其ノ論據ト爲セリ要スルニ實際ノ事態トシテハ該鐵道會社ハ其ノ鐵道附屬地內ニ居住スル日本人、支那人及外國人ニ對シ租稅ヲ賦課徵收セルモ支那官憲ハ斯カル權力ヲ行使セズ單ニ法律上徵稅權ヲ有スルコトヲ主張セルニ止マレリ

累次發生セル紛議ノ例トシテハ日本側鐵道ニ依リテ大連ニ輸送スル爲南滿洲鐵道都市迄荷車ニテ運搬セラルル產物（大豆積出ノ如シ）ニ對シ支那側ガ課稅セントシタル場合ニ起レルモノヲ擧ゲ得ベシ支那側ノ主張ハ該課稅ヲ爲サザルニ於テハ南滿洲鐵道ニ依リテ輸送セラルル產物ニ特惠ヲ與フルコトト爲ルベキガ故ニ右ハ日本ノ「鐵道都市」ノ境界ニ於テ當然統稅トシテ徵收スベシト謂フニ在リ

南滿洲鐵道沿線ニ於ケル日本鐵道守備隊ノ駐屯權ニ關スル問題

日本ノ鐵道守備隊ニ關スル問題ハ殆ド間斷ナク紛爭ヲ惹起セリ此等ノ問題モ亦既ニ言及セル滿洲ニ於ケル國策ノ根本的衝突ヲ示スモノニシテ夥シキ人命ヲ犧牲ト爲シタル多數ノ事變ノ原因ヲ成セリ此等守備隊ヲ駐屯セシムベキ日本ノ所謂權利ノ法律的根據ハ既ニ屢引用セル如ク千八百九十六年ノ原約中ニ存スル東清鐵道ニ對シ「其ノ土地ニ對スル絕對的且排他的行政權」ヲ許與セル條

項ニ在リ露西亞ハ右條項ハ露西亞軍隊ニ依リ該鐵道線路ヲ守備スル權利ヲ與ヘタルモノト主張シ支那ハ之ヲ否定セリ千九百五年ノ「ポーツマス」條約中ニ露西亞及日本ハ該兩國間ニ於テ「一キロメートル毎ニ十五人ヲ超過セザル」鐵道守備隊ヲ存置スル權利ヲ留保セリ然ルニ其ノ後同年中支那及日本ノ署名セル北京條約ニ於テハ支那政府ハ日本及露西亞間ノ協定中ノ右特別條項ニ同意ヲ與ヘザリキ然レドモ支那及日本ハ千九百五年十二月二十二日ノ日支間北京條約ニ附帶スル同日附附屬協定第二條中ニ次ノ如キ規定ヲ挿入シタリ

日本側ノ主張

「清國政府ハ滿洲ニ於ケル日露兩國軍隊竝ニ鐵道守備兵ノ成ルベク速ニ撤退セラレムコトヲ切望スル旨ヲ言明シタルニ因リ日本國政府ハ清國政府ノ希望ニ應ゼムコトヲ欲シ若シ露國ニ於テ其ノ鐵道守備兵ノ撤退ヲ承諾スルカ或ハ清露兩國間ニ別ニ適當ノ方法ヲ協定シタル時ハ日本國政府モ同樣ニ照辨スベキコトヲ承諾ス若シ滿洲地方平靖ニ歸シ外國人ノ生命財產ヲ清國自ラ完全ニ保護シ得ルニ至リタル時ハ日本國モ亦露國ト同時ニ鐵道守備兵ヲ撤退スベシ」

本條ハ日本ガ其ノ條約上ノ權利ノ根據ト爲スモノナリ然レドモ露西亞ハ夙ニ其ノ守備兵ヲ撤去シ且千九百二十四年ノ支那「ソヴィエト」協定ニ依リ右駐兵權ヲ拋棄セリ然ルニ日本ハ未ダ滿洲ニハ平靖確立セズ且支那ハ外國人ヲ完全ニ保護スル能力ヲ有セザルコトヲ說キ從テ尙鐵道守備隊ヲ駐屯セシムベキ有效ナル條約上ノ權利ヲ有スル旨ヲ主張セリ

日本ハ右鐵道守備隊ノ使用ヲ辯護スルニ當リ條約上ノ權利ヲ根據トスルヨリモ寧ロ「滿洲ノ現存事態ノ下ニ於ケル絕對的必要」ヲ根據トシテ論ズルコトニ漸次傾キ來レリ

支那側ノ主張

支那政府ハ日本ノ主張ヲ絕エズ論駁シ日本鐵道守備隊ノ滿洲駐屯ハ法律上ニ於テモ事實上ニ於テモ正當ナラズ且支那ノ領土的及行政的保全ヲ害スルモノナル旨ヲ固執セリ前揭日支北京條約ノ規定ニ關シテハ支那政府ハ右ハ單ニ一時的性質ナル事實上ノ事態ヲ聲明シタルモノニシテ一ノ權利殊ニ永續的性質ヲ有スル權利ヲ付與シタルモノト云フコト能ハザル旨ヲ主張セリ支那ハ更ニ露西亞ハ既ニ其ノ守備兵ヲ撤去シタルコト、滿洲ノ平靖ハ回復セラレタルコト竝ニ支那官憲ニ於テ日本守備隊ノ允諾スル限リ他ノ在滿洲諸鐵道ニ對シテ爲シツツアルト同樣南滿洲鐵道ニ對シテモ適當ノ保護ヲ與ヘ得ベキコトヲ理由トシテ日本ハ其ノ守備隊ヲ撤退スベキ法律上ノ義務ヲ負フモノナル旨ヲ主張セリ

日本ノ鐵道守備隊ニ關シ發生シタル紛爭ハ鐵道附屬地內ニ於ケル其ノ駐屯及活動ノミニ限ラレタルニ非ズ右守備隊ハ日本ノ正規兵ニシテ支那官憲ヨリ許可ヲ得又ハ許可ヲ得ズ或ハ之ニ通告シ又ハ通告ヲ爲スコトナクシテ其ノ警察職權ヲ接續地域ニ及ボシ又ハ鐵道附屬地外ニ於テ演習ヲ擧行セルコト屢ナリキ此等ノ行動ハ官憲民間ヲ問ハズ支那側ニ特ニ嫌惡セラレ不法ナルノミナラズ不幸ナル事變ヲ挑發スルモノト認メラレタリ

日本ノ鐵道守備隊ノ鐵道附屬地內ニ於ケル駐屯及活動

右演習ハ屢誤解ヲ生ゼシメ且支那人ノ農作物ニ夥シキ損害ヲ與ヘ之ニ對シ物質的賠償ヲ爲スモ其ノ釀サレタル反感ヲ緩和シ得ザリキ

日本領事館警察

日本ノ鐵道守備隊ノ問題ト密接ニ關聯シタルモノニ日本領事館警察ノ問題アリ右警察ハ單ニ南滿洲鐵道沿線ノミナラズ哈爾賓、齊齊哈爾及滿洲里ノ如キ都市竝ニ多數ノ在滿洲朝鮮人ノ居住スル

領事館警察ノ滿洲駐在ヲ正當トスル日本側ノ主張

地域タル所謂「間島地方」等在滿洲各日本領事館管轄地域ニ存スル日本領事館及同分館ニ所屬セリ

日本側ハ領事館警察存置ノ權利ハ治外法權ノ當然ノ歸結ナリ卽チ此等警察官ハ日本臣民ヲ保護シ規律スル上ニ必要ナルヲ以テ右ハ領事裁判所ノ司法的權能ノ延長ニ過ギズト主張セリ事實日本ノ領事館警察官ハ其ノ數ハ少キモ支那ノ他ノ地方ニ在ル同國領事館ニモ所屬シ居ルモノニシテ右ハ治外法權條約ヲ有スル諸國ノ一般慣行ト一致セズ

支那側ハ日本ノ主張ヲ否定ス

實際問題トシテ日本政府ハ滿洲ノ現狀ニ於テ特ニ日本ノ重大ナル利益存在シ朝鮮人ヲ含ム多數日本人ノ居住シ居ル點ヲ顧慮セバ滿洲ニ於ケル領事館警察ノ駐在ハ必要事ナリト信ジ居ルモノノ如シ

然レドモ支那政府ハ日本ガ滿洲ニ於ケル領事館警察ノ駐在ヲ正當トスル理由トシテ提示セル右論旨ヲ常ニ反駁シ屢本問題ニ關シテ日本ニ抗議シ滿洲ノ如何ナル地方ニモ日本ノ警察官ヲ駐在セシムル必要ナキコト、警察官問題ハ治外法權ト關聯セシメ得ザルコト竝ニ斯カル警察官ノ存在ハ何等條約上ノ根據ヲ有セズ支那主權ノ侵害ナルコトヲ主張セリ

事ノ當否ハ姑ク措キ領事館警察ノ存在ハ屢右警察官ト支那地方官吏トノ間ニ多クノ重大ナル紛爭ヲ誘發セリ

日本人ノ南滿洲內地ニ於ケル往來、

千九百十五年ノ日支條約ハ「日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ自由ニ居住往來シ各種ノ商工業其ノ他ノ業務ニ從事スルコトヲ得」ト規定セリ右ハ一ノ重要ナル權利ナルガ支那ノ他ノ地方ニ於テハ外國

居住及營業ノ權利

人ハ一律ニ開市場ヲ除ク外居住及營業ヲ許容セラレ居ラザルニ付右規定ハ支那側ニトリテハ好マシカラザルモノナリキ支那政府ハ治外法權撤廢セラレ外國人ガ支那ノ法律及司法權ニ服スルニ至ル迄ハ右特權ヲ許サザルコトヲ以テ其ノ政策ト爲シ居レリ

尤モ南滿洲ニ於テハ右權利ニハ一定ノ制限ヲ附セラレタリ卽チ日本人ハ南滿洲ノ內地滯在中旅券ヲ携帶シ且支那ノ法律及規則ヲ遵守スルコトヲ要セリ然レドモ日本人ニ適用セラルベキ支那ノ諸規則ハ先ヅ支那官憲ニ於テ「日本領事官ト協議ノ上」ニ非ザレバ施行シ得ザルモノトセリ

而シテ多數ノ場合ニ於テ支那官憲ノ行動ハ右取極ノ規定ニ合致セザリキ但シ右取極ノ有效性ニ關シテハ支那側ハ常ニ爭ヒ來レリ南滿洲ノ內地ニ於ケル日本臣民ノ居住、往來及事業的活動ガ制限ヲ受ケタル事實竝ニ日本人又ハ他ノ外國人ノ開市場外居住或ハ建物賃借契約ノ更新ヲ禁止シタル命令及規則ガ諸種ノ支那人官吏ニ依リテ發セラレタル事實ニ關シテハ支那參與員ガ本委員會ニ正式ニ提出シタル文書中ニ何等論駁セラレ居ラズ日本人ヲシテ南滿洲及東部內蒙古ノ多數ノ都市ヨリ退去セシムル爲又ハ支那人家主ガ日本人ニ家屋ヲ貸付クルコトヲ阻止スル爲屢苛酷ナル警察手段ニ依リ支持セラレタル官憲ノ壓迫ハ日本人ニ對シ加ヘラレタリ日本側ノ陳述シタル所ニ依レバ支那官憲ハ又日本人ニ旅券ヲ發給スルコトヲ拒ミ不當課稅ニ依リ彼等ヲ惱マシ又千九百三十一年九月以前數年間ハ日本人ヲ拘束スベキ規則ハ日本領事ニ提出スベキコトヲ約セル前記取極中ノ規定ヲ遵守セザリシ趣ナリ

支那側ノ辯解及說明

支那側ノ目的ハ滿洲ニ於ケル日本人ノ例外的特權ヲ制限シ以テ東三省ニ對スル支那ノ支配ヲ鞏固

右論爭ハ千九百三十一年九月ノ事件ニ至ル迄ノ彼等ノ行動ニ絶エズ痛烈ナル論爭ノ生ズルチエ刺戟ヲ加重シ來レルコトヲ認容スルモノナリ

南滿洲內地ニ於ケル居住竝ニ營業ノ權利ト商租權トハ密接ナル關係ヲ有ス右商租權ハ千九百十五年ノ條約ニ依リ日本人ニ許與セラレタルモノニシテ其ノ條文ハ「日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ各種商工業上ノ建物ヲ建設スル爲又ハ農業ヲ經營スル爲必要ナル土地ヲ商租スルコトヲ得」トアリ右條約當時ノ兩國政府間ニ於ケル公文交換ハ「商租」トハ支那文ニ依レバ「三十箇年ヨリ長カラザル長期租借及其ノ無條件更新ノ可能性」ヲ含ムモノナリト定義セリ日本文ハ單ニ「三十箇年迄ノ長キ期限附ニテ且無條件ニテ更新シ得ベキ租借」ト爲リ居レリ日本關係ノ土地賃借ガ日本側ノ單獨ノ選擇ニ依リ「無條件ニテ更新シ得ベキ」モノナリヤノ問題ニ關シ論爭發生セルハ當然ナリ

支那側ハ日本人ガ滿洲ニ於テ土地ヲ獲得セントスル願望ハ其ノ商租ニ依ルト買入ニ依ルト將又抵當ニ依ルトノ如何ヲ問ハズ之ヲ以テ「滿洲ヲ買收」セントスル日本ノ國家政策ノ證據ナリト解釋

南滿洲竝ニ南滿洲ニ於ケル日本人ノ抵當權、租借權、及買收ニ依ル土地獲得問題

ナラシメントスル其ノ國家政策ノ實行ニ在リタリ彼等ハ千九百十五年ノ條約ヲ以テ「根本的效力」ナキモノト認ムルノ理由ノ下ニ彼等ノ行動ヲ正當ナリト爲シ更ニ右條約ノ規定ニハ南滿洲ト局限シアルニ拘ラズ日本人ハ滿洲ノ全地域ニ亘リ居住及營業ヲ爲サント試ムルモノナルコトヲ指摘セリ

支那及日本ノ相反スル國家政策及目的ニ顧ミレバ右條約規定ニ關シ絶エズ痛烈ナル論爭ノ生ズルハ殆ド避ケ得ザリシ所ナリ兩國ハ共ニ斯カル事態ガ千九百三十一年九月ノ事件ニ至ル迄ノ彼等ノ相互關係ニ漸次刺戟ヲ加重シ來レルコトヲ認容スルモノナリ

南滿洲內地ニ於ケル居住竝ニ營業ノ權利ト商租權トハ密接ナル關係ヲ有ス右商租權ハ千九百十五年ノ條約ニ依リ日本人ニ許與セラレタルモノニシテ其ノ條文ハ「日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ各種商工業上ノ建物ヲ建設スル爲又ハ農業ヲ經營スル爲必要ナル土地ヲ商租スルコトヲ得」トアリ右條約當時ノ兩國政府間ニ於ケル公文交換ハ「商租」トハ支那文ニ依レバ「三十箇年ヨリ長カラザル長期租借及其ノ無條件更新ノ可能性」ヲ含ムモノナリト定義セリ日本文ハ單ニ「三十箇年迄ノ長キ期限附ニテ且無條件ニテ更新シ得ベキ租借」ト爲リ居レリ日本關係ノ土地賃借ガ日本側ノ單獨ノ選擇ニ依リ「無條件ニテ更新シ得ベキ」モノナリヤノ問題ニ關シ論爭發生セルハ當然ナリ

支那側ハ日本人ガ滿洲ニ於テ土地ヲ獲得セントスル願望ハ其ノ商租ニ依ルト買入ニ依ルト將又抵當ニ依ルトノ如何ヲ問ハズ之ヲ以テ「滿洲ヲ買收」セントスル日本ノ國家政策ノ證據ナリト解釋セリ從テ支那官憲ハ擧テ右目的ヲ達セントスル日本側ノ努力ヲ妨害セント試ミタリ而モ右ハ千九百三十一年九月前ノ三四年間支那ノ「利權回收運動」ガ最猖獗ヲ極メタル時其ノ勢漸次旺ト爲レリ

支那官憲ガ日本人ノ土地買收、所有權ニ依ル土地ノ保有又ハ抵當ニ依ル擔保權ノ取得ニ對シ峻嚴ナル規則ヲ制定セルハ元來前記條約ガ單ニ商租權ヲ許與セルニ過ギザリシコトニ顧ミ其ノ法律上ノ權利ノ範圍內ニ在ルモノノ如シ然レドモ日本側ハ土地ノ上ノ抵當ヲ禁止スルハ條約ノ精神ニ悖ル旨苦情ヲ述ベタリ

然ルニ支那官吏ハ右條約ノ效力ヲ認メズ從テ日本人ガ土地ヲ商租セントスルニ當リテハ極力之ヲ妨害シ或ハ日本人ニ土地ヲ商租セシムルトキハ之ヲ刑法ヲ以テ罰スベシト爲ス省令又ハ地方廳ノ命令ヲ發シ或ハ其ノ商租ニ當リ事前ニ特別ノ手數料及稅ヲ課シ或ハ地方官吏ニ訓令シテ日本人ヘノ此種ノ土地讓渡ノ許可ヲ禁止センガ爲刑罰ノ脅威ヲ以テセリ

此等各種ノ障礙アリシニモ拘ラズ事實上ノ問題トシテハ廣大ナル地域ガ日本側ニ依リ單ニ商租セラレタルノミナラズ卽時賣買又ハ一層普通ニ行ハレ居ル抵當流レノ方法ニ依リ實際其ノ所有權取得セラレタリ但シ此等ノ所有權ハ支那ノ法廷ニ於テ其ノ效力ヲ認メラレザリシナルベシ此等土地ニ對スル抵當權ハ日本ノ金融業者殊ニ大規模ナル金融會社ノ取得スル所ト爲リタルガ其ノ內ノ或ルモノノ如キハ特ニ土地ノ取得ヲ目的トシテ組織セラレタルモノナリ日本官廳ヨリノ資料ニ依レバ全滿洲竝ニ熱河ニ於ケル日本人租借地ノ全面積ハ千九百二十二年乃至千九百二十三年ニ於ケル

土地商租問題ニ關スル日支交渉

約八萬「エーカー」ヨリ千九百三十一年ニ於ケル五十萬「エーカー」以上ニ增加セリ右ノ內一小部分ハ日本人ガ支那ノ法律又ハ國際條約ノ何レニ依ルモ商租權ヲ獲得スル法律上ノ權利ヲ有セザル北滿洲ニ存シタリ

右商租權問題ノ重要性ニ顧ミ千九百三十一年ニ至ル十箇年ニ於テ少クトモ三回ニ亘リ日支直接交渉ニ依リ何等カノ協定ニ到達セントノ企圖行ハレタリ而シテ商租權ト治外法權撤廢トノ兩問題ヲ共ニ取扱ヒ卽チ滿洲ニ於テ日本側ハ治外法權ヲ拋棄シ支那側ハ日本人ニ土地ノ自由ナル商租ヲ許スノ建前ニ依ル解決ノ可能性ガ考究セラレツツアリシモノト信ズベキ理由アルモ右商議ハ遂ニ不成立ニ終レリ

右日本人ノ土地商租權ニ關スル日支間ノ長期ニ亘ル紛爭ハ既述ノ他ノ諸問題ト等シク其ノ由テ來ル源ハ相反スル兩國國策ノ根本的不一致ニ在リテ國際協定ノ侵犯呼ハリ又ハ之ガ反駁ノ如キハ右兩政策ノ基本的目的ニ比スレバ左マデ重要ナルモノニ非ズ

五　滿洲ニ於ケル朝鮮人問題

日本ノ法律ニ依リ日本ノ國籍ヲ有スル約八十萬朝鮮人ノ滿洲內居住ハ支那及日本兩國ノ政策ノ衝突ヲ尖銳化セリ右事態ヨリ諸種ノ紛爭發生シ爲ニ朝鮮人自身犧牲者ト爲リ苦痛ト殘虐トヲ蒙リタリ（註）

註　本報告書附屬ノ特別研究第九ヲ見ヨ

滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ地位ニ關スル日支協定

朝鮮人ガ賣買又ハ商租ニ依リ滿洲ニ於テ土地ヲ取得スルニ對スル支那側ノ反對ニ對シ日本側ハ朝鮮人モ等シク日本臣民トシテ千九百十五年ノ條約及交換公文ニ依リテ日本ガ獲得セル商租ノ特權ヲ享有スベキモノナリト主張シテ之ヲ憤慨セリ日本側ハ朝鮮人ガ歸化ニ依リテ支那國民ト爲ルコトノ承認ヲ拒否シタルガ爲茲ニ又二重國籍ノ問題發生セリ朝鮮人ノ監視及保護ノ爲日本領事館警察ノ使用ハ支那側ノ忿懣ヲ招キ屢支那及日本警察官ノ衝突ヲ惹起セリ殊ニ朝鮮ノ北境ニ接スル間島地方ノ如ク朝鮮人ノ居住者四十萬人ニ及ビ同地支那人口ニ對スル比率三對一ノ多數ヲ算スル所ニ於テハ特殊ノ問題發生セリ此等ノ問題ハ支那側ヲシテ千九百二十七年ニ至リ滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ自由居住ヲ制限スルノ政策ヲ執ルニ至ラシメタリ日本側ハ右政策ヲ以テ正當化シ得ラレザル迫害ノ一例ナリト目シタリ

滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ地位及權利ハ主トシテ日支間ニ於ケル次ノ三協定ニ依リテ決定セラル卽チ千九百九年九月四日ノ間島ニ關スル協約、千九百十五年五月二十五日ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約及交換公文竝ニ千九百二十五年七月八日ノ所謂「三矢協定」之ナリ而シテ朝鮮人ノ場合ニ於テ起リ來ル二重國籍ニ關スル機微ナル問題ニ關シテハ日支協定ニ依リ嘗テ規律セラレタルコトナシ

千九百二十七年ニ至ルニ及ビ支那官憲ハ一般ニ朝鮮人ハ事實上滿洲ニ對スル「日本ノ侵略竝ニ併合ノ前衞」ト爲リタリト信ズルニ至レリ斯カル見解ヨリスレバ日本側ガ朝鮮人ノ歸化シテ支那國民ト爲ルコトヲ認ムルコトヲ拒ミ殊ニ日本ノ領事館警察ガ常ニ朝鮮人ニ對スル監視ヲ怠ラザル以

上朝鮮人ノ土地獲得ハ其ノ賣買ニ依ルト商租ニ依ルトヲ問ハズ「滿洲ニ於ケル支那人ノ生存其ノモノヲ脅ス」經濟的及政治的脅威タルベキナリ

支那側ノ論點

支那人間ニ廣ク行ハレタル見解ニ從ヘバ日本ヨリノ移住民ヲシテ朝鮮人ニ代ラシメ又ハ政治的及經濟的ノ手段殊ニ所有土地ノ處分ヲ餘儀ナクセシムルコトニ依リ朝鮮人ノ生活ヲ窮乏化シ自然滿洲ヘノ移住ヲ招徠セントスル日本政府ノ深謀ヨリ出デタル政策ノ結果朝鮮人ハ其ノ母國ヨリ移住スルノ已ムヲ得ザルニ至リタルモノナリトス卽チ支那側ノ見解ニ依レバ朝鮮人ハ其ノ母國ニ於テ外國政府ニ依リテ統治セラレ一切ノ重要ナル官職ヲ日本人ニ專有セラルル一「被壓迫民族」タルヲ以テ彼等ハ政治的自由及經濟的生活ノ途ヲ求メンガ爲滿洲ニ移住スルノ已ムナキニ至レルナリト謂フ朝鮮移民ノ九〇「パーセント」ハ農民ニシテ其ノ殆ド全部ハ米ノ耕作ニ從事ス而シテ彼等ハ當初支那人ニ依リ經濟的ニ有用ナルモノトシテ歡迎セラレ且其ノ推測シタル壓迫ニ對シ自然ニ流露セル同情ヨリシテ大ニ好意ヲ寄セラレタリ支那側ヲシテ言ハシムレバ若シ日本ニシテ朝鮮人ガ歸化シテ支那國民ト爲ルコトヲ拒マズ又彼等ニ必要ナル警察ノ保護ヲ與フト稱スル口實ノ下ニ彼等ヲ滿洲內ニ追躡スル日本ノ政策ナカリセバ朝鮮人ノ滿洲植民ハ重大ナル政治的及經濟的問題ヲ惹起スルニ至ラザリシナルベシト謂フ支那側ニ於テハ特ニ千九百二十七年以後滿洲ノ支那官吏ガ單ナル小作人若ハ勞役者以外ノ朝鮮人ノ自由ニ滿洲ノ土地ニ定住スルコトヲ明ニ制限セント努メタルコトヲ以テ直ニ「迫害」ノ例證ト認メラルルコトヲ拒絕セリ

支那側ノ非議ニ對

日本側ニ於テハ支那側ノ右ノ如キ猜疑心ガ支那側ノ朝鮮人「迫害」ノ主タル原因ナルベキヲ認ム

スル日本側ノ否認

ルモ朝鮮人ノ滿洲移住ヲ奬勵スル爲ニ確定的政策ヲ採リツツアリトノ非難ハ力强ク之ヲ否定シ「日本トシテハ之ニ對シ特ニ奬勵シ又ハ制限ヲ加ヘ居ラズ朝鮮人ノ滿洲移住ハ自然ノ趨勢ノ然ラシムル所ト認ムル外ナシ」右ハ何等政治的或ハ外交的動機ニ依リ影響ヲ受ケタルニ非ザル一ノ現象ナリト述ベタリ從テ彼等ハ「日本ハ朝鮮移民ヲ利用シテ二地方ヲ併呑セント企畫シツツアリトノ支那側ノ危惧ハ全然其ノ根據ナシ」ト聲明ス

朝鮮人問題ニ因ル日支關係ノ激化並ニ朝鮮人ノ犧牲

此等ノ調和シ難キ兩者ノ見解ハ商租權、裁判管轄權及日本ノ領事館警察等ニ關スル諸問題ヲ尖銳化シ爲ニ朝鮮人ニトリ最モ不幸ナル情勢ヲ齎シ日支關係ヲシテ益惡化セシメタリ(註)

註　本報告書附屬ノ特別研究第九ヲ見ヨ

朝鮮人ト商租權問題

現在日支兩國間ニハ特ニ朝鮮人ニ對シ開港場以外ノ地ニ於テ定住、居住又ハ營業ヲ爲スノ權利又ハ所謂間島地方以外ノ滿洲ニ於テ賃借又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ土地ヲ取得スルノ權利ヲ許與又ハ拒否セル何等ノ協定存セズ然リト雖モ間島以外ノ滿洲ニ居住スル朝鮮人ノ數ハ恐ラク四十萬人ヲ超過スベク彼等ハ各處ニ廣ク分布シ特ニ滿洲ノ東半部ニ擴レリ彼等ハ吉林省中朝鮮ノ北ニ位スル地方ニ多ク居住シ又東支鐵道ノ東部線地方、松花江下流地方及朝鮮ノ東北部ヨリ烏蘇里、黑龍兩江ノ流域地方ニ及ブ露支國境方面ニ迄多數進出シ彼等ノ移住並ニ定住ハ隣接「ソヴィエト」聯邦ノ領域內迄溢レ出タリ加之其ノ祖先ガ數代以前ニ移住シテ滿洲土著民ト爲リ了セル朝鮮人ノ相應ノ一群アル一方朝鮮人中ニハ日本ノ羈絆ヲ脫シ歸化支那國民ト爲レルモノアルガ爲朝鮮人中事實間島以外ノ滿洲各地ニ於テ所有權又ハ借地權ニ依リ農地ヲ所有セルモノ多數ニ上レリ然レドモ彼等

ノ大部分ハ支那人地主トノ間ニ收穫分配ノ基礎ノ上ニ結バレタル賃借契約ニ依リ單ナル小作人トシテ米作ニ從事スルニ過ギズ而シテ其ノ契約ハ概ネ一箇年乃至三箇年ノ期限ニ限ラレ且其ノ更新モ地主ノ自由ニ委セラルルヲ常トス

朝鮮人ノ商租權ニ關スル日支協定ニ付テノ紛爭

支那側ハ朝鮮人ガ間島地方以外ノ滿洲ニ於テ農地ヲ買收シ又ハ賃借スル權利ヲ有スルコトヲ否認ス何トナレバ本件ニ關スル日支間ノ唯一ノ協定ハ千九百九年ノ間島協約アルノミニシテ右ハ其ノ適用ヲ右地方ニ局限シ居レバナリ故ニ唯支那國民タル朝鮮人ノミガ滿洲內地ニ於テ土地ヲ購入シ又更ニ居住竝ニ土地賃借ノ權利ヲ有ス支那政府ハ朝鮮人ノ滿洲ニ於ケル土地ノ自由賃借ノ權利ニ關スル要求ヲ否認シ間島地方ニ限リ朝鮮人ニ對シ土地取得ノ特殊ナル權利ヲ伴フ居住權ヲ與ヘ此等朝鮮人ガ支那ノ法權ニ服スベキ旨ヲ取極メタル千九百九年ノ間島協約ハ「當時當該地域ニ於テ日支間ノ懸案ト爲リ居リタル地方的諸問題ヲ互讓ニ依リテ解決セントセル」其レ自體獨立セル取極ナリシナリト稱セリ卽チ間島協約ハ支那ガ朝鮮人ニ農地ヲ所有スベキ特殊權利ヲ與ヘ日本ガ此等朝鮮人ニ對スル法權ノ要求ヲ拋棄スベキ一ノ交換條件ヲ包含セリ

支那側ノ主張

斯クテ兩國ハ千九百十年日本ガ朝鮮ヲ併合シタル後モ同協約ヲ遵守シ來リシ處支那側ニ於テハ千九百十五年ノ條約及交換公文ハ右間島協約ノ規定ニ變更ヲ加フルコト能ハズ何トナレバ特ニ新條約ハ其ノ一條項中ニ於テ「滿洲ニ關スル日支現行各條約ハ本條約ニ別ニ規定スルモノヲ除クノ外一切從前ノ通リ實行スベシ」ト規定スレバナリト主張ス而シテ間島協約ニ關シ何等ノ例外規定ハ設ケラレザリキ尙支那政府ハ千九百十五年ノ條約及交換公文ハ間島地方ニハ適用セラレズ何トナ

レバ右地方ハ地理的ニ謂ヘバ「南滿洲」ノ一部ニ非ズ本語ハ地理的ニモ政治的ニモ不正確ナリト主張ス

日本側ノ主張

右支那側ノ見解ニ對シテハ千九百十五年以來日本ハ絕エズ論爭シ來レリ日本側ノ說明ニ曰ク千九百十年朝鮮併合ニ依リ朝鮮人ハ日本臣民ト爲リタルヲ以テ日本臣民ニ對シ南滿洲ニ於ケル居住權及商租權竝ニ東部內蒙古ニ於ケル合辦農業企業參加ヲ許與シタル南滿洲竝ニ東部內蒙古ニ關スル千九百十五年ノ條約及交換公文ノ規定ハ等シク朝鮮人ニ對シテモ適用セラルベキモノナリト卽チ日本政府ハ間島協約ノ條項中千九百十五年ノ協約ノ條項ト矛盾スルモノハ後者ニ依リテ廢棄セラレ又間島ニ於テ朝鮮人ノ獲得セル權利ハ實ニ日本ガ右地方ヲ支那領土ノ一部ナリト承認セル結果ニ基クモノナルヲ以テ支那側ノ間島協約ヲ目シテ全然獨立ナル取極ナリトスル主張ハ之ヲ維持シ難キモノナリト主張セリ日本政府ハ若シ滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ爲ニ他ノ日本臣民ニ許與セラレタルト同樣ノ權利及特權ヲ要求セザランカ右ハ同政府自ラ差別ヲ設クルコトト爲ルベシト主張ス

此等抗議主張ガ朝鮮人ノ地位ニ及ボセル影響

日本側ガ滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ土地獲得ニ贊成スル理由ノ一ハ日本ノ爲ニ米穀ノ輸出ヲ得ントスル願望ニ在ル處右願望ハ今日迄ノ處一部分達成セラレタルノミナリ何トナレバ千九百三十年產出ノ七百萬「ブッシェル」以上ノ米ノ內約半分ガ地方的ニ消費セラレ殘部ノ輸出ハ制限セラレタレバナリ日本側ハ朝鮮人小作人ハ支那人地主ノ爲ニ荒蕪地ヲ開墾シテ利益アルモノト爲シタル後不法ニ追放セラレタリト主張ス他方支那側ハ可耕低地ガ米ヲ產出スルコトヲ等シク希望スルモ彼等ハ土地其ノモノガ日本人ノ手ニ入ルコトヲ防ガンガ爲ニ概ネ朝鮮人ヲ小作人又ハ勞働者トシテ雇傭

セリ茲ニ於テ多數ノ朝鮮人ハ土地ヲ所有センガ爲ニ歸化支那國民ト爲リタルガ其ノ或者ハ地券ヲ獲得スルト共ニ之ヲ日本人ノ土地抵當會社ニ讓渡セリ右ハ卽チ日本人自身ノ內ニ於テモ日本政府ガ朝鮮人ノ歸化シテ支那國民ト爲ルコトヲ認ムベキヤ否ヤニ關シ議論ノ岐レタル一理由ヲ暗示スルモノナリ

在滿朝鮮人ノ二重國籍問題

千九百十四年ノ支那國籍法ニ依レバ外國人ニシテ支那ニ歸化シ得ベキモノハ其ノ本國法ニ依リテ他國ニ歸化スルコトヲ認メラレ居ル者ニ限レリ然ルニ千九百二十九年二月五日ノ修正支那國籍法ハ支那ノ國籍ヲ取得スル爲ニハ外國人ガ其ノ原國籍ヲ喪失スルコトヲ要スル旨ノ規定ヲ包含セズ從テ朝鮮人ハ日本ノ法律ノ下ニ於テハ其ノ歸化ヲ認メラレ難キ旨ノ日本側主張ニ關係ナク支那ニ歸化セリ日本ノ國籍法ハ未ダ曾テ朝鮮人ガ其ノ日本國籍ヲ喪失スルコトヲ認メズ而シテ千九百二十四年ノ改正國籍法ハ「自己ノ志望ニ依リテ外國ノ國籍ヲ取得シタル者ハ日本ノ國籍ヲ失フ」トノ趣旨ノ條項ヲ存スレドモ未ダ右一般的法律ヲ朝鮮ニ適用スベキ旨ノ特別ノ勅令ノ發布ヲ見ズ右ニ拘ラズ滿洲ニ於ケル多數ノ朝鮮人ハ支那ニ歸化シ或地方殊ニ比較的日本領事官憲ノ手ノ及バザル地ニ在リテハ其ノ數全朝鮮人住民ノ五「パーセント」乃至二〇「パーセント」ニ達セリ又偶滿洲ノ國境ヲ越エ「ソヴィエト」聯邦ノ領域ニ移住シタル者ニシテ同聯邦ノ人民ト爲リタルモノモアリ

朝鮮人ノ二重國籍問題ガ支那ニ及ボセル影響

右朝鮮人ノ二重國籍問題ハ支那ノ國民政府及滿洲ノ地方官憲ヲシテ擧ゲテ朝鮮人ヲ無差別ニ歸化セシムルコトヲ好意ヲ以テ見ズ彼等ガ假ニ支那國籍ヲ取得シタル後將來農地獲得ニ關スル日本ノ

政策ノ手先ト爲ルベキヲ恐レシムルニ至レリ千九百三十年九月吉林省政府ノ發布セル同省內ノ土地賣買ニ關スル規則中ニハ「歸化朝鮮人ガ土地ヲ買收セントスルトキハ右朝鮮人ハ永久ニ歸化人民トシテ居住スル手段トシテ右土地ヲ買收セント欲スルモノナリヤ又ハ日本人ノ爲ニ買收セント欲スルモノナリヤヲ審査スルコトヲ要ス」トノ規定アリ然レドモ地方官吏ハ時ニ上級官廳ノ命令ヲ勵行スルコトアルモ屢省政府及南京內政部ノ認可ヲ要スル正式證明書ノ代ニ假歸化證ヲ發給スル等其ノ態度一貫セザルモノアリ此等地方官吏中特ニ日本領事館ヨリ遠隔ノ地ニ在ル者ハ朝鮮人ヨリノ出願アリシ場合ハ直ニ右證明書ノ發給ヲ承諾セルコト屢ナリ而シテ彼等ハ時ニ實際朝鮮人ニ對シ歸化スベキコト然ラズンバ國外ニ退去スベキコトヲ强要シタルガ右ハ一ハ日本側ノ政策ヨリ又一ハ歸化手數料ノ與フル收入ヨリ影響ヲ受ケタルモノナリ更ニ支那側ノ主張スル所ニ依レバ日本人中ニハ此等ノ歸化朝鮮人ヲ傀儡地主トシテ使用シ又ハ彼等ヨリノ讓渡ニ依リ土地ヲ獲得センガ爲ニ屢自ラ通謀シテ朝鮮人歸化ノ企ヲ爲ス者アル由ナリ然レドモ一般的ニ謂ヘバ日本官憲ハ朝鮮人ノ歸化ヲ認メズ能フ限リ其ノ法權ヲ彼等ニ及ボシタリ

警察權ニ關シ相衝突スル主張ヨリ生ズル問題ハ朝鮮人ノ關係シ特ニ重大ナリ

日本ガ治外法權ヲ有スル當然ノ結果トシテノ滿洲ニ於ケル領事館警察存置ノ權利ノ主張ハ之ニ朝鮮人ノ關聯スル場合絕エザル紛爭ノ原因ヲ形成セリ朝鮮人ガ表面上彼等ノ爲ニスル日本ノ干涉ヲ欲スルト否トニ拘ラズ日本ノ領事館警察ハ特ニ間島地方ニ於テ啻ニ保護的任務ニ當リタルノミナラズ朝鮮人居宅ノ搜索及差押ヲ行フノ權利ヲ恣ニシタルガ右ハ獨立運動者又ハ共產主義若ハ反日運動ニ關係アリトノ嫌疑アル朝鮮人ニ對シ特ニ甚シカリキ又支那警察ハ支那ノ國法ヲ實施シ治安

ヲ維持シ又ハ「不逞」鮮人ノ活動ヲ抑壓セント努ムルニ當リ屢日本警察ト衝突セリ東部奉天省ニ於テ支那側ガ「朝鮮人結社」ヲ彈壓シ且日本側ノ要求ニ應ジ「不良鮮人」ヲ引渡スベキコトヲ協定セル千九百二十五年ノ所謂「三矢協定」ノ規定ニ基キ支那及日本ノ警察ハ幾多ノ場合ニ於テ協力ノ實ヲ擧ゲタル事實ハ存スルモ事態ノ眞相ハ寔ニ不斷ノ紛爭及軋轢ニ外ナラズ斯ノ如キ事態ガ紛擾ヲ惹起スベキハ當然ノコトナリキ

間島ノ特殊問題

朝鮮人問題竝ニ之ニ基ク間島地方ニ關スル日支關係ハ特ニ複雜且重大ナル性質ヲ帶ブルニ至レリ間島（日本語ニテハ「カントウ」朝鮮語ニテハ「カンドウ」ト呼バル）ハ遼寧（奉天）省ノ延吉、和龍、汪清ノ三縣ヨリ成リ且慣習上ハ日本政府ノ態度ニ依リ明ナルガ如ク琿春縣ヲモ包含ス此等四縣ハ圖們江ヲ隔ツルノミニテ朝鮮ノ東北隅ニ隣接ス

日本ノ間島ニ對スル態度及政策

日本側ハ間島地方ニ對スル朝鮮人ノ傳統的態度ヲ敍說シ千九百九年ノ間島協約ニ依リ該地方ガ支那又ハ朝鮮ノ何レニ歸屬スベキヤノ問題ガ永久ニ終結ヲ告ゲタリト認ムルコトヲ欲セズ蓋シ右ハ同地方ニ優勢ヲ占ムルモノハ朝鮮人ニシテ耕作地ノ過半ハ彼等ノ耕作スル所ニ係リ「同地方ハ事實上一朝鮮人地域ト看做シ得ル程度ニ朝鮮人ハ牢乎タル地歩ヲ樹立シタリ」ト謂フニ在リ日本政府ハ間島ニ於テ他ノ滿洲各地ニ比シ一層朝鮮人ニ對シ法權竝ニ監視ヲ勵行センコトヲ主張シ四百名以上ノ領事館警察官ヲ多年同地ニ配置シタリ又日本領事館ハ朝鮮總督ノ任命セル日本人官吏ト協力シ同地方ニ於テ行政的性質ヲ有スル廣汎ナル權力ヲ行使シ其ノ職能ハ日本人學校、病院及政府ノ補助スル朝鮮人金融機關ノ維持ヲ包含セリ該地方ハ米田ヲ耕作スル朝鮮人移民ノ自然的捌口

間島協約ニ關スル支那及日本ノ解釋抵觸

ト看做サルル一方以前ヨリ朝鮮獨立主義者、共產團體及其ノ他日本ニ反感ヲ有スル徒輩ノ避難ノ地ナルヲ以テ政治上ニ於テモ特殊ノ重要性ヲ有ス而シテ又間島ハ朝鮮ニ於ケル獨立運動勃發後千九百二十年琿春ニ於ケル朝鮮人ノ反日暴動ニ依リ明ト爲リタルガ如ク日本側ガ朝鮮統治ノ全般的問題ト密接ニ關聯スル重要ナル政治的諸問題ヲ有シ居ル地方ナリ右地域ノ軍事的重要性ハ卽チ圖們江ノ下流ガ日本、支那及「ソヴィエト」領土ノ境界ヲ成スモノナルニ依リ明白ナリ

間島協約ハ「從來ノ通圖們江北ノ墾地ニ於テ韓民ノ居住」ハ支那ヨリ許容セラルベキ旨右地域ニ居住スル朝鮮人ハ以後「清國地方官ノ管轄裁判ニ歸ス」ベキ旨右朝鮮人ハ支那人ト同等ノ待遇ヲ許與セラルベキ旨竝ニ右朝鮮人ニ關スル民事及刑事一切ノ事件ハ「清國官憲ニ於テ裁判ス」ベシト雖モ日本領事官ハ法廷ニ出席スルコトヲ許サルベク特ニ人命ニ關スル重要事件ニ於テ然リ而シテ特別ノ支那司法手續ノ下ニ「復審スベキコトヲ清國ニ請求スル」ノ權利ヲ有スベキ旨ヲ規定セリ然レドモ日本側ハ司法問題ノ關スル限リ千九百十五年ノ日支條約及交換公文ハ間島協約ヲ超エテ適用アルモノニシテ千九百十五年以後ハ朝鮮人ハ日本臣民トシテ日支諸條約ノ下ニ治外法權的ナル一切ノ權利及特權ヲ認メラルベキモノト爲スノ立場ヲ執リ來レリ右ノ議論ハ支那政府ニ依リ認メラレタルコトナク支那側ハ若シ朝鮮人ノ農耕地居住權ニ關シ間島協約ノ適用アルモノトセバ朝鮮人ハ支那ノ裁判管轄ニ服スベシト規定スル同協約ノ諸條項モ亦適用アルモノナル旨ヲ固執セリ日本側ハ朝鮮人ノ農耕地居住ヲ認ムル條項ハ間島ニ於テ右土地ヲ購入及商租スルノ權利ヲ意味スルモノト解シ支那側ハ右解釋ニ反對シテ同條項ハ字句通リニ解セラルベキモノニシテ唯歸化ニ依

朝鮮人ノ土地所有ノ現狀ハ變態ナリ

リ支那國民ト爲レル朝鮮人ノミ同地ニ於テ土地購入權ヲ有スト爲スノ立場ヲ執リ居レリ

故ニ現狀ハ變態ヲ呈ス何トナレバ事實上間島ニハ支那ニ歸化セザル朝鮮人ニシテ支那地方官憲ノ默認ニ依リ土地所有權ヲ獲得セルモノアリ尤モ朝鮮人自身ハ通例間島ニ於テ土地購入權ヲ得ル爲ニハ支那國籍ヲ取得スルコトヲ必要條件ナリト認メ居レリ日本當局ノ統計ニ依レバ間島（琿春ヲ含ム）ノ可耕地ノ半以上ハ朝鮮人ノ「所有」ト爲リ居ル處同時ニ同統計ハ同地ノ朝鮮人ノ一五「パーセント」强ガ歸化シテ支那國民ト爲リ居レルコトヲ認メ居レリ右土地「所有」者ガ此等ノ歸化朝鮮人ナリヤ否ヤハ玆ニ確言スルコトヲ得ズ斯カル狀態ハ自然幾多ノ變則狀態及不斷ノ紛爭ヲ惹起シ支那及日本ノ警察官憲間ノ公然タル衝突ト爲リタルコト一再ナラズ

支那ノ朝鮮人迫害ニ對スル日本ノ主張

日本側ハ千九百二十七年末頃ヨリ一般的排日運動ノ餘波トシテ支那官憲ノ煽動ニ依リ滿洲ニ於テ朝鮮人移民迫害運動ノ起レルコトヲ主張シ又右迫害ハ滿洲諸省ガ南京國民政府ニ忠誠ヲ宣言セル後更ニ熾烈ヲ加ヘタルコトヲ述ベ居レリ或ハ朝鮮人ヲ强制シテ支那ニ歸化セシメ或ハ米田ヨリ彼等ヲ驅逐シ或ハ其ノ轉住ヲ强制シ或ハ勝手ナル納金及法外ナル租稅ヲ課シ或ハ其ノ家屋及土地ノ商租又ハ賃借契約ヲ結ブコトヲ禁ジ或ハ彼等ニ幾多ノ暴力ヲ加フル等朝鮮人ニ對スル支那ノ徹底的壓迫政策ノ證據トシテ滿洲ニ於ケル中央及地方ノ支那官憲ノ發シタル多數ノ命令ノ翻譯文本委員會ニ提出セラレタリ日本ノ主張ニ依レバ右殘虐ナル運動ハ特ニ「親日」朝鮮人ニ對シテ行ハレ日本政府ヨリ補助金ヲ受クル朝鮮人民會ハ迫害ノ的ト爲リ朝鮮人ニ依リ又ハ朝鮮人ノ爲ニ設立セラレタル支那式ナラザル學校ハ閉鎖セラレ「不逞鮮人」ハ朝鮮人農民ヨリ脅迫ニ依リ金錢ヲ徵收

朝鮮人問題ニ對シ本委員會ハ特別ノ注意ヲ拂ヒタリ

シ又之ニ暴行加害ヲ爲スコトヲ許サレ又朝鮮人ハ支那服ヲ著用スルコトヲ强制セラルルト共ニ其ノ悲慘ナル狀態ニ對シ日本ノ保護又ハ補助ニ依賴スル一切ノ要求ヲ拋棄スルノ已ムナキニ至リシ趣ナリ

滿洲官憲ガ歸化セザル朝鮮人ニ對シ差別的命令ヲ發セル事實ハ支那側之ヲ否定スルコトナシ此ノ種ノ命令及訓令ノ數及性質特ニ千九百二十七年以後ノモノニ徵スレバ滿洲ノ支那官憲ハ一般ニ日本ノ裁判管轄ヲ伴フ限リ朝鮮人ノ侵入ハ一ノ脅威ニシテ反對スベキモノト認メタルコト明白ニ證明セラル

日本ノ主張ノ重大性及滿洲ニ於ケル朝鮮人住民ノ憫ムベキ狀態ニ顧ミ本委員會ハ本問題ニ對シ特別ノ注意ヲ拂ヒタリ而シテ本委員會ハ右非難ノ全部ガ事實ヲ適當ニ敍述セルモノト認ムルコト又ハ朝鮮人ニ對シ使用セラレタル右抑壓手段ノ若干ガ全然不正ナリシモノト斷ズルコトハ差控フルモ滿洲ノ或地方ニ於ケル朝鮮人ニ對スル支那ノ行動ニ關スル右一般的記述ヲ確認シ得ルモノナリ本委員會ハ其ノ滿洲滯在中朝鮮人團體ノ陳情員ト稱スル多數ノ代表者ヲ引見セリ

滿洲ニ於ケル此ノ大ナル少數民族タル朝鮮人ノ存在ガ土地商租、裁判管轄及警察竝ニ千九百三十一年九月ノ事件ノ序幕ヲ爲セル經濟的抗爭ニ關スル日支紛爭ヲ複雜ナラシメタルコトハ明白ナリ大部分ノ朝鮮人ノ欲スル所ハ唯自由ニ其ノ生計ヲ稼ガントスルニ在ルモ其ノ內ニハ支那側又ハ日本側ヨリ又ハ其ノ兩者ヨリ「不逞鮮人」ト呼バルル團體アリテ右ハ日本ノ統治ヨリノ朝鮮ノ獨立ヲ主張スル者及其ノ同志、共產主義者、密輸入者及麻藥業者ヲ含ム職業的犯罪人竝ニ支那人匪賊

ト結託シテ其ノ同胞ヨリ脅喝取財ヲ行ヒ又ハ金錢ヲ强請スル者ヲ包含シ居レリ朝鮮人農民自身スラ其ノ無智及不用意ニ依リ又彼等ヨリ更ニ狡猾ナル家主又ハ地主ヨリ好ンデ借財セル爲屢自ラ迫害ヲ招徠セリ

朝鮮人ノ待遇ニ關スル支那側ノ說明

朝鮮人ガ支那側ノ見解ニ依レバ日本ノ滿洲ニ對スル一般政策ノ避クベカラザル結果タル論爭ノ渦中ニ不知不識捲キ込マルルコトハ別トシ支那側ハ所謂朝鮮人「迫害」ナルモノノ多數ハ之ヲ迫害トスルコト正當ナラズ又朝鮮人ニ對シ支那側ノ執レル方法ノ或モノハ日本官憲ヨリ現ニ是認セラレ又ハ默過セラレタリト述ベ居レリ支那側ハ朝鮮人ノ大部分ハ極メテ反日的ナルコト、日本ガ彼等ノ故國ヲ併合セルコトニ終始反對ナルコト及朝鮮人移民ハ決シテ其ノ故國ヲ去ルヲ欲シタルモノニ非ズ政治的及經濟的困難ニ基ク苦痛ノ爲ニ故國ヲ去リタルニ外ナラズシテ一般ニ滿洲ニ於テ日本ノ監視ヨリ免ルルヲ欲スルモノナルコトヲ忘ルベカラズト主張シ居レリ

所謂「三矢協定」、千九百二十五年

支那側ハ朝鮮人ニ對シ或程度ノ同情ヲ示スモ千九百二十五年六月乃至七月ノ「三矢協定」ノ存在ニ付注意ヲ喚起シ右ヲ以テ日本側ガ「不良」ニシテ且朝鮮ニ於ケル日本ノ地位ニ對スル脅威ナリト目スル朝鮮人ノ行動ハ支那側官憲ニ於テモ之ガ抑壓ヲ快諾シタルコトノ證據ト爲シ且又日本側ニ於テ支那側ノ朝鮮人「迫害」ノ實例トシテ世人ヲシテ信ゼシメントスル前記行爲ノ或モノニ對シ日本側自ラ公式ノ承認ヲ與ヘタル證據ナリト爲セリ外間ニハ未ダ廣ク知悉セラルルニ至ラザル右協定ハ朝鮮總督府警務局長ト支那奉天省警察廳長トノ間ニ商議セラレタルモノナリ同協定ハ東部奉天省ニ於ケル「朝鮮人結社」（反日的ノモノト推定セラル）ノ禁遏ニ關スル支那及日本ノ警

察官ノ協力ヲ目的トスルモノニシテ「支那官憲ハ朝鮮官憲ノ指名セル朝鮮人結社ノ首領ヲ直ニ逮捕シテ之ヲ引渡スベキ」コト及「不良」ナル朝鮮人ハ支那警察官之ヲ逮捕シ裁判及處罰ノ爲日本警察官ニ引渡スベキコトヲ規定ス故ニ支那側ハ「朝鮮人ノ待遇ニ關シ或種ノ禁遏的手段ヲ執レルハ主トシテ右協定ニ實際的效果ヲ與フルヲ目的トス若シ右手段ガ支那官憲ノ朝鮮人迫害ヲ示ス證據トシテ考ヘラルルニ於テハ斯カル壓迫手段ハ假令事實ナリトスルモ是レ主トシテ日本ノ利益ノ爲ニ行ハレタルモノナリ」ト主張ス更ニ支那側ハ「自國農民トノ激烈ナル經濟的競爭ニ顧ミ支那官憲ガ其ノ同胞ノ利益ヲ保護スル手段ヲ講ズル固有ノ權利ヲ執行スベキハ實ニ當然ナリ」ト主張ス

六　萬寶山事件及朝鮮ニ於ケル排支暴動

萬寶山事件ノ千九百三十一年九月事件ニ對スル關係

萬寶山事件ハ中村大尉事件ト共ニ滿洲ニ於ケル日支間ノ危機ヲ直接助成セル原因トシテ廣ク認メラル然レドモ前者ノ眞ノ重要性ハ大ニ誇張セラレタリ何等死傷者ヲ出サザリシ萬寶山事件ノ煽情的ナル報道ハ支那人及日本人間ニ强キ反感ヲ起サシメ朝鮮ニ於テハ朝鮮人ニ依ル在留支那人襲擊ノ大事ヲ惹起シタリ右排支暴動ハ次デ支那ニ於ケル排日「ボイコット」ヲ復活セシメタリ事件其レ自體トシテハ萬寶山事件ハ過去數年間滿洲ニ發生セル支那及日本雙方ノ軍隊又ハ警察間ノ衝突ヲ誘發セル他ノ諸事件ヨリモ重大ナリシモノニハ非ズ

支那人地主及支那人仲介人

萬寶山ハ長春ノ北約十八哩（三十キロメートル）ニ位スル一小村ニシテ伊通河ニ沿フ低濕地ニ隣

間ノ水田
漸租契約
ハ支那官
憲ノ正式
承認ヲ要
セリ

接ス此ノ地ニ於テ支那人仲介業者赫永德ナル者千九百三十一年四月十六日附契約ヲ以テ長農農業公司ノ爲支那人地主ヨリ廣大ナル一劃ノ地ヲ商租セリ右契約中ニハ縣長其ノ條項ノ承認ヲ肯ゼザル場合ニハ契約ハ無效ト爲ルベキ旨規定セラレタリ

此ノ土地ハ支那人仲介人ヨリ朝鮮人ヲ小作人ニ對シ再商租セラレタリ

其ノ後幾何モナクシテ右商租者ハ該土地全部ヲ朝鮮人ノ一團ニ再商租セリ右ノ第二契約ハ其ノ實施ニ付官憲ノ承認ヲ必要トスル規定ヲ含マズ又朝鮮人ガ灌漑水路及附屬ノ水溝ヲ構築スルコトヲ當然ノコトト看做シ居リタリ赫永德ハ先ヅ支那人地主トノ原商租契約ニ對スル支那側ノ正式承認ヲ取付クルコトナクシテ朝鮮人農民ニ對シ其ノ土地ヲ再商租セル次第ナリ

朝鮮人ガ支那人ノ所有ノ土地ヲ再商租シ灌漑水溝ヲ開鑿シタル地方ニ於テ同人ノ反對ニ起因シタル支那人農民ハ水溝工事ノ停止及ノ要求ヲ退去セリ

第二契約ノ締結直後朝鮮人ハ數哩ニ亘リ灌漑水溝卽水路ノ開鑿ヲ開始シ伊通河ノ水ヲ引キテ右低濕地ニ之ヲ分チ當該土地ヲ水田ノ耕作ニ適セシメントセリ然ルニ何レノ商租契約ノ當事者ニモ非ザル支那人ニ屬セル大面積ノ耕地ガ伊通河ト朝鮮人ノ右商租地トノ間ニ介在シタルヲ以テ右水溝ハ該耕地ヲ横斷セリ朝鮮人ハ水溝ニ依リ其ノ土地ニ充分ノ水ヲ引キ來ル爲伊通河ニ堰ヲ築カントセリ

既ニ相當距離ノ灌漑水溝完成セル後右水路ニ依リ其ノ土地ヲ横斷セラレタル支那人農民ハ一團ト爲リテ蹶起シ萬寶山當局ニ抗議シ彼等ノ爲干渉センコトヲ請願セリ其ノ結果支那地方官憲ハ現場ニ警察官ヲ派シ朝鮮人ニ對シテ卽時開鑿工事ヲ停止シ同地ヨリ退去センコトヲ命ジタリ之ト同時ニ在長春日本領事ハ朝鮮人保護ノ爲領事館警察官ヲ派遣セリ日本及支那代表間ノ地方的交渉ハ問題ノ解決ニ成功セザリキ其ノ後ニ至リ雙方トモ增援警察官ヲ派シテ互ニ抗議シ反駁スルト共ニ交

長春ニ於ケル支那官憲及日本官憲ハ共同調査ヲ行フコトニ意見一致セリ

要領ヲ得ザリシ調査

涉ヲ試ミタリ

六月八日雙方ハ其ノ警察隊ヲ撤退シ萬寶山ニ於ケル事態ノ共同調査ヲ行フコトニ意見一致セリ右調査ノ結果原商租ハ若シ支那縣長ノ承認ナキトキハ全契約ガ「無效」ト爲ルベキ旨ノ規定ヲ有シタルコト竝ニ右承認ハ未ダ與ヘラレタルコトナキコト明ト爲レリ

然ルニ共同調査員ハ其ノ調査ノ結果ニ付意見ノ一致ヲ見ルヲ得ザリシモノノ如シ卽チ支那側ニ於テハ灌漑水溝ノ開鑿ハ之ニ依リ其ノ土地ヲ横斷セラレタル支那人農民ノ權利ヲ侵害セザルヲ得ズト固持シ日本側ニ於テハ朝鮮人ハ其ノ自ラ何等過誤ナカリシ商租手續ノ誤謬ノ故ニ排斥セラルルコトハ公正ナラズ故ニ其ノ工事繼續ヲ許容セラルベキナリト固執セリ其ノ後幾何モナク朝鮮人ハ日本領事館警察官ノ援助ヲ得テ水溝開鑿ヲ續行セリ

七月一日ノ事件

七月一日ノ事件ハ斯カル事態ノ連續ヨリ惹起セラレタリ同日灌漑水溝ニ依リ其ノ土地ヲ切斷セラレタル四百名ノ支那人農民ノ一隊ハ農具及矛槍ヲ武具トシテ朝鮮人ヲ驅逐シ水溝ノ大部分ヲ埋立テタリ玆ニ於テ日本領事館警察官ハ右暴徒ヲ散逸セシメ且朝鮮人ヲ保護スル爲發砲シタルモ何等被害ハナカリキ支那人農民ハ退散シ日本警察官ハ朝鮮人ガ水溝及伊通河ノ堰ヲ完成セル迄現場ニ屯留セリ

七月一日ノ事件後支那地方官憲ハ在長春日本領事ニ對シ日本領事館警察官及朝鮮人ノ行動ニ付抗議ヲ繼續セリ

朝鮮ニ於ケル排支暴動

萬寶山事件ヨリモ遙ニ重大ナリシハ本事件ニ對スル朝鮮ニ於ケル反動ナリキ日本及朝鮮ノ新聞ニ

記載セラレタル萬寶山ニ於ケル事態特ニ七月一日ノ事件ノ煽情的ナル報道ノ結果ハ朝鮮全道ニ亘リ激烈ナル排支暴動ノ續發ヲ見タリ此等諸暴動ハ七月三日仁川ニ始マリ急速ニ他市ニ傳播セリ

支那側ハ其ノ公報ニ基キ支那人百二十七名虐殺セラレ三百九十三名負傷シ二百五十萬圓ニ達スル支那人財産ハ破壞セラレタリト稱ス尙支那側ハ在朝鮮日本官憲ガ暴動ノ阻止ニ付適當ノ措置ヲ講ゼズ且之ガ鎭壓遲延シ爲ニ支那人ノ生命及財産ニ多大ノ損失ヲ生ジタリト稱シ右理由ノ下ニ右日本官憲ハ此等ノ暴動ノ結果ニ對シ多大ノ責任アリタリト主張ス日本及朝鮮ノ新聞ハ七月一日ノ萬寶山事件ニ付支那人居留民ニ對スル朝鮮民衆ノ憎惡ノ念ヲ起サシムルガ如キ性質ノ煽情的且不正確ナル記事ノ揭載禁止ヲ受ケザリキ

然ルニ日本側ハ此等ノ暴動ハ民族的感情ノ偶發的爆發ニ因ルモノニシテ日本官憲ハ能フ限リ速ニ此等ノ暴動ヲ鎭壓セリト主張ス

右ノ重要ナル一結果ハ朝鮮ニ於ケル此等ノ暴動ガ直ニ支那全國ヲ通ジ排日「ボイコット」ヲ復活セシムルニ至レルコトナリ

朝鮮ニ於ケル排支暴動ノ直後萬寶山事件ノ尙未解決ナル際支那政府ハ日本ニ對シ暴動ニ付抗議ヲ爲シ其ノ鎭壓ノ失敗ニ對スル全責任ヲ負フベキコトヲ指摘セリ日本政府ハ七月十五日回答ヲ發シ此等暴動ノ發生ニ對シ遺憾ノ意ヲ表シ且死者ノ家族ニ對シ補償金ヲ提供セリ

七月二十二日ヨリ九月十五日ニ至ル迄支那及日本ノ地方及中央官憲ノ間ニ萬寶山事件ニ關スル交渉及文書ノ往復アリタリ支那側ハ朝鮮人ノ居住及借地ノ特權ハ千九百九年九月四日ノ間島協約ニ

支那人居留民ノ被害ノ及ぼす重大損産

日本官憲ハ朝鮮ノ暴動ニ對シ責任アリトナス

朝鮮ニ於ケル暴動ハ支那ニ對シ排日ボイコット排支暴動ヲ激成セリ

日本政府ハ排支暴動ニ對シ遺憾ノ意ヲ表シ且死者ノ家族ニ對シ補償金ヲ提供セリ

依リ間島地方以外ニ及バザルヲ以テ萬寶山ニ於ケル紛議ハ朝鮮人ガ斯カル居住ノ權利ナキ場所ニ居住セシ事實ニ基クコトヲ主張ス

支那側ハ抗議ノ根據

支那政府ハ日本領事館警察ノ支那ニ駐在スルコトニ抗議シ且萬寶山ニ多數ノ此等警察官ヲ派遣セルコトハ七月一日ノ事件ノ誘因タル旨ヲ主張セリ

日本側ノ主張

他方日本側ハ朝鮮人ノ特權ハ間島協約ニ依リ明定セラレタルモノニ限定セラレズシテ南滿洲ヲ通ジ一般日本臣民ニ許與セラレタル居住及商租ニ關スル權利ヲ包含スルガ故ニ朝鮮人ハ萬寶山ニ於テ居住及商租ニ關スル條約上ノ權利アリ卽チ朝鮮人ノ地位ハ他ノ日本臣民ノ地位ト同一ナリト主張セリ又日本側ハ朝鮮人ハ善意ヲ以テ米ノ耕作計畫ヲ爲セルノミナラズ日本官憲ハ賃借契約ヲ取扱ヒタル支那人仲介人ノ反則ニ對シ責任ヲ負フコトヲ得ズト主張セリ日本政府ハ萬寶山ヨリ領事館警察官ヲ撤退スルコトニ同意セルガ朝鮮人小作人ハ依然留リテ其ノ米作地ノ耕作ヲ繼續セリ

千九百三十一年九月迄ニハ萬寶山事件ノ完全ナル解決ヲ見ザリキ

七　中村大尉事件

中村大尉事件ハ日本側ノ見解ニ依レバ滿洲ニ於ケル日本ノ權利及利益ニ對シ支那側ガ全然之ヲ無視セルコトヲ暴露セル長期ニ亘ル幾多ノ事件ガ遂ニ其ノ極點ニ達セルモノナリ中村大尉ハ千九百三十一年盛夏ノ候滿洲ノ僻遠ナル一地方ニ於テ支那兵ニ殺害セラレタリ

中村事件ノ重要性

中村震太郎大尉ハ日本ノ現役陸軍將校ニシテ日本政府ノ認メタルガ如ク日本陸軍ノ命令ニ依ル使

中村大尉ハ滿洲奥地ニ於テ

軍事的使命ヲ有セリ

命ヲ有シタリ哈爾賓通過ノ際支那官憲ハ同大尉ノ護照ヲ檢査セルガ同大尉ハ農業技師ト自稱セリ其ノ際同大尉ハ其ノ旅行セントシタル地方ハ匪賊横行地域ナル旨警告セラレ右事實ハ同大尉ノ護照ニ記載セラレタリ同大尉ハ武器ヲ携帶シ且賣藥ヲ所持シ居リタルガ支那側ニ依レバ賣藥中ニハ藥用ニ非ザル麻藥アリタリ

中村大尉及同行者支那兵ニ殺害セラル

六月九日中村大尉ハ三名ノ通譯者及助手ヲ伴ヒ東支鐵道西部線ノ伊勤克特驛ヲ出發セリ洮南ニ向ヒ相當ノ距離ニ在ル奥地ノ一地點ニ同大尉ガ到達セル際一行ハ屯墾軍第三團長關玉衡ノ指揮スル支那兵ニ監禁セラレタリ其ノ後數日卽チ六月二十七日頃同大尉及同行者ハ支那兵ノ爲ニ射殺セラレ死體ハ右行爲ノ證跡湮滅ノ爲燒棄セラレタリ

日本側ノ主張

日本側ハ中村大尉及其ノ一行ノ殺害ハ公正ナル理由ヲ缺キ日本軍及國民ニ對スル甚シキ侮辱ナリト主張シ又在滿洲支那官憲ハ事件ノ公式調査ノ開始ヲ遷延シ事件ノ責任ヲ回避シ且又彼等ハ事件ノ眞相ヲ確ムル爲有ラユル努力ヲ爲シツツアリト稱スルモ何等誠意ナカリシト論難セリ

支那側ノ主張

支那側ハ當初中村大尉及一行ハ慣習上奥地旅行ノ際外國人ガ所持スベキ許可證ヲ檢査スル期間中監禁セラレタルコト、一行ハ好遇セラレタルコト及中村大尉ハ逃走ヲ企テタル際一歩哨ニ射殺セラレタルモノナルコトヲ主張セリ支那側ニ依レバ日本軍用地圖一葉及日記帳二冊其ノ他ノ書類彼ノ身邊ニ發見セラレ右ハ彼ガ軍事探偵若ハ特別ノ軍事的使命ヲ帶ビタル將校ナリシコトヲ證スルモノナリ

調査

七月十七日中村大尉死去ノ報道在齊齊哈爾日本總領事ノ許ニ到達セルガ同月末在奉天日本官憲ハ

解決ノ爲ノ支那側ノ努力

支那地方官憲ニ對シ中村大尉ガ若干數ノ支那兵ニ依リ殺害セラレタル確實ナル證據ヲ有スル旨ヲ通告セリ八月十七日在奉天日本軍事當局ハ其ノ死ニ關スル最初ノ報道ヲ公表セリ（千九百三十一年八月十七日ノ「マンチュリア、デーリー、ニュース」ヲ見ヨ）同日林總領事及事件調査ノ爲東京日本陸軍參謀本部ヨリ滿洲ヘ派遣セラレタル森少佐ハ遼寧省主席臧式毅ト會見セルガ臧主席ハ卽時同事件ヲ調査スベキコトヲ約セリ

臧式毅主席ハ其ノ後直ニ北平ノ一病院ニ病臥中ナル張學良元帥及在南京外交部長ニ之ヲ通告シ又二名ノ支那人調査員ヲ任命シ卽時所謂殺害ノ現場ヘ赴カシメタリ右二名ノ調査員ハ九月三日奉天ニ歸還シ日本參謀本部ノ爲獨立ニ調査ヲ爲シツツアリシ森少佐ハ九月四日奉天ニ歸還セリ同日林總領事ハ支那參謀長榮臻將軍ヲ訪問シ同將軍ヨリ支那人調査員ノ調査ノ結果ハ不確實且不滿足ナリシヲ以テ再度調査ノ必要アルベキ旨ノ通告ニ接セリ榮臻將軍ハ滿洲ノ事態ノ新ナル進展ニ關シ張學良元帥ト商議ノ爲九月四日北平ニ赴キ九月七日奉天ニ歸還セリ

張學良元帥ハ滿洲ニ於ケル事態ノ重大性ニ關スル報道ニ接シ臧式毅主席及榮臻將軍ニ對シ遲滯ナク中村事件ノ現地再調査ヲ訓令セリ彼ハ本事件ニ對シ日本陸軍ガ多大ナル關心ヲ有スルコトヲ其ノ日本人軍事顧問ヨリ知リタルヲ以テ事件ヲ平和的ニ解決セント欲スル意思ヲ明ナラシムル爲柴山少佐ヲ東京ニ派遣セリ柴山少佐ハ九月十二日東京ニ到著シタルガ其ノ後ノ新聞報道ニ依レバ張學良元帥ガ中村事件ノ急速且衡平ナル結末ヲ得ンコトヲ切望シ居ル旨ヲ述ベタリ其ノ間張元帥ハ滿洲ニ關スル諸種ノ日支繫爭問題解決ノ爲兩國ニトリ何等共通點アリヤヲ確メシムル目的ヲ以テ

高級官吏湯爾和氏ヲ外務大臣幣原男爵ト商議セシムル爲特別ノ使命ノ下ニ東京ニ派遣セリ湯爾和氏ハ幣原男爵、南大將及他ノ陸軍高官ト會談セリ九月十六日張學良元帥ハ新聞記者ト會見セルガ新聞紙ハ彼ガ中村事件ハ日本側ノ希望ニ基キ滅式毅主席及滿洲官憲ニ依リ處理セラレ南京政府ハ與ラザルベキ旨述ベタリト報道セリ

第二回支那調査團ハ中村大尉殺害ノ現場ヲ視察セル後九月十六日朝奉天ニ歸還セリ十八日午後日本領事ハ榮臻將軍ヲ訪問セルガ其ノ際同將軍ハ關玉衡團長ガ中村大尉殺害ノ責ニ依リ九月十六日奉天ニ召喚セラレ即時軍法會議ニ於テ裁判セラルベキ旨述ベタリ日本側ハ奉天占領後關團長ガ支那側ニ依リ陸軍監獄ニ監禁セラレ居リタル旨發表セリ

在奉天林總領事ハ九月十二日乃至十三日日本外務省ニ對シ「調査員ノ奉天歸還後恐ラク友好的解決ヲ見ルベキコト」殊ニ榮臻將軍ハ明確ニ支那兵ガ中村大尉殺害ニ對シ責任アルコトヲ認メタルコトヲ報告セル旨報道セラレタリ日本電報通信社奉天通信員ハ「支那屯墾軍團ノ兵員ニ依ル日本參謀本部中村震太郎大尉ノ所謂殺害事件ノ友好的解決ハ近キニ在リ」ト九月十二日電報セリ然レドモ幾多ノ日本陸軍將校殊ニ土肥原大佐ノ幾多ノ陳述ハ中村大尉ノ死去ニ對シ責任アリト稱セラルル關團長ハ奉天ニ於テ監禁セラレ其ノ軍法會議ノ日取ガ一週間以内ナルベキモノトシテ發表セラレタルモ中村事件ノ滿足ナル解決ニ到達スベキ爲ノ支那側努力ノ誠意如何ニ付引續キ疑惑ヲ表明セリ支那官憲ハ九月十八日午後開催セラレタル正式會談ニ於テ在奉天日本領事官憲ニ對シ支那兵ガ中村大尉ノ死ニ對シ責任アルコトヲ認メ又速ニ事件ガ外交的ニ解決セラルベキ希望ヲ表示セ

ルニ徵スレバ中村事件解決ノ爲ノ外交交渉ハ九月十八日夜迄ハ事實好都合ニ進展シツツアリシガ如シ

中村事件ノ結果

中村事件ハ他ノ如何ナル事件ヨリモ一層日本側ノ憤懣ヲ惡化セシメ滿洲ニ關スル日支懸案解決ノ爲實力ノ行使ヲ可トスルノ硬論ヲ增大セリ本事件自體ノ重大性ハ恰モ當時萬寶山事件、朝鮮ニ於ケル排支暴動、日本陸軍ノ滿洲及朝鮮國境圖們江ヲ挾ミタル演習竝ニ青島ニ於ケル日本愛國團體ノ活動ニ對スル抗議トシテ行ハレタル支那人暴徒ノ暴行等ニ依リ日支關係ガ緊張シ居リタル際ナルヲ以テ一層增大セラレタリ

中村大尉ハ現役陸軍將校ナリシガ右事實ハ强硬且迅速ナル軍事行動ヲ正當ナラシムルモノトシテ日本側ニ依リ指摘セラレ斯カル軍事行動ニ好都合ナル國民的感情ヲ結晶セシムル爲滿洲及日本ニ於テ大衆大會行ハレタリ九月最初ノ二週間中日本ノ新聞ハ陸軍ニ於テハ他ニ方法ナキヲ以テ「解決ノ爲武力ニ訴フベキ」コトニ決定セリト繰返シ宣明セリ

支那側ハ事件ノ重大性ハ甚シク誇張サレタル旨竝ニ右ハ日本側ニ依ル滿洲ノ軍事占領ニ對スル口實トセラレタル旨主張シ支那側ニ於テ事件ノ處理上不誠意又ハ遲延アリタリトノ日本側ノ主張ヲ否認セリ

斯クテ千九百三十一年八月末迄ニ滿洲ニ關スル日支關係ハ本章ニ記述セルガ如キ幾多ノ紛議及事件ノ結果著シク緊張シ來レリ兩國間ニ三百ノ懸案アリ且此等ノ事件ヲ處理スベキ平和的手段ガ當事國ノ一方ニ依リ逐次利用シ盡サレタリトノ主張ニ付テハ之ヲ立證スルコト難シ此等ノ所謂「懸

案」ハ根本的ニ調和シ得ザル政策ニ基因スル一層廣汎ナル問題ヨリ派生セル事態ナリキ兩國ハ各他方ガ日支間ノ各協定ノ規定ヲ侵害シ一方的ニ解釋シ又ハ無視セリト責ムルモ兩者何レモ他方ニ對シ正當ナル苦情ヲ有シタリ

兩國間ノ此等繫爭問題解決ノ爲一方又ハ他方ニ依リ爲サレタル努力ニ關スル以上ノ說述ニ依レバ外交交涉及平和的手段ノ正常手段ニ依リ此等ノ問題ヲ處理スル爲多少ノ努力ガ爲サレ居リタルコト明ナルモ而モ右手段ハ未ダ充分用ヒ盡サレタルモノニハ非ズ然ルニ長期ニ亘ル遷延ハ日本側ヲシテ之ヲ隱忍シ得ザル事態ニ立チ至ラシメタリ特ニ軍部ハ中村事件ノ卽時解決ヲ主張シ滿足ナル賠償ヲ要求セリ就中帝國在鄕軍人會ハ輿論喚起ニ與リテ力アリタリ

九月中支那問題ニ關スル一般的感情ハ中村事件ヲ焦點トシテ頗ル强烈ト爲リ滿洲ニ於テ幾多ノ問題ヲ未解決ノ儘放置スルノ政策ハ支那官憲ヲシテ日本ヲ輕視セシムルニ至ラシメタリトノ意見屢表示セラレタリ有ラユル繫爭問題ノ必要アルニ於テハ實力ニ依ル解決ハ民衆ノ標語ト爲レリ武力ニ訴フベシト爲ス決定、右目的ヲ以テスル計畫討議ノ爲ノ陸軍省、參謀本部及他ノ官憲間ニ行ハレタル協議、必要ノ場合ニ右計畫ヲ實行セシムベキ關東軍司令官ニ對スル確定的訓令及九月上旬東京ニ召致セラレ且必要ナル場合ニハ實力ニ依リ而モ能フ限リ速ニ一切ノ懸案ヲ解決スベシトスル說ノ主張者トシテ新聞ニ引用セラレタル奉天駐在武官土肥原大佐ニ關スル記事ハ新聞紙上ニ遠慮ナク揭ゲラレタリ此等ノ人士及他ノ團體ニ依リ表明セラレタル衷情ニ付テノ新聞報道ハ漸增シツツアリ且危險ナル緊張ヲ指示セリ

第四章

千九百三十一年九月十八日及其ノ後滿洲ニ於テ發生セル事件ノ敍述

事件勃發直前ノ事態（第五ヲ見ヨ）

前章ニ於テ滿洲ニ於ケル日本及支那ノ利益ノ關係漸次緊張シ來レルコトヲ論ジ之ガ兩國軍隊ノ態度ニ及ボシタル影響ヲ述ベ置キタリ既ニ相當期間或種ノ內部的、經濟的及政治的要因ガ日本國民ヲシテ滿洲ニ於テ再ビ「積極政策」ニ出デシムル素地ヲ作リツツアリシコトハ疑ナキ所ナリ陸軍ノ不滿、政府ノ財政政策、總テノ政黨ニ對シテ不滿ノ意ヲ表明シ西洋文明ノ折衷的方式ヲ蔑視シテ古代日本ノ道德ニ依存シ又資本家及政治家ノ利己的方式ヲモ非トスル陸軍及農村落並ニ國家主義靑年ノ間ヨリ釀成セラレタル新政治勢力ノ出現、物價下落ガ原始生產者ヲシテ其ノ境遇ヲ緩和センガ爲ニ冒險的對外政策ニ望ヲ囑スルノ傾アラシムルニ至レルコト、商業ノ不況ガ工業及商業界ヲシテ一層强硬ナル對外政策ニ依リ取引ノ改善ヲ招徠スベシト信ゼシムルニ至レルコト等ノ諸要因ハ何レモ其ノ實績甚ダ貧弱ナリシヤノ觀アリタル對支那幣原「協調政策」ノ拋棄ヘノ道ヲ拓キツツアリタリ而シテ斯カル焦燥ハ在滿洲日本人ノ間ニ於テ一層甚シク同地方ニ於ケル緊張ハ夏期ヲ通ジ漸次加ハリタリ九月ニ入リテ後右緊張ノ遠カラズシテ破裂點ニ達スベキコトハ注意深キ觀察者ノ齊シク認メ得ル點ニ達シタリ而シテ兩國ノ新聞ハ輿論ヲ沈靜セシムルヨリハ寧ロ之ヲ煽

九月十八日—十九日ノ夜（帝國第六ヲ見ヨ）

動スルニ傾キタリ東京ニ於テ日本陸軍大臣ガ在滿洲軍ニ直接行動ニ出デンコトヲ勸告シテ激越ナル演說ヲ爲セル旨報道セラレタリ支那當局ガ中村大尉ノ殺害ニ付滿足ナル調査及救濟ヲ爲スヲ荏苒遷延セルコトハ就中在滿洲日本軍少壯將校ヲ激昂セシメタルガ彼等ハ無責任ナル言辭及誹謗ヲ之亦無責任ナル支那將校ガ街頭、料理店其ノ他相接觸スル場所ニ於テ弄スルニ對シテ敏感ト爲レルコトヲ明ニ示シタリ斯クシテ舞臺ハ次デ來ルベキ事件ノ爲ニ準備セラレタリ

九月十九日土曜日朝奉天市民ハ其ノ覺ムルヤ同市ガ日本軍ノ手中ニ歸シ居ルコトヲ發見セリ夜中發砲ノ音ヲ聞キタルモ右ハ別ニ異トスベキコトニモ非ザリキ日本軍ハ小銃及機關銃ノ猛射ヲ含ム夜間演習ヲ爲シ來レルヲ以テ右ノ如キハ其ノ週間連夜ノコトナリキ九月十八日當夜大砲ノ轟ト砲彈ノ音トハ之ヲ識リ得タル少數ノモノヲシテ若干ノ恐慌ヲ感ゼシメタルハ事實ナルモ市民ノ大部分ハ右發砲ヲ以テ單ニ日本軍ノ演習ノ再開ニ過ギズト爲シ唯聊カ平常ヨリハ喧シト考ヘタルナラン

後述ノ如ク殆ド全滿洲ノ軍事的占領ニ導キタル運動ノ第一歩タル本事件ノ頗ル重大ナルヲ認メ本委員會ハ同夜ノ事件ニ付廣汎ナル調査ヲ遂ゲタリ日本及支那兩軍關係指揮官ノ公式陳述ノ頗ル價値アリ且興味アリタルハ勿論ナリ日本側ノ立場ハ本件ノ最初ノ證人タル河本中尉、北營舍（北大營）ノ攻擊ニ當レル大隊ノ指揮官島本中佐及城內ヲ占領セル平田大佐ニ依リ說明セラレタリ吾人ハ又關東軍司令官本庄中將及其ノ若干ノ參謀將校ノ證言ヲ聽取セリ支那側ノ立場ハ北大營支那軍指揮官王以哲將軍之ヲ說明シ之ガ補足トシテ其ノ參謀長竝ニ軍事行動中現場ニ在リタル其ノ他ノ

日本側ノ所說

將校ノ個人的談話アリタリ吾人ハ又張學良元帥竝ニ其ノ參謀長榮臻將軍ノ證言ヲ聽取シタリ

日本側ノ所說ニ依レバ河本中尉ハ兵卒六名ヲ率キ九月十八日夜巡察任務ニ就キ奉天北方ノ南滿洲鐵道線路ニ沿ヒテ防禦演習ヲ行ヒツツアリタリ彼等ハ奉天ノ方向ニ南進シツツアリタルガ同夜ハ天晴レタルモ暗夜ニシテ視野廣カラズ一小徑ガ線路ヲ橫斷セル地點ニ彼等ガ達セル時稍後方ニ當リテ爆發ノ大音響ヲ耳ニセルヲ以テ方向ヲ轉ジテ走セ還リタル處約二百「ヤード」行キタル後下リ線軌道片側ノ一部分ガ爆破セラレ居ルコトヲ發見セリ右爆發ハ二軌條ノ接合點ニ起レルモノニシテ兩軌條ノ端ハ全ク引キ離サレ之ガ爲線路ニ三十一インチノ間隙ヲ生ジタリ爆發地點ニ達スルヤ巡察隊ハ線路東側ノ畠地ヨリ射擊セラレタルヲ以テ河本中尉ハ直ニ部下ニ對シ展開應射スベキコトヲ命ジタリ茲ニ於テ約五六名ト覺シキ攻擊隊ハ射擊ヲ止メ北方ニ退却セリ日本巡察隊ハ直ニ追擊ヲ開始シタルガ約二百「ヤード」前進セル處ニテ約三四百名ト算セラレタル一層有力ナル部隊ノ爲再ビ射擊セラレタリ河本中尉ハ此ノ優勢ナル部隊ニ包圍セラルルノ危險アルコトヲ認メ此ノ時部下ノ一名ヲシテ約千五百「ヤード」北方ニ於テ同樣夜間演習中ノ第三中隊長ニ報告セシメ同時ニ他ノ一名ヲシテ（現場附近ニ在ル電話機ニ依リ）在奉天大隊本部ニ電話シ增援ヲ求メシメタリ

此ノ時長春發南行列車ノ接近シツツアルヲ聞キタルガ列車ガ破損線路ニ到達シテ破壞スベキコトヲ惧レ日本巡察隊ハ交戰ヲ中止シ時ヲ失セズ列車ニ警告ヲ與ヘンガ爲線路上ニ發雷信號ヲ設置セリ然レドモ列車ハ全速力ニテ進行シ來リ爆發地點ニ達スルヤ動搖シ一方ニ傾クヲ認メタルモ回復シテ停車スルコトナク通過シ去リタリ列車ハ午後十時三十分奉天著ノ筈ニテ其ノ定刻通リ到著セ

ルヨリ見レバ河本中尉ノ初テ爆發ヲ聞キタルハ同中尉ノ談ニ依レバ午後十時頃ナルベシト

次デ交戰再開セラレタルガ第三中隊ヲ率キル川島大尉ハ爆音ヲ聞キテ既ニ南下ノ途中河本中尉ノ使者ト邂逅シ其ノ案内ニテ現場ニ向ヒ午後十時五十分頃到著セリ一方大隊長島本中佐ハ電話ニ接スルヤ直ニ同官ト共ニ奉天ニ在リタル第一及第四中隊ニ現場ニ向フベキコトヲ命ジ又一時間半ノ距離ニ在ル撫順ニ在リタル第二中隊ニ對シ能フ限リ速ニ右ニ加ハルベキコトヲ命ジタリ右ノ兩中隊ハ奉天ヨリ汽車ニテ柳條溝驛ニ至リ次デ徒歩ニテ現場ニ向ヒ夜半過到著セリ

川島中隊ノ來援ヲ受ケタル河本巡察隊ガ繁茂セル高粱ノ葉蔭ニ潛ム支那軍ノ射擊ヲ受ケツツアル際右ノ兩中隊奉天ヨリ到達セリ島本中佐ハ其ノ兵力五百ニ過ギズ而シテ北大營ノ支那軍一萬ニ及ブト信ジタルニ拘ラズ同官ノ吾人ニ語リタル所ニ依レバ同官ハ「攻擊ハ最良ノ防禦ナリ」ト信ジ直ニ營舍ノ攻擊ヲ命ジタリ鐵道線路北大營間約二百五十「ヤード」ノ地面ハ諸所ニ水溜リアリ集團ニテ横斷スルコト困難ナリシガ支那軍ガ右地面ヲ越エ擊退サレツツアル際野田中尉ハ第三中隊ノ一箇小隊ヲ以テ彼等ノ退路ヲ斷ツ爲鐵道ニ沿ヒテ進出スルコトヲ命ゼラレタリ電燈煌煌タリシト傳ヘラルル北大營ニ日本軍ガ到達スルヤ第三中隊ハ攻擊ヲ行ヒ左翼隅ノ占領ニ成功セリ右攻擊ニ對シ營内ノ支那軍ハ頑强ニ抵抗シテ激戰數時間ニ亘レリ第一中隊ハ右翼ヲ第四中隊ハ中央部ヲ攻擊セリ午前五時營舍南門ハ其ノ直前ニ在ル附屬家屋内ニ支那軍ノ遺棄セル小型砲ヨリノ二彈ニ依リテ破壞セラレ同六時全營舍占領セラレタルガ日本側兵卒死者二名傷者二十二名ヲ出シタリ營舍建物中ニハ交戰中火災ニ罹リタルモノアリタルガ殘餘ハ十九日朝日本軍ニ依リ燒キ拂ハレタリ日

本側ニテハ支那兵三百二十名ヲ埋葬セルガ傷者ハ約二十名ヲ發見セルニ過ギズト陳述セリ

一方他ノ地點ニ於テモ同樣ニ迅速且徹底的ニ軍事行動實施セラレタリ平田大佐ハ午後十時四十分頃島本中佐ヨリ南滿洲鐵道線路ガ支那軍ノ爲破壞セラレタルコト及將ニ敵軍攻擊ニ向ハントスル旨ノ電話ヲ受ケタルガ同大佐ハ島本中佐ノ行動ヲ是認シ自ラ城内攻擊ニ當ルベキコトヲ決意シ午後十一時三十分迄ニ軍隊ノ集合ヲ完了シテ攻擊ヲ開始シタリ而シテ何等ノ抵抗ヲモ受ケズ時時街上ニ交戰アリタルモ主トシテ支那警察隊トノ間ニ行ハレタルモノニシテ之ガ爲支那側巡警ノ間ニ死者七十五名ヲ生ジタリ午前二時十五分市ノ城壁ヲ乘越エ午前三時四十分迄ニ之ヲ占領セリ午前四時五十分同官ハ第二師團本部及第十六聯隊ノ一部ガ午前三時三十分遼陽ヲ出發セル旨ノ情報ニ接シタルガ右軍隊ハ午前五時過到著セリ而シテ午前六時東部城壁ノ占領ヲ完了シ兵工廠及飛行場ハ七時半占領セラレ次デ東大營ヲ攻擊シ午後一時戰ハズシテ之ヲ占領セリ此等ノ軍事行動ニ因ル總死傷數ハ日本側傷者七名支那側死者三十名ナリ

當日恰モ檢閲旅行ヨリ歸來シタル本庄中將ハ午前十一時頃新聞記者ヨリノ電話ニテ初テ奉天ニ起リツツアル事件ノ報道ヲ接受セリ參謀長ハ奉天特務機關ヨリ午前十一時四十六分電報ニテ攻擊ノ狀況ニ付詳細ノ報告ヲ受ケ次デ遼陽、營口及鳳凰城ニ在ル軍隊ニ對シ奉天ヘノ出動ノ命令直ニ發セラレタリ艦隊ハ旅順ヲ出發シテ營口ニ赴クコトヲ命ゼラレ在朝鮮日本軍司令官ハ援軍派遣ヲ求メラレタリ本庄中將ハ午前三時三十分旅順ヲ發シ正午奉天ニ到著セリ

支那側ノ所説ニ依レバ營舍（北大營）ニ對スル日本軍ノ攻擊ハ何等挑發ニ因ルモノニ非ズシテ全

然奇襲ニ出デタルモノナリ九月十八日夜第七旅全軍約一萬北大營ニ在リタリ九月六日張學良元帥ヨリ當時ノ緊張セル狀態ニ於テ日本軍トノ衝突ハ一切之ヲ避ケンガ爲特別ノ注意ヲ加フベキ旨ノ訓令(註)ヲ接受セルヲ以テ營舍城壁ノ步哨ハ擬銃ヲ携帶シタルノミナリキ而シテ同樣ノ理由ニ依リ兵營周圍ノ土壁內ニ在リテ鐵道線路ニ到ル西門ハ閉鎖セラレ居リタリ九月十四日、十五日、十六日及十七日ノ連夜日本軍ハ營舍ノ周圍ニ於テ夜間演習ヲ行ヒ十八日夕午後七時ニハ文官屯ナル一村落ニ於テ演習シツツアリタリ午後九時將校劉ハ通常型ノ機關車ヲ有セザル三四輛ノ客車ヨリ成ル一列車ガ同地ニ停車シタル旨ヲ報告セルガ午後十時爆發ノ大音響アリ之ニ引續キテ銃聲ヲ聞キタリ依テ直ニ電話ヲ以テ參謀長ヨリ之ヲ兵營ノ南方六七哩鐵道線路附近ノ私宅ニ在リタル司令官王以哲將軍ニ報告セルガ參謀長ガ尙電話中日本軍ガ兵營ヲ攻擊シツツアル旨竝ニ步哨二名負傷セル旨ノ報道アリ午後十一時頃營舍西南隅ニ對スル總攻擊開始セラレ午後十一時三十分日本軍ハ城壁ノ罅隙ヨリ侵入シ來リタリ攻擊開始セラルルヤ參謀長ハ消燈ヲ命ジ再度王以哲將軍ニ電話ニテ報告セル處同將軍ハ抵抗スベカラザル旨ヲ答ヘタリ午後十時三十分遠方ノ砲聲ヲ西南及西北ヨリ聞キタルガ夜半ニ至リ營舍內ニ實彈落下シ始メタリ退却中ノ第六百二十一團兵ガ南門ニ達スルヤ日本軍ハ同門ヲ攻擊シ居リ守備兵撤退中ナリシヲ以テ同軍ハ日本軍ガ內部ニ侵入スル迄塹壕及土壘內ニ逃避シ後南門ヲ經テ逃ルルコトヲ得午前二時頃營舍東北方ノ二臺子村落ニ到著セリ他ノ諸隊ハ東門及東門外直近ノ空舍ヲ經テ逃レ遂ニ午前三時ヨリ四時ノ間ニ同村落ニ達スルコトヲ得タリ

註　北平ニ於テ本委員會ニ示サレタル電文次ノ如シ「日本トノ吾人ノ關係頗ル機微ト爲レリ吾人ノ彼等トノ接觸ニハ特ニ愼重ナルコトヲ要ス如何ニ彼等ニ於テ挑戰スルモ吾人ハ特ニ隱忍シ斷ジテ武力ニ訴フルコトナク以テ一切ノ紛爭ヲ避クルコトヲ要ス貴官ハ祕密ニ且即時ニ全將校ニ命令ヲ發シ右ノ點ニ付彼等ノ注意ヲ喚起スベシ」

唯一ノ抵抗ハ東北隅建物及其ノ南方第二位建物內ニ在リタル第六百二十團ノ試ミタルモノナリ同團長ノ陳述ニ依レバ日本軍ガ午前一時南門ヨリ侵入シ來ルヤ支那軍ハ建物ヨリ建物ヘト逃レ日本軍ヲシテ空虛ナル建物ヲ攻擊セシメタリ支那軍主力ノ撤退後日本軍ハ東方ニ向ヒテ東方出口ヲ占領セリ斯クシテ第六百二十團ハ連絡ヲ斷タレタルヲ以テ自ラ戰ヒテ活路ヲ開クノ外ナキニ至レリ彼等ハ午前五時ニ至リ突破ヲ始メタルガ全ク脫出シ得タルハ午前七時ナリキ是レ營舍內ニ起レル唯一ノ實戰ニシテ死傷ノ大部分モ之ガ爲ナリ本團ハ最後ニ二臺子村落ニ到著セル部隊ナリ

支那軍ハ全部集合スルヤ直ニ十九日早朝同村落出發東陵驛ニ向ヒ次デ同地ヨリ吉林近傍ノ一村落ニ至リテ冬衣ノ支給ヲ受ケ又王大佐ヲ派シテ熙洽將軍ヨリ軍隊ノ吉林入市ノ許可ヲ求メタリ在吉林日本在留民ハ支那兵ノ接近ヲ頗ル恐怖シ直ニ長春、四平街及奉天ヨリ吉林ニ援軍派遣セラレタルガ之ガ爲支那軍ハ再ビ奉天方面ニ向フコトト爲リタリ彼等ハ奉天外十三哩ノ地點ニ下車シ九隊ニ分レテ夜間奉天ヲ迂回行軍セリ日本軍ノ發見ヲ免レンガ爲王以哲將軍自ラ農民ニ假裝シ市中ヲ乘馬ニテ通過セリ朝ニ至リ日本軍ハ彼等ノ存在ノ報ニ接シ飛行機ヲ發シテ之ヲ爆擊セルヲ以テ彼等ハ晝間潛伏スルノ己ムナカリシモ夜間ハ進軍ヲ續行シ遂ニ北平奉天鐵道ノ一驛ニ達シ同處ニテ七列車ヲ命ジ之ニ依リ十月四日山海關ニ達シタリ

本委員會ノ意見

以上ハ所謂九月十八日事件ニ付兩國ノ事件關係者ノ本委員會ニ語レル二樣ノ物語ニシテ兩者相異リ且矛盾シ居ルハ明ナルガ是レ其ノ事情ニ顧ミ別段異トスルニ足ラザル所ナリ

事件直前ノ緊張狀態竝ニ興奮ヲ考ヘ又特ニ夜間ニ起レル事件ニ關スル利害關係者ノ陳述ニハ必ズヤ相違スル所アルベキコトヲ認メ本委員會ハ極東滯在中事件發生當時又ハ其ノ直後奉天ニ在リタル代表的外國人ノ能フ限ノ多數ニ會見セルガ其ノ內ニハ事件直後現地ヲ視察シ最初ノ日本側ノ正式說明ヲ與ヘラレタル新聞通信員其ノ他ノ人士アリ利害關係者ノ陳述ト共ニ斯カル意見ヲ充分ニ考慮シ多數ノ文書資料ヲ熟讀シ又接受若ハ蒐集セル幾多ノ證據ヲ愼重研究シタル結果本委員會ハ次ノ結論ニ達シタリ

日本及支那兩軍ノ間ニ緊張氣分ノ存在シタルコトニ付テハ疑フノ餘地ナシ本委員會ニ明白ニ說明セラレタルガ如ク日本軍ハ支那軍トノ間ニ敵對行爲起リ得ベキコトヲ豫想シテ愼重準備セラレタル計畫ヲ有シ居リタルガ九月十八日ヨリ十九日ニ亘ル夜間本計畫ハ迅速且正確ニ實施セラレタリ支那軍ニ於テハ日本軍ニ攻擊ヲ加ヘ又ハ特ニ右ノ時及場所ニ於テ日本人ノ生命或ハ財產ヲ危險ナラシムルガ如キ計畫ハ第百二十六頁ニ言及セル訓令ニ從ヒ之ヲ有セザリキ彼等ハ何等協同セル又ハ命令ヲ受ケタル攻擊ヲ日本軍ニ對シ行ヒタルモノニ非ズシテ日本軍ノ攻擊及其ノ後ノ行動ニ驚カサレタルモノナリ九月十八日午後十時ヨリ十時三十分ノ間ニ鐵道線路上若ハ其ノ附近ニ於テ爆發アリシハ疑ナキモ鐵道ニ對スル損傷ハ若シアリタリトスルモ事實長春ヨリノ南行列車ノ定刻到著ヲ妨ゲザリシモノニシテ其レノミニテハ軍事行動ヲ正當トスルニ充分ナラズ同夜ニ於ケル敍上

日本軍隊ノ移動

日本軍ノ軍事行動ハ合法ナル自衞ノ措置ト認ムルコトヲ得ズ尤モ斯ク言ヒタリトテ本委員會ハ現地ニ在リタル將校ガ自衞ノ爲行動シツツアリト思惟シタルナルベシトノ想定ハ之ヲ排除スルモノニ非ズ

今再ビ爾後ノ事件ノ記述ニ移ラザルベカラズ

九月十八日夜在滿洲日本軍ハ次ノ如ク配置セラレ居リタリ上述ノ如ク北大營ノ攻擊ニ參加セル鐵道守備大隊ノ四箇中隊及奉天城市ヲ占領セル平田大佐部下ノ第二師團第二十九聯隊ノ外第二師團ノ殘部ハ各地ニ配置セラレ居リ第四聯隊本部ハ長春ニ第十六聯隊本部ハ遼陽ニ第三十聯隊本部ハ旅順ニ在リ而シテ此等ノ各聯隊ニ屬スル他ノ部隊ハ安東、營口、南滿洲鐵道ノ長春奉天線及安東奉天線ノ沿線幾多小地點ニ駐屯セリ又鐵道守備隊一箇大隊ハ長春ニ在リ又鐵道守備隊及憲兵隊ノ諸部隊ハ上記各小地點ニ第二師團ト共ニ配置セラレ居レリ最後ニ朝鮮警備軍アリタリ

在滿洲全軍及朝鮮軍ノ一部ハ九月十八日夜長春ヨリ旅順ニ至ル南滿洲鐵道ノ全域ニ亘リ殆ド同時ニ行動ヲ開始セリ其全兵力次ノ如シ第二師團兵五千四百、野砲十六門、鐵道守備隊兵約五千、憲兵隊兵約五百ナリ安東、營口、遼陽其ノ他ノ小都市ニ在ル支那軍ハ制壓セラレ無抵抗ニ武裝ヲ解除セラレタリ鐵道守備隊及憲兵隊ハ此等ノ場所ニ留マリ第二師團部隊ハ一層重要ナル行動ニ加ハル爲直ニ奉天ニ集結セリ第十六及第三十聯隊ハ逸早ク到著シ平田大佐ニ合シテ東大營ノ占領ヲ援助シタリ第二十師團所屬第三十九混成旅團（兵四千及砲兵）ハ十九日午前十時朝鮮國境新義州ニ集結シテ二十一日鴨綠江ヲ越エ夜半奉天ニ到著シ同地ヨリ分遣隊ハ遼原及新民ニ派遣セラレ二十

九月十八日—十九日長春占領及九月二十一日吉林占領

二日之ヲ占領セリ

兵約一萬大砲四十門ヲ有スル長春ニ於ケル寛城子及南嶺支那守備隊ハ九月十八日夜同地駐屯ノ第二師團第四聯隊及第一鐵道守備大隊（長谷部少將ノ指揮下ニ在リ）ニ依リ攻擊セラレタルガ同地ニ於テハ多少支那軍ノ抵抗アリタリ夜半戰鬪開始セラレ南嶺營舍ハ十九日午前十一時寛城子ノ營舍ハ同日午後三時占領セラル之ニ依ル日本側ノ全死傷ハ死者將校三名兵卒六十四名傷者將校三名兵卒八十五名ナリ奉天ノ戰鬪終了ト共ニ第二師團ノ各聯隊ハ長春ニ集結セラレ多門將軍及幕僚、第三十聯隊及野砲兵一箇大隊ハ二十日又天野將軍指揮下ノ第十五旅團ハ二十二日到著セリ吉林ハ二十一日發砲ヲ見ズシテ占領セラレ支那軍ハ約八哩外ニ移サレタリ

當時ノ日本ノ半官出版物タル「ヘラルド、オヴ、エシア」ハ軍事行動ハ之ニテ完了セルモノト思考セラレ之以上軍隊ヲ移動スルコトハ豫期セラレ居ラザル旨述ベ居レリ事實爾後ニ於テ行ハレタル軍事行動ハ支那側ノ挑發ニ因ルモノトセラレ二十日間島ニ於ケル排日示威、龍井村ニ於ケル停車場破壞及九月二十三日哈爾賓ニ於テ數箇ノ爆彈破裂シタルモ日本側建物ニハ損傷ナカリシ事件ガ斯カル挑發ノ例トシテ擧ゲラレ居レリ且又匪賊ノ漸次跳梁シツツアルコト及解隊兵ノ活動ニ付テモ苦情アリ而シテ此等ノ事情ニ依リ日本軍ハ其ノ意ニ反シテ新ナル軍事行動ヲ起スニ至レルモノナリト主張セラレ居レリ

錦州爆擊

此等ノ行動ノ第一ハ十月八日ニ於ケル錦州ノ爆擊ナルガ同地ハ九月末張學良元帥ガ遼寧省省政府ヲ移轉セル處ナリ日本側ノ言フ所ニ依レバ爆擊ハ主トシテ兵營及民政事務所ノ設置セラレタル交

通大學ヲ目標ト爲セル趣ナルガ兵力ニ依リ民政府ヲ爆擊スルハ正當ト爲スコトヲ得ズ且又爆擊區域ガ日本側主張ノ如ク實際ニ於テ制限セラレタリヤ否ヤ疑問ノ餘地アリ支那政府ノ名譽顧問米國人「ルウイス」氏ハ十月十二日錦州ニ到著シテ其ノ見聞セル所ヲ顧博士ニ申報シ顧博士ハ後ニ參與員ノ資格ニ於テ其ノ情報ヲ本委員會ニ轉達セルガ「ルウイス」氏ニ依レバ兵營ニハ事實全然異狀ナク夥多ノ爆彈ハ市內到ル所ニ落下シ大學建物竝ニ病院ニスラモ落下セリ爆擊機指揮官ハ其ノ後幾何モナク一日本新聞記者ニ對シ長春ヨリノ四機ハ八日午前八時三十分奉天ニ向フベキ旨命令セラレタル由ヲ告ゲタルガ同地ニテ右四機ハ他機ト合シ六偵察機及五爆擊機ノ一隊ハ爆彈及燃料ヲ滿載シテ直ニ錦州ニ派遣セラレ午後一時頃到著十分乃至十五分內ニ爆彈八十箇ヲ投下シ直ニ奉天ニ歸還セリ「ルウイス」氏ニ依レバ支那軍ハ應射セザリキ

嫩江橋軍事行動

次ノ行動ハ嫩江諸橋ニ於テ行ハレタルモノニシテ十月中旬開始セラレ十一月十九日日本軍ノ齊齊哈爾占領ニ終レルモノナリ之ニ對シ日本側ガ正當ナリトスル理由トシテ擧グル所ハ馬占山將軍ニ依リ破壞セラレタル嫩江橋梁ノ修理中日本軍ガ攻擊セラレタリト謂フニ在リ然レドモ其ノ以前ニ遡リテ敍述シ諸橋梁ノ破壞ニ付說明スルノ要アリ

十月初嘗テ馬占山、萬福麟ト同地位ヲ保有シ彼等ニ代リテ黑龍江省長タラント企テタルコトアル洮南鎭守使張海鵬ハ明ニ强力ニ依リ省政府ヲ奪取スルノ目的ヲ以テ洮南昂昂溪鐵道ニ沿ヒ進出ヲ開始シタリ支那側參與員提出文書第三ニハ右進出ガ日本側ノ使嗾ニ依ルモノト爲シ居レルガ中立ノ方面ヨリ得タル情報モ此ノ見解ヲ支持シ居レリ張海鵬軍ノ進出ヲ防止センガ爲馬占山將軍ハ嫩

江ニ架セラレタル諸橋梁ノ破壞ヲ命ジ兩軍ハ廣茫タル沼澤地ナル同河河谷ヲ隔テテ相對峙シタリ

洮南昂昂溪鐵道ハ南滿洲鐵道供給ノ資本ニ依リ建設セラレ同線ハ借款ノ擔保ト爲サレ居ルヲ以テ南滿洲鐵道當局ハ滿洲北部ヨリノ農產物運搬ノ特ニ必要ナル時節ニ當リ同線ノ運輸阻碍ノ續クコトハ許スベカラズト感ジタリ在齊齊哈爾日本總領事ハ政府ノ訓令ニ依リ十月二十日齊齊哈爾ニ到著セル馬占山將軍ニ對シ能フ限リ速ニ橋梁ノ修理ヲ爲スベキコトヲ求メタルガ右請求ニハ期限ハ付セラレザリキ日本當局ハ馬占山將軍トシテハ交通杜絶ニ依リ張海鵬將軍ヲ一定距離外ニ止メ得ベキヲ以テ能フ限リ橋梁ノ修理ヲ遷延スルモノト信ジ居リタリ十月二十日洮南昂昂溪鐵道及南滿洲鐵道ノ使用人ノ一小部隊ハ軍隊ノ護衛ニ依ルコトナク橋梁破損ノ視察ヲ爲サントシタル處豫メ黑龍江省軍ノ一將校ニ說明シ置キタルニ拘ラズ支那軍ヨリ射擊セラレタリ之ガ爲事態惡化シタルニ依リ十月二十八日本庄將軍ノ在齊齊哈爾代表者林少佐ハ十一月三日正午迄ニ橋梁修理ノ完成ヲ要求シ若シ同日迄ニ實行セラレザルニ於テハ南滿洲鐵道技術員ニ於テ日本軍掩護ノ下ニ該工事ヲ引繼グベキ旨ヲ述ベタリ支那當局ハ期限ノ延長ヲ求メタルモ右請求ニハ何等ノ回答ナク右修理事業ノ遂行ヲ掩護スルノ目的ヲ以テ日本軍ハ四平街ヨリ派遣セラレタリ

交涉ハ十一月二日迄進捗セズ何等ノ決定ヲ見ザリキ同日林少佐ハ馬占山將軍及張海鵬將軍ニ對シテ兩軍何レモ鐵道ヲ作戰上ノ目的ニ使用スベカラザルコト及各自ノ軍隊ヲ河ノ兩岸ヨリ十キロメートルノ地點ニ撤退セシムベキ旨ノ最後通牒ヲ發シタリ右通牒ハ若シ右兩將軍ノ何レカガ南滿洲

鐵道會社ノ技術員ノ橋梁修理ヲ妨害スルトキハ日本軍ハ之ヲ敵軍ト看做スベキ旨ヲ表明シ十一月三日正午ヨリ效力ヲ發生スルコトト爲リ居リタリ而シテ日本掩護隊ハ該河谷ノ北側ナル大興驛ニ十一月四日迄ニ到達スベキ命令ヲ受ケ居リタリ支那參與員（文書第三）、在齊齊哈爾日本總領事及第二師團ノ諸將校ハ何レモ馬占山將軍ハ中央政府ヨリノ訓令アル迄其ノ獨斷ヲ以テ假ニ日本軍ノ要求ニ應ズベキ旨回答セリトノコトニ一致セリ然レドモ一方日本側ノ證人ハ馬將軍ガ破壞セラレタル橋梁ヲ迅速ニ又ハ有效ニ修理スルコトヲ許ス意ナキコト明白ナリシヲ以テ其ノ誠意ヲ信ゼザリキト附言シタリ十一月四日ニ於テ林少佐、日本總領事ノ代表者、支那將校及官吏ヲ含ム共同委員會ハ敵對行爲ノ開始ヲ防止スル爲二回迄橋梁ニ赴キタルガ支那側代表者ハ日本軍ノ前進ノ延期方ヲ求メタリ右要求ハ容レラレズ歩兵第十六聯隊長濱本大佐ハ同官ノ接受セル命令ノ通リ其ノ聯隊中ノ一箇大隊、野砲兵二箇中隊及工兵一箇中隊ヲ率キ日本軍ノ最後通牒條項ニ從ヒ修理作業開始ノ爲橋梁ニ前進セリ工兵ハ花井大尉ノ指揮ノ下ニ十一月四日朝作業ヲ開始シ歩兵一箇中隊ハ同日正午迄ニ二旒ノ日本國旗ヲ翻シテ大興驛ニ向ヒ前進ヲ開始シタリ

敵對行爲ハ實際ニ於テ前記共同委員會ガ再度ノ努力ヲ爲シ居リタル最中卽チ彼等ガ四日ノ晝過支那軍ヲ撤退セシムベク最終ノ努力ヲ試ムル爲現場ニ赴キタル際開始セラレタリ發砲ノ開始セラルルヤ濱本大佐ハ其ノ部下ノ頗ル苦戰ノ狀況ニ在ルヲ曉リ其ノ用ヒ得ベキ全兵力ヲ率キテ之ガ救援ニ赴キタリ迅速ニ偵察シタル同官ハ直ニ沼地ノ爲正面攻擊ハ不可能ニシテ此ノ苦境ヲ脫スルニハ敵ノ左翼ヲ包圍攻擊スルヨリ他ニ方法ナシト信ジタリ仍テ同官ハ其ノ豫備中隊ヲ分派シテ敵ノ左

翼ノ占據セル丘陵ヲ攻擊セシメタルモ兵力ノ寡少ナルト砲ヲ有效射擊距離迄充分接近セシムルコトヲ得ザリシ爲黄昏前ニハ右地點ヲ占領スルヲ得ザリキ丘陵ハ午後八時三十分ニ占領セラレタルモ同日ハ其レ以上ノ前進不可能ナリキ

關東軍司令部ハ狀況ノ報告ヲ受クルヤ直ニ强力ナル增援部隊ヲ派遣シ歩兵一箇大隊ハ其ノ夜ノ內ニ到著シタルヲ以テ濱本大佐ハ十一月五日未明攻擊ヲ再開スルコトヲ得タリ其ノ時ニ至リテモ二時間後支那軍ノ第一陣地ニ達セル際約七十挺ノ自働機關銃及機關銃ヲ以テ防禦セル塹壕ノ頑强ナル一線ニ遭遇セルコトハ同大佐自身ノ本委員會ニ對シテ陳述セル所ナリ同官ノ攻擊ハ阻止セラレ支那軍ノ歩兵及騎兵ノ包圍逆襲ニ遇ヒタル結果其ノ部隊ハ多大ノ損害ヲ被リタリ日本軍ハ己ムナク退却シ再ビ夜ニ入ル迄其ノ陣地ヲ支フルノ外何事ヲモ爲シ得ザリキ十一月五日ヨリ六日ニ亘ル夜間ニ於テ新ニ二箇大隊到著セルヲ以テ日本軍ハ苦境ヲ脫スルヲ得六日再ビ攻擊ヲ開始シ支那軍ノ全戰線ヲ席捲シテ同日正午迄ニ大興驛ハ日本軍ノ掌中ニ歸シタリ濱本大佐ノ使命ハ橋梁修理掩護ノ爲大興驛ヲ占領スルノミナリシヲ以テ退却スル支那軍ヲ追擊セズ日本軍ハ停車場附近ニ留リタリ

支那參與員ハ前記文書第三中ニ林少佐ハ十一月六日黑龍江省政府ニ對シテ新ニ (一) 馬占山將軍ハ張海鵬將軍ノ爲ニ省長ヲ辭職スルコト (二) 一公安委員會ヲ組織スベキコトヲ請求セル旨ヲ主張シ居レリ此等ノ請求ヲ含メル林少佐ノ書翰ノ寫眞ハ本委員會ニ提示セラレタリ尙右文書ハ翌日日本軍ガ回答ヲ待タズシテ當時大興ノ北方約二十哩ノ三軒房ニ駐屯セル同省軍ニ對シテ新ニ攻擊ヲ開

始セルコト及十一月八日林少佐ガ再應書翰ヲ送リテ馬占山將軍ハ張海鵬將軍ノ爲黑龍江省長ヲ辭職スベク之ニ對シテハ同日夜半前ニ回答スベキ旨ノ要求ヲ繰返シタルコトヲ陳述シ居レリ更ニ右陳述ニ依レバ十一月十一日本庄將軍自ラ電報ヲ以テ馬占山將軍ノ辭職、齊齊哈爾撤退及日本軍ノ昂昂溪前進ノ權利ヲ請求シ之ニ對シ同日日沒前ニ回答スベキ旨ヲ再ビ求メタリ十一月十三日林少佐ハ第三回要求中ニ日本軍ハ昂昂溪驛ノミナラズ齊齊哈爾驛ヲモ占領スベシトノ一項ヲ增加セリ馬占山將軍ハ其ノ回答中ニ齊齊哈爾驛ハ洮南昂昂溪鐵道ト何等關係ナキ旨ヲ指摘セリ

十一月十四日及十五日日本聯合部隊ハ四飛行機ノ援護ノ下ニ攻擊ヲ再開シタリ十一月十六日本庄將軍ハ馬占山將軍ハ齊齊哈爾ノ北方ニ退却スルコト、支那軍ハ東支鐵道以北ニ撤退スルコト、如何ナル方法ニ依ルヲ問ハズ洮南昂昂溪鐵道ノ運輸及運轉ヲ阻害セザルコトヲ約定スルコト、此等ノ要求ハ同月十五日ヨリ十日以內ニ實行セラルベキコト、右ニ對スル回答ハ在哈爾賓日本特務機關ニ送附スベキコトヲ要求セリ馬占山將軍ガ此等條項ヲ容ルルコトヲ拒ムヤ多門將軍ハ十一月十八日新ニ總攻擊ヲ開始セリ馬占山將軍ハ最初齊齊哈爾ニ退却セルガ同地ガ十一月十九日日本軍ニ奪ハルルヤ次デ海倫ニ退キ同地ニ省政府行政官署ヲ移轉シタリ

現場ニ於テ指揮セル日本諸將軍ノ證言ニ依レバ新軍事行動ハ十一月十二日前ニ開始セラレタルコトナシ當時馬占山將軍ハ旣ニ麾下ノ軍隊約二萬ヲ三軒房ノ西方ニ集結シ黑龍江省屯墾軍及丁超將軍ノ軍隊迄モ招致シタリ益威嚇的態度ヲ示セル此等ノ大部隊ニ對シテ日本軍ハ天野長谷部兩將軍麾下ノ二箇旅團ヨリ成ル當時集結セル多門師團ノミヲ以テ對抗シ得タリ此ノ緊張セル事態ヲ救フ

爲十一月十二日本庄將軍ハ全黑龍江省軍ガ齊齊哈爾ノ北方ヘ撤退シ日本軍ヲシテ北進シテ洮南昂昂溪鐵道ヲ守備スルヲ得シムベキコトヲ要求セリ十一月十七日支那軍ガ其ノ騎兵部隊ヲシテ日本軍ノ右翼ヲ迂回シテ之ヲ攻擊セシムル迄日本軍ハ前進ヲ開始セザリキ多門將軍ハ本委員會ニ對シ同將軍ノ部隊ハ步兵三千野砲二十四門ヨリ成ル小部隊ニ過ギザリシモ敢テ支那軍ヲ攻擊シ十一月十八日完全ニ之ヲ擊破シタル結果十九日朝齊齊哈爾ヲ占領セリト述ベタリ一週間後第二師團ハ馬占山將軍ノ軍隊ニ對抗シテ同地ヲ防守セシムル爲天野將軍ノ率キル步兵一箇聯隊、砲兵一箇中隊ヲ同地ニ殘シ原駐地ニ歸還シタリ此ノ日本ノ小部隊ハ後ニ新ニ編制セラレタル「滿洲國」軍隊ノ增援ヲ得タルモ右新軍隊ハ吾人ガ千九百三十二年五月齊齊哈爾ヲ訪問セル當時ハ未ダ馬占山將軍ノ軍隊ニ對戰シ得ト認ムルコトヲ得ザリキ

（地圖第七ヲ見ヨ）

附屬地圖第七（軍事上ノ態勢圖）ハ理事會第一回決議當時ニ於ケル雙方ノ正規軍ノ配置ヲ示スモノナリ當時特ニ遼河東西ノ地域及間島地方ニ出沒セル解隊兵及匪賊團ニ關シ記述セラレ居ラズ雙方互ニ故意ニ匪賊ヲ使嗾セル旨ヲ非難シ居レリ卽チ日本側ハ支那側ニ於テ滿洲ノ失地ノ秩序ヲ攪亂セントスル動機ヨリスト認メ支那側ハ日本側ニ於テ支那ノ國土ヲ占領シ益其ノ軍事行動ヲ擴大スベキ口實ヲ發見セント欲スル爲ナリト疑ヘリ此等無賴ノ徒ノ勢力及其ノ軍事的價値ハ頗ル漠然且不定ナルヲ以テ右軍事上ノ態勢圖解中ニ其ノ重要性ノ正確ナル評價ヲ記入スルコトハ不可能ナルベシ同圖ハ東北軍ノ指揮官ガ遼寧省ノ西南地方ニ於テ頗ル强力ナル部隊ヲ組織シタルコトヲ示シ居レリ此ノ部隊ハ日本軍前哨ノ最前線ニ間近キ大凌河ノ右岸ニ鞏固ナル塹壕陣地ヲ築造スルヲ

得タリ斯カル態勢ガ右正規軍ノ全兵力ハ三萬五千人卽チ當時滿洲ニ於テ有シタル自國軍ノ全兵力ノ約二倍ナリト評價シタル日本軍事當局ヲシテ相當ノ不安ヲ感ゼシメタルハ無理ナラザルコトナルベシ

天津事件

敍上ノ事態ハ十一月中天津ニ於テ發生セル或事件ノ結果執ラレタル行動ニ依リ緩和セラレタリ紛爭ノ發端ニ關スル諸報告ハ非常ニ相違シ居レリ十一月八日及二十六日ノ兩度ノ擾亂アリタルガ事件全體ハ極メテ曖昧ナリ

十一月八日ノ擾亂

日本側ノ所說

「ヘラルド、オヴ、エシア」所載ノ日本側ノ所說ニ依レバ天津ノ支那住民ガ張學良元帥ノ支持者及其ノ反對者ニ分レ後者ハ十一月八日公安維持員ヲ攻擊シ支那街ニ於テ政治的示威運動ヲ起サンガ爲武裝團體ヲ組織シタリ右支那人兩派間ノ紛爭ニ於テハ日本守備隊司令官ハ當初ヨリ嚴正ニ中立ヲ守リタルモ其ノ警備地域ニ日本租界附近ノ支那警衛隊ガ無差別ニ發砲スルニ至ルヤ己ムナク射擊ヲ開始セリ同司令官ハ交戰中ノ支那軍ニ對シ日本租界ノ境界ヨリ三百「ヤード」外ニ離ルベキ旨要求セルガ事態ハ緩和セズ甚ダ緊張シタルヲ以テ十一月十一日又ハ十二日一切ノ外國駐屯軍ハ警備ニ就クニ至リタリ

支那側ノ所說

天津市政府ノ所說ハ右ト頗ル異レリ市政府ハ日本側ガ支那人無賴漢及日本人便衣隊ヲ傭ヒタルモノニシテ支那街ニ於テ事件ヲ惹起セシムル爲此等ハ日本租界內ニ於テ實行的暴力團ニ編成セラレタリト主張シ居リ支那警察當局ハ適時ニ其ノ手先ヨリ此ノ形勢ノ報告ヲ受ケタルヲ以テ右無秩序ナル暴徒ガ日本租界ヨリ突出スルヲ擊退シ得タルガ右暴力團中逮捕サレタルモノノ自白ニ依リ暴

動ハ日本人ニ依リ計畫セラレ暴徒ハ日本製ノ銃器及彈藥ヲ以テ武裝セルコトヲ證明スルコトヲ得ト述ベ居レリ市政府ハ九日朝日本守備隊司令官ガ其ノ部下數名流彈ニ依リ負傷セルニ對シテ抗議シ三百「ヤード」外ニ撤退スベキコトヲ求メタルコトハ認メタルモ支那側ニ於テ右諸條件ヲ受諾セルニモ拘ラズ日本正規軍隊ハ支那街ヲ裝甲自働車ヲ以テ攻擊シ且砲擊ヲ加ヘタリト主張シ居レリ

十一月二十六日ノ擾亂ニ關スル所說

市政府側ハ更ニ十一月十七日三百「ヤード」外ニ撤退スルコトニ關スル細目ヲ定メタル協定成立セル旨ヲ述ベ日本側ガ該協定ニ依ル義務ヲ履行セザリシ爲事態ハ益惡化セリト主張シ居レリ

十一月二十六日凄マジキ爆音聞エ次デ直ニ大砲、機關銃及ビ小銃ノ發射起リタリ日本租界ノ電燈ハ消サレ同租界ヨリ便衣隊現ハレ附近ノ公安局ヲ襲擊セリ

後ニ起リタル本擾亂ニ關スル「ヘラルド、オヴ、エシア」所載ノ日本側ノ所說ニ依レバ二十六日事態頗ル好轉セルヲ以テ日本義勇隊ヲ解散シタル處同日夕刻支那側ハ日本兵營ニ向テ發砲ヲ開始シ抗議セルニモ拘ラズ二十七日正午ニ至ルモ發砲ヲ中止セザリシガ故ニ挑戰ニ應ジ支那軍ト戰フヨリ外ナカリキトノコトナリ戰鬪ハ二十七日ノ午後和平會議ノ開會迄繼續シタリ其ノ際日本側ハ戰鬪ノ卽時停止竝ニ支那軍隊及警察隊ノ外國軍隊ノ駐屯スル總テノ地點ヨリ二十支里外ヘノ撤退ヲ要求セリ支那側ハ其ノ軍隊ノ撤退ニ同意セルモ同地方ノ外國人ノ安全ニ對スル唯一ノ責任者タル警察隊ノ撤退ニハ同意セザリキ日本側ノ言ニ依レバ十一月二十九日支那軍側ヨリ警察隊ヲ日本租界附近ヨリ撤退スベキ旨申越シタルヲ以テ之ヲ容レタルガ支那武裝巡警ハ二十九日朝撤退シ三

天津騷擾ノ滿洲ノ事態ニ及ボセル影響

十日防禦工事ヲ除去セル由ナリ

二十六日ノ天津ニ於ケル不穩狀態ハ關東軍參謀將校ヲシテ同地司令官ニ對シ危險ニ瀕スル天津ノ小部隊ニ對シテ錦州及山海關ヲ經テ直ニ增援隊ヲ派遣スベシト提議セシムルニ至レリ單ニ輸送上ノ問題トシテハ增援隊ヲ大連ヲ經テ海路派遣スル方一層容易且迅速ナリシナラン然レトモ軍略上ヨリ考慮センニ右提議ノ經路ニ依レバ前進部隊ヲシテ途中錦州附近ニ集中セル甚ダ都合惡シキ支那軍隊ヲ處理スルヲ得シムル利益アリタリ此ノ經路ヲ採ルモ支那軍ノ抵抗ハ皆無又ハ殆ドナシト想像シ得ルヲ以テ左程延著ストハ思ハレザリキ右提議ハ容レラレ十一月二十七日一裝甲列車、一軍隊輸送列車、二飛行機ガ遼河ヲ越エテ支那軍ノ第一前哨線ヲ攻擊セルノミニテ支那軍隊ヲシテ塹壕陣地ヨリノ撤退ヲ開始セシムルニ充分ナリキ裝甲自動車隊モ亦陣地ヲ變更セリ然レドモ僅小ナル抵抗アリシ爲日本軍ハ更ニ裝甲列車、步兵列車及砲兵ノ數ヲ增シ兵力ノ增加ヲ爲スニ至レリ又日本軍ハ屢錦州ニ爆彈ヲ投下セルモ天津ノ事態好轉セル報道達スルヤ直ニ出動軍ハ本來ノ目的ヲ失ヒ十一月二十九日日本軍隊ハ新民屯ヘ撤收シ支那軍ヲシテ大ニ驚異セシメタリ

第一回ノ天津事件ノ他ノ結果ハ日本租界ニ居住シ居リシ前皇帝ガ土肥原大佐ト會談ノ後十一月十三日旅順ニ一層安全ナル避難所ヲ求メタルコトナリ

錦州占領

日本軍ノ撤退セル地方ハ支那軍ニ依リ再ビ占領セラレ此ノ事實ハ廣ク宣傳セラレタリ支那軍ノ士氣稍昂リ不正規兵及匪賊ノ活動增大セリ彼等ハ冬期ヲ利用シ氷結セル遼河ノ諸所ヲ渡リ奉天周圍地方ヲ襲ヒタリ日本軍事當局ハ現在ノ位置ヲ維持スルニサヘモ增援軍ノ必要ナルコトヲ實感シ此

十二月十日ノ理事會決議ニ際シ諸國ニ受ス日本側ノ留保

等援軍ニ依リ錦州ニ支那軍集結ノ脅威ヲ除カンコトヲ希望スルニ至レリ

其ノ間滿洲ニ於ケル事態ハ「ジュネーヴ」ニ於ケル其ノ後ノ討議ノ議題ナリキ十二月十日ノ決議ヲ受諾シタルトキ日本代表ハ其ノ受諾ハ「本項（第二）ハ「滿洲各地ニ於テ跳梁シ居レル匪賊及不逞ノ徒ノ活動ニ對シテ日本臣民ノ生命及財産ヲ直接保護スルニ必要ナルベキ行動ヲ日本軍ガ執ルコトヲ妨グル意圖ニ出デタルニ非ズトノ了解ニ基ク」モノニシテ斯カル行動ハ明ニ「滿洲ニ於ケル特殊ノ事態ノ爲ニ必要ナル例外手段」ニシテ同地方ガ常態ニ復スルトキハ不必要ト爲ルナラン」ト聲明セリ右ニ對シ支那代表ハ「事態ヲ擴大スベカラズトノ當事國ニ對スル指令ハ滿洲ニ於ケル現狀ニ依リ惹起セラレタル無秩序狀態ノ存在ヲ口實トシテ違反スベカラズ」ト應答シ右討議ニ參加シ居リタル數名ノ理事ハ「日本人ノ生命及財産ニ危險ヲ及ボスガ如キ事態同地方ニ發生スルコトアリ得ベク斯カル緊急ノ場合ニハ其ノ附近ノ日本軍ガ行動スルコトハ己ムヲ得ザルベキコト」ヲ容認シタリ本委員會ニ對シ證言ヲ提供シタル日本諸將校ハ本問題ニ觸ルル際常ニ十二月十日ノ決議ハ滿洲ニ於テ「其ノ軍隊ヲ維持スルノ權利ヲ日本ニ付與シ」若ハ日本軍ヲシテ同地方ニ於ケル匪賊討伐ノ責ニ任ゼシメタリト主張セリ爾後ノ軍事行動ヲ說述スルニ當リ日本諸將校ハ遼河附近ニ於テ土匪軍ニ對シ敍上ノ權利ヲ行使スルニ際シ錦州附近ニ殘留セル支那軍ト偶然衝突シ其ノ結果支那軍ハ長城內ニ撤退セリト主張ス日本側ガ「ジュネーヴ」ニ於テ留保ヲ爲シタル上引續キ其ノ計畫ニ依リ滿洲ノ事態ヲ處理シタル事實存ス

增援軍ノ到著

齊齊哈爾守備隊ヲ除キ第二師團ハ奉天西方ニ集中サレタリ援軍ハ直ニ來著シ始メ第八師團ノ第四

（他國軍ヲ見ヨ）

旅團（註）ハ十二月十日ヨリ十五日ノ間ニ到著セリ更ニ十二月二十七日朝鮮ヨリ第二十師團司令部及一箇旅團ヲ派遣スル爲皇帝ノ裁可ヲ得タリ又長春及吉林ハ差當リ獨立鐵道守備隊ニ依リテノミ保護セラレタリ

註　茲ニ記載セル日本軍隊ノ部隊番號及兵力ノ敍述ハ總テ日本側ノ公報ニ依ル

支那軍ノ撤退ニ關スル交涉ノ失敗

錦州攻擊

錦州ニ對スル日本軍進擊切迫ノ爲支那外交部長ハ三四ノ外國ガ錦州北方及南方ニ中立地帶ノ維持ヲ保障スルノ意アルニ於テハ支那軍ノ長城內撤退ヲ提議シ以テ戰爭ノ進展ヲ阻止センコトヲ企圖シタルモ此ノ提議ハ何等效果ヲ收メザリキ一方北平ニ於テ張學良元帥ト日本代理公使トノ間ニ會談始メラレタルモ之亦諸般ノ理由ニ依リ失敗ニ終レリ支那側ハ其ノ文書第三ノ附屬書ホ中ニ十二月七日、二十五日、及二十九日ニ於ケル訪問ノ度每ニ日本代表ハ支那軍ノ退却ニ關スル其ノ要求ヲ增大シ且日本軍ノ抑制ニ關スル其ノ約束ハ益曖昧ト爲レリト主張シ居レルニ對シ他方日本側ハ撤退ニ關スル支那側ノ約束ハ決シテ眞摯ナルモノニ非ザリシト主張ス

日本軍ノ集中的攻擊ハ十二月二十三日ヲ以テ開始セラレ而シテ支那第十九旅ハ其ノ陣地ヲ拋棄スルノ已ムナキニ至レリ同日ヨリ前進ハ整然トシテ行ハレ殆ド何等抵抗ヲ受ケザリシガ支那軍司令官ハ總退却ノ命令ヲ發シ居リタリ錦州ハ一月三日朝占領セラレ日本軍ハ山海關ニ於ケル長城迄一路前進ヲ續ケ同地ニ於ケル日本守備隊ト恒久的接觸ヲ遂ゲタリ

張學良元帥ノ軍ガ實際一擊ヲモ加ヘズシテ完全ニ滿洲ヲ撤退セルコトハ長城以南ノ內部的狀態ト關係ナカリシモノニ非ズ相拮抗スル諸將軍間ニ蟠レル鬪爭ニ付テハ曩ノ章ニ記述セル所ナルガ此

哈爾賓占領

ノ鬪爭ガ當時終熄セザリシコトヲ記憶スルヲ要ス

山海關ニ至ル進擊ガ比較的容易ニ遂行セラレタルコトハ日本ヲシテ其ノ軍隊ヲ原駐地ヨリ移動シ之ヲ他方面ノ前進ニ使用スルコトヲ得シメタリ從來殆ド戰鬪ノ全局ヲ擔當セル第二師團ノ主力ハ休養ノ爲遼陽、奉天及長春ノ駐屯地ニ復歸シタリ一方隨所ニ於テ受クル虞アル匪賊ノ襲擊ニ對シ保護ヲ加フベキ鐵道線路ノ長サノ增加ハ多數軍隊ノ使用ヲ必要トセルガ該軍隊ハ斯ノ如キ廣大ナル地域ニ分駐セシ爲其ノ戰鬪力ハ減殺セラレタリ第二十師團司令部ノ隷下ニ在ル二箇旅團ハ此ノ目的ノ爲新占領地帶ニ殘留セシメラレ而シテ第八師團ノ第四旅團ハ更ニ北方ニ於テ右兩旅團ニ加ハレリ日本軍事當局ハ此等ノ守備完全ナル地域內ニ於テハ安寧秩序ハ速ニ確立セラレ且爾後數週間ニ匪賊ハ遼河ノ兩岸ニ於テ殆ド其ノ影ヲ潛ムルニ至レリト吾人ニ確言セリ此ノ言明ハ六月吾人ニ對シ爲サレタルガ而モ本報告書ヲ記述シツツアル際ニ當リ吾人ハ義勇軍ガ營口及海城ヲ盛ニ侵攻シ奉天及錦州ヲサヘ脅威シツツアル報道ヲ閱讀セリ

本年初頭ニ於テ最紛亂ヲ來セルハ哈爾賓ノ北方及東方地方ニシテ該地方ニハ舊吉林及黑龍江政府ノ殘黨ガ撤退シ居リタリ該北方地域ニ於ケル支那將軍等ハ北平ノ本據ト若干ノ接觸ヲ保持シ居タリシモノノ如ク北平ヨリ隨時或支援ヲ受ケタリ曩ニ齊齊哈爾ニ對シ行ハレタル如ク哈爾賓ニ對スル前進ハ二箇ノ支那軍隊間ノ衝突ヲ以テ開始セラレタリ一月初旬熙洽將軍ハ哈爾賓占領ヲ目的トシテ北方ニ遠征ノ準備ヲ爲セリ吉林哈爾賓間ニハ反吉林軍ト稱セラレタル軍隊ヲ率キル丁超及李杜兩將軍在リタリ吾人ノ假報告書ガ審議セラレツツアリシ際日本參與員ヨリ受ケタル報道ニ依レ

バ北平當局ノ影響ダニナカリセバ兩當事者間ノ交渉ニ依リ滿足ナル條件ヲ協定シ得ベカリシトノコトナリキ事實交渉ハ開始セラレ而シテ交渉進行中熙洽將軍ハ麾下ノ軍隊ヲ率キテ雙城ニ前進シ一月二十五日同地ニ達セルモ翌朝同地南方隣接地ニ於テ激戰ヲ交フルニ及ンデ右前進ハ忽チ阻止セラレタリ斯クシテ發生セル事態ハ哈爾賓ニ於ケル多數ノ日本人及朝鮮人居留民ニトリ大ニ危險ナルモノト日本側ヲシテ思惟セシメタリ蓋シ同地隣接地域ニ於ケル多少トモ不正規ナル二箇ノ支那軍隊間ノ交戰ハ敗退セル軍隊ガ同地ニ向ケ退却スルノ結果ヲ生ゼシムベク而シテ其ノ慘狀ニ付テハ近時ノ支那歷史ガ多數ノ實例ヲ示シ居レリ故ニ緊急要請ハ關東軍ニ送ラレ日本側ヲシテ言ハシムレバ支那商人等スラ其ノ財產ノ劫掠セラルベキヲ恐レ此ノ要請ニ參加シタリトノコトナリ

此ノ危急ノ時ニ當リ日本特務機關ノ事務引繼ノ爲二十六日哈爾賓ニ派遣セラレタル現將軍土肥原大佐ハ本委員會ニ對シテ同市周圍ニ於ケル支那兩軍ノ交戰ハ約十日間繼續シ而シテ脅威セラレタル地區ニ主トシテ居住セル四千ノ日本居留民及郊外支那街傅家甸ニ在リテ虐殺ノ危險ニ暴露セラレ居リタル千六百ノ朝鮮人ニ付多大ノ心配アリタリト述ベタリ反吉林軍ガ交戰ノ續行セラレタル十日間同市ヲ保持セルニ拘ラズ日本及朝鮮人居留民ノ死傷數ハ比較的僅少ナリキ其ノ際日本人居留民ハ武裝義勇隊ヲ組織シ同胞ノ郊外支那街ヨリ脫出シ來ルコトヲ助ケタリ同所ヲ脫出セントスルニ當リ日本人一名、朝鮮人三名殺害セラレタリト謂フ加之此ノ危急ナル形勢偵察ノ爲派遣セラレタル日本軍飛行機中ノ一機ハ機關ノ故障ノ爲著陸ノ已ムヲ得ザルニ至リ而シテ搭乘者ハ丁超軍

ノ爲ニ殺害セラレタリト謂フ

敍上ノ二事件ハ日本軍事當局ヲシテ干渉スルノ決意ヲ爲サシムルニ至リ第二師團ハ危險ニ瀕セル同胞救助ノ任務ヲ再ビ帶ブルコトト爲レリ然ルニ這回ハ長春以北ノ鐵道ガ露支合辦タル關係上戰鬪ヨリモ寧ロ輸送ガ問題ナリキ東支鐵道ノ南部線ニ於ケル車輛ハ大ニ減少シ居リタルヲ以テ第二師團長ハ第一著手トシテ僅ニ長谷部將軍及歩兵二箇大隊ヲ派遣スルニ決シ鐵道當局ト交渉ヲ開始セルモ該交渉遷延スベシト見ルヤ日本將校ハ軍隊輸送ヲ强行スルニ決シタリ鐵道當局ハ之ニ對シ抗議シ列車ノ運轉ヲ拒絶シタルモ其ノ反對ニ拘ラズ一月二十八日夜日本軍事當局ハ三箇ノ軍用列車ヲ仕立ツルコトニ成功セリ右列車ハ第二松花江鐵橋迄北進シ同所ニ於テ同鐵橋ガ支那軍ニ依リ破壞セラレタルコトヲ發見シタリ其ノ修理ハ翌二十九日ニ遂行セラレタルヲ以テ日本軍ハ三十日午後雙城ニ達シタリ翌拂曉天未ダ明ケザル時此ノ少數ノ日本軍隊ハ闇ニ乘ジテ來襲セル丁超軍ノ攻擊スル所ト爲リ激戰ノ結果支那軍隊ヲ擊退シタルモ同日ハ其レ以上ノ進行不可能ナリキ此ノ間「ソヴィエト」及支那鐵道當局ハ日本軍ガ單ニ在哈爾賓日本居留民保護ノ目的ヲ以テ前進シツツアリトノ了解ノ下ニ東支鐵道ニ依ル日本軍ノ輸送ヲ許可スルコトニ同意シタリ茲ニ於テ其ノ乘車賃ハ現金ヲ以テ支拂ハレ二月一日日本軍到著シ始メ第二師團ノ主力ハ二月三日朝雙城附近ニ集結セラレタリ既說ノ如ク十一月十九日以來第二師團ノ一部ガ駐屯セル齊齊哈爾ヨリノ增援スラ求メラレタリ而モ哈爾賓齊齊哈爾間ノ鐵道線路ハ支那軍ノ爲ニ切斷セラレタルガ故ニ尙幾多ノ困難ヲ克服スルヲ要シタリ支那軍ハ又同時ニ各處ニ於テ東支鐵道南部線沿線ノ獨立鐵道守備隊ノ枝隊ヲ攻

千九百三十二年八月末迄ノ日本軍事行動ノ進展（地圖第九及第十ヲ見ヨ）

擊シタリ

二月三日今ヤ砲十六門ヲ有シ其ノ總兵力約一萬三千乃至一萬四千ト算セラレタル反吉林軍ハ同市南方境界ニ沿ヒテ塹壕陣地ヲ構築シタリ同日第二師團ハ此ノ陣地ニ對シテ前進ヲ開始シ三日ヨリ四日ニ亘ル夜間ニ雙城ノ北方約二十哩ノ葦塘溝（南城子）河ニ達シ翌朝戰鬪ハ開始セラレタリ四日夕支那軍陣地ノ一部ハ日本軍ノ占領スル所ト爲リ越エテ五日正午迄ニ最後ノ結末ヲ告ゲタリ哈爾賓ハ同日午後占領セラレ支那軍ハ三姓ニ向ケ退却シタリ

第二師團ノ攻擊ノ成功ニ依リ哈爾賓市ハ日本官憲ノ手ニ歸シタルモ右攻擊ニ次グニ直ニ敗退支那軍ノ追擊ヲ以テセザリシ爲全局的ニハ北滿洲ノ形勢ニハ變化ヲ齎サザリキ哈爾賓北方及東方ノ鐵道竝ニ松花江ノ重要ナル水路ハ依然反吉林軍及馬占山軍ノ支配ニ委セラレタリ占領地域ガ北ニ於テハ海倫東ニ於テハ方正及海林地方ニ擴大セラルル迄更ニ增援軍ノ到著、東方及北方ニ向ケテノ反覆的出征竝ニ六箇月ニ亘ル戰鬪アリタリ日本側ノ公表ニ依レバ馬占山將軍ノ軍隊ハ反吉林軍ト共ニ全ク擊破セラレタリト傳ヘラルルモ支那側ノ公報ニ依レバ同軍ハ今尙存在スト謂フ其ノ戰鬪力ハ減殺セラレタリト雖モ反吉林軍ハ絶エズ日本軍ヲ妨ゲ同時ニ平野ニ於ケル實際的會戰ヲ回避シツツアリ新聞報道ニ依レバ東支鐵道東部及西部兩線ハ依然襲擊ヲ受ケ哈爾賓海林間ノ各所ニ於テ破壞セラルルノ現狀ナリト

二月初以來ノ日本軍ノ行動ハ次ノ如ク略說スルコトヲ得ベシ

三月末頃第二師團ノ主力ハ丁超及李杜兩將軍ノ反吉林軍討伐ノ爲方正方面ニ向ケ哈爾賓ヲ出發セ

リ同師團ハ三姓地方迄前進シタル後四月上旬哈爾賓ニ歸還セリ此ノ時第十師團哈爾賓ニ到著シ該區域ヲ第二師團ヨリ引繼ギタリ此ノ部隊ハ約一箇月間其ノ主力ヲ以テ三姓附近ニ於テ又其ノ小枝隊ヲ以テ海林方面ニ於テ東支鐵道東部線ニ沿ヒ反吉林軍ト不斷ノ戰鬪ニ從ヒタリ

五月上旬北滿洲ノ日本軍ハ更ニ第十四師團ノ增援ヲ受ケタリ同師團ノ一枝隊ハ反吉林軍トノ戰鬪ニ參加シ三姓ノ南方牡丹江溪谷迄モ進出シ敵對軍ヲシテ吉林省ノ最東方隅ニ退却スルノ已ムナキニ至ラシメタリ而モ五月下旬ニ開始セラレタル第十四師團ノ主要行動ハ哈爾賓ノ北方地方ニ行ハレ馬占山將軍ノ軍隊ニ對スル攻擊ヲ目的ト爲シタリ同師團ハ呼蘭海倫鐵道ニ沿ヒテ哈爾賓ノ北方迄主要ナル攻擊ヲ遂行シ又小部隊ヲ以テ齋齊哈爾克山鐵道ノ終點タルベキ克山ノ東方ニ向ヒテ攻擊ヲ爲セリ日本側ハ八月上旬馬占山將軍ノ軍隊ハ再ビ有效ニ擊破セラレ且將軍自身死亡セル確證ヲ有スト主張スルモ支那側ハ同將軍ハ今尙生存セリト確言ス此ノ戰鬪ニ於テハ日本ヨリ新ニ到著セル騎兵部隊モ亦參加シタリ

八月中數回ノ小規模ナル戰鬪ハ奉天熱河兩省ノ境界主トシテ鐵道ニ依リ熱河ニ至ル唯一ノ途タル北平奉天鐵道ノ錦州北票枝線附近ニ於テ行ハレタリ支那ニ於テハ此等ノ事件ハ單ニ日本軍ノ熱河占領ヲ目的トシ近ク行ハルベキ一層大規模ナル軍事行動ノ序幕ニ過ギズトノ危惧廣ク行ハル今モ尙支那本部ト滿洲ニ於ケル支那軍トノ間ニ存スル主要交通路ハ熱河ヲ貫通スルヲ以テ既ニ「滿洲國」領土ノ一部ト主張セラルル熱河省ニ對スル日本軍ノ攻擊ノ危惧ハ强チ無稽ノコトニ非ズ右攻擊ノ切迫セルコトハ日本新聞ノ遠慮ナク論議スル所ナリ

最近ノ事件ニ關シ日本參與員ガ本委員會ニ提出シタル日本側所見ハ次ノ如シ

石本ト呼ブ關東軍司令部附官吏ハ七月十七日支那「義勇軍」ノ爲熱河省內ニ於テ北票錦州間ニ運轉セラルル一列車ヨリ拉致セラレタリ輕砲ヲ有スル日本軍ノ步兵小部隊ハ直ニ同氏ノ救出ヲ企テタルモ其ノ目的ヲ達スル能ハズ其ノ結果日本軍ハ熱河省境ノ一村落ヲ占領セリ

七月下旬及八月中日本軍ノ飛行機ハ熱河ノ該地方上空ニ數回示威飛行ヲ爲シ若干ノ爆彈ヲ投下シタルモ而モ愼重ニ「諸村落外ノ無住地域」ヲ選ビタリ次デ八月十九日日本參謀將校一名石本氏ノ釋放方交涉ノ爲北票ト省境トノ間ニ位スル小都邑南嶺ニ派遣セラレタルガ少數ノ步兵部隊ヲ隨ヘテ歸還ノ途中同將校ハ射擊セラレタルヲ以テ自衞上應戰シ他ノ步兵部隊ノ到著ト共ニ南嶺ヲ占領セルガ翌日同地ヲ撤退セリ

熱河省長湯玉麟將軍ノ報告書ノ摘錄支那參與員ヲ通ジテ本委員會ニ提出セラレタルガ右報告書ハ敍上ノ交戰ハ遙ニ大規模ニ行ハレ而シテ鐵道守備ノ支那兵一箇大隊ハ二裝甲列車ニ支援セラレタル優勢ナル日本軍步兵部隊ト交戰シタルコトヲ主張シ日本側ノ謂フ爆擊ハ同地方ノ大都邑ノ一タル朝陽ヲ目標トセルコト竝ニ其ノ結果軍隊及住民間ニ三十名ノ死傷者ヲ出セルコトヲ主張ス八月十日日本軍ノ攻擊ハ一裝甲列車ノ南嶺攻擊ニ依リ再ビ開始セラレタリ

日本參與員ノ提供セル情報ハ熱河ニ於ケル秩序ノ維持ハ「滿洲國國內政策ノ一事項タリト雖モ日本ハ滿洲及蒙古ニ於ケル治安ノ維持ニ關シ其ノ重要ナル任務ヲ盡シタルニ顧ミ同地方ノ形勢ニ無關心ナル能ハズ且熱河ニ於ケル如何ナル紛亂モ直ニ滿洲及蒙古全部ニ重大ナル反響ヲ惹起スベ

キ」コトヲ敍說シテ結バレ居レリ湯玉麟將軍ハ日本軍ノ攻擊再開セラルル場合ハ有效ナル抵抗ヲ爲スベク一切ノ可能的措置ヲ講ジツツアリト述ベテ其ノ報告書ヲ結ビ居レリ

此等ノ報告書ニ顧ミレバ此ノ地方ニ於ケル衝突地域ノ擴大ハ將來起リ得ベキコトニシテ考慮ニ入レザルベカラザルモノノ如シ

支那側ノ抵抗ノ性質

支那軍ノ主要部隊ハ千九百三十一年末長城內ニ撤退セルモ日本軍ハ滿洲各地ニ於テ絕エズ不規則的ナル抵抗ニ遭遇セリ嘗テ嫩江ニ於テ行ハレシガ如キ戰鬪ハ最早起ラザリシモ交戰ハ絕エズ且諸所ニ之ヲ見タリ日本人ハ現今自己ニ反抗スル有ラユル部隊ヲ無差別ニ「匪賊」ト稱スルヲ常トセリ事實ニ於テハ匪賊ノ外日本軍隊若ハ「滿洲國」軍隊ニ對スル組織アル抵抗ヲ爲スモノニ截然二種別アリ卽チ支那正規軍隊竝ニ不正規軍隊之ナリ右兩軍隊ノ兵數ヲ概算スルハ至難ニシテ本委員會ハ依然戰鬪ニ從事シツツアル何レノ支那將軍トモ會見スルヲ得ザリシヲ以テ下記情報ノ確實性ニ就キ留保ヲ爲スノ必要アリ自然支那當局ハ滿洲ニ於テ今尙日本軍ニ對スル抵抗ヲ持續シツツアル軍隊ニ關スル正確ナル情報ヲ與フルヲ欲セズ他方日本當局ハ自己ニ抵抗ヲ續ケツツアル部隊ノ數及戰鬪價値ヲ最小限度ニ測定セントスル傾向アリ

舊東北軍ノ殘黨

舊東北軍ノ殘黨ハ全ク吉林黑龍江兩省ニ於テノミ之ヲ看ル千九百三十一年末錦州ノ周圍ニ行ハレタル軍隊ノ改編ハ此等ノ總テノ部隊ガ其ノ後長城內ニ撤退シタルヲ以テ永續セザリキ然レドモ千九百三十一年九月以前松花江地方及東支鐵道沿線ニ駐屯シタル支那正規軍隊ハ未ダ曾テ日本軍ト激戰ヲ交ヘタルコトナク從來日本及「滿洲國」ノ軍隊ニ對シ多大ノ困惑ヲ與ヘ且今尙與ヘツツア

ル不期戰ヲ繼續ス馬占山、丁超、李杜ノ三將軍ハ此等軍隊ノ指揮者トシテ支那全土ヲ通ジテ盛名ヲ博シタリ右三者ハ曩ニ北滿洲ニ於ケル護路軍若ハ守備軍ノ司令タリシ旅長ナリ恐ラク其ノ麾下ニ在リシ軍隊ノ大半ハ若キ元帥ノ政權崩壞ノ後依然トシテ各其ノ指揮者及支那ニ忠實ナリシモノナラン馬占山軍ノ勢力ハ同將軍ガ既述ノ如ク其ノ節ヲ變ゼルヲ以テ容易ニ測定スルコトヲ得ズ

黑龍江省長トシテ同將軍ハ省軍隊全部ヲ統率シタルガ吾人ニ提示セラレタル其ノ兵數ハ合計七箇旅ヲ算セリ四月以降彼ハ日本及「滿洲國」ニ對シ明ニ反對ノ立場ヲ執レリ呼蘭河、海倫、大黑河間ニ在リテ同將軍ノ有スル兵力ハ日本當局ノ概算ニ依レバ六團卽チ七千乃至八千ナリ丁超及李杜兩將軍ハ舊張學良軍ノ六箇旅ヲ支配シ且爾來同地方ニ於テ更ニ三箇旅ヲ徵募シ假報告書當時日本當局ハ其ノ總兵力ヲ約三萬ト概算シタルモ馬占山將軍ノ軍隊及丁超、李杜兩將軍ノ軍隊ハ四月以降著シク其ノ兵數ヲ減ジ現今敍上ノ概算數以下ナルコト事實ニ近カルベシ後ニ記ス如ク此等ノ兩部隊ハ哈爾賓占領以來日本正規軍ノ集中攻擊ニ依リ大損害ヲ被レリ現在兩軍ハ日本軍ノ如何ナル行動ヲモ阻ム能ハズシテ努メテ平野ニ於テ日本軍ト會戰スルコトヲ回避ス日本軍ハ飛行機ヲ使用スルニ反シ支那軍ガ全然此ノ武器ヲ缺如セルコトハ從來支那軍ノ被リタル損害ノ大半ノ原因タルモノナリ

不正規軍、義勇軍

不正規軍ヲ考慮スルニ當リテハ丁超、李杜兩將軍ノ軍ト協力シツツアル吉林省ノ各種義勇軍ヲ區別スルコト必要ナリ千九百三十二年四月二十九日ノ本委員會假報告書ニ於テハ本委員會ハ第五頁

ニ「義勇軍」ナル題下ニ三種ノ義勇軍及數種ノ小集團ヲ掲ゲタルガ後者ノ一ハ敦化及天寶山間ニ在リテ丁超及李杜兩將軍ノ正規軍隊ト聯絡ヲ保チツツアルモノナリ右一集團ハ此等ノ地域ニ於ケル鐵道及其ノ他交通機關ノ缺如ニ依リ今尚其ノ地位ヲ保持シツツアリ其ノ長タル王德林ハ各種ノ「反滿洲國」軍隊ヲ結合シ之ヲ堅ク其ノ支配下ニ置キ居レリ本集團ハ日本軍（敦化以東ニ於テハ殆ド何等ノ活動ヲ示シ居ラズ）ニ比スレバ殆ド意義ナキモノナルヤモ知レザルモ「滿洲國」軍ニハ對抗シ得ルガ如ク見ヘ吉林省ノ相當廣キ地域ニ於テ其ノ地位ヲ維持シ居レリ王德林ト聯絡ヲ有セシ頃間島地方ヲ大ニ騷擾セシメタル「大刀會」ノ現在ノ活動ニ付テハ何等ノ確證ヲ得ルコト能ハズ他方日本軍ハ右ニ對シ何等重要ナル軍事行動ヲ執ラザリキ

多數ノ所謂路軍及其ノ他ノ支那軍部隊ヲ掲記セル日本側ノ一公式文書本委員會ニ提出セラレタリ右ハ何レモ各二百乃至四百名ヨリ成リ義勇軍ノ小單位ヲ成スモノナリ此等ノ諸軍隊ノ活動區域ハ奉天及安東奉天鐵道ノ附近地域、錦州、奉天及熱河兩省間ノ省境、東支鐵道西部線竝ニ新民屯奉天間ノ地方ニ及ブ斯ノ如ク義勇軍及反吉林軍ノ合シテ占據シ居ル地域ハ滿洲ノ大部分ヲ含ム

八月中旬奉天近郊、南滿洲鐵道ノ南部各地殊ニ海城及營口ニ於テ交戰勃發シタリ日本軍ハ數度苦戰ニ陷リタルモ義勇軍ハ何レノ地ニ於テモ何等重要ナル勝利ヲ得ルコト能ハザリキ滿洲ノ一般狀態ガ近キ將來ニ於テ何等カ變化ヲ見ルコト豫想セラルベキヤ否ヤ疑ハシキガ如キモ本報告書完成ノ際ニハ交戰ハ廣汎ナル地域ニ亘リ繼續セラレ居レリ

支那ニ於ケルト同樣滿洲ニ於テモ匪賊ハ常ニ存在シタリ職業的匪賊ハ政府ノ活動又ハ衰微ニ應ジ

其ノ數或ハ大ト爲リ或ハ小ト爲リテ東三省ノ有ラユル地域ニ存シ其ノ助力ハ政治的目的ノ爲諸黨派ニ依リ利用セラレタリ支那政府ハ本委員會ニ對シ最近二十年又ハ三十年ノ間ニ日本側ノ手先ガ其ノ政治的利益ニ利用スル爲大ニ匪賊ヲ使嗾セル旨述ベタル文書ヲ提出セリ右文書ニハ南滿洲鐵道出版ノ「千九百三十年迄ノ滿洲發展ニ關スル第二回報告書」ノ一節引用セラレアルガ右ニ依レバ附屬地內ノミニ於テ匪賊ノ事件數ハ千九百六年ノ九件ヨリ千九百二十九年ノ三百六十八件ニ增加シタル趣ナリ上述支那側文書ニ依レバ匪賊ハ大連及關東州租借地ヨリノ大規模ナル武器及彈藥ノ密輸入ニ依リ助長セラレタル趣ニシテ例ヘバ有名ナル馬賊頭目凌印清ハ客年十一月所謂獨立自衞軍組織ノ爲武器彈藥其ノ他ヲ供給セラレタル旨確言セラル右自衞軍ハ三人ノ日本人手先ノ助力ニ依リ組織セラレ且錦州攻擊ヲ目的トセルモノナリ右企圖ガ失敗セル後他ノ匪賊頭目ハ同樣ノ目的ノ爲日本側ノ助力ヲ得タルガ日本製ノ一切ノ材料ト共ニ支那官憲ノ手ニ歸セリ

勿論日本官憲ハ滿洲ニ於ケル匪賊ニ關シ別種ノ見解ヲ有シ居レリ日本官憲ニ依レバ匪賊ノ存在ハ全然支那政府ノ無能ニ基クモノナリ又日本官憲ハ張作霖ハ必要ノ場合ニ於テハ匪賊ハ容易ニ兵卒ニ改編セラレ得ベシト思考シタルヲ以テ或程度迄其ノ領土內ニ匪賊團ノ存スルヲ支持シタリト稱ス日本官憲ハ張學良政府及其ノ軍ノ完全ナル打倒ガ大ニ滿洲ニ於ケル匪賊數ヲ增加セシメタル事實ヲ肯定スル一方日本軍ガ滿洲ニ在ル結果二三年以內ニ主要ノ匪賊團ハ掃蕩セラレ得ベシト主張ス日本官憲ハ「滿洲國」警察及各部落ニ於ケル自衞團ノ組織ガ匪賊ノ根絕ニ寄與スル所アルベキコトヲ望ミ居レリ現在ノ匪賊ノ多數ハ元來良民ニシテ其ノ財產ヲ總テ失ヒタル爲現在ノ職業ニ投

ズルニ至レルモノト信ゼラレ居レリ農業ヲ再ビ營ム機會アラバ此等ノ匪賊ハ從前ノ平和的生活樣式ニ復歸スベキコト望マレ居レリ

第五章

上海

上海事變（地圖第十一ヲ見ヨ）

一月末上海ニ於テ戰鬪勃發セリ二月二十日迄ノ本事變ノ經過概要ハ聯盟ノ任命セル領事團委員會ニ依リ既ニ報告セラレタリ本委員會ガ二十九日東京ニ到著セル時戰鬪ハ尙進行中ニシテ上海ニ於ケル日本政府ノ武力干涉ノ起因、動機及結果ニ關シ本委員會ハ同政府要員ト數度討議ヲ行ヒタリ吾人ガ三月十四日上海ニ到著セル時ハ戰鬪終了シ居リタルモ休戰交涉ハ難關ニ在リタリ恰モ此ノ時ニ當リ本委員會ガ到著シタルコトハ機ヲ得タルモノニシテ順調ナル雰圍氣ヲ助成セシヤモ知レズ吾人ハ最近ノ敵對行爲ニ基ク緊張セル感情ヲ諒解シ且本紛議ニ關聯スル困難及爭點ノ雙方ニ付直接ニシテ鮮明ナル印象ヲ獲ルコトヲ得タリ本委員會ハ領事團委員會ノ事業ヲ引繼ギ又ハ上海ニ發生セル最近ノ出來事ニ付特ニ研究スベキ旨ノ訓令ヲ受ケタルコトナク事實吾人ハ支那政府ニ於テハ本委員會ガ上海ニ於ケル事態調査ノ爲其ノ滿洲ニ赴クコトヲ延引スベシトノ如何ナル提議ニモ反對ノ意向ヲ表示シタル旨國際聯盟事務總長ヨリ通報ニ接シ居リタリ

吾人ハ上海事變ニ關スル支那及日本兩國政府雙方ノ意見ヲ聽取シ又本問題ニ關スル多數ノ文獻ヲ雙方ヨリ接受セリ尙吾人ハ荒廢地域ヲ視察シ日本陸海軍將校ヨリ最近ノ軍事行動ニ關スル陳述ヲ聽取シタリ又個人ノ資格ニ於テ吾人ハ上海在住ノ何人ノ記憶ニモ新シキ事實ニ關シ各種ノ意見ヲ代表スル人士ト會談セリ然レドモ吾人ハ委員會トシテハ正式ニ上海事件ヲ調査セシコトナク從テ之ニ關聯スル爭點ニ關シ何等意見ヲ表示セズ然レドモ吾人ハ記錄ノ爲二月二十日以降日本軍隊ノ最後ノ撤收ニ至ル迄ノ軍事行動ノ顚末ヲ記述スベシ

二月二十日以降ノ上海事件ノ記述（地圖第十二ヲ見ヨ）

領事團委員會ノ最終報告書ハ二月二十日日本側ガ江灣及吳淞地方ニ於テ新ナル攻擊ヲ開始シタル旨ノ記述ニテ筆ヲ止メタルハ記憶ノ通リナリ右攻擊ハ其ノ後引續キ行ハレタルニ拘ラズ日本軍ニ何等ノ顯著ナル成功ヲ齎サザリシガ日本軍ハ所謂支那警衞軍ノ一部卽第八十七師及第八十八師ガ今ヤ第十九路軍ト共ニ日本軍ト戰ヒツツアルコトヲ知ルヲ得タリ此ノ事實ハ當該地方ノ地勢ニ基ク困難ト共ニ日本側ヲシテ二箇師團卽チ第十一師團及第十四師團ヲ增派スルコトヲ決定セシメタリ

二月二十八日日本軍ハ支那軍ノ撤退セル江灣ノ西部ヲ占領セリ同日吳淞砲臺及楊子江沿岸ノ諸砲壘ハ再ビ空中及海上ヨリ爆擊及砲擊セラレ爆擊機ハ虹橋飛行場及南京鐵道ヲ含ム全戰線ニ亘リテ活動セリ陸軍ノ最高級指揮官ニ任命セラレタル白川大將ハ二月二十九日上海ニ到著セリ同日以後日本軍司令部ハ著著進捗ノ旨發表セリ江灣地方ニ於テハ日本軍ハ徐徐ニ前進セルガ海軍司令部ハ連日ノ砲擊ノ結果閘北ニ於ケル敵軍ハ退却ノ兆アル旨報ゼリ同日上海ヨリ百哩隔タレル杭州飛行

場ニ對スル空中爆擊行ハレタリ

三月一日前線ノ進擊遲遲タリシヲ以テ日本軍司令官ハ支那軍ノ左翼ヲ奇襲センガ爲七丁口附近ノ楊子江右岸若干距離ノ地點ニ第十一師團ノ主力ヲ上陸セシメ廣汎ナル包圍運動ヲ開始セリ本軍事行動ハ成功シ支那軍ハ日本軍司令官ノ二月二十日附最後通牒中ニ當初要求セル二十キロメートル線外ニ直ニ退却スルノ已ムナキニ至レリ三月三日日本軍ガ空中及海上ヨリ旺ニ爆擊及砲擊後シタル吳淞砲臺ニ入リタルトキ支那軍ハ既ニ撤退シ居リタリ其ノ前日上海南京鐵道ノ崑山驛ノ東七キロメートルノ地點迄爆擊行ハレタルガ右ハ支那軍前線ヘノ援軍ノ輸送阻止ノ爲ナリト稱セラル

三月三日午後日本軍司令官ハ停戰命令ヲ下シ支那軍司令官ハ三月四日同樣ノ命令ヲ發セリ支那側ハ日本第十四師團ガ停戰後三月七日ヨリ同月十七日ノ間ニ上海ニ上陸シ約一箇月後ニ至リ在滿洲ノ日本軍增援ノ爲同地ニ輸送セラレタルコトニ强硬ニ抗議セリ

其ノ間友好諸國及國際聯盟ノ斡旋ニ依リ停戰確保ニ對スル企圖續ケラレ居リタリ二月二十八日英國提督「サー、ハウアッド、ケリー」ハ其ノ旗艦ニ日支兩國代表ヲ接受シ相互ノ同時撤退ヲ基礎トシ且暫行的性質ノ協定提議セラレタルガ右會議ハ商議ノ基礎ニ關スル雙方ノ意見相違ノ爲成功ヲ見ルニ至ラザリキ

二月二十九日國際聯盟理事會議長ハ特ニ「地方的取極ヲ爲スコトヲ條件トシテ戰鬪ノ終局的終了竝ニ確定的停戰ノ爲他ノ關係諸國參加ノ下ニ共同會議」ノ開催方ヲ勸告セリ雙方ハ之ヲ受諾セルモ日本代表ガ (一) 支那軍ハ最初ニ撤退ヲ開始スベク及 (二) 其ノ撤退實行中ナルヲ確メタル上ニテ

日本側ハ撤收スベシ但シ右ハ曩ニ述ベラレ居リタルガ如ク共同租界及租界外擴張道路ヘノ撤收ニ非ズシテ上海ヨリ吳淞ニ及ブ地域ヘノ撤收ナルコトヲ要求セル條件ヲ出セル爲右商議ノ成功ヲ見ルコト不可能ト爲リタリ

三月四日聯盟總會ハ理事會ノ提案ヲ回想シテ (一) 兩國政府ニ停戰ヲ實效的ナラシメンコトヲ要求シ (二) 他ノ關係諸國ニ對シ前項ノ實行ニ關シ情報ヲ總會ニ提出スルコトヲ請求シ且 (三) 停戰ヲ確實ナラシメ及日本軍ノ撤收ヲ規定スル爲取極ノ締結ニ關シ他ノ諸國ノ援助ノ下ニ商議ヲ開始センコトヲ勸告スルト共ニ右商議ノ進行ニ付諸國ヨリ情報ヲ受ケンコトヲ希望セリ

三月九日日本側ハ總會ノ定メタル右諸點ノ基礎ニ依リ商議スルノ用意アル旨述ベタル覺書ヲ英吉利公使ヲ通ジ支那側ニ送付セリ

三月十日支那側ハ同樣英吉利公使ヲ通ジ支那側モ亦右基礎ニ依リ商議スルノ用意アルモ會議ガ確定的停戰及日本軍ノ完全且無條件ナル撤收ニ關スル事項ニ限ラルベキコトヲ條件トスル旨回答セリ三月十三日日本側ハ支那側ノ右留保ハ國際聯盟ノ諸決議ノ意義ヲ變更シ又ハ如何ナル意味ニ於テモ日本側ヲ拘束スルモノト認ムルコトヲ欲セザル旨ヲ通報セリ日本側ハ日支雙方ハ右諸決議ノ基礎ニ於テ會合スベキモノナリト思考セリ

三月二十四日日支停戰會議開カレタリ其ノ間日本陸海軍ノ撤收ハ現實ニ開始セラレタリ三月二十日海軍及航空部隊ハ上海ヲ去リ其ノ結果殘留日本兵力ハ常數ヲ超過スルコト遠カラザルモノト爲レリ日本軍司令部ハ更ニ撤收ヲ行フニ際シ三月二十七日右撤收ハ上述ノ會議又ハ國際聯盟トハ何

等關係ナク單ニ最早上海ニ必要ナラザル部隊ヲ歸還セシメントスル日本帝國參謀本部ノ獨自ノ決定ノ結果ニ過ギザル旨聲明セリ

三月三十日右會議ハ確定的停戰ニ關スル協定前日成立セル旨發表セルモ更ニ難問題發生シ五月五日漸ク完全ナル休戰協定ニ署名シ得ルノ運ビニ至レリ右協定ハ確定的停戰ヲ規定シ正常狀態回復シタル後更ニ取極アル迄支那軍ノ進出ニ對スル一時ノ制限トシテ上海ノ西方ニ一線ヲ劃定シ又一月二十八日前ニ於ケルガ如ク共同租界及租界外擴張道路ヘノ日本軍ノ撤收ヲ規定シタリ但シ日本軍隊ノ數ハ共同租界內ニノミ宿營セシムルニハ多キニ過ギタルヲ以テ共同租界外ノ若干地域ハ當分ノ間包含セラルベキモノト爲リタルガ其ノ後日本軍ハ該地域ヨリ撤收セルヲ以テ此等ノ地域ニ付テハ記述ノ要ナシ亞米利加合衆國、「グレート、ブリテン」、佛蘭西及伊太利ノ友好援助諸國竝ニ兩當事國ノ參加セル共同委員會ハ相互ノ撤收ヲ認證スル爲設置セラレ此ノ委員會ハ又日本軍ヨリ支那警察ヘノ引繼ノ取運ビニモ協力スルコトト爲レリ

支那側ハ右協定ニ二箇ノ條件ヲ附加セリ其ノ第一ハ協定中ノ如何ナル規定モ支那領土內ニ於ケル支那軍ノ行動ヲ永久的ニ制限スルコトヲ意味セザル旨ヲ聲明シ第二ハ日本軍ノ駐屯ノ爲一時設ケラレタル地域ニ於テモ警察ヲ含ム一切ノ地方行政ハ支那官憲ノ手ニ存スベキモノト了解セラルベキ旨ヲ聲明セルモノナリ

本協定ノ條項ハ大體其ノ後主要部分ニ於テ履行セラレタリ撤退地域ハ五月九日及三十日ノ間ニ支那特別警察隊ニ引渡サレタリ但シ此等四地域ノ引渡ハ多少延引ヲ見タリ家屋及工場ヲ所有スル支

上海ニ於ケル支那側ノ抵抗ガ滿洲ノ事態ニ及ボセル影響

那人、鐵道及會社ノ役員其ノ他ノ者ガ撤退地域ニ復歸シ始メタルトキ掠奪、故意ノ破壞及財產喪失ニ關シ多數ノ苦情ガ日本軍事當局ニ提起セラレタルハ寧ロ自然ノコトナリ支那側ニ於テハ賠償ニ關スル全問題ハ將來商議セラルベキモノナリト爲シ死傷及行方不明ノ將卒及人民ノ數二萬四千、物質的損害總額約十五億「メキシコ、ドル」ニ達スト推定シ居レリ租界外擴張道路地域ニ關スル協定草案ハ上海工部局ト大上海ノ支那市區トノ代表ニ依リ頭字署名セラレタルモ右草案ハ未ダ上海工部局又ハ市政府ノ何レヨリモ承認ヲ得ズ工部局ハ領事團ノ意見ヲ求ムル爲之ヲ首席領事ニ移牒セリ

上海事件ハ疑モナク滿洲ニ於ケル事態ニ著シキ影響ヲ及ボセリ日本側ガ容易ニ滿洲ノ大部分ヲ占領シ得タルコト及支那軍ヨリ何等ノ抵抗ヲ受ケザリシコトハ單ニ日本陸海軍側ヲシテ支那軍ノ戰鬪力ガ無視シ得ベキ程ノモノナリト信ズルニ至ラシメタルノミナラズ尙且全支那ヲシテ大ニ意氣ヲ沮喪セシメタリ然ルニ當初ヨリ支那第十九路軍ガ後ニ第八十七師及第八十八師ノ援助ヲ得テ試ミタル頑强ナル抵抗ハ全支那ニ於テ熱狂的歡呼ヲ受ケタルガ當初ノ三千ノ陸戰隊ニ替フルニ日本軍ノ三箇師團及一箇混成旅團ヲ以テスルノ要アルニ至リ六週間ノ戰鬪ノ後遂ニ支那軍ヲ擊退驅逐シタルノ事實ハ支那側ノ士氣ニ深甚ナル印象ヲ與ヘ支那ハ其レ自身ノ努力ニ依リテ救ハレザルベカラズトノ感情擴マレリ日支紛爭ハ全支那人民ニ明確ニ認識セラレ到ル所意見ハ强硬ト爲リ抵抗心增加シテ從前ノ悲觀ハ變ジテ同樣誇大ナル樂觀ト爲ルニ至レリ滿洲ニ於テハ上海ヨリノ報道ハ當時尙日本軍ト戰ヒツツアリシ散在セル支那軍隊ニ新ナル勇氣ヲ與ヘタリ右報道ハ馬占山將軍ノ

南京事件、百三十九年二月十二日

其ノ後ノ抵抗ヲ奬勵シ又世界各地ニ在ル支那人ノ愛國心ヲ刺戟シタリ義勇軍ノ抵抗モ增大セリ此等支那軍ノ討伐ハ捗シキ成功ヲ收メズ或地方ニ於テハ日本軍ハ鐵道沿線ニ陣地ヲ占メ守勢ヲ執リ居リタルガ右鐵道モ屢攻擊ヲ受ケタリ

上海ニ於ケル敵對行爲ニ伴ヒ他ノ數箇ノ事件發生セルガ其ノ一ハ短時間ノ南京砲擊ナリ本事件ハ支那以外ニ於テモ多大ノ輿奮ト驚愕トヲ生ゼシメタルガ右ハ二月一日ノ早夜發生セルモ一時間以上ハ繼續セザリキ本件ハ恐ラク誤解ニ基クモノナランガ支那政府ノ南京ヨリ洛陽ヘノ一時移轉ナル重大結果ヲ招徠セリ

南京事件ノ原因及事實兩者ニ關スル支那側及日本側ノ所說ニハ大ナル懸隔アリ日本側ヨリ吾人ニ提出セラレタル釋明ニアリシガ第一ハ上海ノ戰鬪勃發後支那側ハ獅子山砲臺ヲ擴張シ塹壕ヲ築キ江畔ノ城門及江ノ反對側ニ砲兵陣地ヲ設ケ斯クテ江ニ軍艦ヲ有シ居リタル日本側ニ懸念ヲ生ゼシムルニ足ルガ如キ規模ノ軍事施設ヲ爲セリト謂フニ在リ第二ハ支那新聞ハ上海ニ於ケル支那側ノ勝利ノ虛報ヲ擴メ南京ノ支那人ヲ大ニ興奮セシメ其ノ結果日本側ノ言フ所ニ依レバ日本人雇傭ノ支那人ハ其ノ職ヲ去ル樣脅迫セラレ支那商人ハ領事館員及軍艦乘組員ヲ含ム日本在留民ニ食料品スラ販賣ヲ拒絕スルニ至レリト謂フニ在リ

支那側ハ此等ノ苦情ニ對シ何等批評ヲ加ヘズ支那側ハ當時ニ於ケル一般ノ不安及緊張セル空氣ハ日本側ガ上海事件發生後其ノ軍艦數ヲ二隻ヨリ五隻ニ次デ七隻（日本側當局ハ右數ヲ六隻ナリトシ三老齡砲艦及三驅逐艦ナリトス）ニ增加シタルノ事實竝ニ右諸軍艦ノ司令官ハ水兵若干ヲ上陸

セシメ之ヲ日本領事館員及全日本居留民ガ「ハルク」ニ避難シ居リタル日清汽船會社埠頭ノ前ニ衞兵トシテ配置セルノ事實ニ基クモノナルコトヲ主張セリ上海事件ノ記憶尙新ナル際斯カル措置ハ既ニ興奮セル南京民衆ノ心ニ同樣ノ事件發生セズヤトノ恐怖ノ念ヲ充サシメタルベキコトハ蓋シ當然ナリ

吾人ハ南京警察署長ガ外交部ニ提出セル報告書ニ依リ南京ノ自國民及外國人ノ保護ニ全責任ヲ有スル南京當局ガ日本陸戰隊ノ上陸ニ對シ大ニ忿懣ヲ懷キ居リタルコトヲ知レリ南京當局ハ日本副領事ニ照會スル所アリタルモ同副領事ハ右ニ關シ何等ノ處置ヲ執リ得ザル旨答ヘタリ同時ニ上記埠頭ノ所在地ニシテ軍艦ノ碇泊シ居リタル下關ノ地方警察署ニ對シ能フベクンバ同方面ニ於ケル支那人及日本人間ノ殊ニ夜間ニ於ケル如何ナル接觸ヲモ阻止スル樣特別ノ訓令發セラレタリ日本側公報ニ依レバ日本人避難民ハ一月二十九日以後日清汽船會社ナル名稱ノ一汽船內ニ收容セラレ其ノ多數ハ上海ニ送ラレタル由ナリ日本側ハ二月一日早夜明ニ獅子山砲臺ヨリ突如三發ノ發砲アリタルコトヲ確言シ居レリ右ト同時ニ支那正規兵ハ河岸ニ在リタル日本海軍衞兵ニ向ヒテ發砲シ二名ヲ負傷セシメタルガ其ノ內一名ハ死亡セリ之ニ對シ應射シタルガ右ハ衞兵ノ上陸地點眞近ノ箇所ニノミ向ケラレ岸ヨリノ發砲止ムヤ直ニ停止セリ以上ハ日本側ノ述ブル所ナルガ他方支那側ハ之ニ對シ發砲ノ事實ヲ强ク否定スルト共ニ日本側ヨリ砲臺、下關停車場及其ノ他ノ場所ニ合計八箇ノ砲彈發セラレ且機關銃及小銃ノ射擊行ハレタル旨竝ニ右ノ間探照燈ガ岸ニ向ケラレタル旨主張ス右ハ住民ニ多大ノ恐慌ヲ生ゼシメ住民ハ急遽市ノ內部ニ逃レタルモ死傷者ナク物質的損害

モ大ナラザリキ

本事件ハ興奮セル支那人民ガ臆斷セル上海ノ戰捷ヲ祝シテ鳴ラシタル爆竹ニ端ヲ發シタリト謂フコトモ亦アリ得ベキコトナリ

第六章

「滿洲國」

第一節 「新國家」建設ノ段階

日本軍奉天占領ノ結果招徠セル混亂狀態

第四章ニ於テ說述セル如ク千九百三十一年九月十八日事件ノ結果奉天市及遼寧(奉天)省ノ省行政ハ完全ニ破壞セラレ延テ其ノ他ノ二省ノ行政ニ至ル迄程度ハ少キモ影響ヲ蒙リタリ全滿洲ノ政治的中心ナルノミナラズ更ニ大連ニ次デ南滿洲ノ最重要ナル商業的中心タル奉天ニ對スル攻擊突然ナリシ爲支那人民ノ間ニ恐慌ヲ惹起スルニ至レリ高位ノ官吏竝ニ敎育界及商業界ノ主要人物ノ大多數ニシテ逃亡シ得ル事情ニ在リシモノハ直ニ家族ト共ニ逃亡セリ九月十九日後ノ數日間ニ亘リ十萬人以上ノ支那人住民ハ北平奉天鐵道ニ依リ奉天ヲ逃亡シタルガ去リ得ザルモノハ多ク潛匿セリ警察官ニ加フルニ監獄看守人ニ至ル迄影ヲ潛メタリ奉天ニ於ケル市、縣及省ノ行政ハ完全ニ崩壞シ電燈、水其ノ他ヲ供給スル公共事業會社、乘合自動車及市街電車竝ニ電話及電信業務ハ一

奉天市ノ秩序及民政ノ復活

切停止スルニ至レリ銀行及商店ハ閉鎖セリ

直ニ必要ヲ感ジタルハ市政府ノ組織及市ノ正常市民生活ノ復活ナリシガ右ハ日本人ニ依リ著手セラレ迅速且有效ニ實施セラレタリ土肥原大佐ハ奉天市長ニ就任シ三日以內ニ正常市政ハ復活セラレタリ數百ノ警察官及監獄看守人ノ大部分ハ省主席臧式毅將軍ノ助力ニ依リ復歸セシメラレ公共事業ノ業務ハ回復セリ日本人ヲ過半數トスル非常時委員會ハ土肥原大佐ヲ援助シ同大佐ハ一箇月間其ノ職ニ留マレリ十月二十日市政府ノ實權ハ趙欣伯博士(十一年間日本ニ留學シ東京大學ノ法學博士ノ稱號ヲ有スル法律家)ヲ市長トスル資格アル一支那人團體ニ復歸セリ

省政府ノ再組織

(一)遼寧省

次ノ問題ハ東三省ノ各省行政ヲ再組織スルニ在リタリ右事業ハ遼寧省ニ於テハ他ノ二省ニ比シ一層困難ナリキ是レ奉天ハ同省行政ノ中心ニシテ有力者ノ大部分ハ逃亡シ且暫時ハ支那側ノ一地方行政錦州ニ於テ存續シタルヲ以テナリ故ニ再組織ガ完全ニ成就セルハ三箇月後ナリキ九月二十日當時遼寧省政府主席タリシ臧式毅中將ハ先ヅ交涉ヲ受ケ支那中央政府ヨリ獨立セル省政府ノ組織ニ關シ勸誘セラレタルガ之ヲ拒絕セリ次デ同中將ハ逮捕セラレ十二月十五日釋放セラレタリ

臧式毅將軍ノ獨立省政府組織拒絕

臧式毅將軍ガ獨立政府樹立ニ關スル援助ヲ拒絕シタル後他ノ有力ナル支那人官吏袁金凱氏交涉ヲ受ケタルガ同氏ハ元ノ省長ニシテ東北政治委員會ノ副委員長ナリキ日本軍事當局ハ袁金凱氏及其ノ他八人ノ支那人住民ニ「地方維持委員會」ヲ組織センコトヲ勸誘セリ同委員會ハ九月二十四日組織セラレタル旨聲明セラレタリ日本ノ新聞ハ直ニ之ヲ以テ分離運動ノ第一步ト爲シ稱讚セルガ十月五日袁金凱氏ハ斯カル意思ナキコトヲ公然聲明セリ袁氏曰ク右委員會ハ「舊政府崩壞後治安

袁金凱氏ヲ委員長トスル「地方維持委員會」ノ設置、九月二十五日

財政廳ノ開設、十月十九日

維持ノ爲實現セラレタルモノニシテ逃亡者ノ救助及金融市場ノ回復ヲ援助シ且其ノ他ノ事務ニ當リタルガ右ハ全ク單ニ不必要ナル困難ヲ避ケシメンガ爲ナリキ然レドモ同委員會ハ省政府ヲ組織シ又ハ獨立宣言ヲ爲スノ意思ハナカリキ」ト

十月十九日右地方維持委員會ハ財政廳ヲ開設シ支那人官吏ヲ輔佐スル爲日本人顧問任命セラレタリ財政廳長ハ同廳ノ決定ニ對シ效力ヲ發セシムルニ先ダチ軍事當局ノ承認ヲ得ルコトヲ要シタリ各縣內ニ於ケル稅捐局ハ日本憲兵隊又ハ他ノ機關ニ依リ支配セラレタリ場合ニ依リテハ右稅捐局ハ每日憲兵隊ノ檢閱ニ供スル爲帳簿ヲ提出スルコトヲ要シ憲兵隊ノ承認ハ警察、司法、敎育等公共ノ目的ニ要スル一切ノ金錢ノ支出ニ對シ必要ナリキ錦州ニ於ケル「敵對者」ニ向テノ稅金ノ送達ハ直ニ日本官憲ニ報告スルコトトセラレタリ之ト同時ニ財政整理委員會組織セラレ其ノ主要事務ハ租稅制度ヲ改組スルニ在リタリ日本側代表者及支那人同業組合代表者ハ租稅ニ關スル論議ニ參加スルコトヲ許サレタリ長春ニ於ケル「外交部」ヨリ本委員會ニ對シ送付セラレタル千九百三十二年五月三十日附「滿洲國獨立史」中ニ於ケル陳述ニ依レバ前述稅制審議ノ結果千九百三十一年十一月十六日附ヲ以テ六稅ノ廢止、其ノ他ノ四稅ノ半減、尙其ノ他ノ八稅ノ地方政府ヘノ移讓及法律的根據ナキ一切ノ課稅ヲ禁止スルコトヲ決定セリ

實業廳ノ設立、十月二十一日

「遼寧省自治公署」ト改稱セル前揭地方維持委員會ニ依リ十月二十一日實業廳開設セラレタリ日本軍事當局ノ承認ヲ求メテ之ヲ得タリ而シテ多數ノ日本人顧問任命セラレタリ總テ命令ヲ發スルニ先ダチ同廳長ハ日本軍事當局ノ承認ヲ得ルコトヲ必要トセラレタリ

東北交通委員會

最後ニ遼寧自治公署ハ新ニ東北交通委員會ヲ組織シタルガ同委員會ハ漸次遼寧省ノミナラズ又吉林及黑龍江ニ於ケル諸鐵道ノ管理ヲ爲スニ至レリ同委員會ハ十一月一日遼寧自治公署ヨリ分離セリ

十一月七日及十一月十日ノ聲明

十一月七日遼寧自治公署ハ臨時遼寧省政府ニ變形シ聲明書ヲ發表シテ舊東北政府及南京中央政府トノ關係ヲ斷絕セリ臨時遼寧省政府ハ同省內ノ各地方政府ニ對シ其ノ發布セル命令ヲ遵守スベキコトヲ要求シ爾後省政府トシテノ權力ヲ行使スベキ旨發表セリ十一月十日開廳式公式ニ擧行セラレタリ

最高諮議會ノ任命

自治公署ガ臨時遼寧省政府ニ改造セラルルト同時ニ最高諮議會ナルモノ于冲漢氏ノ委員長ノ下ニ創設セラレタリ同氏ハ從來地方維持委員會ノ副委員長ナリキ于氏ハ最高諮議會ノ目的ヲ次ノ如ク發表セリ卽チ秩序ノ維持、惡稅ノ廢止ニ依ル施政ノ改善、租稅ノ輕減竝ニ生產及販賣組織ノ改善之ナリ同會ハ更ニ臨時省政府ヲ指揮監督シ地方民衆ノ傳統及現代ノ必要ニ準據シ省自治政府ノ發展ヲ助成スベキモノナリ同會ハ總務課、調査課、儀禮課、指導課、監査課及自治指導部ヨリ成レリ殆ド一切ノ主要職員ハ日本人ナリキ

十一月二十日省名ハ奉天ト改チ奉天ト改ム、十二月十五日臧式毅將軍ノ就任

十一月二十日省名ハ奉天ト改定セラレタルガ右ハ千九百二十八年國民主義支那トノ合同以前ノ名稱ナリ又十二月十五日袁金凱氏ハ臧式毅將軍ト交替セリ同將軍ハ監禁ヲ釋カレ奉天省省長ニ就任セリ

(二)吉林省

吉林省ニ省政府ヲ樹立スル事業ハ遙ニ容易ナリキ二十三日第二師團長多門少將ハ張作相將軍ノ不

在中省政府ノ首長ヲ代理セル熙洽中將ト會見シ省政府ノ首位タランコトヲ勸誘セリ右會見後九月二十五日熙洽將軍ハ許多ノ政府機關及公共團體ヲ召集會合セシメタルガ日本陸軍將校モ亦參加セリ新臨時政府樹立ノ考案ニ對シ何等反對ノ表明ナク九月三十日右趣旨ノ宣言發布セラレタリ次デ吉林省新政府ニ關スル組織法公布セラレタリ政府ノ委員制度ハ廢止セラレ熙洽省長ハ政府ノ行爲ニ對シ全責任ヲ負ヘリ數日後同氏ニ依リ新政府ノ主要官吏任命セラレ其ノ後若干ノ日本人職員追加セラレタリ總務廳長ハ日本人ナリキ縣ニ於テモ若干ノ行政改革及人事ノ移動アリタリ四十三縣ノ内十五縣ハ改組セラレタルガ其ノ結果支那人縣吏ノ罷免アリタリ其ノ他十縣ニ於ケル縣吏ハ熙洽將軍ニ忠誠ヲ宣明シタル後就職ヲ持續セリ其ノ他ノ諸縣ハ舊政權ニ忠實ナル支那將領ノ下ニ依然留マルカ又ハ鬪爭各派ニ對シ中立ヲ保チタリ

(三)東支鐵道ノ特別行政區

特別區行政長官張景惠中將ハ日本人ニ親善ナリキ舊政權ハ特別區其レ自體内ニ於ケル鐵道守備隊及吉林、黑龍江兩省ニ於ケル相當多數ノ軍隊ニ尙號令シ得タルニ對シ同氏ハ何等軍隊ノ背景ヲ有セザリキ九月二十七日同氏ハ哈爾賓ニ於ケル事務所ニ於テ會合ヲ催シ特別區ノ非常時委員會ノ組織ヲ論議セリ同委員會ハ張將軍ヲ委員長トシ其ノ他八人ノ委員ヨリ成リ其ノ内ニハ王瑞華將軍及後ニ千九百三十二年一月熙洽將軍ニ敵對シテ「反吉林」軍ノ指揮官ト爲レル丁超將軍ヲ含メリ十一月五日張作相部下ノ諸將官ノ指揮ニ依ル反吉林軍ハ哈爾賓ニ於テ新ニ吉林省政府ヲ樹立セリ千九百三十二年一月一日張景惠將軍黑龍江省長ニ任命セラルルヤ省長ノ資格ニ於テ一月七日同省ノ獨立ヲ宣言セリ一月二十九日丁超將軍ハ行政長官ノ官廳ヲ占領シ張將軍ヲ其ノ屋内ニ監禁セリ張

(四)黑龍江

將軍ハ日本軍ガ北上シテ丁超將軍擊退後二月五日哈爾賓ヲ占領スルヤ再ビ自由ト爲レリ爾來日本ノ勢力ハ特別區内ニ益擴大スルニ至レリ

黑龍江省ニ於テハ前章ニ於テ說述セル如ク張海鵬及馬占山兩將軍ノ抗爭ニ因リ一層複雜セル形勢ヲ生ジタリ十一月十九日日本軍ノ齊齊哈爾占領後常例ノ形式ノ自治會ナルモノ設立セラレタルガ人民ノ意思ヲ代表スト稱セラルル同會ハ特別區ノ張景惠將軍ニ對シ黑龍江省長ヲ兼任センコトヲ勸誘セリ然レドモ哈爾賓附近ノ形勢尙依然トシテ不安定ニシテ馬占山將軍トノ間ニ確定協定成立セザリシニ依リ右勸誘ハ千九百三十二年一月初ニ至ル迄受諾セラレザリキ其ノ時ニ於テモ馬占山將軍ノ態度ハ暫時曖昧ナリキ同將軍ハ二月丁超將軍ガ敗戰スル迄之ト相提携シ其ノ後日本側ト和睦シ張將軍ノ掌中ヨリ黑龍江省長ノ職ヲ受領シタルガ次デ他ノ省長ト共ニ新國家ノ建設ニ協力セリ一月二十五日齊齊哈爾ニ於テ自治指導委員會設置セラレ他ノ省ト同一形式ノ省政府漸次成立スルニ至レリ

(五)熱河

熱河省ハ從來滿洲ニ於ケル政治的變動ニ對シ超然タル態度ヲ維持シ來レリ熱河ハ内蒙古ノ一部分ナリ目下三百萬以上ノ支那人移民同省内ニ居住シ漸次遊牧蒙古人ヲ北方ニ驅逐シツツアルガ蒙古人ハ依然トシテ傳統的部族又ハ旗組織ノ下ニ生活ス約百萬ヲ數フル此ノ種蒙古人ハ奉天省ノ西部ニ居住スル蒙古旗人ト或程度ノ關係ヲ保持シ來レリ奉天省及熱河省ノ蒙古人ハ「盟」ヲ組織シ居リタルガ其ノ内最有力ナルモノヲ哲里木盟ト爲ス哲里木盟ハ獨立運動ニ參加セルガ從來屢支那ノ支配ヨリ免レント試ミ來レル「バルガ」地方卽チ黑龍江省西部ノ呼倫貝爾ノ蒙古人モ亦同運動ニ

參加セリ蒙古人ハ容易ニ支那人ト同化セズ彼等ハ自尊心强キ人種ニシテ皆成吉斯汗ノ偉業及蒙古武人ノ支那征服ヲ記憶シ居レリ彼等ハ支那ノ君臨ヲ憤慨シ特ニ支那人移民ノ來住ヲ憤慨ス蓋シ右移住ニ依リ蒙古人ハ漸次自己ノ領土ヨリ驅逐セラレ居レバナリ熱河省ノ昭烏達及卓索圖ノ兩盟ハ奉天省ノ各旗ト聯絡ヲ取リ居レルガ後者ハ今ヤ委員會ニ依リ支配セラレ居レリ熱河省ノ省長湯玉麟將軍ハ九月二十九日同省ニ對スル全責任ヲ執リ滿洲ニ於ケル同僚ト聯絡ヲ保チ來リタル趣ナリ三月九日ノ「滿洲國」建國ニ當リ熱河省ハ新國家ニ包容セラレタルガ實際ニ於テハ同省政府ハ何等決定的措置ヲ執ルコトナカリキ同省ニ於ケル最近ノ事件ニ付テハ第四章ノ末尾ニ於テ言及スル所アリタリ

獨立「國家」ノ創立

叙上ノ如ク各省ニ設立セラレタル地方自治政府ハ次デ一ノ別個獨立セル「國家」ニ結合セリ右事實完成ノ容易ナリシコト及右事實完成後之ニ對スル支那人ノ支持ニ關シテ提出セラレ得タル證據ノ實質ヲ理解センガ爲ニハ或場合ニハ强味ト爲リ他ノ場合ニハ弱點ト爲ル支那社會生活ノ特徴ヲ考察スルコト必要ナリ既ニ第一章ニ於テ述ベタルガ如ク支那人ノ認ムル共同生活上ノ義務ハ國家ニ對スルヨリハ寧ロ家族、地方又ハ個人ニ對スルモノナリ西洋ニ於テ理解サルルガ如キ愛國心ハ支那ニ於テハ今日漸ク感得セラレ始メタルニ過ギズ同業組合、結社、盟、軍隊等皆或個人的指導者ニ從フヲ例トス故ニ說得又ハ强制ニ依リテ或特定ノ指導者ノ支持ヲ得ルトキハ右指導者ノ全勢力範圍内ノ追從者ノ支持モ亦自ラ得ルコトト爲ルナリ事件ニ關スル前揭ノ記述ハ支那人ノ斯カル特徴ガ各省政府ノ組織ニ如何ニ有效ニ利用セラレタルカヲ示スモノニシテ前述ノ少數ノ個人ノ助

力ハ最終ノ段階ヲ完成スル爲ニ用ヒラレタリ

自治指導部

獨立實現ニ主トシテ與リテ力アリタルモノハ奉天ニ本部ヲ有シタル自治指導部ナリ信憑スベキ證人ガ本委員會ニ對シテ陳述シタル所ニ依レバ右自治指導部ハ日本人ニ依リ組織セラレ且部長ハ支那人ナルモ大部分ノ職員ハ日本人ニ依リ充タサレ關東軍司令部第四課ノ機關トシテ活動シタル趣ナリ而シテ同部ノ主タル目的ハ獨立運動ヲ促進スルニ在リタリ右本部ノ指揮監督ノ下ニ奉天省各縣ニ地方自治執行委員會組織セラレタリ此等ノ各縣ニ對シ本部ハ其ノ有スル監督員、指導員及講師ヨリ成ル多數ノ且經驗ニ富メル人員中ヨリ必要ニ應ジ部員ヲ派シタルガ其ノ多數ハ日本人ナリキ尙本部ハ其ノ編輯發行セル新聞ヲ利用シタリ

在奉天自治指導部ノ布告、一月七日

右本部ヨリ發セラレタル訓令ノ性質ハ同部ガ一月一日附ヲ以テ同月七日早クモ發布シタル布告ニ依リ明ナリ同布告ハ東北ハ今ヤ滿洲及蒙古ニ於テ新獨立國家ノ建設ノ爲一大民衆運動ヲ遲滯ナク起スノ必要ニ直面セリト告ゲ居レリ同布告ハ尙奉天省各縣ニ於ケル其ノ事業ノ發展ノ狀ヲ叙シ且奉天省ノ爾餘ノ各縣更ニ進ンデハ奉天以外ノ各省ニ對シ其ノ活動ヲ擴張スル爲ノ方案ヲ概說シタリ而シテ更ニ布告ハ東北民衆ニ對シ張學良ヲ打倒シ自治會ニ加入シ清廉ナル政府ヲ設立シ人民ノ生活狀態ヲ改善スルガ爲ニ協力スベシト訴ヘ次ノ語ヲ以テ結ベリ「東北ノ諸組織ヨ團結セヨ、新國家ヘ、獨立ヘ」右布告ハ五萬枚頒布セラレタリ

一月中ニ於ケル部長ノ方案

尙一月中ニハ早クモ自治指導部部長于冲漢氏ハ省長臧式毅ト共ニ新「國家」ニ對スル方案ヲ作リツツアリタルガ右新國家ハ二月十日樹立セラルベキ旨報ゼラレタリ然ルニ一月二十九日哈爾賓ニ

於ケル騷擾及丁超トノ戰鬪中馬將軍ノ態度不明ナリシコトハ當時右準備ノ進行ヲ一時延期セル主ナル理由ナリシガ如シ

奉天會議、二月十六日—十七日

其ノ後丁超ノ敗退後張景惠中將ト馬將軍トノ間ニ商議ノ結果二月十四日協定成リ之ニ依リ馬將軍ハ黑龍江省省長ニ就任スルコトト爲レリ新國家ノ基礎ヲ協定スベキ會議ハ二月十六日及十七日奉天ニ於テ開カレタリ東三省各省長及特別區長官竝ニ從來一切ノ準備事業ニ於テ重要ナル役ヲ勤メ來レル趙欣伯博士等皆自ラ出席セリ

最高行政委員會、二月十七日

右五人ノ會合ニ於テ新國家ヲ樹立スベキコト、一時東三省及特別區ニ對スル最高權力ヲ行使スベキ東北行政委員會ヲ組織スベキコト竝ニ最後ニ右最高委員會ハ遲滯ナク新國家ノ建設ノ爲必要ナル一切ノ準備ヲ爲スベキコト決議セラレタリ會議ノ第二日ニハ二人ノ蒙古王族出席シタルガ其ノ一人ハ黑龍江省西部ノ「バルガ」區域（呼倫貝爾）ヲ代表シ他ノ一人卽チ哲里木盟ノ齊王ハ殆ド總テノ旗ヲ代表シタルガ右諸旗ハ同王ヲ他ノ如何ナル指導者ヨリモ尊敬シ居レリ

同日最高行政委員會組織セラレタリ其ノ委員ハ委員長張景惠中將、奉天、吉林、黑龍江及熱河ノ各省省長竝ニ蒙古地方代表齊王及凌陞王ナリ同委員會最初ノ諸決定ハ次ノ如シ卽チ新「國家」ニ共和制ヲ採用スルコト、構成各省ノ自治ヲ尊重スルコト、行政長官ニ「執政」ノ稱號ヲ與フルコト、四省省長及特別區長官、全旗代表齊王及黑龍江省呼倫貝爾代表貴福公ノ署名スベキ獨立宣言ヲ發スルコトナリ關東軍司令官ハ同夜「新國家ノ諸首腦者」ノ爲公式ノ晩餐會ヲ催シタルガ同司令官ハ右諸首腦者ニ對シ其ノ成功ヲ祝スルト共ニ必要ノ際ニハ援助ヲ與フベキ旨確言スル所アリタ

獨立宣言、二月十八日

リ

獨立ノ宣言ハ二月十八日發布セラレタリ右宣言ハ永遠ノ平和ヲ享受セントスル人民ノ熱烈ナル願望及人民ニ依リ選定セラレタリト稱セラルル各省長ガ右人民ノ願望ヲ充タスベキ義務ニ言及セリ宣言ハ新國家樹立ノ必要ニ言及シ且東北行政委員會ハ此ノ目的ノ爲設置セラレタル旨言明シ今ヤ國民黨及南京政府トノ關係破棄セラレタルヲ以テ人民ハ善政ヲ享受スベシト約束シタリ同宣言ハ通電ヲ以テ滿洲各地ニ發送セラレタリ馬省長及熙洽省長ハ次デ夫々其ノ省首都ニ歸還セルガ代表ヲ任命シテ臧式毅省長、張景惠長官及趙欣伯市長ト會合セシメ以テ該方案ノ細目ヲ決定セシメタリ

新國家ニ對スル方案

二月十九日此ノ團體ニ依リテ開カレタル其ノ後ノ會合ニ於テ一共和國ヲ樹立スルコト、憲法中ニ於テ權力分立主義ヲ制定スルコト及前宣統帝ニ執政タランコトヲ請フベキコトヲ決定セリ次ノ數日中ニ於テ首都ハ長春トスルコト新政ノ年號ハ「大同」（大調和）トスルコトヲ決定シ尙國旗ノ圖案ヲ確定セリ二月二十五日右諸決定ハ熱河省ヲ含ム各省政府竝ニ呼倫貝爾及哲里木、昭烏達、卓索圖諸盟ノ蒙古行政諸官署ニ通告セラレタリ右ノ內最後ニ揭ゲタル諸盟ハ熱河ニ設立セラレタルモノニシテ從テ既述ノ如ク該省政府主席ノ意ニ反スル何等ノ措置ヲ執ルコト能ハザリキ

國家建設促進運動

獨立ノ宣言及新國家方案ノ發表後、自治指導部ハ民衆支持ノ表明ヲ組織化スル上ニ於テ指導的地位ニ就キタリ同部ハ「新國家建設促進」ノ爲ノ諸結社組織ニ與リテ力アリタリ同部ハ全奉天省各縣ニ於ケル其ノ支部卽チ自治執行委員會ニ訓令シテ能フ限ノ一切ノ手段ヲ盡シテ獨立運動ヲ强化

促進セシメタリ此ノ結果新ナル諸「促進會」ハ自治執行委員會ヲ中心トシテ急速ニ設立セラレタリ

二月二十日以後此等ノ新ニ組織セラレタル「促進會」ハ活動ヲ開始セリ「ポスター」ハ準備セラレ標語ハ印刷セラレ書籍及小冊子ハ發行セラレ　東北文化半月刊　ハ發行セラレ赤聯配布セラレタリ印刷物ハ宣傳事業ニ對スル助力ヲ求ムル爲郵便ニ依リテ多數ノ名士ニ發送セラレタリ奉天ニ於テハ支那商務總會ハ聯ヲ配布シテ戸口ニ貼付セシメタリ

獨立ニ對スル民衆ノ贊意ノ組織化

同時ニ各縣ノ自治執行委員會ハ地方紳士並ニ商業、農業、工業及教育諸團體ノ會長又ハ顯著ナル會員等ノ如キ人民代表ノ會議ヲ召集セリ加フルニ民衆大會ハ組織セラレ行列又ハ游行ハ縣首都ノ主要街路ニ行ハレタリ一般人民又ハ特殊ノ團體ノ希望ヲ表明セル決議ハ地方有力者會議及幾千人ノ出席者アリト稱セラルル民衆大會ヲ通過シタリ此等ノ決議ハ勿論在奉天自治指導部ニ送達セラレタリ

新國家ニ贊成スル奉天決議、二月二十八日

促進會及自治執行委員會ガ奉天省ノ各縣ニ於テ活動ヲ續ケタル後新國家樹立ニ對スル民衆ノ一般的希望ノ具體的證據ヲ示ス爲奉天ニ於テ省大會組織セラレタリ斯クテ二月二十八日會合ハ開催セラレタルガ右會合ニハ同省ノ各縣官吏全部及殆ド一切ノ階級及團體ノ代表者ヲ網羅セル約六百人ノ出席者アリタリ同會合ハ一宣言ヲ發シテ舊壓制軍閥ノ沒落及新時代ノ黎明ニ對スル奉天省千六百萬住民ノ喜悅ノ情ヲ表明セリ奉天省ニ關スル限ニ於テハ右運動ハ斯クシテ終結ヲ告ゲタリ

吉林省ニ於ケル獨立運動

吉林省ニ於ケル新國家贊助運動モ亦組織セラレ且指導セラレタリ奉天ニ於ケル二月十六日ノ會議

ニ出席中熙洽省長ハ其ノ管下ノ各縣官吏ニ對シ通電ヲ發シテ新國家ガ行フベキ政策ニ付テノ輿論ニ關シ報告ヲ得ンコトヲ求メタリ此等ノ各縣官吏ハ各自ノ縣ニ於ケル諸同業組合及結社ニ對シ充分ノ指導ヲ與フベキ旨命ゼラレタリ右通電ニ對スル直接ノ反響トシテ獨立運動ハ各地ニ擡頭セリ二月二十日吉林省政府ハ國家建設委員會ヲ組織シタルガ其ノ目的ハ各種團體ノ獨立運動ヲ指導スルニ在リタリ二月二十四日在長春人民協會ハ民衆大會ヲ開催セルガ約四千名ノ出席者アリタル旨報ゼラレタリ彼等ハ新國家建設ノ促進ヲ要求セリ同樣ナル會議ハ其ノ他ノ地方及哈爾賓ニ於テモ亦開催セラレタリ二月二十五日全省民衆大會吉林市ニ於テ開催セラレタリ約一萬人ノ出席者アリタル旨報ゼラレタリ二月二十八日奉天ニ於テ可決セラレタルト同樣ノ一宣言適當ニ發セラレタリ

黑龍江省ニ於テ

黑龍江省ニ於テハ奉天自治指導部重要ナル役ヲ勤メタリ一月七日張景惠將軍ハ黑龍江省長ノ職ヲ受諾スルヤ同省ノ獨立ヲ宣言セリ

前記奉天自治指導部ハ黑龍江省ニ於ケル右促進運動ヲ援助セリ二名ノ日本人ヲ含ム四名ノ指導員奉天ヨリ齊齊哈爾ニ派遣セラレタリ此等指導員ガ齊齊哈爾到著後二日ヲ經テ卽チ二月二十二日省政府廳舍內ノ應接廣間ニ會合ヲ催シタルガ右會合ニハ各團體ヨリ多數ノ參會者アリタリ右會合ハ全黑龍江省大會ニシテ建國準備ノ方法ヲ決定センガ爲ノモノナルガ右大會ハ二月二十四日大衆示威運動ヲ爲スベキ旨ヲ可決セリ

齊齊哈爾ニ於ケル右大衆示威運動ニハ數千人參加シ同市ハ此ノ事件ヲ祝スル爲「ポスター」、聯、

翩旗、長旒ヲ以テ覆ハレタリ日本ノ砲兵隊ハ當日ヲ祝シテ百一發ノ祝砲ヲ發シ日本飛行機上空ヲ旋廻シ印刷物ヲ投下シタリ責任內閣制トシ國家ノ元首ニ大總統ヲ戴ク共和政體ヲ可トスル一宣言直ニ發セラレタリ一切ノ權力ヲ中央政府ニ集中シ省政府ヲ廢止シ縣及市ハ地方行政ノ單位トシテ存置スルコトトセラレタリ

奉天ニ於ケル全滿大會ノ二月二十九日

二月末ニ至ル迄ニ奉天、吉林、黑龍江及特別區ハ既ニ縣及省ノ宣言ヲ發スル段階ヲ經過セリ蒙古諸旗モ亦新國家ガ特別自治蒙古區ヲ區劃シ且他ノ方法ニ依リ蒙古住民ノ權利ヲ保障スベキコトヲ知リ得タルヲ以テ忠誠ヲ新國家ニ誓フニ至レリ回教徒ハ奉天ニ於ケル二月十五日ノ會合ニ於テ既ニ忠誠ヲ誓ヒタリ其ノ他未ダ同化セザル少數ノ滿洲人ノ大部分ハ新國家ノ執政トシテ恐ラク其ノ前皇帝ガ推擧セラルベキコト明ト爲ルヤ新國家ヲ歡迎シタリ

各縣及省ガ新國家方案ニ對シ正式ノ支持ヲ與ヘタル後自治指導部ハ全滿大會ノ召集ヲ指導シ右ハ二月二十九日奉天ニ於テ行ハレタリ同大會ニハ各省、奉天省各縣及蒙古地方ヨリノ正式代表其ノ他吉林省及特別區ノ朝鮮人、滿洲蒙古青年同盟ノ諸支部等諸團體ノ代表者ヲ含ム多數出席シ總數七百名以上ニ達シタリ

諸種ノ演說行ハレ又滿場一致ヲ以テ宣言及決議可決セラレタルガ前者ハ舊政權ヲ非議シ後者ハ新國家ヲ歡迎シタリ又新國家ノ臨時大總統トシテ今ハ「ヘンリー」溥儀氏ナル私名ニ依リ知ラルル前宣統帝ヲ推擧スルノ第二ノ決議モ採擇セラレタリ

前皇帝「ヘンリー」

東北行政委員會ハ直ニ緊急會議ヲ開キ六名ノ代表者ヲ選ビテ之ヲ旅順ニ派遣シ客年十一月天津出

發以來同地ニ滯在中ノ前皇帝ニ對シ招請ノ意ヲ傳ヘシメタリ溥儀氏ハ當初之ヲ謝絕シタルモ三月四日二十九名ノ代表者ヨリ成ル第二回代表團ハ遂ニ一年ヲ期限トシテ其ノ地位ヲ受諾スベシトノ同氏ノ承諾ヲ得タリ茲ニ於テ前記行政委員會ハ其ノ委員長張景惠中將外九名ヲ選出シテ歡迎委員會ヲ組織シタルガ右委員會ハ三月五日旅順ニ赴キ謁見セリ其ノ懇請ヲ容レテ前皇帝ハ三月六日旅順ヲ出發シ湯崗子ニ至リタルガ二日ノ後卽チ八日ニハ既ニ「滿洲國」ノ執政トシテノ禮ヲ受ケ始メタリ

1 溥儀氏「滿洲國」元首ヲ承諾ス

長春ニ於ケル就任式、三月九日

三月九日新都長春ニ於テ就任式行ハレタリ溥儀氏ハ執政トシテ新國家ノ政策ハ「道德、仁及愛」ヲ基礎ト爲スベキコトヲ約スル旨ノ宣言ヲ發シタリ十日ニハ新政府ノ主要官吏卽チ內閣ノ閣僚、立法院長、監察院長、參議府議長、副議長及參議、各省長及特別區長官、各省警備司令其ノ他ノ高官ノ任命ヲ見タリ「滿洲國」樹立ニ關スル通告ハ三月十二日電報ニテ諸外國ニ發セラレタルガ右通告ノ標榜セル目的ハ諸外國ニ對シ「滿洲國」建設ノ根本目的及對外政策ノ主義ヲ通告シ新國家トシテノ承認ヲ要求スルニ在リタリ

「滿洲國」建設ノ日附法律及規則

執政ノ到著前既ニ趙欣伯博士ガ相當期間準備シ居リタル諸法律及規則ハ採擇セラルル迄ニ爲リ居リタルガ此等ノ法規ハ三月九日新政府組織法ト同時ニ實施セラレ其レ迄有效ナリシ諸法律ハ新法律又ハ新國家ノ根本方針ト牴觸セザル限リ同日附ノ特別命令ニ依リ暫定的ニ採用セラレタリ

情報ノ出所

「滿洲國」ノ創設ニ至ル經過ニ關スル以上ノ記述ハ有ラユル出所ヨリ得タル情報ニ依リ編輯セラレタルモノナリ諸種ノ事件ハ其ノ都度詳細ニ日本ノ新聞紙上ニ報ゼラレタルガ日本側ノ編輯スル

「マンチュリア、デーリー、ニュース」ノ紙面ニハ恐ラク最巨細ニ報ゼラレタリ五月三十日長春ニ於テ現政府ニ依リ準備セラレタル「滿洲國獨立史、滿洲國外交部編」「滿洲國概觀、滿洲國外交部編」ノ二文書及支那參與員ニ依リ準備セラレタル「東北三省ニ於ケル所謂獨立運動ニ關スル覺書」モ亦愼重ニ研究セラレタリ加之中立的出所ヨリ得タル情報モ能フ限リ利用セラレタリ

九月十八日以來ノ民政

九月十八日ヨリ「滿洲國政府」ノ樹立ニ至ル迄ノ間ニ於ケル日本軍事當局ノ民政上ノ措置、特ニ銀行ノ管理、公共事業ノ經營及鐵道ノ運用ハ一時的軍事占領ノ必要以上ノ永續的ナル諸種ノ目的ガ軍事行動開始以來遂行セラレ居リタルコトヲ示シタリ九月十九日奉天占領ノ直後支那銀行、鐵道事務所、公共事業事務所、鑛山監理事務所等其ノ他同種ノ建物ノ內部又ハ門前ニ衞兵ヲ置キ然ル後此等企業ノ財政的又ハ一般的情況ノ調査ヲ行ヒタリ此等ノ企業ガ再開ヲ許サルルニ及ビ日本人ハ顧問、專門家又ハ祕書ニ任命セラレ概シテ執行權限ヲ有シタリ多數ノ企業ハ前東三省政府又ハ各省政府ノ所有シタルモノナルガ前政府ハ戰時ニ於ケル敵國政府ノ如ク看做サレタルヲ以テ何レノ銀行モ鑛山モ農工企業モ鐵道事務所モ公共事業モ實際右政府ガ嘗テ公的ニ又ハ私的ニ利害關係ヲ有シタル收入ノ源ハ唯一箇ト雖モ監督ヲ受ケザルモノナカリキ

鐵道

鐵道ニ關シテハ軍事占領ノ當初以來日本官憲ニ依リ執ラレタル措置ハ支那及日本鐵道ノ間ニ永年繫爭中ニシテ第三章ニ記述セシ諸問題中ノ或モノヲ日本ノ爲ニ有利ニ確然解決スルコトニ在リタリ卽チ急速ニ次ノ如キ措置執ラレタリ

一　長城以北ノ一切ノ支那側所有鐵道及在滿洲諸銀行ニ在ル此等鐵道ノ貸方勘定ト爲リ居ル金

額押收セラレタリ

二　右諸鐵道ヲシテ南滿洲鐵道ト適當ナル關係ニ立タシムル爲奉天ノ內外ニ於テ線路配置ノ變更ヲ爲シタリ卽チ南滿洲鐵道下ノ陸橋ノ箇所ニ於テ北平奉天鐵道線路ヲ切斷シ斯クシテ遼寧中央驛、奉天東驛、奉天北門驛ヲ閉鎖シ且吉林行支那政府鐵道トノ連絡ヲ斷チタリ（後ニ復舊セラル）

三　吉林ニ於テハ海倫吉林線及吉林敦化、吉林長春鐵道ノ間ニ物的連絡ヲ設定シタリ

四　鐵道ノ諸部ニ技術顧問タル日本人部員配置セラレタリ

五　支那官憲ニ依リ採用セラレタル「特別運賃率」ハ廢止セラレ本來ノ運賃率復活セラレ斯クシテ支那鐵道ノ貨物運賃率ハ南滿洲鐵道ノ運賃率ト一層調和セシメラレタリ

九月十八日卽チ東北交通委員會ガ機能ヲ停止シテヨリ「滿洲國交通部」ノ開設ニ至ル迄ハ日本官憲ガ諸鐵道ノ經營ニ付全責任ヲ負ヒタリ

其ノ他ノ公共事業

在留民ノ生命及財產ノ保護ノ爲必要ナル程度ヲ超エテ行ハレタル同種ノ措置ハ奉天及安東ニ於ケル公共電氣供給ノ場合ニ於テモ日本人ニ依リテ行ハレタリ又九月十八日ヨリ滿洲國建設迄ノ期間日本官憲ハ支那政府ノ電話、電信及無電通信ノ管理及經營ニ關シ滿洲ニ於ケル日本ノ電話及電信事業トノ密接ナル連絡ヲ確實ニスベキ變更ヲ加ヘタリ

結論

千九百三十一年九月十八日以來日本軍事當局ノ軍事上及民政上ノ活動ハ根本的ナル政治的考慮ノ象徵ヲ有シタリ東三省ノ累進的軍事占領ハ順次齊齊哈爾、錦州及哈爾賓ノ諸市ヲ延テハ滿洲ニ於

ケル總テノ重要ナル諸都市ヲ支那官憲ノ管理ヨリ離レシメタリ而シテ軍事占領ノ後ニハ常ニ民政ノ改組ヲ見タリ千九百三十一年九月前ニハ滿洲ニ於テ嘗テ聞カレザリシ獨立運動ガ日本軍ノ存在ニ依リテノミ可能ト爲リタルコトハ明ナリ

第四章ニ於テ言及セラレタル日本ニ於ケル新政治運動ニ密接ナル接觸ヲ保チ居リタル日本ノ文官及武官ノ一團ハ其ノ現職ニ在ルト否トヲ問ハズ九月十八日ノ事件後ニ存シタルガ如キ滿洲ノ事態ノ解決策トシテ此ノ運動ヲ考案シ組織シ且遂行シタリ

右目的ヲ以テ彼等ハ或支那人ノ姓名及行動ヲ利用シ前政府ニ對シ不平ヲ懷ク住民中ノ或少數者ヲ利用シタリ

日本參謀本部ガ當初ヨリ又ハ少クトモ短小ノ期間内ニ斯ノ如キ自治運動ノ利用サレ得ベキコトヲ覺リタルコト亦明ナリ其ノ結果彼等ハ此ノ運動ノ組織者ニ對シテ援助ヲ供シ且指導ヲ與ヘタリ各方面ヨリ得タル證據ニ徵シ本委員會ハ「滿洲國」ノ創設ニ寄與シタル要素多多アルモ其ノ内二箇ハ兩者相俟テ最有效ニシテ而モ吾人ノ觀ル所ヲ以テセバ之ヲ缺クニ於テハ新國家ハ形成セラレザリシナルベキモノニシテ右ハ日本軍隊ノ存在及日本ノ文武官吏ノ活動ナリシコトヲ會得セリ

右ノ理由ニ依リ現在ノ政權ハ純眞且自發的ナル獨立運動ニ依リテ出現シタルモノト思考スルコトヲ得ズ

第二節　「滿洲國」ノ現政府

政府組織法

滿洲國ハ政府組織法及人權保障法ニ從ヒテ統治セラル政府組織法ハ政府諸機關ノ根本的組織ヲ規

定シタルモノニシテ大同元年（千九百三十二年）三月九日附敎令第一號ヲ以テ公布セラレタリ

執政ハ國家ノ元首ニシテ一切ノ行政權ハ執政ニ屬シ執政ハ又立法院ノ上位ニ立ツノ權能ヲ有ス執政ハ重要事項ニ關シ助言ヲ與フル參議府ニ依リ補佐セラル

政府組織法ノ特質ハ政府ノ權力ヲ行政、立法、司法及監察ノ四區分又ハ四部ニ分ツ點ニ在リ

行政部

行政部ノ任務ハ執政統督ノ下ニ總理及各部總長ニ依リテ遂行セラレ總理及此等總長ハ相合シテ國務院卽チ内閣ヲ組織スルモノトス總理ハ各部ノ事務ヲ監督シ强力ナル總務廳ヲ通ジテ機密事項、人事、會計及支給ノ事務ヲ直裁ス國務院ニ附屬シテ諸種ノ局アリ就中資政局及法制局ハ重要ナリ

行政權ハ斯ノ如ク主トシテ總理及執政ノ手ニ集中セラレ居レリ

立法部

立法權ハ立法院ニ在リ總テノ法律及收入關係諸法ハ同院ノ翼贊ヲ經ルコトヲ要ス然レドモ同院ガ或議案ヲ否決シタル場合ニハ執政ハ同院ニ其ノ再議ヲ求ムルコトヲ得而シテ尙再ビ其ノ議案ガ否決セラレタル場合ニハ執政ハ參議府ニ諮リテ之ヲ裁決スベキモノトス然レドモ現在ニ於テハ立法院ノ組織ニ關スル法律ハ制定セラレ居ラズ從テ諸法律ハ國務院ニ依リ起案セラレ參議府ニ諮問セラレ且執政ノ承認アリタル後效力ヲ發生ス立法院ガ組織セラレザル限リ總理ノ地位ハ優越ナリ

司法部

司法部ハ數多ノ法院ヲ包含シ此等ノ法院ハ最高法院、高等法院及地方法院ノ三階級ニ分タル

監察部

監察院ハ官吏ノ行績ヲ監察シ會計ヲ檢査ス監察院ノ監察官及審計官ハ犯罪行爲又ハ懲戒處分ニ依ルノ外免職セラルルコトナク且其ノ意ニ反シテ停職、轉任又ハ減俸セラルルコトナカルベシ

省及特別區

地方行政ノ爲「滿洲國」ハ五省及二特別區ニ分タル省ハ奉天、吉林、黑龍江、熱河及興安ナリ最

後ニ擧ゲタル興安省ハ蒙古地方ヲ包含シ舊來ノ旗制度ト諸旗ノ連合セル盟トニ適合セシムル如ク三地方卽チ分省ニ分タル特別區ハ舊東支鐵道區卽チ哈爾賓區域及新ニ設置セラレタル間島區卽チ朝鮮人區域ナリ此ノ行政的區劃ニ依リ主要少數民族ナル蒙古人、朝鮮人及露西亞人ハ彼等ノ必要ニ適合スル特別ノ行政ヲ能フ限リ保障セラルベキモノトス本委員會ハ「滿洲國」ニ包含セラルト主張セラルル區域ノ地圖ヲ示サレンコトヲ屢請求シタレドモ右地圖ハ與ヘラレズシテ該國ノ境界ヲ次ノ如ク示ス一ノ書翰ヲ受領シタリ

「新國家ハ南ハ長城ニ依リ界セラレ同國ニ於ケル蒙古諸盟及諸旗ハ呼倫貝爾並ニ哲里木、昭烏達及卓索圖ノ諸盟及此等ノ諸旗ヲ包含ス」

各省ノ長官ニハ省長アリ然レドモ行政權ヲ中央政府ニ集中セントセルニ依リ省長ハ軍隊又ハ財政ノ何レニ對シテモ何等ノ權限モ與ヘラレザルモノトス中央政府ニ於ケル如ク省ニ於テモ總務廳ハ支配的地位ヲ保持ス同廳ハ機密事項、人事、會計、文書及他部ノ管轄ニ屬セザル事項ヲ管轄ス

縣及自治市

省ハ縣ニ分タル縣ハ一般ニ縣自治公署ニ依リ治メラレ右機關ハ其ノ指揮下ニ各部特ニ總務科ヲ有ス自治市政府ハ奉天、哈爾賓及長春ニ在リ尤モ哈爾賓ニ於テハ露西亞市街及支那市街ノ雙方ヲ包含スベキ大哈爾賓ヲ建設セントスル計畫アリ特別鐵道區ハ廢止セラルベシ同區ノ一部ハ大哈爾賓ニ包含セラルベク又東支鐵道ニ沿ヒ東西ニ擴ガレル殘部ハ黑龍江省及吉林省ニ加ヘラルベシ

「滿洲國政府」ハ省ヲ目シテ行政區劃ト爲シ縣及自治市ヲ目シテ財政上ノ單位ト爲ス同政府ハ省、縣及自治市ノ租稅ノ額ヲ決定シ豫算ヲ裁定ス一切ノ地方的收入ハ之ヲ中央ノ國庫ニ拂込ムコトヲ

要シ拂込後國庫ハ適當ナル支出ヲ監督ス此等ノ收入ハ舊制度ノ下ニ於テ普通行ハレタル如ク地方官憲ニ依リ全部又ハ一部ヲ保留セラルルコトナカルベシ自然本制度ハ未ダ滿足ナル運用ヲ見ルニ至ラズ

日本人官吏及顧問

「滿洲國政府」ニ於テハ日本人官吏ハ樞要ノ地位ヲ占メ且日本人顧問ハ一切ノ重要ナル部局ニ附屬ス國務總理及其ノ總長ハ總テ支那人ナリト雖モ新國家ノ組織ニ於テ實權ノ最大部分ヲ行使スル各總務廳ノ首長ハ日本人ナリ當初日本人ハ顧問トシテ任命セラレタレドモ最近ニ至リ最重要ナル諸地位ヲ占ムル日本人ハ支那人ト同一ノ地步ニ於ケル完全ナル官吏トセラレタリ地方政府ニ、軍政部及軍隊ニ又ハ官業ニ於ケル者ヲ除キ中央政府ノミニ於テ約二百名ノ日本人ハ「滿洲國」官吏ナリ

日本人ハ總務廳、法制局及資政局(以上ハ實際上國務總理ノ官房ヲ構成ス)、各部及各省政府ニ於ケル總務廳、各縣ニ於ケル自治指導委員會竝ニ奉天、吉林及黑龍江各省ニ於ケル警務廳ヲ管理ス加之大多數ノ局科ニハ日本人ノ顧問、理事官及事務官アリ

鐵道事務所及中央銀行ニモ亦多數ノ日本人アリ監察院ニ於テ日本人ハ總務處長、監察部長及審計部長ノ地位ヲ占ム立法院ニ於テ書記官長ハ日本人ナリ最後ニ執政ノ最重要ナル官吏ノ若干ハ宮務局長及執政護衞隊指揮官ヲ含ミ日本人ナリ(註)

註　爾來重要ナル其ノ他ノ任命ハ滿洲國政府公報ニ發表セラレタリ

政府ノ目的

政府ノ目的ハ二月十八日ノ東北行政委員會ノ宣言及三月一日ノ「滿洲國政府」ノ宣言ニ表明セラ

レタルガ如ク「王道」ノ根本原則ニ從ヒテ統治スルニ在リ此ノ語ニ對スル英吉利語ノ正確ナル同意語ヲ發見スルコトハ困難ナリ「滿洲國」當局ニ依リ提供セラレタル通譯者ハ之ヲ「愛」ト譯シタレドモ學者ハ多數ノ意味合ヒヲ有シ得ベキ「王者ノ道」ナル意義ヲ之ニ與フ傳統的ニ支那人ハ「王道」ナル語ヲ「覇道」ニ正反對ナルモノトシテ使用シタリ右「覇道」ナル語ハ孫逸仙博士ニ依リ「三民主義」中ニ論ゼラレタル如ク物質力ト强制トニ倚賴スルコトヲ意味ス孫逸仙ハ依テ「王道」ハ「力ハ正義ナリ」ノ正反對ナリト說明シタリ

新政府ノ創設ニ主トシテ與リテ力アリタル自治指導部ノ政策ハ該部ニ代リタル資政局ニ依リ繼續セラレタリ陸軍將校ハ行政事項ニ干與スルコトヲ許サレザリキ官吏任用ノ資格ヲ定ムル規則ハ制定セラルベク且任命ハ候補者ノ能力ヲ基礎トシテ爲サルベキモノトス

課稅

課稅ハ輕減セラレ且法律的基礎ノ上ニ置カルベク又經濟及行政ノ健全ナル原則ニ從ヒ改革セラルベシ直接稅ハ縣及自治市ノ政府ニ移讓セラルベク中央政府ハ間接稅ヨリ得ル收入ヲ確保スベシ長春當局ヨリ提供セラレタル文書ハ若干ノ租稅ガ既ニ廢止セラレ同時ニ他ノ租稅ガ輕減セラレタル旨ヲ述ベ居レリ官業及政府ノ所有スル財源ノ調整ガ收入ヲ增加センコト及將來行ハルルコトアルベキ軍隊ノ縮少ガ支出ヲ減少センコトヲ希望スル旨表明セラレ居レリ然レドモ目下ノ處新國家ノ財政的地位ハ不滿足ノモノナリ不期戰ハ軍事費ヲ大ナラシメ他方同時ニ政府ハ正規ノ諸財源ヨリ收入ヲ受領シ居ラズ第一年度ノ支出ハ六千五百萬「ドル」ノ收入ニ對シ現在大約八千五百萬「ドル」ト見積ラレ二千萬「ドル」ノ不足ヲ示セリ而シテ右不足ハ後ニ說明スルガ如ク新ニ設置セラレ

タル中央銀行ヨリノ借入金ヲ以テ塡補セラルル豫定ナリ(註)

註　本報告書附屬ノ特別研究第四ヲ見ヨ

政府ハ財政的狀態ノ改善スルニ從ヒ其ノ收入ノ能フ限リ多額ヲ敎育及公安竝ニ荒蕪地ノ開墾、鑛物及森林資源ノ開發、交通通信組織ノ擴張ヲ含ム國ノ開發ニ使用スベキ意嚮ヲ表明シタリ政府ハ國ノ開發ニ付外國ノ財的援助ヲ歡迎スベキコト竝ニ機會均等及門戶開放ノ主義ヲ固守スベキコトヲ述ベタリ

敎育

政府ハ既ニ初等學校及中等學校ノ再開ニ著手シタリ而シテ政府ハ新國家ノ精神及政策ヲ完全ニ理解スベキ極メテ多數ノ敎員ヲ養成スルノ意嚮ヲ有ス新課程ハ採用セラルベク新敎科書ハ編纂セラルベク而シテ一切ノ排外敎育ハ廢止セラルベシ新敎育制度ハ初等學校ノ改善竝ニ職業敎育、初等學校敎員ノ養成及衞生的生活ニ關スル健全ナル思想ノ敎育ヲ强調スルコトヲ目的ト爲スベシ英吉利語及日本語ノ敎授ハ中等學校ニ於テ必修科タルベク又日本語ノ敎授ハ初等學校ニ於テ隨意科タルベシ

司法及警察

「滿洲國」當局ハ司法ノ分野ニ於テハ行政官憲ノ干涉ノ許容セラレザルベキコトヲ決定シタリ司法官ノ地位ハ法律ニ依リテ保障セラレ且其ノ俸給ハ充分ナルモノタルベシ司法官ノ任用資格ハ高メラルベシ

治外法權ハ當分ノ間尊重セラルベキモ政府ハ現制度ニ對スル充分ナル改革ノ遂行セラレタルトキ直ニ治外法權ノ撤廢ノ爲諸外國ト交涉ヲ開始スルノ意嚮ナリ警察官ハ適當ニ選擇、訓練及給與セ

ラレ且警察職務ヲ簒奪スルコトヲ許サレザルベキ軍隊ヨリ完全ニ分離セシメラルベキモノトス

軍隊

軍隊ノ改編ハ計畫セラレ居ルモ現時軍隊ハ大多數舊滿洲兵ヨリ成ルヲ以テ增大スル不滿ト叛亂トヲ避クル爲警戒ヲ怠ラザルコト必要ナリト感ゼラレ居レリ

「滿洲國」中央銀行ハ六月十四日設置セラレ七月一日正式ニ營業ヲ開始セリ同銀行ハ「滿洲國」ノ首都長春ニ其ノ本店ヲ竝ニ滿洲ノ大多數ノ都市ニ百七十ノ數ニ達スル支店及出張所ヲ有ス

「滿洲國」中央銀行ハ三十年七月一日長春ニ其ノ本店及他ノ多數ノ滿洲都市ニ支店ヲ開キタリ

同銀行ハ三十年間有效ノ特許狀ヲ有スル株式會社トシテ組織セラレタリ其ノ最初ノ要員ハ支那人及日本人タル銀行家及金融家ナリキ同銀行ハ「內國通貨ノ流通ヲ規律シ其ノ安定ヲ保持シ及金融ヲ管理スル」ノ權限ヲ付與セラレタリ同銀行ノ資本ハ三千萬「ドル」(銀)ト定メラレ且少クトモ三〇「パーセント」ノ正貨準備ヲ條件トシテ紙幣ヲ發行スルノ許可ヲ與ヘラレタリ

中央銀行ハ邊業銀行ハ一切ノ舊省銀行ヲ併呑シタリ

邊業銀行ヲ含ム舊省銀行ハ新中央銀行ト合併セラレ傍系事業ヲ含ム其ノ全業務ハ新中央銀行ニ引渡サレタリ尙舊省銀行ノ滿洲外ノ支店ヲ淸算スル爲ニ措置講ゼラレタリ

中央銀行ハ舊銀行ヨリ捻出シ得ベキモノニ加フルニ其ノ設立用トシテ二千萬圓(註一)ト報ゼラルル日本ノ貸付金及其ノ資本ニ對スル「滿洲國政府」ヨリノ七百五十萬「ドル」(銀)ノ醵出ヲ有ス(註二)

同銀行ハ一切ノ滿洲通貨ヲ千九百三十二年七月一日ヨリ公式ニ定メラレタル率ヲ以テ新紙幣ニ代ヘテ買戻スコトニ依リ之ヲ統一セント計畫シタリ此等ノ新紙幣ハ銀「ドル」ヲ基礎トシ且少クトモ三〇「パーセント」迄銀、金、外國通貨又ハ預金ヲ以テ保證セラルルコトヲ要ス新通貨ガ要求次第且無制限ニ硬貨ニ代ヘラルベキヤ否ヤハ公式ノ發表ニハ明ニセラレ居ラズ舊紙幣ハ舊貨幣整

新通貨ハ銀「ドル」ヲ基礎トスルモ兌換シ得ルヤ否ヤハ不明ナリ

理辨法ノ通過ヨリ二年間流通スルコトヲ許サルベキモ其ノ以後ハ有效ナラザルベシ

註一　之ガ「銀圓」ノ意味ナルコト極メテアリ得ベキコトナリ

註二　千九百三十二年五月五日「滿洲國」財政部總長ヨリ本委員會ニ與ヘラレタル假豫算ニ依ル

新中央銀行紙幣ノ註文ハ日本政府ニ發セラレタルモ今日迄ノ所ハ右紙幣モ新硬貨モ未ダ流通シ居ラズ滿洲ノ現通貨ハ紙幣ガ諸銀行ヲ通過スルトキ榮厚氏(新中央銀行總裁)ノ署名ヲ追加セラレ居ルノ外依然千百三十一年九月十八日前ニ存シタルモノナリ

新「滿洲國」銀行ガ如何ニシテ其ノ自由處分ニ委セラレタル制限セラレタル資本額ヲ以テ一切ノ現時ノ滿洲通貨ヲ統一シ安定セントスル大望アル計畫ノ實行ヲ庶幾シ得ルヤハ明ナラズ舊省諸金融施設ヨリ受繼ギタル財源ハ日本ノ諸銀行ヨリノ借入金及其ノ資本ニ對スル「滿洲國政府」ヨリノ醵出ヲ加フルモ右目的ノ爲全然不充分ナリト思考セラル加之如何ナル基礎ニ於テ同銀行ト「滿洲國政府」トノ關係ガ設定セラルベキヤ明ナラズ財政部總長ヨリ本委員會ニ與ヘラレタル「滿洲國」假豫算ニ依レバ「滿洲國」ハ其ノ成立ノ第一年度中ニ二千萬銀圓(註三)以上ノ不足ニ直面センコトヲ豫期ス同總長ニ依レバ右ハ中央銀行(當時ハ存在セザリキ)ヨリノ借入金ニ依リ塡補セラルベキモノナリキ一ノ政府ニシテ其ノ銀行ニ七百五十萬銀圓ヲ醵出シ然ル後其ノ豫算ノ均衡ヲ保ツ爲右銀行ヨリ二千萬銀圓以上ヲ借出サントスルモノハ其ノ中央銀行又ハ其ノ豫算ヲ健全ナル財政的基礎ノ上ニ建ツルモノト云フベカラズ

註三　豫算中本項目及之ニ續ク諸項目ハ「滿洲國」財政部總長ノ本委員會ノ一委員トノ會見ニ於テ圓トシテ與ヘラレタ

現滿洲通貨ハ實質的ニ千九百三十一年九月十八日前ニ存シタルモノト同ジ

硬貨ノ不充分ナル供給ニ基ク「滿洲國」ノ統一政策

ルモ滿洲國外交部ヨリ提出セラレタル「滿洲國概觀」ノ英吉利語ノ翻譯文ニ於テハ右ハ銀圓ナル用語ヲ以テ表示セラル從テ本委員會ハ本項目及之ニ續ク豫算項目ニ言及スルニ際シ圓ヨリモ寧ロ銀圓ヲ使用スルコトトス

銀圓ニ對スル支那ノ記號ハ日本人ガ圓ニ對シ使用スル記號ト同一ナルノ事實ハ支那側及日本側ノ雙方ヨリ本委員會ニ提供セラレタル英吉利語ノ翻譯文及佛蘭西語ノ翻譯文ヲ取扱フニ當リ常ニ困難ヲ感ゼシメタリ

中央銀行ハ現ニ有スト認メラルル以上ニ多額ノ現實ノ硬貨ヲ獲得シ得ルニ非ザレバ一切ノ滿洲通貨ヲ兌換可能ノ銀「ドル」ヲ基礎トシテ統一シ且安定スルコト殆ド庶幾シ得ザルベシ同銀行ガ假令通貨ノ兌換ハ可能ナラズトスルモ其ノ統一ヲ創成スルニ成功スルニ於テハ同銀行ハ恐ラク何等カ成就シタリト云フベキモ而モ統一的通貨ト雖モ其ノ安定性ガ兌換ニ依リ保證セラレザルニ於テハ健全ナル貨幣制度ノ要件ヲ充タシタルモノニ非ザルナリ（註四）

中央銀行ハ通貨ヲ兌換可能ナラシムルヨリ寧ロ銀圓ヲ使用スルコトトスノ如シ

註四　本報告書附屬ノ特別研究第五ヲ見ヨ

日本人ノ支配ハ支那ノ公共事業ニ及ブ

各種ノ公共營造物及鐵道ニ關シ支那側組織ト日本側組織トノ連結ヲ助成スル諸取極作成セラレタリ奉天事變勃發前日本側ハ之ガ實現ヲ熱望シタリシモ支那側ハ同意ヲ與フルコトヲ絶エズ拒絶シタリ尤モ九月十八日ト「滿洲國」ノ建設トノ間ニ於テ既ニ本章第一節中ニ說述シタル如ク日本側ノ希望ヲ實現スベキ措置直ニ執ラレタリ「新國家」ノ建設以來「滿洲國交通部」ノ政策ハ其ノ權力下ニ在ル主要鐵道線ノ少クトモ若干ノ利用ニ付南滿洲鐵道會社ト協定ヲ爲サントスルモノノ如シ

支那ノ電話、電信及無電系

滿洲ニ於ケル支那ノ電話、電信及無電系ハ全然官有ナルヲ以テ各自己ノ業務經營部ヲ有スル外東北電話、電信及無電主管廳ノ統一的管理下ニ置カレ居リタリ九月十八日以來ハ右等三系ハ何レモ

全滿洲ニ於ケル現存日本系ト更ニ密接ナル協調ヲ爲シ來レリ加之滿洲各地ヨリ發シ關東州租借地、日本、朝鮮、臺灣及南洋諸島各地ニ著シ又ハ關東州租借地、日本、朝鮮、臺灣及南洋諸島各地ヨリ發シ滿洲各地ニ著スル通聯電報ニ付日本電信主管廳ト東北電信主管廳トノ間ニ協定作成セラレタリ北滿洲ニ於ケル主要中心地ト大連、奉天及長春ニ於ケル日本郵便局トノ間ニ電報ノ迅速ナル傳送ヲ確保スル爲直通回線建設セラレタリ

日本ノ假名（註）電報ハ特ニ低料金トセラレタリ日本ノ假名綴リノ取扱ヲ學ブ爲支那人職員ニ對シ特別ナル訓練ヲ與ヘラレ居リ又日本人書記ヲシテ主要中心地ニ於テ漸次支那人電信從業員ニ加ハラシムル樣計畫セラレ居レリ斯クシテ滿洲及全日本帝國間ノ電信交通ヲ便利ナラシムル爲有ラユル便宜ヲ供與セラレタリ自然兩國間ノ通商上ノ結合ハ右ニ依リ著シク鞏固ト爲レリ

註　日本ノ音字

日本、軍事當局ハ千九百三十一年九月基金ノ鹽稅ヲ管理ヲ掌握セリ

九月十八日乃至十九日事件ノ後日本官憲ハ鹽稅收入ヲ保留シ居ル官衙及銀行ニ對シ日本官憲ノ同意ナクシテ此等ノ基金ヨリ何等ノ支出ヲ爲スベカラザル旨ノ命令ヲ發シタリ

右鹽稅ノ監理ハ此ノ財源ヨリスル收入ノ大部分ガ名義上ハ國家ノモノナリト雖モ事實張學良元帥ノ政府ニ保留セラレ居リタルコトヲ根據トシテ主張セラレタルモノナリ此ノ財源ヨリノ收入ハ千九百三十年ニ於テハ約二千五百萬銀「ドル」ニ上リ右ノ內二千四百萬「ドル」ハ滿洲ニ於テ保留セラレ單ニ百萬「ドル」ガ在上海鹽務稽核總辦署ニ送金セラレタリ

張學良元帥ハ千九

張學良元帥ハ千九百二十八年十二月國民政府ト結合シタル後鹽稅ヲ擔保ト爲シタル借款ニ對シ滿

百二十八年滿洲分擔額ノ支拂ニ同意セリ

洲ヨリ支拂フベキ定額卽チ八萬六千六百銀「ドル」ノ月割分擔額ノ支拂ニ同意セリ其ノ後千九百三十年四月改正表發表セラレ之ニ依リ滿洲ノ月割分擔額ハ二十一萬七千八百「ドル」ニ增額セラレタリ然レドモ滿洲財政ノ內部的逼迫ノ爲ニ張元帥ハ新割當ノ延期ヲ請求セリ奉天事件ノ際ニ於ケル彼ノ滯納額ハ五十七萬六千二百「ドル」ニ上レリ二十一萬七千八百「ドル」ノ新率ニ依ル最初ノ送金ハ日本軍將校ノ同意ヲ得テ千九百三十一年九月二十九日實行セラレタリ滿洲ニ樹立セラレタル新政權ハ右以後千九百三十二年三月中迄ニ中央政府ニ對シ啻ニ此等ノ月割分擔額ノミナラズ張學良元帥ガ未拂ノ儘殘シタル滯納額ヲモ送金セリ然レドモ新政權ハ鹽稅剩餘金ヲ以テ國家ノ收入ト認メズ之ヲ滿洲ノ收入ト認メ從テ之ヲ地方的目的ノ爲ニ保留スルコトヲ正當ナリト思考シタリ

千九百三十一年十月及十一月牛莊(營口)ニ於ケル鹽稅金ノ押收

奉天地方維持委員會ガ臨時省政府ニ改造セラレシ後同政府ハ財政廳ノ支拂ニ充ツル爲在牛莊鹽務稽核署ニ對シ其ノ總テノ基金ヲ省銀行ニ移管スベキ旨ヲ命ジタリ支那ノ公報ニ依レバ同樣ニ十月三十日在牛莊中國銀行モ預金タル六十七萬二千七百九銀「ドル」五十六「セント」ニ上ル鹽稅基金ヲ原預金者ノ承諾ナクシテ提供スルコトヲ强要セラレ遼寧省財政廳ノ名ニ於テ同廳日本人顧問ノミガ署名シタル一葉ノ領收證ヲ交付セラレタリ

新吉林省政府モ亦政府ノ鹽稅收入ヲ押收セリ

新吉林省政府ハ吉林及黑龍江ノ鹽運署ニ關シ同樣ノ措置ヲ執レリ支那ノ公報ニ依レバ新吉林省政府ハ鹽稅收入ヲ其ノ省金庫ニ移管スベキ旨要求シタリ署長ガ之ヲ拒絕スルヤ彼ハ數日間拘留セラレ且熙洽省長ノ任命セル者ト更迭セシメラレ同後任者ハ十月二十二日同署ヲ强制接收シ又監査署ハ熙洽省長ノ命令ニ依リ閉鎖セラレタリ此ノ場合ニ於テモ亦中國銀行及交通銀行ニ預入セラレ居

「滿洲國政府」ヲ鹽稅行政ニ接收シタリ

リタル鹽稅金ハ新吉林官憲ニ依リ要求セラレ十一月六日省銀行ニ移管セラレタリ爾來月割分擔額ハ規則正シク上海ニ送金セラレタリト雖モ鹽稅收入ハ地方官憲ニ依リ隨時引出シ費消セラレタリ千九百三十一年十月三十日ヨリ千九百三十二年八月二十五日迄ノ期間ニ對シテハ支那政府ノ計數ヲ利用シ得ラルル處右期間ニ於テ千四百萬銀「ドル」ニ上ル鹽稅收入ハ滿洲ニ於テ保留セラレタリ

全滿洲ニ於ケル鹽務行政ハ前記制限及監督ヲ受ケタリト雖モ尙三月二十八日迄ハ引續キ行ハレタルガ同日「滿洲國政府」ノ財政部總長ハ稽核署ニ屬スル預金、勘定、書類其ノ他ノ財產ヲ「滿洲國」鹽稅務司ニ翌日引渡スベク又元來中國銀行ノ取扱ヒタル鹽稅ノ徵收ハ東三省銀行ニ移管スベキ旨ノ命令ヲ發シタリ財政部總長ハ「滿洲國」ノ鹽務行政ニ引續キ勤務ヲ希望スル官吏ハ鹽稅務司事務所ニ其ノ姓名ヲ申出ヅベキ旨ヲ聲明スルト共ニ彼等ニシテ先ヅ中華民國政府ニ對スル忠節ヲ拋棄スルニ於テハ其ノ出願ヲ愼重ニ考慮スベキ旨ヲ約シタリ

四月十五日牛莊稽核署ハ强力ヲ以テ解散セラレ署長及副署長ハ解職セラレ構內ハ占領セラレ金庫、書類及印章ハ押收セラレタリ其ノ他ノ官吏ハ引續キ勤務方ヲ請求セラレタルモ彼等ハ何レモ之ヲ拒絕シタリト報ゼラレ居レリ鹽務行政ニ勤務シ居リタル多數ノ者ハ署長ニ隨ヒテ天津ニ赴キ上海ヨリ更ニ訓令アルヲ待チタリ斯クテ東三省ニ於ケル舊鹽務稽核署ノ職務ハ「滿洲國」ノ新鹽稅務司事務所ニ依リ完全ニ接收セラレタリ尤モ新政府ハ鹽稅ヲ擔保トスル外債ノ元利拂ニ必要ナル額ノ衡平ナル分擔額ヲ引續キ支拂フノ意思アル旨ヲ聲明セリ

滿洲ニ於ケル關稅收入

滿洲ニ於テ徵收セラレタル關稅基金ハ常時中央政府ニ送金セラレ居リタルヲ以テ日本軍事當局ハ關稅行政又ハ上海ヘノ基金ノ送金ニ干涉スル所ナカリキ此ノ收入ニ對スル干涉ハ先ヅ「滿洲國政府」ニ依リ彼等ノ國ハ獨立ナリトノ理由ヲ以テ行ハレタリ

二月十七日地方的ナル「滿洲國政府」トシテ設立セラレタル東北行政委員會ガ最初ニ爲シタル行動ノ一ハ滿洲條約港ニ於ケル海關監督ニ對シ關稅收入ハ當然ノ權利トシテ「滿洲國」ニ屬スベキモノニシテ將來該委員會ノ管理ノ下ニ置カルベキモノナルガ當分海關監督及稅務司ハ平常通リ其ノ職務ヲ執行スベキ旨ヲ訓令スルニ在リタリ彼等ハ一般關稅行政ヲ監督スル爲滿洲各港ニ夫々一名ノ日本人稅關顧問ガ任命セラレタル旨通報ヲ受ケタリ右關係港ハ龍井村、安東、牛莊及哈爾賓竝ニ其ノ支署ニシテ右各港ニ於テ千九百三十一年ニ徵收セラレタル收入ハ夫々五十七萬四千海關兩、三百六十八萬二千海關兩、三百七十九萬二千海關兩及五百二十七萬二千海關兩ナリ現在尙「滿洲國政府」ノ管理外ニ在ル愛琿港ハ支那關稅行政ノ下ニ執務シツツアリ關東州租借地ニ在ル大連港ハ特殊ノ地位ヲ有シ居レリ大連ヲ含ム滿洲諸港ニ於テ徵收セラレタル關稅收入ガ全支那ノ總關稅收入ニ對シ千九百三十年ニ於テハ其ノ一四・七「パーセント」又千九百三十一年ニ於テハ其ノ一三・五「パーセント」ニ上リタルノ事實ハ支那關稅行政上滿洲ノ重要ナルコトヲ示スモノナリ

「滿洲國政府」ハ

「滿洲國」官憲ガ滿洲ニ於ケル全關稅行政ヲ接收シタル手續ハ安東ニ於テ執ラレタル措置ニ依リ善ク例證セラル右手續ハ總稅務司署ニ依リ次ノ如ク記述セラレタリ

三月安東稅關ニ日本人ノ一稅關顧問任命セラレタルモ彼ハ六月中旬迄ハ何等積極的行動ヲ執ル所

關稅行政及收入ヲ接收セリ、百三十二年三月—六月

ナカリシガ同月彼ハ中國銀行ニ對シ關稅金ハ爾今上海ニ送金スベカラザル旨ノ「滿洲國」財政部ノ確定的命令ヲ送達セリ六月十六日四名ノ「滿洲國」武裝警察官ハ日本人タル一名ノ警視補ニ伴ハレテ中國銀行ニ赴キ同銀行支配人ニ對シテ彼等ハ關稅收入ヲ警備スル爲來レル旨ヲ告ゲタリ六月十九日中國銀行ハ東三省銀行ニ對シ七十八萬三千兩ヲ交付スルト共ニ稅務司ニ對シ右措置ハ不可抗力ノ結果トシテ執ラレタルモノナル旨ヲ通報シタリ

六月二十六日及二十七日「滿洲國政府」ノ一日本人顧問ハ在安東稅關ヲ彼ニ引渡スベキコトヲ要求シタルニ對シ稅務司ガ之ヲ拒絕シタル處「滿洲國」警察官（此ノ全部ハ日本臣民ナリ）ノ爲同稅務司ハ强力ヲ以テ稅關ヨリ退去セシメラレタリ然ルニ安東關稅收入ノ八〇「パーセント」ハ鐵道附屬地ニ於テ徵收セラルルモノナルヲ以テ稅務司ハ日本官憲ガ此ノ地帶內ニ於ケル干涉ヲ許サザルベキコトヲ希望シ其ノ住宅ニ於テ尙稅關ノ事務ヲ執ラントシタル處「滿洲國」警察官ハ日本鐵道附屬地ニ入リ若干ノ稅關吏員ヲ逮捕シ殘餘ノ吏員ヲ脅威シ稅務司ヲシテ支那ノ關稅行政ヲ停止スルノ餘儀ナキニ至ラシメタリ

大連稅關ノ地位

六月七日ニ至ル迄大連ノ關稅收入ハ三日又ハ四日每ニ上海ニ送金セラレタルガ「滿洲國政府」ハ六月九日附ヲ以テ爾今此等ノ送金ヲ爲スベカラザル旨ノ通牒ヲ發シタリ其ノ後上海ニ資金到達セザルヲ以テ總稅務司ハ本件ヲ問題トシ在大連日本人稅務司ニ對シ電報スル所アリタルガ右ニ對シ稅務司ハ日本租借地政府ノ外事課長ヨリ關稅收入ノ送金ハ日本ノ利益ニ影響スル所大ナルベキ旨勸告アリタルノ理由ヲ以テ關稅收入ノ送金繼續ヲ拒絕シタリ依テ總稅務司ハ六月二十四日大連稅

務司ヲ命令不服從ノ廉ヲ以テ罷免シタリ

「滿洲國政府」ハ六月二十七日右罷免稅務司及職員ヲ「滿洲國」ノ官吏ニ任命シ從前ノ職務ニ從事セシメタリ同政府ハ若シ日本官憲ガ同政府ノ大連稅關接收ヲ妨害スルニ於テハ租借地ノ境界タル瓦房店ニ新稅關ヲ設置スベシト警告セリ租借地ノ日本官憲ハ關稅行政ガ新任「滿洲國」官吏ノ手ニ移ルコトニ反對セズ本問題ハ日本ニ關係ナク滿洲國ヲ一方トシ支那政府及大連稅務司ヲ他方トスル兩者間ノミノ問題ナリト主張シタリ

關稅ニ關スル「滿洲國政府」ノ見解

「滿洲國政府」ハ「滿洲國」ハ獨立國ナルヲ以テ當然ノ權利トシテ其ノ領域內ニ於ケル關稅行政ニ對シ完全ナル管轄權ヲ行使スト主張ス尤モ同政府ハ各種外債及賠償金ハ支那ノ關稅收入ヲ基礎トシ爲シ居ルノ事實ニ顧ミ此等ノ債務ヲ果ス爲必要ナル年額ノ衡平ナル分擔額ヲ支拂フノ意思アル旨ヲ聲明シタリ同政府ハ右分擔額ヲ橫濱正金銀行ニ預金シタル後地方的用途ニ充當シ得ベキ千九百三十二年、三十三年ノ關稅剩餘金約千九百萬銀「ドル」アルベキコトヲ期待シ居レリ

滿洲ニ於ケル郵務行政

九月十八日後在滿洲日本軍事當局ハ新聞及封書ニ對シ若干檢閱ヲ爲スノ外ハ郵便局ニ對シ甚シキ干涉ヲ加ヘザリキ「滿洲國」ノ建設後同國政府ハ其ノ領域內ノ郵務行政ヲ接收センコトヲ欲シ四月十四日郵務行政ノ移管ヲ實行スル爲特別ノ官吏ヲ任命セリ四月二十四日同國政府ハ萬國郵便聯合ニ加盟許可方ヲ申込ミタルモ同政府ハ今尙其ノ資格ヲ有セズ

郵務司ガ郵便局ノ引渡ヲ拒絕シタル爲暫時現狀維持セラレタルモ管理手段ヲ行使スル爲或事務所ニハ「滿洲國」ノ監督官配置セラレタリ尤モ「滿洲國政府」ハ遂ニ同國ノ切手ヲ發行シ支那切手

ノ使用ヲ停止スルコトニ決定シタリ七月九日附ノ交通部令ヲ以テ同國政府ハ新切手及新葉書ヲ八月一日ヨリ一般ニ發賣スベキ旨ヲ布告セリ玆ニ於テ支那政府ハ郵務司ニ對シ滿洲ニ於ケル郵便局ノ閉鎖ヲ命ズルト共ニ職員ニ對シ三箇月分ノ給與ヲ受クルカ又ハ他ノ地ニ於テ勤務スル爲支那ニ於ケル指定地ニ歸還スルカノ選擇ヲ許與シタリ之ニ對シ「滿洲國」官憲ハ殘留ヲ希望スル全郵務使用人ヲ採用スベキ意嚮ヲ示シ且支那行政ノ下ニ於テ彼等ノ獲得シタル金錢上其ノ他ノ權利ヲ保障スルコトヲ約シタリ七月二十六日「滿洲國政府」ハ全滿洲ヲ通ジ完全ニ郵務行政ヲ接收セリ

私有財產ノ取扱

「滿洲國政府」ハ私有財產竝ニ支那ノ中央政府又ハ滿洲舊政權ノ何レカニ依リ與ヘラレタル總テノ利權ニシテ從前施行中ノ法律及規則ニ從ヒ合法的ニ許與セラレタルモノナル限リ之ヲ尊重スベキ旨ヲ聲明セリ同政府ハ又舊政權ガ負ヘル適法ノ負債及債務ヲ支拂フコトヲ約シ且負債ニ對スル請求ヲ裁決スル爲ニ委員會ヲ任命セリ張學良元帥其ノ他舊政權ノ若干要人ニ屬スル財產ニ對シ如何ナル措置ガ採ラルベキヤヲ記述スルコトハ未ダ尙早ナリ支那ノ公報ニ依レバ張學良元帥、萬福麟將軍、鮑毓麟將軍其ノ他若干ノ者ノ個人的財產ハ沒收セラレタリ尤モ「滿洲國」官憲ハ舊政權ノ官吏ハ其ノ權力ヲ行使シテ彼等自身ノ爲ニ蓄財シタルモノナルヲ以テ斯ノ如キ方法ニ依リ獲得セラレタル財產ハ今日ノ處之ヲ以テ正當ニ「私有財產」トシテ承認スルノ意嚮ナシトノ見解ヲ持シ居レリ舊官吏ノ所有物ニ關シテハ愼重ナル調査行ハレツツアリ但シ銀行預金ノ關スル限リ右調査ハ既ニ終了シタリト報ゼラル

以上吾人ハ「滿洲國政府」ノ組織、其ノ政綱及同政府ガ支那ヨリノ獨立ヲ確定スル爲執リタル手段ノ若干ヲ敍述シタルヲ以テ次ニ該政府ノ行動及其ノ主タル特質ニ關スル吾人ノ結論ヲ述ベザルベカラズ

此ノ「政府」ノ政綱ハ多數ノ自由主義的改革ヲ包含シ此等ノ實施ハ單ニ滿洲ニ於テノミナラズ支那ノ他ノ部分ニ於テモ亦望マシキモノナルベシ事實此等改革ノ多數ハ支那政府ノ政綱中ニモ亦顯ハレ居レリ本委員會トノ會見ノ際右「政府」ノ代表者ハ日本人ノ援助ニ依リ彼等ハ相當期間內ニ治安ヲ確立スルコトヲ得ベク而シテ爾後ハ之ヲ永遠ニ維持スルコトヲ得ベシト主張セリ彼等ハ公正ニシテ且有能ナル行政、匪賊ノ掠奪ニ對スル保障、軍事費削減ノ結果タル租稅ノ輕減、通貨ノ改革、改善セラレタル交通通信及一般人民ノ政治參與ヲ人民ニ保障スルコトニ依リ遂ニ其ノ支持ヲ獲得スルコトヲ得ベシトノ信念ヲ述ベタリ

然レドモ現在迄「滿洲國政府」ガ其ノ政策ヲ遂行スル爲費シタル時日ノ短少ナリシコトヲ充分酌量シ且既ニ講ゼラレタル措置ニ對シ篤ト考量ヲ加フルモ尙此ノ「政府」ガ事實上其ノ改革ノ多數ヲ遂行シ得ベキコトヲ示ス何等ノ徵候モ存セズ單ニ一例(註)ヲ擧ゲンニ彼等ノ豫算制度及貨幣制度ノ改革實現ノ前途ニハ重大ナル障碍存スルガ如シ諸改革、秩序アル狀態及經濟的繁榮等ニ關スル徹底的政綱ハ千九百三十二年ニ於テ存在シタル不安及攪亂ノ狀態ノ下ニ於テハ到底實現ヲ見ルコトヲ得ザルベシ

註　本報告書附屬ノ特別研究第四及第五ヲ見ヨ

「政府」及公共事務ニ關シテハ假令各部局ノ名義上ノ長官ハ滿洲在住ノ支那人ナリト雖モ主タル政治的及行政的權力ハ日本人ノ官吏及顧問ノ掌中ニ在リ「政府」ノ政治的及行政的組織ハ此等ノ官吏及顧問ヲシテ單ニ專門的意見ノ提供ノミナラズ更ニ事實上行政ヲ支配シ指揮スルノ機會ヲモ得シムルガ如キ仕組ナリ彼等ガ東京政府ノ指揮ノ下ニ在ラザルコトハ疑問ノ餘地ナク且彼等ノ政策ハ必ズシモ日本政府又ハ關東軍司令部ノ公ノ政策ト合致セザリシコトアリ然レドモ極メテ重大ナル諸問題ニ際シテハ新組織ノ初期ニ於テコソ若干ノ者ハ多少獨立的ニ行動スルコトヲ得タレ漸次益日本ノ公ノ權力ノ指揮ニ從フコトヲ要スルニ至レリ實際ニ於テ此ノ權力ハ其ノ軍隊ニ依ル國土占領ノ理由ニ依リ、「滿洲國政府」ガ內的ニモ外的ニモ其ノ權力ノ維持ノ爲此等ノ軍隊ニ依存スルコトニ依リ、且「滿洲國政府」ノ管轄下ニ在ル諸鐵道ノ經營ニ關シ益重要ト爲レル任務ガ南滿洲鐵道會社ニ委託セラレタル結果トシテ、又更ニ最重要ナル都市諸中心地ニ於テ聯絡機關トシテ日本領事ノ存在スルコトニ依リ如何ナル不時ノ事アルモ抵抗スベカラザル壓迫ヲ加フル手段ヲ有ス「滿洲國政府」ト日本ノ公ノ權力トノ間ノ聯絡ハ最近ノ特派大使ノ任命ニ依リ更ニ一層緊密ト爲リタリ右特派大使ハ信任狀ヲ以テ公式ニ派遣セラレタルモノニ非ズシテ滿洲ノ首都ニ駐劄シ關東長官ノ資格ニ於テ南滿洲鐵道會社ニ對スル監督ヲ行ヒ且同官職ニ外交代表者、領事事務ノ首長及占領軍ノ總指揮官タル權能ヲ集中ス

「滿洲國」ト日本トノ關係ハ從來之ヲ明ニスルコト稍困難ナリキ然レドモ本委員會ノ有スル最近ノ情報ハ日本政府ニ於テ近ク此ノ關係ヲ明ニスル意思アルコトヲ示セリ日本參與員ノ千九百三十

二年八月二十七日附本委員會宛書翰ニ特派大使武藤大將ハ「八月二十日滿洲ニ向ヒ東京ヲ出發セリ到著後同大將ハ日本ト滿洲トノ間ノ友好關係ノ樹立ニ關スル基本條約締結ノ爲交渉ヲ開始スベシ日本政府ハ右條約ノ締結ヲ以テ「滿洲國」ノ正式承認ト認ム」トノ趣旨ヲ記載ス

滿洲住民ノ態度

第三節　滿洲住民ノ意見

滿洲住民ノ新「國家」ニ對スル態度ヲ確ムルコトハ本委員會ノ目的ノ一ナリキ然レドモ調査ヲ行ヒタル際ノ事情ニ依リ證據ヲ蒐集スルコトニ付若干ノ困難ニ遭遇セリ匪賊、朝鮮人共產主義者及支那參與員ノ新制度非難ノ爲同人ノ滯在ヲ憤慨シ居ルコトアルベキ新政府擁護者等ヨリノ本委員會ニ對スル實際ノ又ハ想像セラレタル危險ハ本委員會保護ノ爲ノ例外的手段ヲ執ル一理由ト爲レリ同地方ノ不安定ナル狀態ニ於テハ屢實際ノ危險アリタルハ疑ナク而シテ吾人ハ吾人ノ旅行中與ヘラレタル有效ナル保護ニ對シ感謝スルモノナリ然レドモ執ラレタル警察的手段ノ結果ハ證人ヲ近ヅカシメザリシコトナリ而シテ多數ノ支那人ハ吾人ノ部員ト會見スルコトスラ明ニ恐怖シ居リタリ吾人ハ或場所ニ於テ何人ト雖モ官ノ許可ナクシテ本委員會ト會見スルコトヲ許サレザル旨吾人ノ到著前ニ通達サレタルコトヲ聞キタリ依テ會見ハ常ニ甚シキ困難ヲ以テ祕密裡ニ行ハレタリ而モ斯カル方法ニ依リテスラ吾人ト會見スルコトハ彼等ニトリ餘リニ危險ナリシ旨ヲ吾人ニ知ラシメタル人多カリキ

斯カル困難ニモ拘ラズ吾人ハ「滿洲國」ノ官吏、日本ノ領事官及陸軍將校トノ公ノ會見ノ外實業家、銀行家、敎師、醫師、警察官、商人及其ノ他トノ私的會見ヲ行フコトヲ得タリ吾人ハ又千五

代表團及準備セラレタル陳述書

百通以上ノ書信ヲ接受シタルガ其ノ內若干ハ手交セラレ大多數ハ諸宛先ニ郵送セラレタリ斯クシテ得タル情報ハ之ヲ中立的方面ニ依リ能フ限リ眞僞ヲ照合セリ

公ノ團體又ハ結社ヲ代表スル多數ノ代表團ヲ接受セルガ彼等ハ通例吾人ニ陳述書ヲ提出セリ代表團ノ多數ハ日本又ハ「滿洲國」ノ官憲ニ依リ紹介セラレタリ而シテ吾人ハ彼等ガ吾人ニ委シタル陳述書ガ豫メ日本側ノ許諾ヲ得タルモノナリト信ズベキ强キ根據ヲ有セリ實際若干ノ場合ニ於テハ陳述書ヲ提出シタル人士ガ後ニ至リ右陳述書ハ日本人ノ筆ニ成リ又ハ日本人ニ依リ本質的ニ修正セラレタルモノニシテ彼等ノ眞ノ感情ヲ表ハセルモノト看做サレザルベキモノナルコトヲ吾人ニ告ゲタリ此等ノ陳述書ノ顯著ナル特質ハ「滿洲國」政府ノ樹立又ハ維持ニ對スル日本ノ參加ニ對シテハ贊否共ニ批評スルコトヲ細心ニ避ケタル點ナリ大體ニ於テ此等ノ陳述書ハ從前ノ支那政權ニ對スル不平ノ敍述ニ關スルモノニシテ且新「國家」ノ將來ニ對スル希望ト信賴トノ表明ヲ包含セリ

書翰

接受シタル書翰ハ農民、小商人、都市勞働者及學生ヨリ發セラレタルモノニシテ筆者ノ感情及體驗ヲ述ベ居レリ本委員會ガ六月北平ニ歸還セル後此ノ大量ノ通信ハ特ニ其ノ爲ニ選任セラレタル專門職員ニ依リ翻譯、分類及整理セラレタリ此等千五百五十通ノ書翰ハ二通ヲ除キ他ハ總テ新「滿洲國政府」及日本人ニ對シ痛烈ニ敵意ヲ示セリ此等ハ眞摯且自發的ニ意見ヲ表明シタルモノノ如ク見受ケラレタリ

「滿洲國」官吏

「滿洲國政府」ノ支那人高級官吏ハ諸種ノ理由ノ爲ニ其ノ地位ニ在ルモノナリ彼等ノ多數ハ嘗テ

從前ノ制度ノ官吏タリシガ諸種ノ誘引又ハ威嚇ニ依リ引留メラレタルモノナリ彼等ノ或者ハ脅迫ニ依リ其ノ地位ニ留マルコトヲ强制セラレタルコト、一切ノ權力ハ日本人ノ手中ニ在ルコト、彼等ハ支那ニ忠誠ナルコト及日本人ノ立會ノ下ニ行ハレタル本委員會トノ彼等ノ會見ニ於ケル所述ハ必ズシモ信ヲ措クベキモノニ非ザルコト等ノ趣旨ノ通報ヲ本委員會ニ爲シタリ若干ノ官吏ハ彼等ノ財産ノ沒收ヲ禦グ爲其ノ地位ニ留マリタリ而シテ斯カル沒收ハ支那ニ遁入セル官吏中ノ若干ノ場合ニ事實トシテ起リタリ他ノ好評アル人士ハ彼等ガ行政ヲ改善スル實力ヲ有スルニ至ルベシトノ希望ト彼等ガ行動ノ自由ヲ有スベシトノ日本側ノ約束トノ下ニ參加シタリ若干ノ滿洲人ハ滿洲人種ニ屬スル諸人ノ爲ニ利益ヲ得ルノ希望ノ下ニ參加シタリ彼等ノ或者ハ失望シ且眞ノ權力ガ彼等ニ與ヘラレザルコトヲ訴ヘタリ尙少數ノ者ハ從前ノ制度ニ對シ個人的不平ヲ有セシ爲或ハ利得センガ爲其ノ地位ニ在ルモノナリ

下級官吏及地方官吏

下級官吏及地方官吏ハ大體ニ於テ一ニハ生計ノ資ヲ得テ彼等ノ家族ヲ扶養スルノ必要アルガ爲又一ニハ若シ彼等ニシテ去ラバ彼等ヨリ劣惡ナル者ガ彼等ノ地位ニ代ルコトアルベシト感ズルノ理由ニ依リ新制度ノ下ニ彼等ノ地位ヲ維持シタリ地方縣知事ノ多數モ亦一ニハ彼等ノ責任下ニ在ル人民ニ對スル義務觀念ヨリ又一ニハ壓迫ノ下ニ其ノ地位ニ留マレリ高級ノ地位ヲ好評アル支那人ヲ以テ充タスコトハ屢困難ナリシモ下級ノ地位及地方官廳ニ入ルベキ支那人ヲ得ルコトハ容易ナリキ尤モ斯カル事情ノ下ニ爲サレタル執務ノ忠實性ハ少クトモ疑問ナリ

警察

「滿洲國」警察ハ一部ハ舊支那警察ノ人員ニ依リ又一部ハ新ニ募集セラレタル者ニ依リ構成セラ

軍隊

ル大都市ニ於テハ警察中ニ實際日本人官吏アリ又他ノ多數ノ場所ニ於テハ日本人ノ顧問アリ吾人ト談話セル若干ノ個個ノ警察官ハ新制度ニ對スル彼等ノ反感ヲ表明シ唯彼等ハ生計ヲ營ム爲引續キ奉職セザルベカラズト言ヘリ

「滿洲國」軍隊モ亦主トシテ日本側ノ監督ノ下ニ改編セラレタル舊滿洲軍人ヨリ成ル斯カル軍隊ハ彼等ガ單ニ地方ノ秩序ヲ維持スルニ必要トセラルルモノト假定シテ當初ハ新制度ノ下ニ勤務スルコトニ滿足シタリ然レドモ爾來彼等ガ屢支那軍ニ對スル眞劍ナル戰爭ニ從事シ且日本側ノ指揮ノ下ニ日本軍隊ト相竝ンデ戰フコトヲ要求セラレテ以來「滿洲國」軍隊ハ漸次信賴シ得ザルモノト爲リツツアリ日本側ヨリ出デタル情報ハ「滿洲國」軍隊ノ頻發スル支那側ヘノ內應ヲ報ズルニ對シ支那側ハ彼等ノ最信賴スルニ足ル且豐富ナル軍需供給ノ源泉ノ一ハ「滿洲國」軍隊ナリト主張ス

實業家及銀行家

吾人ト會見シタル支那實業家及銀行家ハ「滿洲國」ニ對シ敵意ヲ抱懷セリ彼等ハ日本人ヲ嫌惡セリ彼等ハ其ノ生命及財産ニ對シ懸念ヲ有シ且屢「吾人ハ朝鮮人ノ如ク爲ルコトヲ欲セズ」ト述ベタリ九月十八日以後實業家ノ支那ヘ脫出スルモノ多數アリタリ然レドモ比較的富裕ナラザル若干ノ者ハ今ヤ歸還シツツアリ一般的ニ謂ヘバ比較的小ナル商人ハ從前ノ官吏トノ間ニ有利ナル關係ヲ有シタル大商人及製造業者ニ比シテ日本人ノ競爭ニ苦シムコト一層少カルベキコトヲ期待ス多數ノ商店ハ吾人ノ訪問ノ時ニ於テ尙閉店シ居リタリ匪賊ノ增加ハ地方ニ於ケル商取引ニ不利ナル影響ヲ與ヘ信用機構ハ大部分破壞セラレタリ滿洲ヲ經濟的ニ開發スベシトノ日本側ノ意圖ノ發表

及過去二三箇月間ニ於テ日本人經濟狀況視察者ノ夥シキ滿洲訪問ハ此等視察者ノ多數ガ失望シテ日本ニ歸レリト報ゼラルル事實ニ拘ラズ支那實業家ノ間ニ不安ノ念ヲ惹起シタリ

自由職業階級醫師、教師、學生

自由職業階級タル教師及醫師ハ「滿洲國」ニ對シ敵意ヲ有ス彼等ハ其ノ行動ヲ探偵セラレ且脅迫ヲ受ケタリト主張ス教育ニ對スル干涉、大學其ノ他若干ノ學校ノ閉鎖及教科書ノ改訂ハ愛國的理由ニ基キ既ニ旺盛ナリシ彼等ノ敵愾心ヲ彌熾烈ナラシメタリ新聞、郵便及言論ノ檢閲竝ニ支那ニ於テ發行セラルル新聞紙ノ「滿洲國」ヘノ搬入禁止ニ對シテハ反感ヲ懷キ居レリ勿論日本ニ於テ教育ヲ受ケタル支那人ニシテ前記ノ一般的敍述ニ包含セラレザルモノアリ「滿洲國」ニ反對スル學生及青年ヨリ多數ノ書翰ヲ接受セリ

農夫及都會勞働者

農夫及都會勞働者ノ態度ニ關スル證據ハ多種多樣ニシテ勿論之ヲ入手スルコト困難ナリ外國人及教育アル支那人間ノ意見ハ彼等ヲ以テ「滿洲國」ニ敵意アルカ然ラザレバ無關心ナリト爲セリ農夫及勞働者ハ政治的ニ教育セラレ居ラズ一般ニ文盲ニシテ普通ニ政治ニ興味ヲ有スルコト少シ農民ガ「滿洲國」ニ敵意ヲ懷クコトニ對シ次ノ理由ヲ述ベタルモノアルガ右ハ其ノ後此ノ階級ニ屬スル者ヨリ受ケタル書翰ノ内ノ若干ニ依リテ確認セラレタリ農夫ハ新制度ガ朝鮮人及恐ラク日本人ノ移民ヲ增加セシムルニ至ルベシト信ズルノ理由ヲ充分有ス朝鮮人ノ移民ハ支那人ト同化セズ兩者ハ農業方法ヲ異ニセリ支那人ノ農夫ハ主トシテ豆類、高粱及小麥ヲ栽培スルモ朝鮮人ノ農夫ハ米ノ耕作ニ從事ス米ノ耕作ハ溝渠及堰堤ヲ掘リ田野ヲ灌漑スルコトヲ伴ヒ若シ豪雨アラバ朝鮮人ニ依リ造ラレタル堰堤ハ崩潰シテ附近ノ支那人ノ土地ニ氾濫シ其ノ收穫ヲ害フガ如キコトモ

アリ得ベク又過去ニ於テ土地所有權及地代ノ問題ニ付朝鮮人ト不斷ノ紛爭ヲ生ジタリ「滿洲國」ノ建設以來支那人ハ朝鮮人ガ屢地代ヲ支拂フコトヲ停止セルコト、彼等ガ支那人ヨリ土地ヲ押收セルコト及日本人ガ支那人ヲ强制シテ其ノ土地ヲ低廉ナル價格ニテ賣ラシメタルコトヲ主張ス鐵道及都市ノ附近ノ農夫ハ鐵道線路及都市ヨリ五百メートル以内ニ高粱（高サ十「フィート」ニ成長スル作物ニシテ匪賊ノ作動ニ好都合ナルモノ）ノ栽培ヲ行フコトヲ禁ズル命令ニ依リ苦ミツツアリ支那本部ヨリ來ル勞働者ノ季節的移住ハ經濟的不況ヲ主トシ政治的擾亂ヲ從トスル原因ニ依リ減少シツツアルガ右ノ傾向ハ尙繼續ノ勢ニ在リ支那ヨリ來ル移民ガ一定ノ條件ニテ常ニ入手シ得タル公有地ハ今ヤ「滿洲國」ニ移管セラレタリ

千九百三十一年九月十八日以來地方ニハ匪賊及不逞ノ徒ノ類例ヲ見ザル跳梁ヲ見タルガ是レ一部ハ解隊兵ニ依ルモノニシテ一部ハ匪賊ニ依リ零落セシメラレタル末生活ノ爲自ラ匪賊ニ投ジタル農夫ニ依ルモノナリ支那ノ他ノ部分ト對照シ滿洲ハ多年組織的戰鬪ヲ見ザリシモ今ヤ斯ノ如キ戰鬪ハ日本及「滿洲國」ノ軍隊ト支那ニ尙忠誠ナル各地散在ノ軍隊トノ間ニ東三省ノ多數地方ニ亘リ行ハレツツアリ斯ノ如キ戰鬪ハ自然農夫ニ大ナル困難ヲ蒙ラシムルモノニシテ殊ニ日本ノ飛行機ハ反「滿洲國」軍庇護ノ疑アル村落ヲ爆擊シ來リタルガ故ニ特ニ然リトス其ノ一結果ハ廣大ナル地面ニ作付セザリシ事例ナルガ斯ノ如キ農夫ハ次年ニ於テ其ノ地代ヲ支拂フニ益困難ヲ感ズルニ至ルベシ定著シテ間モナキ支那人移民ノ大多數ハ騷擾勃發以來長城内ニ遁ゲ還レリ此等ノ物質的理由ハ日本人ニ對スル或根底深キ憎惡心ニ加ハリテ多數ノ證人ヲシテ吾人ニ對シ滿洲住民ノ壓

倒的多數ヲ形成スル支那人農夫ハ新制度ノ爲苦ミ且之ヲ嫌惡シ彼等ノ態度ハ受動的敵對ナルコトヲ吾人ニ告ゲシムルニ至レリ

都會住民ニ付テハ彼等ハ所ニ依リテハ日本ノ兵士、憲兵及警察官ノ態度ノ爲苦ミタリ日本兵ノ行狀ニ付テハ吾人ハ個個ノ蠻行ヲ訴ヘタル投書ニ接シ居ルモ一般的ニ謂ヘバ善良ニシテ一般的掠奪又ハ虐殺ノ事例ナシ他方ニ於テ日本人ハ其ノ敵意アリト信ジタル者ニ對シテハ之ヲ彈壓スル爲强硬ナル手段ヲ執リ來レリ支那人ハ多數ノ處刑ガ行ハレタルコト竝ニ捕虜ガ日本憲兵部ニ於テ脅迫及拷問セラレタルコトヲ主張ス

都市ニ於テ民衆ヲ刺戟シテ「滿洲國」ノ建國式ニ對スル熱心ヲ現ハサシムルコトハ不可能ナリシト聞ケリ一般的ニ謂ヘバ都人士ノ態度ハ受動的默從及敵對ノ混合ナリ

少數民族

吾人ハ支那人ノ大多數ガ「滿洲國」ニ對シ敵意アルカ然ラザレバ無關心ナルコトヲ發見シタルモ他面新政府ハ蒙古人、朝鮮人、白系露西亞人及滿洲人ノ如キ滿洲ニ於ケル諸少數民族團體ノ間ヨリ若干ノ支持ヲ受ケ居レリ彼等ハ程度ハ異レルモ何レモ從前ノ政權ノ爲壓迫ヲ受ケ又ハ過去數十年間ニ於ケル支那人ノ大移住ノ爲經濟的不利益ヲ蒙リタリ而シテ何レノ部族モ新制度ニ全ク傾倒セルモノト謂フコト能ハザルモ新制度ヨリ從來ニ優レル待遇ヲ受クベキコトヲ豫期シ新制度ノ政策モ亦此等ノ少數民族ヲ支援ス

蒙古人

蒙古人ハ支那人トハ別個ナル人種ト爲リ居レリ而シテ既述ノ如ク强キ民族意識竝ニ其ノ部族制度、貴族政治、言語、服裝、特別ノ生活樣式、作法、習慣及宗教ヲ保存セリ彼等ハ尙主トシテ牧

畜ノ民ナリト雖モ漸次農作ニ從事シ又荷車及動物ニ依ル農產物ノ運搬ニ從事ス滿洲內ノ境界接壤地方ニ住スル蒙古人ハ彼等ノ土地ヲ獲得シ耕作シ彼等ヲ漸次驅逐シツツアル支那人移民ノ爲益苦ミ來リ爲ニ漫性的且不可避ノ反感ヲ有スルニ至レリ吾人ノ接シタル蒙古代表團ハ過去ニ於テ支那ノ官吏及收稅吏ノ貪慾ニ依リ苦ミタルコトヲモ訴ヘタリ內蒙古ノ蒙古人ハ外蒙古ガ「ソヴィエト」聯邦ノ勢力下ニ歸スルヲ見タルガ彼等ハ同聯邦ノ內蒙古ヘノ進出ヲ恐レツツアリ彼等ハ一方ニ於テ支那人他方ニ於テ「ソヴィエト」聯邦ガ侵略シ來ルニ對抗シテ別個ノ國家的存在ヲ維持セント欲ス彼等ハ從來敍上ノ如キ不安定ナル地位ニ置カレタルヲ以テ新制度ノ下ニ於テ其ノ別個ノ存在ヲ維持セントスル一層大ナル希望ヲ懷キ居レリ加之王族ハ其ノ富ノ維持ノ爲主トシテ不動產及特權ニ依存スルモノナルヲ以テ自然彼等ハ事實上ノ權威者ニ對シ從順ナルノ傾向アルコトヲ注目スルヲ要ス然レドモ本委員會ハ北平ニ於テ蒙古王族ノ一代表團ニ接シタルガ彼等ハ新制度ニ對シ反對ナルコトヲ述ベタリ現在滿洲外ノ境界接壤地方ニ住スル蒙古人ト「滿洲國政府」トノ間ノ關係ハ明確ナラズ而シテ「滿洲國政府」モ亦今日迄彼等ノ施政ニ干涉スルコトヲ抑制セリ現在ニ於ケル此等蒙古人ノ或者ノ支持ハ多少ノ不安ヲ交ヘナガラ兎モ角本心ヨリスルモノナルモ彼等ハ若シ日本人ガ或將來ニ於テ彼等ノ獨立又ハ經濟上ノ利益ニ對スル脅威ナルコト明ナルニ至ラバ斯ノ如キ支持ハ忽チ之ヲ撤去スルニ至ルベシ

滿洲人

滿洲人ハ支那人ト殆ド完全ニ同化セリ尤モ吉林及黑龍江ニ於テハ尙政治上重要ナラザル少數ノ滿洲人ノ殖民團アリテ二國語ヲ話スモ明ニ滿洲人トシテ殘存ス民國成立以來滿洲民族ノ殘存者ハ其

ノ特權的地位ヲ失ヒタリ卽チ民國ハ彼等ノ補助金ノ支拂ヲ繼續スベキコトヲ約シタルモ減價セル通貨ヲ以テ支拂ハレタルガ故ニ彼等ハ徐儀ナク經驗ナキ農耕及商業ヲ始ムルニ至レリ「滿洲國」ノ後援者ハ屢滿洲ノ住民ヲ以テ支那ノ他ノ部分ノ住民ト人種ヲ異ニストヽ爲シタルト又最後ノ滿洲皇帝ハ「滿洲國」ニ於テ執政ナルトニ依リ右少數ノ純滿洲人ハ「滿洲國」ノ建設ト共ニ再ビ特權的待遇ヲ得ベシトノ希望ヲ懷クコトアルベシ滿洲人ハ斯カル希望ヲ以テ政府ニ入リタルモ滿洲ニ於ケル支那人證人ノ言フ所ニ依レバ此等ノ在官者ハ總テノ權力ハ日本人ノ手ニ握ラレ彼等ノ提議ハ顧ミラレザルヲ見テ期待ニ反シタルコトヲ感ジツツアル趣ナリ滿洲人ノ血ヲ有スル者ノ間ニハ前皇帝ニ對スル或感情的忠誠ノ念尙存スベシト雖モ何等民族意識アル顯著ナル滿洲人運動存在セズ滿洲人ヲ官吏ニ登用シ以テ滿洲民族意識ノ振興ニ資セントノ努力アルモ彼等ハ殆ド全ク支那人ト同化シタルヲ以テ此ノ方面ヨリノ新政府ニ對スル支持ハ民意代表ノ名ヲ冠スルニ足ル實ヲ具フルモノニ非ズ

朝鮮人

過去ニ於テ一方日本官憲ノ後援ヲ受クル朝鮮人農夫ト他方支那ノ官吏、地主及農夫トノ間ニハ多クノ軋轢アリタリ過去ニ於テ朝鮮人農夫ハ暴行及搾取ニ依リ苦ミタルコト疑ナシ

本委員會ノ會見シタル朝鮮人代表諸團ハ一般ニ新制度ヲ歡迎セリ然レドモ吾人ハ如何ナル範圍迄彼等ガ其ノ團體ノ代表ナリシカヲ言明スルコトヲ得ズ兎ニ角朝鮮人中ノ政治的避難民ハ日本ノ支配ヲ免ルル爲移住セルモノナルヲ以テ右支配ノ擴張ヲ歡迎スルモノトハ想像セラレズ此等ノ避難民ハ共產主義宣傳ノ沃土ト爲リ又朝鮮內ニ於ケル革命團體ト接觸ヲ維持シ居レリ(註)

白系露西亞人

註　尙第三章及本報告書附屬ノ特別研究第九ヲ見ヨ

滿洲ニ於ケル一切ノ少數民族團體ノ內哈爾賓及其ノ附近ニ於ケル其ノ數少クモ十萬人ヲ算スル白系露西亞人ノ小居留民團ハ近年最苦難ヲ嘗メタリ彼等ハ彼等ヲ保護スベキ自國政府ヲ有セザル少數民族團體ナルヲ以テ支那ノ官吏及警察官ニ依リ各種ノ屈辱ヲ蒙リタリ彼等ハ故國ノ政府ト不和ノ關係ニ在リ故ニ滿洲ニ在リテモ絕エザル不安ノ裡ニ在ルモノナリ彼等ノ團體內ニ於テ裕福ニシテ敎育アル者ハ生計ヲ營ミ得ルモ支那官憲ガ彼等ヲ犧牲ニ供シテ或種ノ利益ヲ「ソヴィエト」聯邦ヨリ得ラルベシト考フルトキハ之ガ爲ニ苦メラレ易カリキ一層貧困ナル者ハ生計ヲ立ツルコト甚ダ困難ニシテ又絕エズ警察ノ爲及支那法廷ニ於テ苦メラレタリ懸引ノ方法ニ依リ租稅ガ賦課セラルル地方ニ於テハ彼等ハ其ノ支那人タル隣人ヨリモ高キ割合ノ課稅ヲ支拂フコトヲ要シタリ彼等ハ其ノ商業及行動ニ關シ多クノ制限ヲ經驗セリ而シテ彼等ノ旅券ガ檢査セラレ其ノ契約ガ認證セラレ又ハ其ノ土地ガ讓渡セラルルニハ官吏ニ對シ賄賂ヲ贈ルコトヲ要シタリ右團體內ノ多數ノ者ニトリテハ蓋シ現在ヨリモ劣レル狀態ト爲リ得ザルベキヲ以テ彼等ハ日本人ヲ歡迎シ且今ヤ彼等ノ運命ハ新政權ノ下ニ開ケ行クベシトノ希望ヲ懷抱スルコトハ怪ムニ足ラズ

吾人ハ哈爾賓滯在中白系露西亞人ノ代表團竝ニ多數ノ書翰ニ接シタリ而シテ吾人ハ之ニ依リ彼等ハ次ノ諸事項ヲ彼等ニ保障スル如何ナル制度ヲモ支持スベシトノ結論ヲ得タリ

(一) 庇護權

(二) 公正ニシテ有能ナル警察行政

(三) 法廷ニ於ケル公正
(四) 衡平ナル課税制度
(五) 贈賄ニ依ラザル商業及定住ノ權利
(六) 兒童ノ教育ニ對スル便宜

彼等ノ此ノ點ニ於ケル要求ハ主トシテ彼等ノ移住ヲ可能ナラシムル爲ノ外國語ノ有能ナル教授及彼等ヲシテ支那ニ於テ實業ニ就職シ得シムル爲ノ良好ナル技術教育ナリ

(七) 土地定住及移住ニ關スル或援助

本委員會ノ結論

以上ハ吾人ノ滿洲旅行中吾人ニ傳達セラレタル地方人民ノ意見ナリ公私ノ會見、書翰及書面陳述ニ依リ吾人ニ提供セラレタル證據ヲ愼重ニ研究シタル後吾人ハ「滿洲國政府」ハ地方ノ支那人ニ依リ日本側ノ手先ト目セラレ支那側一般ノ支持ナキモノナリトノ結論ニ到達シタリ

第七章

日本ノ經濟的利益及支那ノ「ボイコット」(註一)(註二)

註一 「ボイコット」 本語ハ當初「アイルランド」ニ於テ使用セラレ「メーボ」縣ニ於ケル「アーヌ」伯領地ノ差配人「チャールズ、カンニンガム、ボイコット」大尉(千八百三十二年—千八百九十七年)ノ名ニ起原ス借地人ニ依リテ定メラレタル額ノ地代ヲ千八百八十年受領スルコトヲ

拒絶セルガ爲「ボイコット」大尉ノ生命ハ脅サレ其ノ雇人ハ退去ヲ餘儀ナクセラレ其ノ垣根ハ破壞セラレ其ノ書翰ハ押收セラレ又其ノ食糧供給ハ阻害セラレタリ此ノ語ハ直ニ普通ノ英吉利語トシテ使用セラレ且急速ニ多數ノ外國語ニ採用セラルルニ至レリ(「エンサイクロペディア、ブリタニカ」)

註二 本報告書附屬ノ本問題ニ關スル特別研究(第八)ヲ見ヨ

日貨ニ對スル支那ノ「ボイコット」ハ日支紛爭ニ於ケル重要ナル要因ナリ

前三章ハ主トシテ千九百三十一年九月十八日以來ノ軍事上及政治上ノ事件ノ記述ニ限ラレタリ日支紛爭ノ討究ハ紛爭ニ於ケル他ノ重要ナル要因卽チ日貨ニ對スル支那ノ「ボイコット」ヲ何等說明セザル限リ的確又ハ完全ナラザルベシ右「ボイコット」運動ニ於テ使用セラレタル方法及其ノ日本ノ貿易ニ及ボシタル影響ヲ理解センガ爲ニハ日本ノ一般經濟的地位、其ノ支那ニ於ケル經濟的及金融的利益並ニ支那ノ外國貿易ニ付若干記述スルノ要アリ尙右ハ次章ニ於テ論究セラルベキ滿洲ニ於ケル支那及日本雙方ノ經濟的利益ノ範圍及特質ヲ理解スル爲ニモ必要ナリ

日本ノ人口過剩

日本ハ前世紀ノ六十年代ニ於ケル明治維新ノ頃二世紀以上ニ亘ル鎖國ヨリ脫却シ而シテ五十箇年ヲ俟タズシテ世界ノ一流强國ニ發展セリ從前殆ド增加ナカリシ人口ハ急速ニ增加シ始メ千八百七十二年ニ於ケル三千三百萬ヨリ千九百三十年ニ於ケル六千五百萬ノ數字ニ達セリ而シテ此ノ驚クベキ增加ハ一年ニ約九十萬ノ割合ヲ以テ尙繼續ス

日本ノ人口ノ全面積ニ對スル割合ハ一平方哩ニ約四百三十七人ニシテ合衆國ノ四十一人、獨逸ノ三百三十人、伊太利ノ三百四十九人、英吉利ノ四百六十八人、白耳義ノ六百七十人及支那ノ二百五十四人ニ對比ス

可耕地一平方哩當リノ日本ノ人口ヲ他國ノ人口ニ比較センニ日本ノ割合ハ異常ニ高シ右ハ島帝國ノ特殊ノ地理的構成ニ歸因ス卽チ

日本	二、七七四
英吉利	二、一七〇
白耳義	一、七〇九
伊太利	八一九
獨逸	八〇六
佛蘭西	四六七
亞米利加合衆國	二二九

農業地ニ人口ガ高度ニ集中シ居ル爲各人ノ保有地面積ハ頗ル狹小ニシテ農夫ノ三五「パーセント」ハ一「エーカー」未滿ヲ三四「パーセント」ハ二「エーカー」半未滿ヲ耕作ス耕地ノ擴張ハ其ノ限度ニ達シ又農法ノ集約モ其ノ限度ニ達シ居レリ約言スレバ日本ノ土地ハ今日以上ニ餘リ多ク生産スルコト能ハザルベク又就職ノ機會ヲ今日以上ニ多ク供給スルコト能ハズ

土地ニ關スル困難

尙集約農法及肥料ノ普及的使用ノ結果トシテ生産費ハ嵩マレリ

土地ノ價格ハ亞細亞ノ如何ナル地方ニ於ケルヨリモ否歐羅巴ノ最人口稠密ノ地方ヨリモ遙ニ高シ重キ債務ヲ負ヒ居レル人民ノ間ニ多クノ不滿存シ居ルモノノ如ク借地人ト地主トノ間ノ爭議ハ增加シツツアリ移民ハ見込アル救濟方法ト思考セラレタルモ次章ニ於テ述ブルガ如キ理由ヲ以テ現

在迄ノ處解決手段ト爲ラザリキ

日本ハ當初都市人口ノ增加奬勵ノ爲工業主義ニ轉向セルガ右ハ農産物ノ爲國內市場ヲ提供スルト共ニ勞働ヲ國內及外國ニ於テ使用セラルベキ物資ノ生産ニ向ハシムルモノナリ爾後幾多ノ變化ヲ生ゼリ從前日本ハ食糧供給ノ見地ヨリ觀テ自足以上ノ狀態ニ在リシガ近年ハ其ノ全輸入ノ八「パーセント」乃至一五「パーセント」ハ食料品ニシテ右高低ハ國內收穫殊ニ米ノ收穫ノ狀態ノ變易ニ歸因スルモノナリ右食料品ノ輸入並ニ此等ノ輸入ノ必要ノ恐ラク增加スベキコトハ既ニ逆ト爲レル同國ノ貿易勘定ヲ工業品ノ輸出增加ニ依リテ補フノ企圖ヲ必要ナラシム

一層ノ工業化ノ必要

若シ日本ニシテ增加シツツアル人口ニ對スル職業ヲ此以上ノ工業化ノ過程ニ依リテ見出スノ要アリトセバ其ノ輸出貿易ノ發展並ニ其ノ製造品及半製造品ノ漸增數量ヲ吸收シ得ル外國市場ノ開拓益緊要ナリ斯ノ如キ市場ハ同時ニ原料品及食料品ノ供給地タリ得ベシ

今日迄發展シタル日本ノ輸出貿易ハ二箇ノ主ナル方面ヲ有ス卽チ其ノ贅澤產品タル生絲ハ亞米利加合衆國ニ其ノ主要製造品主トシテ綿製品ハ亞細亞ノ諸國ニ向ヒ合衆國ハ日本ノ輸出ノ四二・五「パーセント」、亞細亞市場ハ總括シテ四二・六「パーセント」ヲ占ム而シテ右後者ノ內支那、關東州租借地及香港ハ二四・七「パーセント」ヲ占メ其ノ殘餘ノ大部分ハ亞細亞ノ他ノ地方ニ於テ支那商人ニ依リテ取扱ハル（註）

日本ノ輸出貿易市場タル支那

註　千九百二十九年ノ數字、千九百三十一年ノ「ジャパン、イーヤ、ブック」

千九百三十年卽チ完全ナル數字ノ判明シ居ル最近ノ年ニ於テ日本ノ輸出總額ハ十四億六千九百八

十五萬二千圓其ノ輸入總額ハ十五億四千六百七萬千圓ニ達シタリ而シテ右輸出ノ内二億六千八十二萬六千圓卽チ一七・七「パーセント」ハ支那（關東州租借地及香港ヲ除ク）ニ向ヒ右輸入ノ内一億六千百六十六萬七千圓卽チ一〇・四「パーセント」ハ支那（關東州租借地及香港ヲ除ク）ヨリ來レリ

日本ヨリ支那ニ輸出サルル主ナル商品ヲ細別スルトキハ支那ハ日本ヨリ輸出サルル一切ノ水產物ノ三二・八「パーセント」、精糖ノ八四・六「パーセント」、石炭ノ七五・一「パーセント」、綿織物ノ三一・九「パーセント」卽チ平均五一・六「パーセント」ヲ輸入スルヲ見ルベシ

支那ヨリ輸入サルル商品ヲ同樣ニ細別スルトキハ日本ガ輸入スル豆類及豌豆ノ總額ノ二四・五「パーセント」、油糟ノ五三「パーセント」、植物性纖維ノ二五「パーセント」卽チ平均三四・五「パーセント」ハ支那ヨリ來ルモノナルコトヲ示ス

上記ノ數字ハ香港及關東州租借地ヲ除キタル支那ノミニ關スルモノナルヲ以テ主トシテ大連港ヲ經由シテ行ハレツツアル日本ノ對滿洲貿易ノ範圍ヲ示シ居ラズ

日支貿易關係ノ重要性

敍上ノ事實及數字ハ日本ニトリ其ノ對支那貿易ノ重要ナルコトヲ明ニ示スモノナリ尙日本ノ支那ニ於ケル利益ハ單ニ貿易ニ止マルモノニ非ズ日本ハ巨額ノ資本ヲ工業的企業、鐵道、船舶業及銀行業ニ投ジ此ノ方面ノ金融上及經濟上ノ活動ニ於テ發展ノ一般的傾向ハ最近三十年間ニ著シク增大シツツアリタリ

支那ニ於ケル日本ノ投資

千八百九十八年ニ於テ擧グルニ足ルベキ日本ノ唯一ノ投資ハ支那人トノ合辦ニ係リ約十萬兩ノ價

格ヲ有スル上海ニ在ル一小精綿機械ニ過ギザリキ千九百十三年迄ニ支那及滿洲ニ於ケル日本ノ投資見積總額ハ日本ノ海外投資見積總額五億三千五百萬圓ノ内四億三千五百萬圓ニ上リ世界大戰ノ終迄ニ日本ハ支那及滿洲ニ於ケル其ノ投資額ヲ千九百十三年ノ同投資額ノ二倍以上ト爲セリ右增加ノ大部分ハ有名ナル「西原借款」ニ基クモノニシテ同借款ハ或程度迄政治的考慮ニ基キ與ヘラレタルモノナリ然レドモ千九百二十六年日本ノ議會ハ一億圓ニ達スル迄右等借款ヲ利子ト共ニ引取ルベキコトヲ政府ニ要求スル一法律ヲ通過シタリ支那諸企業ニ對スル借款ノ多數モ亦其ノ價値疑ハシキモノナルコト明瞭ト爲レリ此ノ故障アリシニ拘ラズ日本ノ支那及滿洲ニ於ケル投資額ハ千九百二十九年ニ於テ海外投資總額二十一億圓ノ内約二十億圓（註）ト見積ラレタリ右ハ日本ノ海外投資ハ殆ド全ク支那及滿洲ニ限定セラレ而モ後者ガ此ノ投資（特ニ鐵道ヘノ）ノ遙ニ大部分ヲ吸收シタルモノナルコトヲ示ス

註　他ノ見積ニ依レバ支那（滿洲ヲ含ム）ニ於ケル日本ノ投資ハ總額約十八億圓ナリ

右投資以外ニ支那ハ日本ニ對シ諸種ノ國債、省債及市債トシテ債務ヲ負ヒ其ノ總額ハ千九百二十五年ニ於テハ三億四百四十五萬八千圓（其ノ大部分ハ無擔保）及利息千八百三萬七千圓ト推算セラレタリ

日本ノ投資ノ大部分ハ滿洲ニ存スルモ支那本部ニ於テ工業、船舶業及銀行業ニ投ゼラレタル金額亦少カラズ千九百二十九年ニ於テ支那ノ紡績及紡織工場ニ於テ運轉セル紡錘總數ノ約五〇「パーセント」ハ日本人ニ依リテ所有セラレ又日本ハ支那ニ於ケル通運業ニ於テ第二位ヲ占メ支那ニ於

ケル日本ノ銀行ノ數ハ千九百三十二年ニ於テ三十ニ達シ其ノ内若干ハ日支合辦ナリ

對日本貿易ノ發展ニ於ケル支那ノ利益

敍上ノ數字ハ日本ノ立場ヨリ述ベタルモノナル處支那ノ立場ヨリ見ルモ其ノ相對的重要性ヲ容易ニ知ルコトヲ得日本トノ外國貿易ハ千九百三十二年迄支那ノ外國貿易總額中ノ首位ヲ占メタリ千九百三十年ニ於テ其ノ輸出ノ二四・一「パーセント」ハ日本ニ向ヒ同年ニ於ケル其ノ輸入ノ二四・九「パーセント」ハ日本ヨリ來レリ右ヲ日本側ノ立場ヨリスル數字ニ比較スレバ支那ノ外國貿易總額中對日本貿易ノ占ムル割合ハ日本ノ外國貿易總額中對支那貿易ガ占ムルモノヨリモ多キコトヲ知ルヲ得然ルニ支那ハ日本ニ於テ何等ノ投資ヲモ銀行業又ハ船舶業ノ利益ヲモ有セズ支那ニトリテハ其ノ需要スル多數ノ精製品ニ對スル支拂ヲ可能ナラシメ且堅實ナル信用ノ基礎ヲ築キ以テ更ニ發展スルニ必要ナル資本ヲ借入レンガ爲ニハ其ノ生產物ノ輸出增加ヲ可能ナラシムルコト何事ヨリモ必要ナリ

日支ノ經濟金融關係ハ如何ナル紛擾要因ニ依リテモ容易ニ影響セラレ且混亂セシメラルルモノナルコト明ナリ尙全體トシテ日本ノ支那ニ依存スルコトハ支那ノ日本ニ依存スルコトヨリモ大ナルモノノ如シ故ニ日本ハ支那トノ關係混亂スル場合ニ於テハ支那ニ比較シ一層害セラレ易ク且失フ所モ多シ

以上ニ依リ之ヲ觀ルニ日支ノ經濟上及金融上ノ關係ハ廣汎且多岐ニシテ從テ如何ナル紛擾要因ニ依リテモ容易ニ影響セラレ且混亂セシメラルルモノナルコト明ナリ尙全體トシテ日本ノ支那ニ依存スルコトハ支那ノ日本ニ依存スルコトヨリモ大ナルモノノ如シ故ニ日本ハ支那トノ關係混亂スル場合ニ於テハ支那ニ比較シ一層害セラレ易ク且失フ所モ多シ

從テ千八百九十五年ノ日清戰爭以來兩國ノ間ニ起リタル幾多ノ政治的紛爭ガ順次相互ノ經濟關係ニ影響シタルコト明ナリ而シテ此等ノ紛擾ニ拘ラズ兩國間ノ貿易ガ絕エズ增加シタルノ事實ハ政治的敵對モ斷ツコト能ハザル基本的經濟紐帶ノ存スルコトヲ證スルモノナリ

「ボイコット」ノ起原

幾世紀ニ亘リ支那人ハ商人、銀行家及職人等ノ同業組合ノ組織内ニ於テ「ボイコット」手段ヲ慣用シタリ此等ノ同業組合ハ現代ノ情勢ニ合致スル樣變更セラレタルモ尙多數ニ存在シ其ノ共通ナル職業的利益ノ擁護ノ爲組合員ニ對シ絕大ナル勢力ヲ振ヒツツアリ右幾世紀ノ歷史ヲ有スル同業組合生活ニ於テ得タル訓練及態度ハ近代ノ「ボイコット」運動ニ於テ近年ノ熾烈ナル國民主義ト結合セリ而シテ國民黨ハ右國民主義ノ組織的表現ナリ

近代ノ排外「ボイコット」

國民的基礎ニ於テ外國ニ對スル政治的武器（支那商人相互間ニ行ハレタル職業的方便ト異ル）トシテ使用セラルル近代ノ排外「ボイコット」ノ時代ハ千九百五年亞米利加合衆國ニ對シテ行ハレタル「ボイコット」ニ依リ始マリタリト云フヲ得ベシ右「ボイコット」ハ同年改訂セラレタル米支通商條約ノ規定ガ從前ヨリモ一層嚴重ニ支那人ノ亞米利加ヘノ入國ヲ制限セルニ依リ起リタリ爾來今日ニ至ル迄規模ニ於テ國民的ト稱セラルベキ別個ノ「ボイコット」十回行ハレタリ（此ノ外ニ地方的性質ノ排外運動アリタリ）右ノ内九回ハ對日本（註）ニシテ唯一回ハ對英吉利ナリ

註　此等「ボイコット」ノ年度及直接原因ハ次ノ如シ

千九百八年	辰丸事件
千九百九年	安東奉天鐵道問題
千九百十五年	「二十一箇條要求」
千九百十九年	山東問題
千九百二十三年	旅順及大連回收問題
千九百二十五年	五月三十日事件
千九百二十七年	山東出兵

此等「ボイコット」運動ノ諸原因

若シ此等ノ「ボイコット」ヲ仔細ニ研究セバ何レモ概シテ政治的性質ヲ有スル或一定ノ事實、事件又ハ出來事ニシテ支那ガ其ノ物質的利益ニ反シテ行ハレ又ハ其ノ國家ノ威嚴ヲ毀損スト解スルモノニ其ノ緣由ヲ繹ネ得ルコトヲ發見スベシ斯クシテ千九百三十一年ノ「ボイコット」ハ同年六月ノ萬寶山事件ニ續キテ發生セル七月ノ朝鮮ニ於ケル虐殺ノ直接ノ結果トシテ開始セラレ九月ノ奉天事件及千九百三十二年一月ノ上海事件ニ依リ促進セラレタルモノナリ各「ボイコット」ニハ各直接ニ繹ネ得ル原因アルモ其ノ原因自體ハ何レモ第一章ニ述ベタル群衆心理ナカリセバ斯ノ如キ廣汎ナル經濟的報復ヲ惹起セザリシナルベシ此ノ心理ノ創生ニ寄與セル要因ハ不公正ナリトノ確信（正當ニ又ハ不當ニ斯ク考ヘラレタル）、外國人ニ比シ支那ノ文化ガ優越ナリトスル相傳的信條及目的ニ於テ主トシテ守勢的ナルモ其ノ間攻擊的傾向ヲ缺如セザル西洋式ノ熾烈ナル國民主義ナリ

千九百二十五年迄ノ「ボイコット」運動

國民黨ノ前身トモ見ラルル支那ノ更生ヲ目的トスル一結社（興中會）ハ遠ク千八百九十三年ニ創設セラレ又千九百五年ヨリ千九百二十五年ニ至ル間ノ總テノ「ボイコット」ハ疑モナク國民主義ノ喊聲ヲ以テ開始セラレタルモノナリト雖モ最初ノ國民主義者ノ諸團體及後ニ至リ國民黨ガ右「ボイコット」ノ組織ニ直接關與セルノ具體的證憑ナシ

商務總會及學生同盟ハ孫逸仙博士ノ新綱領ニ鼓吹セラレ又實際ニ於テハ幾世紀ノ歷史ヲ有スル祕

千九百二十五年以後ノ「ボイコット」運動、國民黨ノ活動

密結社竝ニ同業組合ノ經驗及心理ニ導カレ斯カル事業ニ付充分ノ能力ヲ有シタリ商人ハ專門的知識、組織方法及手續規則ヲ供給シ一方學生ハ新ニ得タル確信ノ熱誠及奉國ノ精神ヲ以テ其ノ運動ヲ鼓吹シ以テ之ガ實行ヲ助成セリ學生ハ概シテ國民主義的感情ノミニ動カサレタルモノナルガ商務總會ハ其ノ感情ハ同ジクスルモ「ボイコット」ノ實行ヲ支配セントスルノ欲望ヨリ之ニ參加スルヲ賢明ナリト思考セリ初期「ボイコット」ノ實際ノ規則ハ同運動ノ對手タル國ノ商品ノ購買ヲ防止スル樣工夫セラレタルモノナルガ其ノ活動ノ範圍ハ漸次該國ニ對スル支那商品ノ輸出拒絕又ハ支那ニ於ケル該國人ニ對スル有償無償ノ奉仕ノ拒絕ニ擴張セラレ終ニ最近ノ「ボイコット」ノ標榜スル目的ハ「仇國」トノ間ノ一切ノ經濟的關係ヲ完全ニ斷絕スルコトニ存スルニ至レリ

斯ク樹立セラレタル規則ハ本報告書ニ附屬ノ特別研究ニ於テ詳述セラレタル理由ニ因リ未ダ充分ニ徹底的ニハ實行セラレタルコトナキコトヲ指摘セザルベカラズ一般的ニ謂ヘバ「ボイコット」ハ北方（特ニ山東ハ之ニ對スル支持ヲ差控ヘタリ）ニ於ケルヨリモ國民主義的感情ガ最初ノ且最熱烈ナル共鳴者ヲ發見セル南方ニ於テ一層强キ原動力ヲ有セリ

千九百二十五年以來「ボイコット」組織ニ確定的變化起リタリ國民黨ハ其ノ創設以來同運動ヲ支持シ相次デ起レル「ボイコット」毎ニ其ノ支配ヲ增加シ遂ニ今日ニ於テハ此等示威運動ノ眞ノ組織的、原動的、調整的及監督的要素タルニ至レリ

以上ノ事ヲ爲スニ當リ國民黨ハ本委員會所有ノ證據ニ示サルル如ク從前「ボイコット」運動ノ指導ニ當リ居リタル各團體ヲ除外セザリキ同黨ハ寧ロ此等ノ團體ノ努力ヲ調整シ其ノ方法ヲ組織化及

統一シ其ノ運動ノ背後ニ強力ナル黨組織ノ精神的及物質的ノ重味ヲ充分ニ付與セリ全國ニ支部ヲ有シ廣汎ナル宣傳及情報機關ヲ有シ強キ國民主義的感情ニ刺戟セラレ居ル同黨ハ當時迄稍散在的ナリシ運動ニ組織及ビ刺戟ヲ與フルコトニ急速ニ成功セリ其ノ結果トシテ商人及一般民衆ニ對スル「ボイコット」組織者ノ强制的權力ハ從前ヨリモ一層强キヲ加ヘタリ尤モ同時ニ個個ノ「ボイコット」團體ニ對シ相當ノ自治及發案ノ餘地殘サレタリ

使用セラレタル方法

「ボイコット」規則ハ地方ノ狀況ニ從ヒ變化ヲ續ケタルモ組織ノ强大ト爲ルニ伴ヒ「ボイコット」團體ニ依リ使用セラレタル方法ハ一層統一的ニ一層嚴格且效果的ト爲レリ同時ニ國民黨ハ命令ヲ發シテ日本人ニ屬スル商業家屋ノ破壞又ハ身體ノ加害ヲ禁止セリ右ハ「ボイコット」中ニ於テ在支那日本人ノ生命ガ決シテ脅サレタルコトナキヲ意味セザルモ概括的ニハ最近ノ「ボイコット」ニ於テハ日本臣民ニ對スル暴行ハ從前ニ比シ少ク且輕微ナリシト謂フコトヲ得ベシ

使用セラレタル方法ノ技巧ヲ檢討スルニ「ボイコット」ノ成功ニ必須ナル民衆感情ノ雰圍氣ハ「仇」國ニ對スル民心ヲ刺戟スル爲巧妙ニ選バレタル標語ヲ用ヒテ全國ニ亘リ統一的ニ實行セラレタル猛烈ナル宣傳ニ依リ創生セラレ居ルヲ見ル

排日宣傳

本委員會ノ實見セル現在ノ對日本「ボイコット」ニ於テハ民衆ニ對シ日貨不買ノ愛國的義務ヲ印象スル爲有ラユル手段使用セラレ居リタリ支那新聞紙ノ紙面ハ此ノ種ノ宣傳ニ充タサレ又市内ノ建築物ノ壁ハ「ポスター」ヲ以テ蔽ハレ居リタルガ此ノ種「ポスター」ニハ屢極端ニ激烈ナル性質ノモノアリタリ(註) 排日標語ハ紙幣、書翰及電報用紙ニモ印刷セラレ繼送書翰ハ轉轉セリ此等ノ

事例ハ決シテ玆ニ全部ヲ盡シ居ルモノニハ非ザルモ使用セラレタル方法ノ性質ヲ示スニ足ルベシ此ノ種ノ宣傳ガ千九百十四年乃至千九百十八年ノ世界大戰中歐羅巴及亞米利加ノ數國ニ於テ用ヒラレタルモノト本質的ニ異ラザルノ事實ハ兩國間ノ政治的緊張ノ結果トシテ支那人ガ日本ニ對シテ感ズルニ至レル敵意ノ程度ヲ證明スルニ足ル

註 本委員會ノ訪問セル多數ノ都市ニ於テハ此ノ種「ポスター」ハ豫メ撤去セラレ居リタルモ屢此ノ種「ポスター」ノ見本ヲ所有セル信賴スベキ地方ノ證人ノ言明ハ上記ノ事實ヲ確證セリ尙又右見本ハ本委員會ノ記錄中ニ保存シアリ

抗日會ニ依リ採用セラレタル「ボイコット」規則

「ボイコット」ノ政治的雰圍氣ハ其ノ最後ノ成功ニ缺クベカラザルモノナレドモ斯カル運動ハ若シ「ボイコット」團體ガ其ノ手續規則ニ於テ或種ノ統一性ヲ得ルニ非ザレバ決シテ效果的ナルコト能ハズ千九百三十一年七月十七日ニ開催セラレタル上海抗日會ノ第一回會議ニ於テ採用セラレタル四箇ノ一般原則ハ此ノ種規則ノ主要目的ヲ例證スルニ足ルベシ

(イ) 既約日貨ノ注文ヲ撤回スルコト

(ロ) 既約日貨ニシテ引渡未了ノモノハ積荷ヲ停止セシムルコト

(ハ) 既ニ倉庫ニ在ルモ支拂未了ノ日貨ハ受領ヲ拒絶スルコト

(ニ) 既購入日貨ヲ抗日會ニ登記シ其ノ賣却ヲ一時停止スルコト登記ノ手續ハ別ニ決定ス

同會ニ依リ採用セラレタル其ノ後ノ決議ハ一層詳細ニシテ有ラユル場合及起リ得ベキ事件ニ對スル規定ヲ包含ス

「ボイコット」ヲ勵行スル强力ナル手段ハ支那商人ノ手持日貨ノ强制登記ナリ排日諸團體ノ檢査員

ハ日貨ノ動キヲ監視シ出所疑ハシキモノハ日貨ナリヤ否ヤヲ確ムル爲之ヲ檢査シ未登記日貨ノ存在ノ嫌疑アル商店及倉庫ニ手入レヲ行ヒ規則違反發見ノ場合ハ其ノ首領ノ注意ヲ喚起ス斯カル規則違反ノ行爲ヲ發見セラレタル商人ハ「ボイコット」團體自身ニ依リ罰金ヲ課セラレ公然民衆ノ非難ニ曝サレ一方其ノ所有商品ハ沒收ノ上公賣ニ付セラレ其ノ賣上金ハ排日團體ノ資金ト爲ル

「ボイコット」ハ商業ノミニ限ラルルニ非ズ支那人ハ日本船ニテ旅行ヲ爲サズ日本ノ銀行ヲ利用セズ又ハ業務上家事上ヲ問ハズ如何ナル資格ニ於テモ日本人ニ奉仕セザル樣警告セラル此等ノ命令ヲ無視スルモノニハ各種ノ非難及脅迫加ヘラル

千九百三十一年—三十二年ニ於ケル「ボイコット」運動ノ消長

從前ノ「ボイコット」ニ於ケルト同ジク此ノ「ボイコット」ノ他ノ特徵ハ單ニ日本ノ工業ヲ害スルノミナラズ從來日本ヨリ輸入セル或種貨物ノ生產ヲ刺戟シテ支那ノ工業ヲ促進セントスル希望ナリ其ノ主ナル結果ハ支那纖維工業ガ上海地方ニ於ケル日本側所有ノ工場ヲ犧牲トシテ擴張セラレタルコトナリ

上述ノ如キ大綱ニ依リ組織セラレタル千九百三十一年ノ「ボイコット」ハ同年十二月或種ノ弛緩ノ現ハレタル迄繼續セリ千九百三十二年一月ニハ當時進行中ノ大上海市長ト同地日本總領事トノ間ノ交涉中ニ於テ支那側ハ同地方抗日會ヲ自發的ニ解散スルコトヲスラ約シタリ

上海ニ於ケル敵對行爲中及日本軍撤收直後ノ數箇月間ニ於テハ「ボイコット」ハ決シテ完全ニ拋棄セラレザリシモ緩和セラレ晩春及初夏ニ於テハ支那各地方ニ於ケル日本トノ貿易再興スベキヤニサヘ見受ケラレタリ次デ七月末ヨリ八月初旬ニ亘リ熱河境界ニ於ケル軍事的活動ノ報ト時ヲ同ジ

「ボイコット」運動ノ物質的影響

クシテ極メテ突然ニ「ボイコット」運動ノ顯著ナル復活ヲ見タリ民衆ニ對シ日貨不買ヲ强調スル記事ハ支那各新聞ニ再ビ揭載セラレ上海商務總會ハ「ボイコット」ノ再開始ヲ慫慂スル書翰ヲ公開シ同市ニ於ケル石炭商同業組合ハ日本炭ノ輸入ヲ最少限度ニ制限スルニ決セリ同時ニ日本炭取扱ノ嫌疑アル石炭商ノ構內ニ爆彈ヲ投入シ又ハ商店主ニ對シ書翰ヲ送リテ日貨ヲ賣ルコトヲ止メザレバ其ノ財產ヲ破壞スベシト脅迫スル等ノ一層激烈ナル方法用ヒラルルニ至レリ新聞ニ揭載セラレタル此ノ種ノ書翰ニハ「鐵血團」又ハ「血魂除奸團」ト署名セラレタルモノアリタリ

以上ハ本報告書起草中ノ狀況ナリ「ボイコット」活動ノ此ノ再發ハ在上海日本總領事ヲシテ地方官憲ニ對シ正式抗議ヲ提出セシメタリ

各種ノ「ボイコット」運動及特ニ現時ノ「ボイコット」運動ハ物質的及心理的ノ兩意味ニ於テ日支關係ニ重大ナル影響ヲ及ボセリ

物質的影響卽チ貿易上ノ損失ニ關スル限リ支那側ハ「ボイコット」ヲ經濟的加害行爲トシテヨリモ寧ロ道義的抗議トシテ表現センコトヲ希望シ之ヲ輕ク表示スルノ傾向アリ然ルニ日本側ハ或種貿易上ノ統計ニ餘リニ絕對的ノ價値ヲ附シ居レリ之ニ關聯シテ雙方ノ行ヒタル議論ハ前述ノ附屬研究ニ檢討セラレアリ同研究ニ於テハ日本ノ貿易ニ及ボシタル確ニ相當多額ニ達セル實害ノ程度ニ付テモ亦詳細ニ記述シアリ

本問題ノ他ノ一面モ亦之ヲ述ブルコトヲ要ス支那側自身モ既ニ支拂ヲ了セル商品ニシテ「ボイコット」團體ニ登記セズ爲ニ公賣ノ爲押收セラレタルモノニ依リ又「ボイコット」規則違反ニ對シ同團

日支關係ニ及ボセル心理的影響

體ニ支拂ヒタル罰金ニ依リ將又支那海關ガ其ノ收入ヲ得ザルコトニ依リ而シテ一般的ニ謂ヘバ貿易ノ減少ニ依リ損失ヲ蒙リ居リ此等ノ損失ハ相當ノ額ニ達ス

「ボイコット」ノ日支關係ニ及ボセル心理的影響ハ物質的影響ニ比シ算定困難ナレドモ廣範圍ノ日本ノ對支輿論ノ感觸ニ不幸ナル反響ヲ與ヘタル點ニ於テ確ニ物質的影響ニ劣ラズ重大ナリ本委員會ノ日本訪問中東京及大阪ノ兩商工會議所ハ此ノ點ヲ力說セリ

日本ノ輿論ハ日本ガ自ラ保護スルコト能ハザル被害ヲ蒙リツツアルコトヲ知リテ憤激セリ吾人ガ大阪ニ於テ會見セル商人等ハ暴行及脅喝取財ノ如キ「ボイコット」手段ノ或種濫用ヲ誇張シ日本ノ最近ノ對支那政策ト右政策ニ對スル防禦的武器トシテノ「ボイコット」ノ實行トノ間ニ存スル密接ナル關係ヲ輕視シ又ハ之ガ全部ノ否定ヲ敢テスル傾向アリタリ反對ニ此等ノ商人ハ「ボイコット」ヲ支那ノ防禦武器トハ見ズ「ボイコット」ヲ以テ侵略行爲ト爲シ之ニ對スル日本ノ軍事行動ハ報復ナリト主張セリ何レニセヨ「ボイコット」ハ近年支那及日本間ノ關係ヲ深刻ニ惡化セシメタル諸原因中ノ一タリシコトハ疑フノ餘地ナシ

「ボイコット」ノ關スル論爭點

(一)運動ハ自發的ナリヤ又ハ組織的ナリヤ

「ボイコット」ノ政策及手段ニ關シ三箇ノ論爭點アリ

第一ハ該運動ハ支那人自身主張スルガ如ク純粹ニ自發的ナリヤ又ハ日本人ノ主張スルガ如ク國民黨ガ往往ニシテ恐怖政治ト爲ルガ如キ方法ニ依リ人民ニ强制スル組織的運動ナリヤノ問題ナリ此ノ點ニ付テハ雙方ニ多クノ主張アルベシ一方ニ於テハ一ノ國民ガ廣大ナル地域ニ亘リ且長期間繼續スル「ボイコット」ノ持續ニ伴フ斯カル程度ノ協力及犧牲ヲ示スコトハ民衆ノ强キ感情ノ基礎ナ

カリセバ不可能ナルベキヤニ見受ケラル他方國民黨ガ支那人ノ其ノ古キ同業組合及祕密結社ヨリ繼承セル心理ト方法トヲ利用シテ如何ナル程度迄近時ノ「ボイコット」特ニ現在ノ「ボイコット」ヲ支配スルニ至レルカハ明ニ示サレタリ現在ノ「ボイコット」ニ於テ極メテ主要ナル部分ト爲リ居ル諸規則、規律及「賣國奴」ニ對スル制裁ハ該運動ガ自發的ナリトスルモ確ニ鞏固ニ組織セラレ居ルコトヲ示スモノナリ

有ラユル民衆運動ハ之ヲ效果的ナラシムル爲ニハ或程度ノ組織ヲ必要トス總テノ同志ガ共同目的ニ對シテ有スル忠實ノ念ハ決シテ劃一的ニ鞏固ナルモノニ非ズ故ニ目的及行動ノ統一ヲ勵行スル爲ニハ規律ヲ設クルノ要アリ吾人ハ支那ノ「ボイコット」ハ民衆運動ニシテ且組織セラレタルモノナルコト、右「ボイコット」ハ强キ國民的感情ニ胚胎シ之ニ依リ支持セラルト雖モ之ヲ開始又ハ終熄セシメ得ル團體ニ依リ支配セラレ又指揮セラルルモノナルコト竝ニ確ニ脅迫ニ等シキ方法ニ依リ强行セラルルモノナルコトヲ結論ス「ボイコット」ノ組織ニハ多數ノ個別的ノ團體關係スト雖モ主タル支配的權力者ハ國民黨ナリ

(二)「ボイコット」ノ方法ノ合法性ト否ト

第二ノ論點ハ「ボイコット」運動ノ實行ニ際シ用ヒラレタル方法ハ常ニ合法ナリシヤ否ヤニ在リ本委員會ノ蒐集セル證據ニ依レバ不法行爲ハ常ニ行ハレ而モ此等ハ官憲及法廷ニ依リ充分ニ禁壓セラレザリシ所ナリト言フ外ニハ何等ノ結論ヲ爲スコト困難ナリ此等ノ方法ガ往時支那ニ於テ用ヒラレタルモノト大體ニ於テ同一ナリトノ事實ハ一ノ說明ト爲ルベシト雖モ釋明トハ爲ラズ往時支那ノ同業組合ガ「ボイコット」ヲ宣言スルニ決シ被疑者タル組合員ノ家宅ヲ搜索シ彼等ヲ組合裁判

所ニ召致シ反則ノ廉ニ依リ處罰シ罰金ヲ課シ押收品ヲ賣却セルハ當時ノ慣習ニ從ヒタルナリ尙右ハ一支那團體ノ內部的問題タリシモノニシテ外國人ノ關係ナカリシ所ナリ現在ノ狀態ハ右ト異レリ支那ハ現代的法典ヲ採用シタルガ此等ハ支那ニ於ケル同業者「ボイコット」ノ傳統的手段ト兩立セザル所ナリ支那參與員ガ「ボイコット」ニ關スル自國ノ見解ヲ辯護セル覺書ハ以上ノ所論ヲ駁セズ單ニ「「ボイコット」ハ(中略)一般的ニ謂ヘバ合法ナル方法ニ依リ行ハル」ト論ズルノミ本委員會ノ有スル證據ハ斯カル主張ヲ支持セズ

右ニ關聯シ不法行爲ニシテ直接ニ外國人居住者卽チ此ノ場合日本人ニ對シテ行ハレタルモノト支那人ニ對シテ行ハレタルモ其ノ實日本ノ利益ニ損害ヲ與フルノ意圖ヲ標榜シタルモノトヲ區別セザルベカラズ前者ニ關スル限リ此等ノ行爲ハ支那ノ法律ニ依リ明ニ不法ナルノミナラズ生命及財產ヲ保護シ竝ニ商業、居住、往來及行動ノ自由ヲ維持スルノ條約上ノ義務ニ違反ス此ノ點ハ支那側ノ爭ハザル所ニシテ「ボイコット」團體モ國民黨當局モ此ノ種ノ犯行ヲ豫防スルニ努メタリシガ必ズシモ常ニ成功セザリシモノノ如シ旣ニ述ベタルガ如ク現在ノ「ボイコット」ニ於テハ此ノ種ノ行爲ハ旣往ノ場合ニ於ケルヨリモ少カリキ(註)

註 最近ノ日本側情報ニ依レバ上海ニ於テ千九百三十一年七月ヨリ千九百三十一年十二月末迄ノ間排日諸團體員ニ依リ日本商人ニ屬スル商品ガ押收セラレ且抑留セラレタル事件ハ三十五件ナリ右商品ノ價格ハ約二十八萬七千「ドル」ト評價セラル右事件ノ內千九百三十二年八月ニ於テ未解決ノ儘殘サレタルモノハ五件ナリ

支那人ニ對シテ行ハレタル不法行爲ニ關シテハ支那參與員ハ「ボイコット」ニ關スル其ノ覺書第

十七頁ニ於テ次ノ如ク論ゼリ

「吾人ハ先ヅ外國ハ國內法上ノ問題ヲ提起スル權限ヲ有セザルコトヲ述ベントス事實吾人ハ不法ナリト摘發セラルル行爲ニ直面スルモ右ハ中國國民ガ他ノ中國國民ニ損害ヲ加ヘタルモノナリ此等ノ行爲ノ抑壓ハ中國官憲ノ關係事項ニシテ中國ノ刑法ガ加害者及被害者雙方共吾人自身ノ國籍ヲ有スル事件ニ如何ニ適用セラルルカニ對シ何人モ問責スル權利ナキヤニ認メラル如何ナル國家ト雖モ他ノ國家ノ純然タル國內問題ノ處理ニ干涉スルノ權利ナシ各自ノ主權及獨立ノ相互尊重ナル原則ノ意味スル所卽チ之ナリ」

右ノ如ク陳述セラルルトキハ右ノ議論ハ反駁ノ餘地ナシト雖モ右ハ日本側ノ苦情ハ一支那國民ガ他ノ支那國民ニ依リ不法ニ損害ヲ被リタリト言フ點ニ根據ヲ有スルニハ非ズシテ支那ノ法律ニ依レバ不法ナル方法ノ使用ニ依リ日本人ノ利益ガ侵害セラレタル點及右ノ如キ事情ノ下ニ於テ法律ヲ勵行セザルコトガ日本ニ對シテ爲サレタル加害ニ對スル支那政府ノ責任ヲ意味スルモノナリトノ點ニ根據ヲ有スルノ事實ヲ閑却スルモノナリ

(三)「ボイコット」ニ對スル支那政府ノ責任

敍上ハ「ボイコット」政策ノ包含スル最後ノ論爭點卽チ支那政府ノ責任ノ範圍ノ考察ヲ招徠ス支那政府ノ態度ハ「物ヲ買フニ當リ自由ニ選擇ヲ爲スコトハ個人ノ權利ニシテ如何ナル政府ト雖モ干涉シ得ル所ニ非ズ政府ハ生命及財產ノ保護ニ對シテハ責任ヲ有スルモ一般ニ認メラレタル如何ナル規則及原則モ政府ニ對シ各人民ノ基本的權利ノ行使ヲ禁止シ處罰スベシトハ要求セズ」ト言フニ在リ

本委員會ハ本報告書附屬ノ研究第八ニ採錄セラレタル證據書類ヲ提供セラレタリ該書類ハ現在ノ「ボイコット」ニ於テ支那政府ガ上記引用支那側覺書ノ指示スルヤニ認メラルル所ヨリモ稍一層直接ナル關與ヲ爲シタルコトヲ示セリ吾人ハ政府各部ガ「ボイコット」運動ヲ支持スルノ事實ニ何等不當ナルモノアリト言ハントスルモノニハ非ズ吾人ハ單ニ官邊ノ奬勵ハ或程度ノ政府ノ責任ヲ意味スルコトヲ指摘セント欲ス此ノ點ニ關シ政府ト國民黨トノ關係ノ問題ヲ考慮スルコトヲ要ス後者ノ責任ニ關シテハ何等ノ疑點ナシ國民黨ハ全「ボイコット」運動ノ背後ニ存スル支配的且調整的機關ナリ國民黨ハ政府ノ製作者ニシテ又其ノ主人ナルヤモ知レザルモ如何ナル點迄ガ黨ノ責任ニシテ如何ナル點ヨリ政府ノ責任ガ開始スルカヲ決定スルコトハ憲法上ノ一ノ複雜ナル問題ニシテ本委員會ハ右ニ關シ意見ヲ述ブルコトヲ適當ナリトハ感ゼズ

「ボイコット」ハ强國ノ軍事的侵略ニ對抗スル合法ナル防衛武器ニシテ特ニ仲裁裁判ノ方法ガ豫メ利用セラレザリシ場合ニ於テ然リト爲ストノ支那政府ノ主張ハ一層廣汎ナル性質ノ問題ヲ提起ス支那人個人ガ日貨ヲ買フコト、日本ノ銀行若ハ船舶ヲ利用スルコト、日本人タル雇主ノ爲ニ働クコト、日本人ニ物品ヲ賣ルコト又ハ日本人ト交際スルコトヲ拒絶スルノ權利アルハ何人モ否定スルコトヲ得ザルベシ又支那人ガ個人トシテ又ハ組織セラレタル團體トシテモ上述ノ如キ思想ノ爲ニ宣傳ヲ爲スノ權利アルコトヲ否定スルヲ得ズ尤モ此ノ場合常ニ其ノ方法ガ國法ニ違反セザルコトヲ要スルコト勿論ナリ然レドモ一ノ特定ノ國家ノ貿易ニ對シ「ボイコット」ヲ組織的ニ行フコトガ友好關係ト兩立スルヤ又ハ條約上ノ義務ト合致スルヤ否ヤハ吾人ノ調査ノ題目ナリト謂ハンヨ

リハ寧ロ國際法上ノ問題ナリ然レドモ吾人ハ各國ノ利益ノ爲ニ本問題ハ近キ將來ニ於テ考慮セラレ國際約定ニ依リ規律セラルルコトアルベシトノ希望ヲ表示セントス

本章中ニ於テ第一ニ日本ハ其ノ人口問題ニ關聯シ其ノ工業生產高ヲ增加セントシ此ノ目的ノ爲ニ確實ナル海外市場ヲ求メツツアルコト第二ニ對亞米利加合衆國生絲輸出ヲ除キテハ支那ハ日本ノ輸出ノ主タル市場ニシテ同時ニ島帝國ニ重要數量ノ原料品及食料品ヲ供給スルコトヲ示セリ加之支那ハ日本ノ海外投資ノ殆ド全部ヲ吸收シ從テ現時ノ如キ混亂及未開發ノ狀態ニ於テスラ支那ハ日本ノ諸種ノ經濟的及金融的活動ニ對シ有利ナル天地ヲ提供ス最後ニ千九百八年ヨリ今日ニ至ル迄相次デ起レル諸「ボイコット」ガ支那ニ於ケル日本ノ利益ニ加ヘタル損害ノ解說ハ此等ノ利益ハ毀損セラレ易キモノナルコトニ付注意ヲ喚起セリ

日本ガ支那市場ニ依存スルコトハ日本人自身モ充分之ヲ認ムル所ナリ他方支那ハ經濟生活ノ各方面ニ於ケル發展ヲ最焦眉ノ急トスル國ナリ而シテ千九百三十一年ニ於テ「ボイコット」アリタルニモ拘ラズ其ノ貿易總額ニ於テ首位ヲ占メタル日本ハ他ノ如何ナル外國ヨリモ經濟的ニ支那ノ友邦タルベキモノト指示セラレタルモノノ如シ

此等二箇ノ隣邦ノ貿易上ノ相互依存ト兩國ノ利益トノ爲ニハ其ノ經濟的接近ヲ必要トス然レドモ兩者間ノ政治的關係ニシテ一方ガ兵力ノ他方ガ「ボイコット」ナル經濟的武器ノ使用ニ訴フルガ如キ不滿足ナルモノナル間ハ斯ノ如キ接近ハ存シ得ザルナリ

第八章

滿洲ニ於ケル經濟的利益（註一）

註一　本章ニ關シテハ本報告書附屬ノ特別研究第二、第三、第六、第七ヲ見ヨ

前章ニ於テ日本及支那ノ經濟上ノ要求ハ政治的考慮ニ依リ妨害セラレザル限リ紛爭ヲ齎サズシテ兩國相互ノ了解及協調ヲ齎スベキモノナルコトヲ示セリ滿洲ニ於ケル日本及支那ノ經濟上ノ利益ノ相互關係ヲ利益自體ニ付且近年ノ政治的事件ト分離シテ考究スルモ同樣ノ結論ニ到達ス滿洲ニ於ケル兩國ノ經濟上ノ利益ハ融和シ難キモノニ非ズ滿洲ニ於ケル現在ノ資源及將來ノ經濟的可能性ヲ其ノ極度迄發展セシメントセバ兩國ノ融和ハ尚ニ必要ナリト謂フベシ

第三章ニ於テ滿洲ニ於ケル資源ハ其ノ現實ノモノタルト潛在的ノモノタルトヲ問ハズ日本ノ經濟生活ニ必須ナリトノ日本輿論ノ主張充分檢討セラレタルガ本章ノ目的ハ右主張ガ如何ナル程度迄經濟的事實ト合致シ居ルカヲ考察スルニ在リ

南滿洲ニ於テハ日本ガ最大ノ外國投資者ニシテ又北滿洲ニ於テハ「ソヴィエト」聯邦ガ同樣ナルコトハ事實ナリ東三省ヲ總括シテ之ヲ觀ルニ日本ノ投資ハ「ソヴィエト」聯邦ノ投資ヨリモ重要ナリ尤モ正確ニ如何ナル程度ニ重要ナルカハ信憑スルニ足ル比較數字ヲ得ルコト不可能ナルヲ以テ之ヲ明ニスルコト困難ナリ投資ノ問題ハ本報告書ノ附屬書中ニ於テ詳細檢討シアルヲ以テ茲ニ

ハ少數ノ基本的數字ヲ擧グレバ滿洲ノ經濟的開發ノ參與分子トシテノ日本、「ソヴィエト」聯邦及其ノ他ノ諸國ノ相對的重要性ヲ說明スルニ足ルベシ

日本側ヨリ得タル情報ニ依レバ日本ノ投資額ハ千九百二十八年ニ於テ約十五億圓ト算定セラレタルヲ以テ右ノ數字ニシテ正確ナリトセバ今日ニ於テハ約十七億圓ニ增加シタルベキナリ（註二）露西亞側ヨリ出デタル情報ハ日本ノ現時ノ投資額ヲ關東州租借地ヲ含ム滿洲全體ニ對シ約十五億圓、東三省ニ對シ約十三億圓ナリトシ日本資本ノ大部分ハ遼寧省ニ投下セラレ居レリト稱ス

註二　他ノ日本側數字ハ千九百二十九年ニ於ケル日本ノ滿洲ヲ含ム對支那全投資額ヲ約十五億圓ナリトス

此等投資ノ性質ニ關シテハ資本ノ過半ハ運輸企業（主トシテ鐵道）ニ向ケラレ農業、鑛業及林業之ニ次グヲ知ル事實南滿洲ニ於ケル日本ノ投資ハ主トシテ南滿洲鐵道ヲ中心トシテ集中セラレ居リ又北方ニ於ケル「ソヴィエト」聯邦ノ投資モ多クハ直接又ハ間接ニ東支鐵道ト關聯セルモノナリ

日本以外ノ外國ノ投資ハ之ヲ算定スルニ一層困難多ク直接關係者ノ有益ナル援助アリシニモ拘ラズ本委員會ノ得タル情報ハ貧弱ナリ日本側ヨリ與ヘラレタル數字ノ大部分ハ千九百十七年以前ノモノニシテ從テ今日ノ時勢ニ適セズ「ソヴィエト」聯邦ニ關シテハ上述ノ如ク確實ナル計算不可能ナリ他ノ諸國ニ付テハ北滿洲ノミニ關スル露西亞側ノ最近ノ計算アリ右計算ハ之ヲ確認スルコト能ハザリシモ之ニ依レバ英吉利ハ第二ノ最大投資者ニシテ千百十八萬五千金「ドル」、日本之ニ次ギ九百二十二萬九千四百金「ドル」、亞米利加合衆國八百二十二萬金「ドル」、「ポーランド」五百

二萬五千金「ドル」、佛蘭西百七十六萬金「ドル」、獨逸百二十三萬五千金「ドル」、其ノ他百十二萬九千六百金「ドル」ノ投資ヲ合セ總計三千七百七十八萬四千四百金「ドル」ナリ同樣ノ計算ハ南滿洲ニ付テハ之ヲ得難シ

日本ノ對滿洲經濟關係

滿洲ガ日本ノ經濟的生活ニ於テ勤ムル役ヲ茲ニ解說スルコト必要ナリ本問題ニ關スル詳細ノ研究ハ本報告書ノ附屬書中ニ採錄シアリ右ニ依レバ該役割ハ重要ナルモノナリト雖モ同時ニ周圍ノ事情ニ依リ制限ヲ受ケ居ルコトヲ知ルベク此ノ事情ハ閑却ヲ許サズ

過去ノ經驗ヨリ推シテ滿洲ハ大規模ノ日本人移民ニ適當ナラザル地方ナルモノノ如シ第二章ニ於テ既ニ述ベタルガ如ク山東及直隸(現時ノ河北)ヨリノ農民及苦力ハ最近數十年間ニ土地ヲ取得セリ日本人移住者ハ資本ノ投下、各種企業ノ發展及天然資源ノ開發ヲ經理スル爲ニ來レル實業家、官吏、俸給生活者ニシテ將來モ多年ノ間大體然ルベシ

農業

日本ハ其ノ供給ヲ受クル農產物中現ニ滿洲ニ依存シ居ルハ主トシテ大豆及其ノ副產物ニシテ食料及飼料トシテノ此等ノ使用ハ將來更ニ增加スルコトモアリ得ベシ(今日其ノ主要用途ノ一タル肥料トシテノ重要性ハ日本ニ於ケル化學工業ノ發達ト共ニ減退スベキモノノ如シ)然レドモ朝鮮及臺灣ノ獲得ガ日本ノ米ノ問題ノ解決ニ少クトモ當分ノ間資シタルニ依リ食糧問題ハ日本ニトリテ現在ノ處緊切ナラズ將來或時期ニ於テ米ノ必要ガ日本帝國ニトリ緊急ヲ告グル場合ニ於テハ滿洲ハ別個ノ補給地タリ得ベシ然レドモ斯カル場合ニ於テハ充分ナル灌漑組織ヲ發達セシムルガ爲多額ノ投資ヲ必要トスベシ

重工業

滿洲資源ノ利用ノ結果日本ノ重工業ガ外國ヨリ獨立スベキ運命ヲ有スルモノナリト假定センニ此等重工業ノ創設ニハ更ニ巨額ノ資本ヲ要スベキヤニ認メラル日本ハ何ヨリモ先ヅ其ノ國防ニ缺クベカラザル原料ノ生產ヲ東三省ニ於テ發達セシメンコトヲ求メ居レリ滿洲ハ石炭、油及鐵ヲ日本ニ供給スルコトヲ得然レドモ斯カル供給ノ經濟上ノ利益ハ確實ナラズ石炭ニ付テ謂ヘバ生產高ノ比較的小部分ノミガ日本ニ於テ利用セラレ居リ油モ亦頁岩ヨリ極メテ制限セラレタル量ノミガ搾出セラレ居レリ又鐵ハ損失ノ下ニ生產セラレ居ルモノノ如ク見受ケラル然レドモ經濟的考慮ハ日本政府ヲ左右スル唯一ノモノニ非ズ獨立ノ冶金組織ノ發達ヲ助クル爲ニ滿洲ノ資源ヲ以テ之ニ充テントスルモノナリ如何ナル場合ニ於テモ日本ハ其ノ必要トスル「コークス」及或種ノ珪土不含有原礦ノ大部分ノ供給ヲ海外ニ仰ガザルヲ得ズ東三省ハ日本ノ國防ニ缺クベカラザル或種ノ生產物ノ供給ニ付大ナル保障ヲ與フベキモ此等生產物ヲ得ンガ爲ニハ大ナル財政的犧牲ヲ拂フコトヲ要スベシ此ノ問題ニ關聯セル日本ノ滿洲ニ於ケル軍略上ノ利益ハ別章ニ述ブル所アリタリ尙滿洲ハ日本ガ其ノ纖維工業ニ最必要トスル原料ヲ供給スルコト能ハザルモノノ如シ

日本生產品ノ市場トシテノ滿洲

東北三省ハ日本製品ニ對スル定市場ニシテ此ノ市場ノ重要性ハ東北三省ノ繁榮ノ增加ト共ニ更ニ增大スルコトアリ得ベシ尤モ大阪ハ過去ニ於テ常ニ大連ヨリモ上海ニ依存スル所多カリキ滿洲市場ハ安全性ニ於テ恐ラク支那市場ニ優ルベキモ而モ支那市場ニ比シ一層局限セラレ居レリ

「經濟「ブロック」」ノ觀念ハ西洋ヨリ日本ニ浸透セリ日本帝國及滿洲ヲ包括スル此ノ種「ブロック」ノ可能性ニ關シテハ日本ノ政治家、學者及操觚者ノ文書中ニ屢之ヲ見受ク現商工大臣ハ其ノ就任

ノ直前ニ執筆セル論說中ニ於テ亞米利加、「ソヴィエト」、歐羅巴及英帝國等ノ此ノ種經濟「ブロック」ノ世界ニ於ケル成立ヲ指摘シ日本モ滿洲ト共ニ斯ノ如キ「ブロック」ヲ創設スベキナリト述ベタリ

現在ノ處右ノ如キ組織ノ實行シ得ベキコトヲ示スベキモノ毫モナシ最近日本ニ於テハ其ノ同胞ニ對シ危險ナル幻想ニ付警告ノ聲ヲ擧グル者アリタリ日本ガ其ノ通商ノ大部分ニ付滿洲ニ依存スル所ハ其ノ亞米利加合衆國、支那本部及英領印度ニ依存スル所ニ比シ遙ニ少シ

滿洲ハ將來ニ於テ人口過剩ノ日本ニ對シ大ナル援助ト爲ルコトアルベキモ其ノ可能性ノ限度ヲ辨識セザルコトハ其ノ可能性ノ價値ヲ輕視スルコトト同樣ニ危險ナリ

支那ノ對滿洲經濟關係

支那ノ他ノ部分ト其ノ東三省トノ經濟關係ヲ研究スルトキハ吾人ガ日本ノ場合ニ於テ見タル所ト異リ支那ノ東三省開發ニ對スル初期ノ主ナル貢獻ハ滿洲ノ農業上ノ大發展ニ寄與セル季節的勞働者ト永久的定住者トヲ送リタルコトニ在ルコト明瞭ナルベシ然ルニ近年殊ニ最近十年間ニ於テハ鐵道建設、工業、商業及銀行業竝ニ鑛產及林產ノ開發ニ對スル支那ノ參與モ著シキ進歩ヲ示セルモノアル處其ノ範圍ハ資料ナキ爲充分ニ之ヲ示ス能ハズ大體ニ於テ滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ主要ナル紐帶ハ經濟的ヨリモ寧ロ民族的及社會的ノモノナリト謂フヲ得ベシ第二章ニ於テ滿洲現在ノ住民ハ大部分近時ノ移民ヨリ成レルモノナルコトヲ述ベタルガ此等ノ移民ガ自發的ニ行ハレタルニ見ルモ其ノ如何ニ實際ノ必要ニ應ジタルモノナルカヲ知ルヲ得ベシ右移民ハ飢饉ノ結果ナリ尤モ或程度迄日本側及支那側雙方ニ依リ奬勵セラレタリ

日本側ハ多年撫順炭坑、大連築港工事及鐵道建設ノ爲支那人勞働者ヲ募レルガ右ノ如クシテ募集セラレタル支那人ノ數ハ常ニ極メテ限アルモノナリキ而シテ右募集ハ千九百二十七年ニ至リ地方的ノ勞働供給ヲ以テ充分ナルノ觀アリタル結果停止セラレタリ

滿洲ノ地方官憲モ數次支那人移民ノ來住ヲ援ケタルコトアルガ實際ニ於テハ東三省官憲ノ活動ガ移民ニ對シ及ボシタル影響ハ極メテ小ナリ北支那官憲及慈善團體モ亦或時期ニ於テ滿洲ヘノ家族移民ノ奬勵ニ努力セリ

移民ノ受ケタル主ナル援助ハ南滿洲鐵道、支那諸鐵道及東支鐵道ノ與ヘタル割引運賃ナリ新來者ニ提供セラレタル右奬勵方法ハ南滿洲鐵道、滿洲各省官憲及支那政府ニ於テ少クトモ千九百三十一年末迄ハ右移住ヲ好感ヲ以テ迎ヘタルコトヲ示スモノナリ彼等ハ何レモ東三省ノ植民ニ依リ利益ヲ得タリ尤モ前記移住ニ對シ彼等ノ有シタル利害關係ハ常ニ同一ナリシトハ謂ヒ難シ

一旦滿洲ニ定著セル移民ハ支那本部ニ於ケル彼等ノ原住地トノ關係ヲ維持ス右ハ彼等ノ其ノ故鄉ニ殘シタル家族ニ對スル送金ヲ研究スレバ最明瞭ナリ銀行及郵便局ヲ通ジテ竝ニ歸還移民ノ携帶金ニ依リテ爲サルル彼等ノ送金ノ總額ヲ算定スルコトハ不可能ナルガ每年二千萬「ドル」ハ前記ノ方法ニ依リ山東及河北ニ送ラルト信ゼラレ又千九百二十八年ノ郵政統計ハ遼寧吉林兩省ヨリ山東省ニ對シ郵便爲替ニ依リ送金セラレタル額ガ支那ノ他ノ全部ノ省ヨリ山東省ニ送金セラレタル額ト同額ニ達セルコトヲ示シ居レリ此等ノ送金ガ滿洲及支那本部間ノ重要ナル經濟的連鎖ヲ形成シ居ルコトハ疑ヲ容レズ右ハ移民ト原住地ニ在ル其ノ家族トノ間ニ維持セラルル接觸ノ指數ナリ右

ノ接觸ハ長城ノ兩側ニ於ケル狀況ガ大差ナキ爲一層容易ナリ農作物ハ大體同種ニシテ耕作法モ亦同一ナリ滿洲ト山東トニ於ケル農業狀況ノ最顯著ナル相違ハ氣候、人口ノ密度及經濟的開發狀態ノ差異ニ因ルモノナルガ此等ノ要素ハ東三省ノ農業ガ益山東ニ於ケル農業狀況ニ近似シ來ルコトヲ妨ゲズ永年ノ定住地タル遼寧省ニ於ケル農村ノ狀況ハ近年開發セラレタル黑龍江ノ其レヨリモ一層山東ノ農村狀況ニ酷似ス

滿洲ニ於ケル農業者トノ直接取引ノ組織モ亦支那本部ノ狀況ト酷似ス東三省ニ於テハ右ノ如キ取引ハ獨リ農民ヨリ直接購買スル支那人ノ手ニ在リ又東三省ニ於テハ支那本部ニ於ケルト同樣信用ガ右ノ如キ地方的取引ニ重要ナル職能ヲ行フモノナリ滿洲及支那本部ニ於ケル商業組織ノ酷似ハ單ニ農村ニ於ケル地方的取引ニ於テノミナラズ都市ニ於ケル取引ニ於テモ亦之ヲ見ルコトヲ得ト謂フモ過言ニ非ズ

實際ニ於テ滿洲ニ於ケル支那人ノ社會的及經濟的組織ハ其ノ鄕里ノ習慣、方言及行動ヲ其ノ儘移植セル社會ニシテ唯鄕里ニ比シテ土地廣ク人口少ク且外部ヨリノ影響ヲ一層蒙リ易キ地方ノ狀況ニ適合セシムルニ必要ナル變改ヲ要スルノミナリ

玆ニ前記大量移民ハ單ナル一時的現象ナリヤ或ハ將來モ繼續スルモノナリヤノ問題アリ南滿洲ノ地域竝ニ松花江、遼河及牡丹江流域ノ如キ南部及東部ニ於ケル數箇ノ流域地方ヲ考慮ニ入ルルトキハ純然タル農業的見地ヨリ觀テ滿洲ハ尙多數ノ植民ヲ收容シ得ベキコト明ナリ東支鐵道幹部ノ最優秀ナル一專門家ニ依レバ滿洲ノ人口ハ四十年間ニ七千五百萬ニ達シ得ベシトノコトナリ

然レドモ滿洲ニ於ケル人口ノ急激ナル增加ハ將來經濟的條件ニ依リ制限セラルルコトアルベシ事實經濟的條件ノミニテモ大豆栽培ノ將來ヲ不確實ナラシムルモノアリ一方近年滿洲ニ移入セラレタル作物殊ニ米ノ栽培ハ同地方ニ於テ發達スルコトアルベシ若干ノ日本人ガ望ヲ囑シタル棉花栽培ノ發達ニ對スル望ハ或程度ノ制限ヲ免レザルモノノ如シ故ニ新來者ノ東三省移住ハ經濟的及技術的要因ニ依リ或程度迄制限セラルルコトアルベシ

滿洲ニ對スル支那人ノ移住ノ減少ハ最近ニ於ケル政治的事件ノミガ其ノ唯一ノ原因ニ非ズ經濟上ノ危機ハ既ニ千九百三十一年ノ最初ノ六箇月間ニ於テ季節的移住ノ重要性ヲ減殺セルガ世界的不況ハ避クベカラザリシ地方的危機ノ影響ヲ大ナラシメタリ此ノ經濟上ノ危機去リ秩序囘復セラレタル曉ニハ滿洲ハ再ビ支那本部ノ人口ノ捌ケ口タリ得ベシ支那人ハ滿洲植民ニ最適合セル人民ナリ無定見ナル政治的措置ニ依リ此ノ移民ヲ人爲的ニ制限スルコトハ滿洲ノ利益竝ニ山東及河北ノ利益ヲ毀損スルモノナリ

滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ紐帶ハ主トシテ民族的及社會的ナルガ同時ニ經濟的紐帶モ絕エズ鞏固ト爲リツツアリ右ハ滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ間ニ於ケル通商關係ノ增進ニ依リ示サル然レドモ稅關統計ニ依レバ日本ハ滿洲ノ最大顧客ニシテ且第一ノ供給者ナリ支那本部ハ次位ヲ占ム

滿洲ヨリ支那ノ他ノ部分ヘノ主要輸入品ハ大豆及其ノ副產物、石炭及少量ノ落花生、生糸、雜穀竝ニ極少量ノ鐵、玉蜀黍、羊毛及木材ナリ支那本部ヨリ滿洲ニ對スル主要輸出品ハ綿織物、煙草類、絹其ノ他ノ織物、茶、穀類及種子、棉花、紙及小麥粉ナリ

批判

從テ支那本部ハ或種ノ食糧ニ付滿洲ニ依賴シ居リ就中最重要ナルモノハ大豆及其ノ副產物ナルガ其ノ石炭ヲ除ク鑛產物ノ輸入及其ノ木材、動物產品及製造ノ爲ノ原料ノ輸入ハ過去ニ於テ僅少ナリキ更ニ支那本部ハ其ノ自身ノ入超ヲ相殺スルガ爲滿洲ノ出超利益金ノ一部分ノミヲ利用シ得右利用ハ一般ニ想像セラレ居ルガ如ク政治的結合自體ニ依ルニ非ズシテ主トシテ滿洲ノ郵政機關及稅關ガ頗ル利益多キ施設ナルコト竝ニ支那人移住者ノ上海及河北ニ在ル其ノ家族ニ對スル多額ノ送金ニ依ルモノナリ

滿洲ノ資源ハ豐富ナレドモ未ダ充分ニ確知セラレ居ラズ之ガ開發ノ爲ニハ人口、資本、專門的熟練、組織及國內ノ安全ヲ必要トス住民ハ殆ド全部支那ヨリ供給セラル現在住民ノ多數ハ北支那諸省ノ產ニシテ其ノ故鄉トノ家族的紐帶ハ今尙密接ナルモノアリ資本、專門的熟練及組織ハ今日迄ノ處主トシテ南滿洲ニ於テハ日本ニ依リ又長春以北ニ於テハ露西亞ニ依リ供給セラレ來レリ其ノ他ノ外國モ其ノ程度甚ダ少キモ東三省ヲ通ジ但シ主トシテ大都會ニ於テ利益ヲ有セリ此等諸外國ノ代表者ハ近年ノ政治的緊張ニ際シ調停的ノ役ヲ勤メタルガ經濟的ニ最優勢ナル日本ガ此ノ經濟戰場ノ獨占ヲ企テザル限リ今後モ右ヲ繼續スベシ現時ノ最喫緊事ハ住民ニ依リ受諾セラレ得ベキ且法ト秩序トノ維持ナル窮極的ノ必要ヲ充タシ得ベキ政權ノ樹立ナリ

如何ナル外國ト雖モ住民ノ大部分ヲ占メ且滿洲ノ土地ヲ耕シ國內ノ殆ド總テノ企業ニ對シ勞力ヲ供給シツツアル支那民衆ノ好意及滿腔ノ協力ナクシテハ滿洲ヲ開發シ又ハ之ヲ管理セントスルノ企圖ヨリ利益ヲ獲得スルコト能ハズ一方支那モ此等北方諸省ガ接壤諸國ノ相反對スル大望ノ戰場

門戶開放ノ維持

ト爲ルコトノ熄マザル限リ永久ニ憂懼ト危險トヨリ解放セラレザルベシ故ニ支那トシテハ此ノ地域ニ於ケル日本ノ經濟上ノ利益ヲ滿足セシムルコト又日本トシテハ右地域ノ住民ノ變改スベカラザル支那的特性ヲ容認スルコトガ共ニ必要ナリ

上記ノ如キ了解ト相俟テ一切ノ關係諸國ガ滿洲ノ開發ニ協力スルコトヲ許容スルガ爲ニハ門戶開放ノ主義ヲ單ニ法律的見地ヨリノミナラズ商業、工業及銀行業ノ實際的運用ニ付テモ維持スルコト必要ナルモノノ如シ日本人以外ノ在滿洲外國實業家ノ間ニハ日本商社ガ現在ノ政治狀況ヲ利用シテ自由競爭以外ノ方法ニ依リテ利益ヲ獲得セント試ムベシトノ危懼アリ若シ右ノ危懼ニシテ理由アリトセラルルニ至ラバ外國側利益ハ打擊ヲ蒙リ先ヅ其ノ害ヲ被ムルモノハ滿洲住民ナルベシ貿易、投資及金融上ノ自由競爭ニ依リテ表現セラルル眞實ノ門戶開放ノ維持ハ日本及支那雙方ノ利益ナルベシ(註)

註　此ノ點ニ關シ滿洲ヘノ密輸入特ニ朝鮮國境及大連ヲ通ジテ爲サルルモノガ非常ナル範圍ニ亘リ居ルコトヲ指摘スルコト必要ナリ斯カル慣行ハ單ニ關稅收入ニ損失ヲ與フルノミナラズ貿易ヲ破壞シ實際上關稅行政ヲ支配シ居ル國ガ他國ノ貿易ニ對シテ差別的待遇ヲ爲スコトアリ得ベシトノ信念ヲ其ノ當否ハ別トシテ起サシムベシ

前揭諸章ノ概觀

第九章

解決ノ原則及條件

本報告書ノ前揭諸章ニ於テ支那及日本間ノ諸問題ハ其レ自體ニ於テ仲裁ノ手續ニ依リ解決シ得ベ

カラザルモノニ非ザリシモ此等ノ諸問題特ニ滿洲ニ關スルモノヲ右夫々ノ政府ニ於テ取扱ヒタル結果ハ兩國ノ關係ヲ甚シク惡化セシメ早晩衝突ヲ免レ難カラシメタルコトヲ明ナラシメタリ支那ガ斯カル過渡期ニ必然伴ハルベキ有ラユル政治的紛糾、社會的混亂及分裂的傾向ヲ有スル進化途上ニ在ル國家ナルコトニ付テモ略述シタリ日本ノ主張スル權利及利益ガ支那中央政府ノ權力ノ微弱ナル爲如何ニ重大ナル影響ヲ蒙リタルカ又日本ガ滿洲ヲ支那ノ他ノ部分ニ於ケル政府ヨリ離隔シ置クコトヲ如何ニ切望シ居ルコトヲ示シ來レルカヲモ敍述シタリ支那、露西亞及日本ノ諸政府ノ滿洲ニ於ケル夫々ノ政策ノ簡單ナル吟味ハ此等諸省ノ政權ガ其ノ支配者ニ依リ支那中央政府ヨリ獨立セルコトヲ一再ナラズ聲明セラレタルモ而モ支那人ガ絶對多數ヲ占ムル此等各省ノ人民ハ未ダ曾テ支那ノ他ノ部分ヨリ分離スルコトヲ欲スル旨表明シタルコトナキ事實ヲモ開示シタリ最後ニ吾人ハ千九百三十一年九月十八日及其ノ後ニ起レル現實ノ諸事件ヲ愼重ニ且充分ニ檢討シ之ニ對スル吾人ノ所見ヲ表明シタリ

問題ノ複雜性

今ヤ吾人ハ將來ニ注意ヲ集中シ得ル時期ニ達シタルヲ以テ此ノ省察ヲ最後トシ此ノ上過去ニハ言及セザルベシ前諸章ノ各讀者ニトリテハ本紛爭ニ包含セラルル諸問題ハ往往稱セラルルガ如ク簡單ナルモノニ非ザルコト明白ナルベシ卽チ此等ノ諸問題ハ寧ロ極度ニ複雜ナリ一切ノ事實及其ノ史的背景ニ關スル徹底セル知識アルモノノミ右諸問題ニ關スル確定意見ヲ表示シ得ル資格アリト謂フベキナリ本紛爭ハ一國ガ國際聯盟規約ノ提供スル調停ノ機會ヲ豫メ利用シ盡スコトナクシテ他ノ一國ニ宣戰セル事件ニ非ズ又一國ノ國境ガ隣接國ノ軍隊ニ依リ侵略セラレタルガ如キ簡單ナ

ル事件ニモ非ズ何トナレバ滿洲ニ於テハ世界ノ他ノ部分ニ於テ正確ナル類例ヲ見ザル幾多ノ特殊事態存スルヲ以テナリ

他ニ類例ナキ滿洲ノ事態

本紛爭ハ雙方トモ聯盟國タル二國間ニ於テ佛蘭西ト獨逸トヲ合シタル面積アル地域ニ關シ發生セルモノニシテ右地域ニ關シテハ雙方ニ於テ各諸種ノ權利及利益ヲ有スルコトヲ主張シ而モ此等ノ權利及利益中ノ若干ノミ國際法ニ依リ其ノ意義明確ニ定マリ居レリ右地域ハ法律的ニハ支那ノ一構成部分ナリト雖モ本紛爭ノ根底ヲ成ス事項ニ關シ日本ト直接交渉ヲ遂グルニ充分ナル自治的性質ヲ有シタリ

日本ハ海岸ヨリ一路滿洲ノ中心ニ達スル一鐵道ト一地帶トヲ支配シ且該財產ノ保護ノ爲約一萬ノ兵力ヲ維持セルガ右兵力ハ必要ナル場合ニハ之ヲ一萬五千迄增加スルノ條約上ノ權利アリト主張ス又日本ハ「滿洲ニ在ル其ノ一切ノ臣民ニ對シ法權ヲ行使シ且滿洲全土ニ亘リ領事館警察ヲ維持ス」

解釋ノ多岐性

敍上ノ事實ハ本諸問題ヲ討議スルモノニ於テ考慮スルコトヲ要スルモノナリ開戰ノ宣言ナクシテ疑モナク支那ノ領土タリシ廣大ナル地域ガ日本軍隊ニ依リ强力ヲ以テ押收且占領セラレ而シテ右行動ノ結果トシテ支那ノ他ノ部分ヨリ分離セラレ且獨立ト宣言セラレタルハ事實ナリ日本ハ之ヲ成就セシメタル措置ヲ以テ此ノ種ノ行動ノ防止ヲ目的トスル國際聯盟規約、「ケロッグ」條約及「ワシントン」九國條約ノ義務ニ合致スルモノナリト主張ス更ニ本事件ニ付初テ聯盟ノ注意ガ喚起セラレタル際漸ク開始セラレタル行動ハ其ノ後數箇月間ニ完結セラレ且日本政府ハ右行動ヲ以

テ九月三十日及十二月十日「ジュネーヴ」ニ於テ其ノ代表ノ與ヘタル保證ト合致スルモノナリト思考シ此ノ場合ニ於テ一切ノ軍事行動ハ合法ナル自衛行爲タリシモノニシテ右自衛ノ權利ハ敍上ノ一切ノ多邊的條約中ニ包含セラレ且聯盟理事會ノ何レノ決議ニ依リテモ奪ハレタルコトナキモノナリトシテ正當トセラレタリ將又東三省ニ於テ支那ノ政權ニ代レル政權ハ其ノ樹立ガ地方住民ノ行爲ニシテ彼等ハ自發的ニ其ノ獨立ヲ宣言シ支那トノ一切ノ關係ヲ斷絶シテ自己ノ政府ヲ樹立シタルモノナリトノ論據ニ依リ正當トセラル尙斯ノ如キ眞正ナル獨立運動ハ如何ナル國際條約ニ依リテモ將タ國際聯盟理事會ノ如何ナル決議ニ依リテモ禁ゼラレズ且其ノ既ニ發生シタルノ事實ハ九國條約ノ適用ヲ著シク改變シ聯盟ニ依リ調査セラレツツアル問題ノ全性質ヲ根本的ニ變更セルモノナリト主張セラル

本件紛爭ヲ且複雜ナラシメ且重大ナラシムルモノハ正當性ヲ主張スル敍上ノ論辯ナリ本問題ニ付論議スルコトハ本委員會ノ職能ニ非ザルモ而モ吾人ハ國際聯盟ヲシテ紛爭當事國雙方ノ名譽、威嚴及國家的利益ヲ損セズシテ紛爭ヲ解決セシメ得ンガ爲充分ナル資料ヲ供給スルコトニ努メタリ單ニ批評スルコトノミニテハ右ヲ成就シ難ク更ニ調停ノ爲ノ實際的努力ナカルベカラズ吾人ハ滿洲ニ於ケル過去ノ事件ニ關シ眞相ヲ捕捉シ之ヲ率直ニ陳述スル爲苦心シ來レルガ右ハ吾人ノ事業ノ僅ニ一部分タルニ止リ而モ決シテ最重要ナル部分ニ非ザルコトヲ認ム吾人ハ吾人ノ使命ヲ行フニ當リ終始兩國政府ニ對シ其ノ不和ヲ調整スル爲國際聯盟ノ援助ヲ申入レタルガ今ヤ吾人ハ正義ト平和トニ合致スル方法ニ依リ滿洲ニ於ケル支那及日本ノ永遠ノ利益ヲ確保スル爲ノ吾人ノ提議

解決ニ關スル不滿足ナル提議

(一)原狀回復

(二)「滿洲國」ノ存置

ヲ聯盟ニ提出シテ其ノ使命ヲ結了セントス

單ナル原狀回復ガ何等解決タリ得ザルコトハ既ニ吾人ノ述ベタル所ニ依リ明ナルベシ蓋シ本紛爭ガ去ル九月前ニ於ケル狀態ヨリ發生セルニ顧ミ該狀態ノ回復ハ單ニ紛糾ノ反覆ヲ招徠スニ止マルベク斯ノ如キハ全問題ヲ理論的ニ取扱ヒ事態ノ現實性ヲ閑却スルモノナリ

前揭二章ニ述ベタル所ニ顧ミ滿洲ニ於ケル現政權ノ存置及承認モ亦等シク不滿足ナルベシ斯カル解決ハ現存國際義務ノ根本的諸原則トモ將又極東平和ノ基礎タルベキ兩國間ノ良好ナル了解トモ兩立スルモノトハ見受ケラレズ右ハ支那ノ利益ニ背馳シ又滿洲人民ノ希望ヲ無視スルノミナラズ結局ニ於テ日本ノ永遠ノ利益ト爲ルベキヤ否ヤハ少クトモ疑問ナリ

現政權ニ對スル滿洲人民ノ感情ニ付テハ眞乎何等疑問ナシ而シテ支那ハ其ノ東三省ノ完全ナル分離ヲ以テ永久的解決ナリト爲シテ進ンデ之ヲ承諾スルガ如キコトナカルベシ遠隔ナル外蒙古地方ノ類似性ヲ論ズルハ全然其ノ當ヲ得タルモノニハ非ズ何トナレバ外蒙古ト支那トノ間ニハ何等輦固ナル經濟的又ハ社會的紐帶ナク且人口ハ稀薄ニシテ而モ其ノ大部分ハ支那人ニ非ザルヲ以テナリ滿洲ニ於ケル事態ハ外蒙古ニ於ケル事態トハ極端ニ相違セリ滿洲ニ今ヤ定著セル幾百萬ノ支那人農民ハ各般ノ關係ニ於テ滿洲ヲシテ長城以南ノ支那ノ單ナル延長タラシメタリ東三省ハ其ノ人種、文化及國民的感情ニ於テ殆ド支那化シ其ノ移住者ノ大部分ノ出身地タル隣省河北及山東ト相似タリ

敍上ノ事情ハ之ヲ擱クモ過去ノ經驗ニ依レバ滿洲ノ支配者ハ支那ノ他ノ部分少クトモ北支那ノ事

ニ付大ナル勢力ヲ行使シ來リ且各種軍略上及政治上明白ニ有利ナル地位ヲ占ム東三省ヲ支那ノ他ノ部分ヨリ法律的ニ若ハ實際的ニ分離スルコトハ一ノ重大ナル「イリデンティスト」問題ヲ將來發生セシムベク同問題ハ支那ノ敵愾心ヲ常ニ旺ナラシメ且恐ラク日貨ノ「ボイコット」ヲ永續的ナラシメ以テ平和ヲ危殆ニ陷ルルモノト謂フベシ

本委員會ハ日本政府ヨリ滿洲ニ於ケル同國ノ死活的利益ニ關スル明瞭且貴重ナル陳述書ヲ得タリ吾人ハ滿洲ニ對スル日本ノ經濟的依存ヲ前章ニ於テ日本ニ存スト爲セル程度以上ニ誇張スルモノニ非ズ又勿論右經濟的關係ハ日本ニ對シ右等諸省ノ經濟的發達ヲ況シテヤ政治的發達ヲ支配スルノ資格ヲ付與スト提議スルモノニ非ザルモ而モ日本ノ經濟的發展ノ爲滿洲ガ甚ダ重要ナルコトヲ承認スルモノナリ將又日本ガ滿洲ノ經濟的發展ノ爲必要ナル治安ヲ維持シ得ベキ安固ナル政府ノ樹立ヲ要求スルコトモ不合理ナリト思惟スルモノニ非ズ然レドモ斯ノ如キ狀態ハ人民ノ願望ニ合致シ且其ノ感情及要望ヲ充分ニ考慮スル政權ニ依リテノミ確實且有效ニ保障セラルベキモノナルト共ニ滿洲ノ急速ナル經濟的發展ニ必要ナル資本ノ進出ハ極東ノ現在雰圍氣トハ甚ダ異リ外部ノ信賴ト內部ノ平和トヲ有スル雰圍氣ニ於テノミ可能ナリ

增進スル人口過剩ノ壓迫アルニ拘ラズ日本人ハ移民ニ關スル其ノ現存ノ便益ヲ尙充分ニ利用シタルコトナク且日本政府ハ從來滿洲ニ其ノ國民ノ大移住ヲ計畫シタルコトナシ然レドモ日本人ハ土地的危機及人口問題ニ善處スル方法トシテ更ニ一層ノ工業化ニ望ヲ囑シツツアリ斯ノ如キ工業化ハ此ノ上ノ經濟的販路ヲ要求スベキ處日本ガ有シ得ベキ唯一ノ廣大且比較的確實ナル市場ハ亞細

亞特ニ支那ニ於テ之ヲ求メ得ベシ日本ハ單ニ滿洲市場ノミナラズ全支那市場ヲ必要トスル處支那ノ統一及現代化ニ必ズヤ伴フベキ生活程度ノ向上ハ貿易ヲ促進シ且支那市場ノ購買力ヲ增進スベキナリ

日本ニトリ死活的利益タル右日本及支那間ノ經濟的接近ハ支那ニトリ同樣ノ利益アリ何トナレバ支那ハ其ノ更ニ一層日本ト經濟的及技術的ニ協力スルコトガ支那ノ國家改造ノ第一事業ヲ助成スルモノタルコトヲ了得スベケレバナリ支那ハ其ノ國民主義ノ狹量ナル傾向ヲ抑壓スルコトニ依リ又友好關係ノ復活ヲ見ルト共ニ組織的「ボイコット」ノ常習ヲ復活セシメザルベキ旨ノ有效ナル保障ヲ與フルコトニ依リ右接近ヲ助成シ得ベシ一方日本トシテハ滿洲問題ヲ支那トノ友好及協力ヲ不可能ナラシムル如キ方法ニ依リテ其ノ對支那關係問題ノ全般ヨリ分離シテ解決スルガ如キ一切ノ企圖ヲ拋棄シ以テ右接近ヲ容易ナラシムルコトヲ得ベシ

然レドモ滿洲ニ於ケル日本ノ行動及政策ヲ決定セシモノハ經濟的考慮ヨリハ寧ロ日本自體ノ安全ニ對スル懸念ナリシナルベシ日本ノ政治家及軍事當局ガ滿洲ハ「日本ノ生命線」ナルコトヲ常ニ口ニスルハ特ニ此ノ關係ニ於テナリトス世人ハ右ノ如キ懸念ニ同情シ得ベク且有ラユル事態ニ於テ自國ノ防衛ヲ確保スルノ重大ナル責任ヲ負ハザルヲ得ザル此等ノ人士ノ行動ト動機トヲ諒解スルニ努ムベシ滿洲ヲ其ノ國土ニ對スル敵對行動ノ根據地トシテ利用スルコトヲ防止セントスル日本ノ關心ヲ認メ且或情勢ノ下ニ外國ノ軍隊ガ滿洲ノ國境ヲ越エ來ル場合有ラユル適當ナル軍事的手段ヲ執ルコトヲ可能ナラシメントスル日本ノ希望スラモ之ヲ認ムルトスルモ巨額ノ財政的負擔

ヲ必然齎スベキ無期限ノ滿洲ノ軍事占領ガ眞乎ニ斯カル外部ヨリスル危險ニ對スル最有效ナル保障方法ナリヤ將又右ノ如キ方法ニ依リ侵略ニ對抗スル場合ニ在滿洲日本軍隊ハ其ノ若シ敵意アル支那ニ後援セラルル不從順ナル若ハ反抗的ナル民衆ニ依リ包圍セラレタル曉ニハ甚シク困難ヲ感ズルコトナキヤ否ヤハ尙疑問トスベキ所ナルベシ從テ現存ノ世界平和組織ノ基礎ヲ成ス原則ト一層善ク合致シ且世界ノ各地ニ於ケル他ノ大國ニ依リ締結セラレタル協定ニ類似セル方法ニ依リ安全保障問題ノ他ノ可能ナル解決方法ヲモ考慮スルコトハ確ニ日本ノ爲利益ナリ日本ハ又世界ノ他ノ國家ノ同情ト好意トニ依リ而モ日本自體ハ何等ノ負擔ヲ爲スコトナクシテ其ノ目下執リツツアル高價ナル方法ニ依リ獲得セント欲スル所ヨリモ更ニ確實ナル安全保障ヲ得ル可能性モ存スルコトヲ知得シ得ベキナリ

國際的利益

支那及日本ヲ別トシ世界ノ他ノ諸國モ亦此ノ日支紛爭ニ關シ防衛スベキ重大ナル利益ヲ有スルモノナリ吾人ハ曩ニ現行ノ多邊的條約ニ言及セルガ苟モ合意ニ依ル眞正ナル且永續的ナル解決ハ世界平和組織ノ基礎ヲ成ス此等基本的協定ノ條項ト兩立シ得ルモノタルコトヲ要ス「ワシントン」會議ニ於テ諸國ノ代表者ヲ動カシタル諸考慮ハ今日尙有效ナリ平和維持ノ爲必要缺クベカラザル條件トシテ支那ノ改造ヲ援助シ且其ノ主權竝ニ其ノ領土的及行政的保全ヲ維持スルコトハ千九百二十二年ニ於ケルト全然同樣ニ今日ニ於テモ列國ノ利益ナリ支那ノ分裂ハ恐ラク急速ニ重大ナル國際競爭ヲ招徠スベキ處右競爭ニシテ若シ相異レル社會組織ノ間ニ於ケル競爭ト同時ニ發生スベキ場合ニハ更ニ熾烈ヲ加フベシ最後ニ平和ノ利益ハ全世界ヲ通ジテ同樣ナリ聯盟規約及「パリ」

條約ノ原則ノ適用ニ關シ世界ノ如何ナル方面ニ於テカ何等信賴ヲ失フコトアラバ此等原則ノ價値ト效力トハ他ノ如何ナル方面ニ於テモ減少スベシ

「ソヴィエト」聯邦ノ利益

本委員會ハ滿洲ニ於ケル「ソヴィエト」聯邦ノ利益ノ範圍ニ關シ直接ニ情報ヲ入手スルコトモ將又滿洲問題ニ關スル同聯邦政府ノ所見ヲ確ムルコトモ得ザリシモ而モ假令直接情報ヲ入手セザリシト雖モ本委員會ハ滿洲ニ於テ露西亞ノ演ジタル役割若ハ「ソヴィエト」聯邦ガ東支鐵道及滿洲ノ北方及東北方國境外ニ於ケル領土ノ所有者トシテ該地域ニ於テ有スル重要ナル利益ヲ看過スルコトヲ得ズ「ソヴィエト」聯邦ノ重要ナル利益ヲ無視セル滿洲問題ノ如何ナル解決モ平和ノ將來ノ攪亂ヲ招クノ危險アリ其ノ永久性ナカルベキコトハ明白ナリ

結論

若シ支那及日本兩國政府ニシテ雙方ノ主要利益ノ一致セルコトヲ承認シ且平和ノ維持及相互ノ友好關係ノ樹立ヲ右利益中ニ包含セシムルノ意アルニ於テハ敍上ノ諸考察ハ紛爭解決策ノ方針ヲ指示スルニ充分ナリトス既述ノ如ク千九百三十一年九月前ノ狀態ヘノ復歸ハ問題ニ非ズ將來ニ於ケル滿足スベキ制度ハ何等過激ナル變更ナクシテ現制度ヨリ進展セシメ得ベシ次章ニ於テ吾人ハ之ガ爲或提議ヲ提出スベキモ吾人ハ先ヅ如何ナル滿足ナル解決モ準據スルコトヲ要スル一般的原則ヲ明ニセント欲ス此等ノ原則ハ次ノ如シ

滿足ナル解決ノ條件

一　支那及日本雙方ノ利益ト兩立スルコト

兩國ハ聯盟國ナリ各自ハ聯盟ヨリ同一ノ考慮ヲ拂ハルルコトヲ要求スルノ權利ヲ有ス兩國ガ利益ヲ獲得セザル解決ハ平和ノ爲ニ稗益スル所ナカルベシ

二　「ソヴィエト」聯邦ノ利益ニ對スル考慮

隣接諸國中ノ二國間ニ於テ第三國ノ利益ヲ尊重スルコトナクシテ平和ヲ講ズルコトハ公正若ハ賢明ナラザルベク將又平和ニ資スル所以ニモ非ザルベシ

三　現存多邊的條約トノ合致

如何ナル解決ト雖モ國際聯盟規約、「パリ」條約及「ワシントン」九國條約ノ規定ニ合致スルコトヲ要ス

四　滿洲ニ於ケル日本ノ利益ノ承認

滿洲ニ於ケル日本ノ權利及利益ハ無視スルコトヲ得ザル事實ナリ之ヲ承認セズ且滿洲トノ日本ノ史的關聯ヲモ考慮ニ入レザル如何ナル解決モ滿足ナルモノニ非ザルベシ

五　支那及日本間ニ於ケル新條約關係ノ設定

滿洲ニ於ケル兩國各自ノ權利、利益及責任ヲ新條約中ニ再ビ聲明スルコトハ合意ニ依ル解決ノ一部タルベキモノニシテ將來ノ軋轢ヲ避ケ相互ノ信賴及協力ヲ回復スル爲ニ望マシキコトナリ

六　將來ニ於ケル紛爭ノ解決ニ對スル有效ナル措置

敍上ヨリ來ル當然ノ歸結トシテ、將來發生スルコトアルベキ比較的重要ナラザル紛爭ノ迅速ナル解決ヲ容易ナラシムル爲措置ヲ爲スノ要アリ

七　滿洲ノ自治

滿洲ニ於ケル政府ハ支那ノ主權及行政的保全トノ一致ノ下ニ東三省ノ地方的狀況及特質ニ應ズル樣工夫セラレタル廣汎ナル範圍ノ自治ヲ確保スルガ如キ方法ニ依リテ改メラルルコトヲ要ス新文治制度ハ善良ナル政治ノ本質的要求ヲ滿足スル樣構成セラレ且運用セラレザルベカラズ

八　內部的秩序及外部的侵略ニ對スル安全保障

滿洲ノ內部的秩序ハ有效ナル地方的憲兵隊ニ依リ確保セラルルコトヲ要シ外部的侵略ニ對スル安全保障ハ憲兵隊以外ノ一切ノ武裝隊ノ撤退ト利害關係國間ニ於ケル不侵略條約ノ締結トニ依リ與ヘラルルコトヲ要ス

九　支那及日本間ニ於ケル經濟的接近ノ促進

本目的ノ爲兩國間ノ新通商條約望マシ斯カル條約ハ兩國間ノ通商關係ヲ衡平ナル基礎ノ上ニ置キ且之ヲ兩國間ノ改善セラレタル政治關係ト合致セシムルコトヲ目的ト爲スコトヲ要ス

十　支那ノ改造ニ關スル國際協力

支那ニ於ケル現時ノ政治的不安定ハ日本トノ友好關係ニ對スル障礙ニシテ且（極東ニ於ケル平和ノ維持ハ國際的關心事項タルヲ以テ）世界ノ他ノ部分ノ憂慮ナルト共ニ右ニ列擧シタル條件ハ支那ニ於テ鞏固ナル一中央政府ナクシテハ實行スルコト能ハザル所ナルヲ以テ滿足ナル解決ニ對スル窮極ノ要件ハ故孫逸仙博士ガ提議セル如ク支那ノ內部的改造ニ對スル一時的ノ國際協力ナリトス

若シ現時ノ事態ニシテ此等ノ條件ヲ充シ敍上ノ觀念ヲ包含スルガ如キ方法ニ依リテ變改セラレ得

ルニ於テハ支那及日本ハ其ノ紛爭ノ解決ヲ達成シ以テ兩國間ニ於ケル密接ナル了解及政治的協力ノ新時代ノ出發點タラシメ得ベシ若シ斯カル接近ニシテ確保セラレザルニ於テハ其ノ條件ノ如何ヲ問ハズ如何ナル解決モ眞ノ效果ナカルベシ現下ノ危機ニ際シテモ一ノ新關係ヲ企畫スルコトハ眞ニ不可能ナリヤ青年日本ハ支那ニ於ケル强硬措置及滿洲ニ於ケル徹底政策ヲ叫ビ居レリ斯ノ如キ要求ヲ爲ス者ハ九月前ノ時期ニ於ケル遷延及刺戟政策ニ困憊セリ彼等ハ其ノ目的ヲ達成センガ爲性急ナリ然レドモ日本ニ於テモ有ラユル目的ヲ達成スル爲適當ナル手段ヲ見出サザルベカラズ右「積極」政策ノ頗ル熱心ナル主張者ノ若干竝ニ特ニ其ノ明白ナル理想主義及偉大ナル個人的熱誠ヲ以テ「滿洲國」政權テフ機微ナル企畫ノ先覺者ト爲レル人士ト相識レル後日本ノ有スル問題ノ核心ニ現代支那ノ政治的發展及其ノ進ミツツアル將來ノ傾向ニ關スル日本ノ危惧ノ存スルコトヲ認識セザルヲ得ズ此ノ危惧ハ右發展ヲ制御シ且其ノ進路ヲ日本ノ經濟的利益ヲ確保スルト共ニ同帝國ノ防衛ノ爲ノ軍略的要求ヲ滿足セシムル方向ニ向ケシムル目的ヲ有スル行動ニ導キタリ

然レドモ日本ノ輿論モ滿洲ニ對スルモノト支那ノ他ノ部分ニ對スルモノトノ二箇ノ別個ノ政策ヲ有スルコトガ最早實行シ得ザルコトヲ朧ゲナガラ知覺シツツアリ故ニ其ノ滿洲ニ於ケル利益ヲ目標トスル場合ニ於テモ日本ハ支那ノ國民的感情ノ再生ヲ認メ同情ヲ以テ之ヲ歡迎スルヤモ知レズ又日本ハ支那ガ他ノ何レニ對シテモ支持ヲ求メザルコトヲ確保スル目的ノミヨリスルモ同國ト提携シ之ヲ誘導シ且之ヲ扶掖スルヤモ知レズ

支那ニ於テモ亦思慮アル人士ハ該國ノ爲ノ死活問題、眞ノ國家的問題ハ國家ノ改造及現代化ナル

コトヲ認ムルニ至レルヲ以テ彼等ハ右改造及現代化ノ政策ハ既ニ開始セラレテ成功ノ望多キモ其ノ實現ニハ一切ノ國家特ニ其ノ最近隣者タル大國トノ友好關係ノ涵養ヲ必要トスルコトヲ了得セザルヲ得ザルナリ支那ハ政治的及經濟的事項ニ於テ一切ノ主要國ノ協力ヲ必要トスルモ而モ支那ニトリ特ニ有益ナルハ日本政府ノ友好的態度及滿洲ニ於ケル日本ノ經濟的協力ナリトス支那ノ新ニ覺醒シタル國家主義ノ他ノ一切ノ要求ハ如何ニ合法ニシテ且緊急ナルモノナルヤモ知レザルモ國家ノ有效ナル內部的改造ノ爲ノ此ノ一箇重大必要ノ前ニハ之ヲ從タラシメザルベカラズ

第十章

考察及理事會ヘノ提議

終局的解決ヲ容易ナラシムル爲ノ提議

現在ノ紛爭ヲ解決スル爲支那及日本ノ兩政府ニ直接ニ勸告ヲ提出スルコトハ本委員會ノ職能ニ非ズ然レドモ本委員會ヲ創設シタル決議ノ案文ヲ理事會ニ說明スルニ當リ「ブリアン」氏ガ使用セル字句ヲ藉リテ曰ヘバ「兩國間ノ紛爭ノ現存原因ノ終局的解決ヲ容易ナラシムル」爲吾人ハ玆ニ國際聯盟ニ對シ聯盟ノ適當ナル機關ガ紛爭當事國ニ提示スベキ確定提案ヲ起草スルコトヲ助ケンコトヲ目的トセル提議ヲ吾人ノ研究ノ成果トシテ提出セントス此等ノ提議ハ吾人ガ前章ニ於テ設定シタル諸條件ニ合致シ得ベキ一方法ヲ例示スルノ目的ヲ以テ爲サレタルモノト了解セラルベキ

モノナリ此等ノ提議ハ主トシテ大綱ニ關スルモノニシテ多數ノ細目ヲ挿入スルノ餘地ヲ存シ且紛爭當事國ニシテ此等ノ趣旨ニ副ヘル何等カノ解決ヲ受諾スルノ意アルニ於テハ右當事國ニ依ル多大ナル變更ヲ許サルベキモノトズ

假令日本ノ「滿洲國」ニ對スル正式承認ガ「ジュネーヴ」ニ於ケル本報告書ノ審議前ニ行ハルルコトアリトスルモ（右ハ起リ得ベキ事態ニシテ吾人ノ無視シ得ザルモノナルガ）吾人ハ吾人ノ事業ガ無價値ト爲ルベシトハ思惟セズ吾人ハ孰レニセヨ理事會ハ本報告書ガ關係兩大國ノ滿洲ニ於ケル死活的利益ヲ滿足セシムルノ目的ヲ以テスル理事會ノ決議又ハ右兩大國ニ對スル勸告ニ有用ナルベキ諸提議ヲ包含セルコトヲ發見スベシト信ズ

吾人ガ國際聯盟ノ諸原則、支那ニ關スル諸條約ノ精神及條章竝ニ平和ノ一般的利益ヲ顧念スルト共ニ他方現實ノ事態ヲ閑却スルコトナク且東三省ニ現存シ目下進化ノ過程ニ在ル行政機關ヲ考慮ニ入レタルハ一ニ此ノ目的ニ出ヅルモノナリ事態ガ如何ニ決著スルトモ刻下滿洲ニ於テ釀成セラレツツアル一切ノ健全ナル力ハ其ノ理想タルト人物タルト將又思想タルト行爲タルトヲ問ハズ總テ之ヲ利用シ以テ常ニ支那及日本間ノ永續的了解ヲ確保セントスル目的ノ下ニ本報告書中ノ諸提議ガ今尚日ニ進展シツツアル事態ニ如何ニ擴張シ且適用セラルベキカヲ決定スルコトハ世界平和ノ卓絶ナル利益ノ爲理事會ノ職能ナルベシ

解決ヲ議センガ爲ノ當事國ノ招請

吾人ハ先ヅ前章ニ示サレタル趣旨ニ基キテ其ノ紛爭ノ解決ヲ議センガ爲聯盟理事會ガ支那及日本ノ兩政府ヲ招請スベキコトヲ提議ス

諮問會議

若シ右招請ニシテ受諾セラルルニ於テハ次ノ措置ハ東三省ノ行政ノ爲ノ特別ナル制度ノ構成ニ關スル詳細ナル提案ヲ審議シ且勸告スル爲能フ限リ速ニ諮問會議ヲ招集スルコトニ在リ

右會議ハ支那及日本ノ兩政府ノ代表者竝ニ地方民ヲ代表スル二代表部ニシテ一ハ支那政府ノ指定スベキ方法ニ依リ選擇セラレ一ハ日本政府ノ指定スベキ方法ニ依リ選擇セラレタルモノヲ以テ構成セラレ得ベキコトヲ提議ス當事國ノ同意アルニ於テハ中立國傍聽者ノ援助ヲ受クルコトヲ得ベシ

若シ右會議ガ何等特殊ノ點ニ付協定ニ達シ得ザリシ場合ニハ會議ハ意見ノ相違セル點ヲ理事會ニ提出スベク然ルトキハ理事會ハ此等ノ點ニ付合意的解決ヲ得ンコトヲ試ムベシ

諮問會議ノ開會ト同時ニ各自ノ權利及利益ニ關スル日本及支那間ノ諸懸案ハ別ニ審議セラルベク此ノ場合ニ於テモ當事國ノ同意アルニ於テハ中立國傍聽者ノ援助ヲ受クルコトヲ得ベシ

最後ニ吾人ハ此等ノ審議及交渉ノ成果ガ四箇ノ異リタル文書ニ具現セラルベキコトヲ提議ス

一　諮問會議ノ勸告セル條件ニ基キ東三省ノ爲ノ特別ナル行政組織ヲ構成スベキ旨ノ支那政府ノ宣言書

二　日本ノ利益ヲ處理スル日支條約

三　調停、仲裁裁判、不侵略及相互援助ニ關スル日支條約

四　日支通商條約

諮問會議ノ會合前同會議ノ考慮スベキ行政組織ノ大綱ハ理事會ノ援助ノ下ニ當事國間ニ協定セラ

ルベキモノナルベキコトヲ提議ス此ノ際考慮セラルベキ事項中ニハ次ノ如キモノアルベシ

諮問會議ノ會合ノ場所、代表ノ性質及中立國傍聽者ガ希望セラルルヤ否ヤノ點

支那ノ領土的及行政的保全維持ノ原則及滿洲ニ對スル廣汎ナル自治ノ付與

內部的秩序ヲ維持スル唯一ノ方法トシテ特別憲兵隊ヲ創設スルノ方針

提議セラレタルガ如キ別個ノ諸條約ニ依リテ各般ノ紛爭事項ヲ解決スルノ原則

滿洲ニ於ケル最近ノ政治的推移ニ參加セル者全部ニ對シ大赦ヲ行フコト

一度此等ノ廣汎ナル原則ニシテ豫メ協定セラレンカ細目ニ付テハ諮問會議ニ於テ又ハ條約交涉ノ際ニ於テ當事國代表者ニ對シ能フ限リ充分ナル自由裁量ヲ與フベシ國際聯盟理事會ニ更ニ付議スルコトハ協定失敗ノ場合ニ於テノミ行ハルベキモノトス

本手續ノ利益アル諸點中吾人ハ本手續ガ支那ノ主權ト抵觸スルコトナクシテ而モ今日現存スル滿洲ノ狀勢ニ適合センガ爲有效且實際的ナル手段ヲ執ルコトヲ可能ナラシムルト同時ニ支那ニ於ケル國內ノ狀勢ノ變化ニ伴ヒ當然ナリト認メラルルガ如キ今後ノ變革ヲ斟酌スルモノナルコトヲ主張ス例ヘバ本報告書ニ於テハ地方政府ノ改組、中央銀行ノ創立、外國人顧問ノ傭聘ノ如キ既ニ提案セラレタルカ又ハ滿洲ニ於テ近時實施セラレタル行政上及財政上ノ若干ノ變革ニ留意シタリ此等ノ事項ハ諮問會議ニ於テモ依然之ヲ維持スルコト有利ナルヤモ知レズ吾人ノ提議セルガ如キ方法ニ依リ選擇セラレタル滿洲住民代表者ノ本會議出席モ亦現制度ヨリ新制度ヘノ轉換ヲ容易ナラシムベシ

本手續ノ有利ナリト主張セラルル諸點

滿洲ノ爲考案セラレタル自治制度ハ遼寧（奉天）、吉林及黑龍江ノ三省ニノミ施行スル趣旨ナリトス現ニ日本ガ熱河省（東部內蒙古）ニ於テ享有スル權利ハ日本ノ利益ニ關スル條約中ニ於テ處理セラルベシ

四箇ノ文書ハ玆ニ之ヲ順次考察スルコトヲ得ベシ

一　宣言書

諮問會議ノ最終的提案ハ支那政府ニ提示セラルベシ而シテ支那政府ハ之ヲ國際聯盟及九國條約ノ署名國ニ送付セラルベキ宣言書中ニ具現スベシ聯盟國及九國條約ノ署名國ハ右宣言書ヲ了承シ右宣言書ハ國際約定ノ拘束的性質ヲ支那政府ニ對シ有スルモノナルコトヲ明ナラシムベシ

必要ニ依リ本宣言書ノ爾後ノ改正ノ行ハレ得ベキ場合ノ條件ハ上ニ提議セラレタル手續ニ從ヒ協定セラレタル所ニ依リ宣言書自體中ニ設定セラルベシ

宣言書ハ東三省ニ於ケル支那中央政府ノ權能ト自治地方政府ノ權能トノ區分ヲ明確ニスベシ

中央政府ニ保留セラルベキ權能ハ次ノ如クナルベキコトヲ提議ス

中央政府ニ保留セラルベキ權能

一　別ニ規定ナキ限リ一般條約及涉外關係ノ掌理但シ中央政府ハ宣言書ノ條項ニ抵觸スル何等國際約定ヲ爲サザルモノト了解セラル

二　稅關事務、郵務及鹽務竝ニ次第ニ依リテハ印花稅及煙酒稅ノ事務ノ管理　此等諸收入ヨリ

ノ純收入ノ中央政府及東三省間ノ衡平ナル配分ハ諮問會議ニ依リテ決定セラルベシ

三　宣言書中ニ定メラルベキ手續ニ依ル東三省政府行政長官ノ少クトモ第一次ノ任命權　缺員ハ同樣ノ方法又ハ諮問會議ニ依リテ同意セラレ且宣言書中ニ挿入セラルベキ東三省ニ於ケル或種ノ選任制度ニ依リテ充タサルベシ

四　東三省行政長官ニ對シ東三省自治政府ノ管轄下ニ在ル事項ニ付支那中央政府ガ結ベル國際約定ノ履行ヲ確保スルニ必要ナルベキ命令ヲ發スルノ權

五　右會議ニ依リテ同意セラレタル其ノ他ノ權能

地方政府ノ權能

他ノ權能ハ總テ東三省自治政府ニ歸屬スベシ

地方輿論ノ表現

次第ニ依リテハ商務總會、同業組合及其ノ他ノ民間團體等ノ傳統的機關ヲ通ジテ政府ノ政策ニ關スル民意ノ發現ヲ確保スル爲何等カノ實際的制度案出セラレ得ベシ

少數民族

白系露西亞人及其ノ他ノ少數民族ノ利益ヲ保全スル爲ニモ亦何等カノ規定ヲ設クルノ要アルベシ

憲兵隊

東三省内ニ於ケル唯一ノ武裝隊タルベキ特別憲兵隊ヲ外國人教官ノ協力ノ下ニ組織スベキコトヲ提議ス右憲兵隊ノ編制ハ豫メ決定セラレタル期間内ニ完成セラルルカ又ハ其ノ完了ノ時期ハ宣言書中ニ記載セラルベキ手續ニ從ヒ決定セラルルコトヲ要ス本特別憲兵隊ハ東三省地域内ニ於ケル唯一ノ武裝隊ナルベキヲ以テ之ガ編制完成ノ曉ニハ該地域ヨリ支那又ハ日本ノ何レニ屬スルヲ問ハズ警察又ハ鐵道守備兵等有ラユル特別隊ヲ含ム他ノ一切ノ武裝隊ノ撤退行ハルベシ

外國人顧問

自治政府ノ行政長官ハ適當數ノ外國人顧問ヲ任命スベク其ノ内日本人ハ充分ナル割合ヲ占ムルコ

トヲ要ス之ガ細目ハ前揭ノ手續ニ依リテ決定セラルベク且宣言書中ニ記載セラルベキモノトス小國ノ國民モ大國ノ國民ト同樣ニ選任セラルルコトヲ得ベシ

行政長官ハ(一)警察及(二)財務行政ヲ監督スベキ二名ノ異レル國籍ニ屬スル外國人ヲ聯盟理事會ヨリ提出スベキ人名簿中ヨリ任命スルモノトス右二名ノ官吏ハ新制度ノ組織期間及試驗期間中廣汎ナル權能ヲ有スベシ顧問ノ權能ハ宣言書中ニ明定セラルルモノトス

行政長官ハ國際決濟銀行ノ理事會ヨリ提出スベキ人名簿中ヨリ一名ノ外國人ヲ東三省中央銀行ノ總顧問ニ任命スルモノトス

外國人顧問及官吏ノ任用ハ中國國民黨ノ創立者ノ政策及現國民政府ノ政策ニ合致スルモノナリ吾人ハ右等諸省ニ於ケル現下ノ狀勢竝ニ外國ノ利益、權利及勢力ノ複雜性ガ平和及良好ナル施政ノ爲ニ特別ナル措置ヲ必要ナラシムルコトヲ支那ノ輿論ガ認識スルニ難カラザルベキコトヲ期待ス然レドモ玆ニ提議セル外國人顧問及官吏（新制度ノ組織期間中例外的ニ廣汎ナル權能ヲ行使スベキ外國人ヲ含ム）ノ存在ハ單ニ國際協力ノ一形式ヲ表現スルニ過ギザルモノナルコトハ吾人ノ特ニ强調セント欲スル所ナリ此等ノ外國人顧問及官吏ハ支那政府ノ受諾シ得ベキ且支那ノ主權ニ合致セル方法ニ依リ選任セラレザルベカラズ彼等ハ從來稅關及郵政ニ傭聘セラレタル外國人又ハ支那ト協力セル聯盟ノ技術的機關ノ場合ニ於テ常ニ然リシト同樣其ノ任命セラレタル曉ニハ任命セル政府ノ忠僕ナリト自覺セザルベカラズ此ノ點ニ關シ内田伯爵ガ千九百三十二年八月二十五日日本ノ議會ニ於テ爲シタル演說中ノ次ノ一節ハ興味アルモノナリ

「我國ノ如キモ明治維新後、多數ノ外國人ヲ官吏又ハ顧問トシテ傭聘シテ居ッタノデアリマシテ、例ヘバ明治八年頃ニ於ケル此等外國人ノ總數ハ、五百名ヲ超過シテ居タノデアリマス」

尙日支協力ノ雰圍氣ノ裡ニ比較的多數ノ日本人顧問ガ任命セラルルコトハ彼等ヲシテ特ニ地方的狀況ニ適合セル訓練及知識ヲ供與セシメ得ベキモノタル點モ亦之ヲ强調スルコトヲ要ス過渡期ヲ通ジテ常ニ考慮ニ存シ置カルベキ目標ハ結局ニ於テ外國人ノ傭聘ヲ不必要ナラシムベキ支那人ニ依リテ組織セラレタル文官制度ノ創立ナリ

二　日本ノ利益ヲ處理スル日支條約

本報告書中ニ提議セル支那及日本間ノ三條約ノ交渉ニ當ルベキ人士ニ對シテ完全ナル自由裁量ヲ與フベキコトハ勿論ナルモ彼等ガ處理スベキモノト提議セラルル事項ヲ指示スルコトハ有用ナルベシ

東三省ニ於ケル日本ノ利益及熱河省ニ於ケル或種ノ日本ノ利益ヲ處理スル條約ハ主トシテ日本國民ノ特定ノ經濟的權利及鐵道問題ヲ處理スベキモノトス卽チ本條約ノ目的ハ次ノ如クナルコトヲ要ス

條約ノ目的

(一)　滿洲ノ經濟的發展ニ對スル日本ノ自由ナル參加但シ右ハ同地方ヲ經濟的ニ又ハ政治的ニ支配スル權利ヲ伴ハザルモノトス

(二)　熱河省ニ於テ現ニ日本ガ享有シ居レル權利ノ存續

(三)　居住權及商租權ヲ全滿洲ニ擴張スルコト及之ニ伴ヒテ治外法權ノ原則ヲ多少修正スルコト

(四)　鐵道ノ運行ニ關スル協定

日本人ノ居住權

從來日本國民ノ居住權ハ南北滿洲間ニ何等確定的境界嘗テ存セザリシモ南滿洲及熱河ニ限定セラレ居リタリ而シテ此等ノ權利ハ支那ガ受諾シ得ズト爲セル條件ノ下ニ行使セラレ其ノ結果絕エズ軋轢及紛爭ヲ釀シタリ課稅及司法ニ關スル治外法權的地位ハ日本人及朝鮮人ノ雙方ノ爲ニ主張セラレ後者ニ付テハ不明確ニシテ且紛爭ノ題目ヲ成セル特別規定存シタリ本委員會ニ提出セラレタル證據ニ徵シ支那ハ治外法權的地位ガ伴ハザルニ於テハ現在ノ限定的居住權ヲ全滿洲ニ擴張スルコトニ同意ヲ與フルモノト信ズベキ理由アリ治外法權的地位ガ之ニ伴フニ於テハ支那領域ノ中心ニ日本人國家ヲ創立スルノ結果ヲ招徠スベシト主張セラレタリ

居住權ト治外法權トハ密接ナル關係ヲ有スルコト明白ナリ然レドモ日本側ハ司法及財政制度ガ從來滿洲ニ存シタルヨリモ遙ニ高キ程度ニ到達スル時期迄ハ其ノ治外法權的地位ノ拋棄ニ同意セザルベキコトモ同樣ニ明ナリ

玆ニ二種ノ妥協方法案出セラル一ハ治外法權的地位ヲ伴フ現行ノ居住權ハ之ヲ維持シ治外法權的地位ヲ伴ハザル居住權ヲ北滿洲及熱河ニ於ケル日本人及朝鮮人雙方ニ擴張スルコトニシテ他ハ滿洲及熱河ノ何レノ所ニ於テモ日本人ニハ治外法權的地位ノ下ニ居住スルノ權利ヲ與ヘラルベク朝鮮人ニハ治外法權的地位ヲ伴ハザル同樣ノ權利ヲ與ヘラルベシト爲スモノトス右兩提案ハ何レモ

或程度ノ長所ヲ有スルモ同時ニ比較的重大ナル異論アリ本問題ノ最滿足ナル解決方法ハ最早治外法權的地位ヲ希望スルコトヲ要セザル程度ニ此等諸省ノ施政ヲ有能ナラシムルニ在ルコト明ナリ此ノ見地ヨリシテ吾人ハ少クトモ二名ノ外國人顧問(其ノ内一名ハ日本國籍ヲ有スルコトヲ要ス)ガ最高法院ニ配屬セラルベキコト及他ノ顧問ガ他ノ法院ニ配屬セラルルコトノ有利ナルコトヲ勸告ス此等ノ法院ガ外國人關係事項ニ關シ判決スルコトヲ求メラレタル一切ノ事件ニ付テハ此等ノ顧問ノ意見ハ公表セラレ得ルモノトス吾人ハ又改組期間中財務行政ニ關シ外國人ノ或種ノ監督ヲ望マシト思考シ宣言書ニ付論ズルニ當リ右ノ趣旨ノ提議ヲ爲シ置キタリ

右ノ外支那又ハ日本何レカノ政府ガ其ノ自己ノ名ニ於テ又ハ各自ノ國民ノ名ニ於テ提起スベキ何等カノ訴ヲ處理スベキ仲裁裁判所ヲ調停條約ニ依リ設置スルニ於テハ更ニ一段ノ保障與ヘラルベシ

複雜且困難ナル本問題ノ決定ハ條約ノ交渉ヲ爲ス當事國側ニ殘サルベキモノナルモ外國ニ依ル保護ノ現行制度ヲ朝鮮人ノ如ク多數ナルガ上ニ現ニ其ノ數增加シツツアリ且支那人住民ト斯ク迄モ密接ナル接觸ノ下ニ居住スル少數民族ニ對シテ適用スルコトハ必然的ニ刺戟ノ多クノ機會ヲ發生セシメ延テハ地方的事件及外國ノ干涉ヲ招徠スルモノナリ斯カル軋轢ノ源泉ガ除去セラルルコトハ平和ノ利益ノ爲望マシキコトナリ

日本人ニ對シテ與ヘラルベキ居住權ノ有ラユル擴張ハ「最惠國」條款ノ利益ヲ享有スル他ノ一切ノ諸國ノ國民ニ對シ同樣ノ條件ノ下ニ適用セラルルモノトス但シ右ハ其ノ國民ガ治外法權ヲ享有

スル諸國ニ於テ支那トノ間ニ同樣ノ條約ヲ締結セル場合ニ限ルベシ

鐵道ニ關シテハ第三章ニ於テ支那ノ鐵道建設者及鐵道當局ト日本ノ其レ等トノ間ニ廣汎ニシテ相互ニ利益ヲ齎ス如キ鐵道計畫ヲ目標トスル協力ガ過去ニ於テ殆ドナカリシカ又ハ絶無ナリシコトヲ指摘セリ若シ將來ニ於ケル軋轢ヲ避ケントセバ過去ニ於ケル競爭制度ヲ終熄セシメ之ニ代フルニ各鐵道系統ニ於ケル貨客運賃ニ關スル共通ノ了解ヲ以テスルノ規定ヲ本條約中ニ設クルノ必要アルコト明ナリ本問題ハ本報告書附屬ノ特別研究第一ニ於テ檢討セラレ居レリ本委員會ノ意見ニ依レバ二箇ノ解決方法アリ右二方法ハ其ノ何レカ一ヲ選擇スルコトヲ得ルモノトモ又ハ一ノ最終的解決ヘノ段階トモ見ルコトヲ得ベシ其ノ一ハ範圍ニ於テ稍局限セラレタルモノニシテ支那及日本ノ鐵道當局間ノ協力ヲ容易ナラシムベキ右兩者間ノ業務協定ナリ支那及日本ハ協力ノ原則ニ基キテ滿洲ニ於ケル各自ノ鐵道系統ヲ經營スルコトニ同意スベク且日支混合鐵道委員會ハ少クトモ一名ノ外國人顧問ヲ加ヘ或他國ニ存スル理事會ノ職能ニ類似セル職能ヲ行使スベシ更ニ徹底的ナル一ノ救濟方法ハ支那及日本ノ鐵道ノ利益ヲ合同スルコトニ在リ而シテ斯カル合同ハ若シ協定セラレ得ルニ於テハ日支經濟的協力ノ眞乎ノ表徵ト爲ルモノニシテ之ガ確保ハ本報告書ノ目的ノ一タルモノナリ右ハ支那ノ利益ヲ保障スルト同時ニ滿洲ニ於ケル總テノ鐵道ニ對シテ南滿洲鐵道ノ偉大ナル技術的經驗ノ利益ヲ提供セシムベク且過去數箇月間滿洲ニ於ケル諸鐵道ニ適用セラレタル制度ヨリ容易ニ進展セラレ得ベキモノナリ右ハ將來ニ於テ東支鐵道ヲ含ム更ニ廣汎ナル國際協定ニ到ルノ途サヘ之ヲ拓クニ至ルヤモ知レズ斯ノ如キ合同ニ關スル相當詳細ナル記述ハ實行ノ可

能性アル事項ノ例トシテ附屬書ニ之ヲ掲載セルモ詳細ナル計畫ハ當事者間ニ於ケル直接交渉ニ依リテノミ進展セラルベシ鐵道問題ノ斯ノ如キ解決ハ南滿洲鐵道ヲシテ純然タル商業的企業タラシムベク且一度特別憲兵隊ニシテ完全ニ組織セラルルニ於テハ右憲兵隊ニ依リ與ヘラルル安全保障ハ鐵道守備隊ノ撤退ヲ可能ナラシメ相當莫大ナル費用ヲ節約シ得ベシ若シ右ニシテ實施セラルル際ハ南滿洲鐵道及日本國民ノ既得利益ヲ保障スル爲豫メ鐵道附屬地内ニ特別土地章程及特別市政ヲ施行スルヲ可トスベシ

若シ此等ノ趣旨ニ依ル條約ニシテ協定シ得ベクンバ東三省及熱河ニ於ケル日本ノ權利ニ對スル法律的根據ハ見出サルベク且右ハ少クトモ現行諸條約及諸協定同樣日本ニ有利ナルト共ニ支那ニトリ一層受諾シ易キモノナリ斯クテ支那ハ新條約ニ依リ廢棄又ハ修正セラレタルモノヲ除キ千九百十五年ノモノノ如キ諸條約及諸協定ニ依リ日本ニ爲シタル一切ノ確定的讓與ヲ承認スルニ困難ヲ感ゼザルベシ日本ノ要求スル一切ノ比較的重要ナラザル權利ニシテ其ノ效力ニ付爭起リ易キモノハ協定ノ題目タルベシ若シ協定成立セザルニ於テハ調停條約ニ概示シタル手續ニ訴フベシ

三　調停、仲裁裁判、不侵略及相互援助ニ關スル日支條約

本條約ニ付テハ多數ノ先例及現存實例存スルヲ以テ詳細ニ其ノ内容ヲ記述スルノ必要ナシ

斯カル條約ハ支那及日本ノ兩政府間ニ何等難問ノ發生スルトキ其ノ解決ヲ援助スル職能ヲ有スル

調停委員會ニ付規定スベク又司法的經驗及極東ニ關スル必要ナル知識ヲ有スル人士ヲ以テ構成スル仲裁裁判所ヲ設置スベシ右裁判所ハ宣言書又ハ新條約ノ解釋ニ關スル支那及日本ノ兩政府間ニ於ケル一切ノ紛爭及調停條約中ニ列記セラルルガ如キ他ノ種類ノ紛爭ヲ處理スベシ

最後ニ本條約ニ挿入セラレタル不侵略及相互援助ニ關スル規定ニ從ヒ締約國ハ滿洲ガ漸次一非武裝地域ト爲ルベキコトニ同意スベシ右ノ目的ヲ以テ憲兵隊ノ編制ノ實行後ニ於テハ兩締約國ノ一方又ハ第三國ニ依ル非武裝地域ノ侵犯ハ侵略行爲ヲ構成スルモノト爲シ他ノ締約國ニ於テ又ハ第三國ノ攻擊ノ場合ニハ兩締約國ニ於テ聯盟理事會ノ聯盟規約ノ下ニ行動スベキ權利ヲ害スルコトナク非武裝地域ヲ防禦スルニ適當ナリト思考スル一切ノ措置ヲ執ルノ權利ヲ有スベキコトヲ規定スベシ

若シ「ソヴィエト」聯邦政府ニシテ斯カル條約中ノ不侵略及相互援助ノ部分ニ參加セント欲スルニ於テハ別個ノ三國協定中ニ適當ナル條項ヲ包含セシメ得ベシ

四　日支通商條約

通商條約ハ條約上現存スル他國ノ權利ヲ保障シツツ能フ限リ支那及日本間ニ於ケル交易ヲ促進シ得ベキ條件ノ設定ヲ目的トスルモノナルベキコトハ當然ナリ本條約ハ又支那人消費者ノ個人的權利ヲ害スルコトナクシテ日本人ノ商業ニ對スル組織的「ボイコット」運動ヲ禁壓スル爲其ノ權能内

ニ於ケル一切ノ措置ヲ講ズベキ旨ノ支那政府ニ依ル約定ヲ包含スベシ

*　　*

*

提案セラレタル宣言書及諸條約ノ對象ニ關スル敍上ノ提議及考察ハ聯盟理事會ノ考慮ニ供スル爲之ニ提出スルモノナリ將來ニ於ケル諸協定ノ細目ノ如何ニ拘ラズ交渉ガ能フ限リ速ニ開始セラレ且相互信賴ノ精神ニ依リテ行ハルベキコトハ最重要ナル點ナリトス

吾人ノ事業ハ完了セリ

滿洲ハ過去一年間爭鬪及混亂ニ委セラレタリ

廣大、肥沃且豐饒ナル國土ノ人民ハ嘗テ恐ラク其ノ經驗シタルコトナキ悲慘ナル狀態ニ遭遇セリ

支邦及日本間ノ關係ハ假裝セル戰爭關係ニシテ其ノ將來ハ憂慮ニ堪ヘザルモノアリ

吾人ハ右ノ如キ狀態ヲ創造セル事情ヲ報告セリ

何人ト雖モ國際聯盟ノ直面セル問題ノ重大性及其ノ解決ノ困難ニ付充分了知セリ

吾人ハ其ノ報告書ヲ完了セントスル際新聞紙上ニ於テ支那及日本兩國外務大臣ノ爲セル二箇ノ聲明ヲ閲讀セルガ其ノ雙方ヨリ極メテ重要ナル一點ヲ拔萃スベシ

八月二十八日羅文幹氏ハ南京ニ於テ次ノ如ク言明セリ

「支那ハ現事態ノ解決ノ爲ノ如何ナル合理的ナル提案モ國際聯盟規約、不戰條約及九國條約ノ條章及精神竝ニ支那ノ主權ト兩立スベキモノタルコトヲ要シ又極東ニ於ケル永續的平和ヲ有效ニ確保スルモノタルコトヲ要スト信ズ」

八月三十日內田伯爵ハ東京ニ於テ次ノ如ク言明セリト傳ヘラル

「帝國政府ハ日支關係ノ問題ハ滿蒙問題ヨリ一層重要ナリト思惟ス」

吾人ハ本報告書ヲ終了スルニ當リ右兩聲明ノ基調ヲ成ス思想ヲ玆ニ採錄スルコトヲ以テ最適當ナリト思惟ス右思想タルヤ吾人ノ蒐集セル證據、問題ニ關スル吾人ノ研究、從テ吾人ノ確信ト正ニ正確ニ合致スルモノニシテ又吾人ハ此等ノ言明ニ依リ表示セラレタル政策ニシテ敏速且有效ニ實行セラルルニ於テハ必ズヤ極東ニ於ケル兩大國及人類一般ノ最善ノ利益ノ爲滿洲問題ノ滿足ナル解決ヲ招徠スルニ謬ナカルベキコトヲ正ニ確信スルモノナリ

千九百三十二年九月四日北平ニ於テ署名セリ

リットン
アルドロヴァンディ
アッシュ、クローデル
フランク、マッコイ
シュネー

附錄

極東ニ於ケル國際聯盟調査委員會ノ旅程

（千九百三十一年十二月十日ノ理事會決議）

（尙地圖第十三及第十四ヲ見ヨ）

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
二月二十九日	到著	横濱	水路	汽船「プレジデント、クーリッヂ」	1	各委員、「ベルト」、「フォン、コッツェ」、「バスチュホーフ」、「アスター」、「ジューヴレー」、「ビッドル」「アース」加ハル（二月二十五日上海ヨリ到著ス）
	出發		鐵道			
	到著	東京				
自二月二十九日至三月八日		東京			1	青木加ハル（二月二十九日）「アース」離團ス（三月八日、一行ヨリ後レテ三月九日大阪ニ向フ）

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
三月八日	出發	東京	鐵道		1	
九日	到著	京都				
十日	出發	同				
	到著	奈良				
	出發	同				
	到著	大阪				「アース」再ビ加ハル（東京ヨリ）
十一日	出發	大阪	自動車及「ケーブル、カー」	六甲山經由		
	到著	神戸				
	出發	同	水路	汽船「プレジデント、アダムス」		
十四日	到著	上海				
自十四日至二十六日		上海			1	「シャレール」、吳（三月十四日）及「ヤング」（三月十八日北平ヨリ）加ハル　青木（三月二十五日、東京ヘ歸還ス）及「アース」（三月二十六日、

三月二十六日	出發	上海	鐵道		1	一行ヨリ後レテ三月二十八日南京ニ向フ）離團ス
二十七日	到着	杭州				「クローデル」、「マッコイ」、「シュネー」、「ヤング」、「ブレークスリー」、「フォン、コッツェ」、「ジューヴレー」、「ビッドル」
	出發	同	自動車			
	到著	宜興				
	出發	同				
	到著	南京				
二十六日	出發	上海	水路	汽船同和	1	「リットン」、「アルドロヴァンディ」、「ペルト」、「バスチュホーフ」、「アスター」、「シャレール」、吳
二十七日	到著	南京				
自三月二十七日至四月一日		南京			1	「アース」再ビ加ハル（三月二十九日、上海ヨリ）「ヤング」及「アスター」離團ス（四月一日、後記Aヲ見ヨ）

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
四月一日	出發	南京	空路		A	「ヤング」、「アスター」
二日	到著	漢口				
二日	出發	同				
二日	到著	重慶				
三日	出發	同				
三日	到著	宜昌				
四日	出發	同				再ビ主班ニ加ハル
四日	到著	漢口				
一日	出發	南京	水路	汽船隆和	1	各委員、「アース」、「ブレークスリー」、「ベルト」、「フォン、コッツェ」、「バスチュホーフ」、「ジューヴレー」、「シャレール」、吳、「ビッドル」
三日	到著	九江				
三日	出發	同				
四日	到著	漢口				「ヤング」及「アスター」再ビ加ハル（前記Aヲ見ヨ）
五日	出發	漢口				
六日	到著	九江				
六日	出發	同				

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
七日	到著	浦口	鐵道			
七日	出發	同				
八日	到著	濟南				
八日	出發	同				
九日	到著	天津				
九日	出發	同				
九日	到著	北平				
自九日至十九日		北平			1	「アンジェリーノ」加ハル（四月十四日、「ジャヴァ」ヨリ）
十九日	出發	北平				
二十日	到著	秦皇島				
二十日	出發	秦皇島	水路	支那及日本軍艦	2	「リットン」、「クローデル」、「シュネー」、「ベルト」、「バスチュホーフ」、「アスター」、「ジューヴレー」、吳
二十一日	到著	大連	鐵道			
二十一日	出發	同				
二十一日	到著	奉天				
四月二十日	出發	秦皇島	鐵道		2	「アルドロヴァンディ」、「マッコイ」、「アース」、「アンジェリーノ」、「ヤング」、「ブレークスリー」、「フォン、コッ

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
二十一日	到著	山海關				ツェ」、「シャレール」、「ビッドル」
	出發	同				
	到著	秦皇島				
	出發	同				
	到著	山海關				
	出發	同				
	到著	奉天				
自四月二十一日至五月二日		奉天			2	「ハイアム」(四月二十一日、「カナダ」ヨリ四月十六日到著ス)、「モッス」(五月一日、威海衞ヨリ)及「ド、ペイール」(五月一日、神戸ヨリ)加ハル
五月二日	出發	奉天	鐵道		2	各委員、「アース」、「アンジェリーノ」、「ハイアム」、「ヤング」、「ブレークスリー」、「ペルト」、「フォン、コッツェ」、「バスチュホーフ」、「アスター」、「ジューヴレー」、「モッス」、「ド、ペイール」、「シャレール」、吳、「ビッドル」

	到著	公主嶺				
	出發	公主嶺				
	到著	長春				
自二日至七日		長春				
七日	出發	長春				
	到著	吉林				
	出發	同				
	到著	長春				
自七日至九日		長春				
九日	出發	長春				
	到著	哈爾賓				
自九日至二十一日		哈爾賓			2	「デヌリイ」(五月九日、「バリ」ヨリ五月六日到著ス)、「ドルフマン」(五月十日、東京ヨリ五月九日到著ス)加ハル「フォン、コッツェ」、「ハイアム」、「アスター」、「モッス」、「ビッドル」(五月二十

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
						一日、後記Bヲ見ヨ)、「ヤング」(五月二十一日、後レテ五月二十三日奉天ニ向フ)、「ペルト」、「デヌリー」、「ドルフマン」(五月二十一日、後レテ五月二十三日長春及奉天ニ向フ)離團ス
五月二十一日	出發	哈爾賓	鐵道		2	各委員、「アース」、「アンジェリーノ」、「ブレークスリー」、「バスチュホーフ」、「ジューヴレー」、「シャレール」、吳、「ド、ペイール」
	到著	長春				
	出發	同				
	到著	奉天				
二十二日	出發	哈爾賓	空路		B	「フォン、コッツェ」、「ハイアム」、「アスター」、「モッス」、「ビッドル」
自 二十二日 至 二十四日	到著	齊齊哈爾				
		齊齊哈爾				

二十四日	出發	齊齊哈爾	鐵道			
	到著	洮南				
	出發	同				
二十五日	到著	奉天				
自 二十一日 至 二十五日		奉天			2	「ド、ペイール」(五月二十一日、神戸ニ向ヒ)出發ス「ヤング」(五月二十四日、哈爾賓ヨリ)、「ペルト」、「デヌリー」、「ドルフマン」(五月二十五日、哈爾賓及長春ヨリ)、「フォン、コッツェ」、「ハイアム」、「アスター」、「モッス」、「ビッドル」(五月二十五日、前記Bヲ見ヨ)再ビ加ハル
二十五日	出發	奉天	鐵道		2	各委員、「アース」、「アンジェリーノ」、「ハイアム」、「ヤング」、「ブレークスリー」、「ペルト」、「デヌリー」、「ドルフマン」、「フォン、コッツェ」、「バスチュホーフ」、「アスター」、「ジューヴレー」、「モッス」、「シャレール」、吳、「ビッドル」

二十六日 二十七日	到著 出發 到著 出發 到著	大連 同 旅順 同 大連	自動車			「アンジェリーノ」、「ヤング」、「バスチュホーフ」離團ス（五月三十日、一行ニ先ンジ塘沽經由北平ニ向フ）
自 至 二十六日 三十日		大連				
三十日	出發	大連	鐵道		2	各委員、「アース」、「ハイアム」、「ブレークスリー」、「ペルト」、「デヌリー」、「ドルフマン」、「フォン、コッツェ」、「アスター」、「ジューヴレー」、「モッス」、「シャレール」、吳、「ビッドル」
三十日	到著 出發 到著	鞍山 同 奉天				「デヌリー」離團ス（後レテ五月三十一日奉天ニ向フ）
自五月三十日 至六月四日		奉天			2	「デヌリー」再ビ加ハル（五月三十一日、鞍山ヨリ）「デヌリー」（六月一日、一行ニ先ンジ撫順ニ向フ）、「アース」、「ハイアム」（六月一日、一行ニ先ンジ山海關經由北平ニ向フ）、「ペルト」、「ドルフマン」（六月二日後記Cヲ見ヨ）離團ス
六月一日	出發 到著 出發 到著	奉天 撫順 同 奉天	鐵道		2	各委員、「フォン、コッツェ」、「ブレークスリー」、「ペルト」、「デヌリー」、「ドルフマン」、「アスター」、「ジューヴレー」、「モッス」、「シャレール」、吳、「ビッドル」 「デヌリー」再ビ加ハル（一行ニ先ンジ奉天ヨリ） 「デヌリー」離團ス（大連ニ赴ク）
二日 三日	出發 到著	奉天 大連	鐵道		C	「ペルト」、「ドルフマン」 「デヌリー」再ビ加ハル（六月二日撫順ヨリ到著ス）
自三日 至六日		大連				

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
六月七日	出發	大連	水路	汽船濟通丸		
	到著	塘沽				
	出發	同				
	到著	北平				
四日	出發	奉天	鐵道		2	各委員、「フォン、コッツェ」、「ブレークスリー」、「アスター」、「ジューヴレー」、「モッス」、「シャレール」、吳、「ビッドル」
	到著	錦州				
	出發	同				
	到著	山海關				
	出發	同				
	到著	北戴河海岸				
五日	出發	同				
	到著	北平				
自五月二十八日至		北平			3	「モッス」(六月二十六日威海衛ヘ)出發ス「デヌリー」(六月二十五日、一行ニ

六月八日	出發	北平	鐵道		3	先ンジ天津ニ向フ)、「ドルフマン」(六月二十七日、後記Dヲ見ヨ)離團ス
九日	到著	青島				「リットン」、「アルドロヴァンディ」、「シュネー」、「シャレール」、「ビッドル」
十日	出發	同				
十一日	到著	泰安				
	出發	同				
十二日	到著	北平				
二十七日	出發	北平	鐵道		D	「ドルフマン」
二十九日	到著	南京				
	出發	同				
三十日	到著	上海				
自六月三十日至七月十五日		上海				
七月十五日	出發	上海				
十七日	到著	北平				
六月二十八日	出發	北平	鐵道		4	各委員、「アース」、「ヤング」、「ブレークスリー」、「ペ

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
	到著	天津				ルト」、「アスター」、「ジューヴレー」、「シャレール」、「ビッドル」
二十九日	出發	同				「デヌリー」再ビ加ハル（六月二十五日北平ヨリ到著ス）
	到著	山海關				
	出發	同				
	到著	奉天				
三十日	出發	同				
七月一日	到著	安東				
	出發	同				
	到著	京城				
二日	出發	同				
	到著	釜山				
三日	出發	同	水路	汽船昌慶丸		
	到著	下關				
四日	出發	同	鐵道			
	到著	東京				

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
自六月二十八日至七月二十日		北平			E	「アンジェリーノ」、「ハイアム」、「ドルフマン」、「フォン、コッツェ」、「バスチュホーフ」、吳 「ハイアム」（六月二十九日、後記Fヲ見ヨ）、「フォン、コッツェ」（七月二日、後記Hヲ見ヨ）、「バスチュホーフ」（七月四日、主班ヨリ後レテ東京ニ向フ）離團ス「ペルト」再ビ加ハル（七月十日、後記Gヲ見ヨ）「ペルト」離團ス（七月十九日、空路濟南ニ赴ク）
六月二十九日	出發	北平	鐵道			
七月一日	到著	上海				
四日	出發	同	水路	汽船「エムプレス、オヴ、ジャパン」		
六日	到著	神戸			F	「ハイアム」
	出發	同				
	到著	東京	鐵道			
六月三十日	出發	奉天	鐵道		G	「ペルト」

主班ニ再ビ加ハル

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
七月一日	到著	長春				
	出發	同				
二日	到著	哈爾賓				
自二日 至七日		哈爾賓				
七日	出發	哈爾賓				
八日	到著	奉天				
九日	出發	同				
十日	到著	北平				
二日	出發	北平	空路		H	「フォン、コッツェ」
	到著	上海				
自二日 至六日		上海				
六日	出發	上海				
	到著	北平				
自四日 至十六日		東京			4	青木(七月四日、上海ヨリ三月三十日到著ス)、「ハイアム」(七月六日、前記Fヲ見ヨ)、「バスチュホーフ」(七月八日、北平ヨリ)再ビ加ハル「ハイアム」出發ス(七月八日、「カナダ」へ)「リットン」(七月十五日、一行ニ先ンジ横濱ヨリ水路神戸ニ向フ)、「アース」(七月十五日、一行ニ先ンジ京都ニ向フ)、「ヤング」(七月十五日、後記Iヲ見ヨ)離團ス

九日	出發	東京	鐵道及自動車			「アルドロヴァンディ」、「クローデル」、「マッコイ」、「シュネー」、「ヤング」、「ブレークスリー」、「バスチュホーフ」、「ジューヴレー」、「ビッドル」
	到著	宮ノ下				
自九日 至十一日		宮ノ下				
十一日	出發	宮ノ下				
	到著	東京				
七月十四日	出發	東京				「アルドロヴァンディ」、「マッコイ」、「シュネー」、「ビッドル」

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
十五日	到著	日光	鐵道及自動車			
	出發	日光				
	到著	東京				
十五日	出發	東京	鐵道		I	「ヤング」
十六日	到著	下關				
	出發	同	水路	汽船		
十七日	到著	釜山				
	出發	同	鐵道			
	到著	京城				
自十七日 至二十日		京城				
二十日	出發	京城	鐵道			
二十一日	到著	會寧				
	出發	同				
	到著	龍井村				
自二十一日 至二十三日		龍井村				

二十三日	出發	龍井村	空路			
	到著	吉林				
	出發	同				
	到著	長春				
	出發	同	鐵道			
二十四日	到著	大連				
二十五日	出發	同	水路	汽船長平丸		
二十六日	到著	塘沽				
	出發	同	鐵道			
	到著	北平				
十六日	出發	東京	鐵道		4	「アルドロヴァンディ」、「クローデル」、「マッコイ」、「シュネー」、「デヌリー」、「バスチュホーフ」、「アスター」、「ジューヴレー」、「シャレール」、青木、「ビッドル」
十七日	到著	京都				「アース」再ビ加ハル(七月十六日東京ヨリ到著ス)
	出發	同				
	到著	神戸				「リットン」再ビ加ハル(七月十六日東京ヨリ到著ス)
	出發	同	水路	汽船秩父丸		

月日	到著又ハ出發	場所	旅行ノ方法	備考	地圖記號	人員
十九日	到著	青島				
二十日	出發	同	鐵道			
	到著	濟南				「ペルト」再ビ加ハル（七月十九日、空路北平ヨリ到著ス）
二十日	出發	濟南	鐵道			
	到著	北平				「アルドロヴァンディ」、「マッコイ」、「シュネー」、「アース」、「ペルト」、「バスチュホーフ」、「シャレール」、「ビッドル」
七月二十日	出發	濟南	空路		4	「リットン」、「クローデル」、「デヌリー」、「アスター」、「ジューヴレー」
	到著	北平				
自七月二十日至九月四日		北平			4	「アンジェリーノ」、「ドルフマン」、「フォン、コッツェ」、吳（七月二十日、前記Eヲ見ヨ）、「ヤング」（七月二十六日、前記Iヲ見ヨ）再ビ加ハル「デヌリー」（八月二十六日、亞米利加合衆國經由「パリ」へ）「ブレークスリー」（八月三十一日、亞米利加合衆國へ）、「リットン」、「アルドロヴァンディ」、「マッコイ」、「フォン、コッツェ」、「アスター」、「ビッドル」（九月四日、上海及「スエズ」經由「ジュネーヴ」へ）、「クローデル」、「シュネー」、「ジューヴレー」（九月五日、「シベリア」經由「ジュネーヴ」へ）出發ス